

秋田県文化財調査報告書第221集

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書V

—— 山 王 岱 遺 跡 ——

1992・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財七巻

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書V

—— 山 王 岱 遺 跡 ——

1992・3

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

豊かな自然に恵まれた秋田県には、我々の先人達が営々と築き上げてきた歴史があります。地中に刻まれた埋蔵文化財もその歴史遺産の一つであります。

国道103号道路改良事業に伴い、山王岱遺跡を昭和62年度、平成元年度に引き続き3年度も発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代と古代の竪穴住居跡、中世の空堀・橋・土塁・竪穴建物跡・掘立柱建物跡、中世から近世にかけての火葬墓など多くの遺構と、それに伴う遺物が発見されました。

本書は、これらの調査成果をまとめたものでありますが、埋蔵文化財保護へのご理解と郷土の歴史解明にご活用いただければ幸いです。

最後に本書を刊行するにあたり、ご援助、ご協力を賜りました秋田県土木部、北秋田土木事務所、大館市教育委員会、比内町教育委員会並びに関係各位に対し心からの感謝を申し上げます。

平成4年3月17日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 顕 信

例 言

- 1 本書は、国道103号道路改良事業(通称大館南バイパス)に係る大館市餌釣字山王岱地内に所在する山王岱遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 本遺跡は、昭和62年度に第一次調査、平成元年度に第二次調査、平成3年度に第三次調査が実施された。第一次調査の成果は、昭和63年3月に秋田県文化財調査報告書第170集『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報－山王岱遺跡－』として刊行された。
- 3 本遺跡については、上記概報のほか現地説明会(平成3年8月10日)、秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会(平成4年3月8日)で公表してきたが、本書を正式な報告書とする。
- 4 遺跡名については、昭和60年度の国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財分布調査の結果、中世城館「餌釣館」に隣接する遺跡であるとして、小字名をとって「山王岱遺跡」とした。しかし、昭和62年度に実施した第一次調査の結果では、「餌釣館」の範囲に含まれるものであることが判明した。その後の第二次調査、第一次調査区北隣の大館市教育委員会による山王台遺跡発掘調査の結果も踏まえて、大館市教育委員会から平成2年に刊行された『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』では、中世城館「餌釣館」の範囲を拡大し「山王岱遺跡」と「山王台遺跡」もふくめて「餌釣館」としている。本来1つの遺跡に複数の遺跡名を付すことはおかしいが、「山王岱遺跡」として継続して調査していたことから本報告も「山王岱遺跡」とした。
- 5 掘立柱建物跡については、県立由利工業高等学校建築学科五十嵐典彦教諭に建物プランの分析図と玉稿をいただいた。
- 6 本遺跡から出土した陶磁器類のうち、須恵器系中世陶器の鑑定は国立歴史民俗博物館吉岡康暢教授に、その他の陶磁器の鑑定は金沢大学文学部考古学研究室佐々木達夫助教授と、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二資料課長にお願いした。
- 7 本遺跡第一次調査で出土した人骨の鑑定の報告書は、札幌医科大学解剖学第2講座百々幸雄教授のはからいにより、昭和63年3月に札幌医科大学解剖学第2講座鈴木隆雄助教授からいただいた。
- 8 本報告書に掲載した航空写真は、第三次調査中に株式会社パスコに委託して撮影したものである。
- 9 本書に使用した地形図は、国土地理院発行25,000分の1「大館」・「扇田」、大館市発行2,500分の1「大館市都市計画図」である。

- 10 本報告書挿図中に使用した土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』4版1973(昭和48)年を使用して表記した。
- 11 本遺跡の発掘調査・整理に際して諸機関・諸氏のご指導・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)
- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 板橋範芳(大館市教育委員会) | 秋元信夫・藤井安正(鹿角市教育委員会) |
| 工藤清泰(青森県浪岡町役場) | 小山彦逸(青森県七戸町教育委員会) |
| 本澤慎輔(岩手県平泉町教育委員会) | 小山純夫(よねしろ考古学研究会) |
| 荒川保徳(大館史遊会) | 坂本洋一(青森県埋蔵文化財調査センター) |
| 鷲谷豊(北羽歴史研究会) | 遠藤正夫(青森市教育委員会) |
| 村田健二(財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団) | |
| 高島成侑(八戸工業大学建築学研究室) | 宮 宏明(北海道余市町教育委員会) |
| 小山岳夫(長野県御代田町教育委員会) | 加賀真樹(珠洲市教育委員会) |
| 齋藤隆悦(大館市役所) | 関 直(岩手県立釜石北高等学校) |
| 萩原三雄(財団法人山梨文化財研究所) | 本堂寿一(岩手県北上市立博物館) |
| 珠洲市立珠洲焼資料館 | |
- 12 本書の執筆は、第一次調査分の草稿を大野憲司が、第二次調査分の草稿を高橋学が、第三次調査分のうち縄文時代の遺構・遺物の草稿を小山内透と藤岡光男が執筆し、その他を桜田隆が執筆した。また、桜田隆が第三次調査の成果を併せて全体を構成し、執筆・編集した。

凡 例

- 1 本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は国家座標第X系による座標北を示す。
原点(MA50)とした秋田県土木部北秋田土木事務所の打設杭(STA.No120)の座標値は、
X : 27860.7590 Y : -21279.3905である。この原点における座標北と磁北との偏角は
東に $0^{\circ} 9' 48''$ である。
- 2 遺構番号は検出順に連番としたが、精査過程において欠番となったものもある。なお、遺
構番号は、第一次調査が1～、第二次調査が50～、第三次調査が100～の番号を用いている。
ただし、掘立柱建物跡と柱列については、建物プランの確認順に1～43の番号を、柱列プラン
は確認順に44～54の番号を用いた。
- 3 遺構の種別を表す略号は以下の通りである。


















SA……柱列	SB……掘立柱建物跡
SD……空堀・溝状遺構	SE……井戸
SF……土塁	SI……竪穴住居跡
SK……土坑	SKF…フラスコ状土坑
SKI…竪穴状遺構	SR……土器埋設遺構
SX……火葬墓・被火骨出土遺構	SN……焼土遺構
SM……橋	
- 4 土層註記は基本層位にローマ数字を用い、遺構埋土・盛土にはアラビア数字を用いた。ま
た攪乱(木根等)はKで表示した。
- 5 挿図中の遺物実測図には通し番号を付した。それらは図版中の遺物写真の番号とも対応
する。
- 6 掘立柱建物跡の柱穴の呼称は、本来的には梁行方向と桁行方向で統一して行うべきであ
ろうが、本遺跡では東西方向(見かけの東西方向も含む)をX軸、南北方向(見かけの南北方
向も含む)をY軸とした方眼を作り、柱穴はその交点の(X, Y)で表示した。
- 7 柱穴および柱穴様ピットの深さは、床面あるいはプラン確認面からの深さと共に、基準高
からの深さも併記した。
- 8 掘立柱建物跡の柱間寸法で、メートル法から曲尺に換算する場合には1尺を30.3cmとし
た。メートル数値を30.3cmで除算し、小数点第3位で四捨五入している。
- 9 縄文時代中期の竪穴住居跡に付設されている「炉」を、火を焚いた石囲の区画(石囲部)と
それに連続して床面が掘り込まれた区域(掘り込み部)が1セットになった状態

あることから『所謂「石囲複式炉」の形態』と呼称している。本来「複式炉」とは、『土器を利用した火つぼと、石で構成した炉が1セットとなっているもの』である。これが現在「複数の空間から構成される炉」と拡大解釈されて「〇〇複式炉」と使用されている。

本報告書では、簡便に炉の形態を説明できる用語として『所謂「石囲複式炉」の形態』として使用した。また、石囲の区画の中に土器を埋設している形態の炉を『土器埋設石囲炉』と呼称した。

10 須恵器系中世陶器(珠洲焼・珠洲系陶器)の拓影図は、縄文土器の拓影図と異なり左側に内面の拓影、右側に断面を配置している。この場合、断面は、左側が内面側となり右側が外面側となるよう作図した。陶磁器の実測図も同様に配置した。

11 挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

	炉・かまど・床面堆積の焼土		粘土堆積・貼床
	埋土中の焼土		灰(禾本科植物灰)
	白頭山・苫小牧火山灰		炭化物・炭化材
	柱材の痕跡		炉石の被火熱部位
	土器の黒色処理部位		須恵器
	土器付着炭化物(煤状・糊状)		石器の擦痕・磨痕
	石器の被火熱部位		石器の凹み部
	石器の光沢部位		
	土器・土器片		石器・剥片・礫

12 竪穴住居跡の床面積は、牛方商会製マイクロコンピュータ内蔵座標計算式精密面積線長測定器(商品名:ウシカタエリアカーブメータX-PLAN360)を使用して3回測定して平均値を求め小数点第2位で四捨五入し、第1位までとした。

13 縄文土器は時期と文様構成等から下記のように分類した。

I 群土器 縄文時代前期の土器で綾絡文が施されている。

II 群土器 縄文時代中期の土器

a 類 貼付隆帯で口縁部文様帯を区画し、口縁部文様帯には撚糸圧痕文が施され、体部には綾線文が施されるもの。

b 類 縄文地文に縦位の沈線(懸垂文)が施されるもの。

c 類 b 類の文様にさらに刺突文が施されているもの。

d 類 曲線的な沈線が描かれているもの。

e 類 複数の沈線によって曲線的な文様が描かれるもの。

III 群土器 縄文時代後期の土器

- a 類 縄文地文に横位の沈線が施されるもの。
- b 類 沈線区画の磨消し縄文が施されるもの。
- c 類 焼成前の穿孔をもつもの。
- d 類 隆・沈線文で区画するもの。
- e 類 口縁部に平行沈線が施されるもの。
- f 類 縄文地文に2条1組の逆U字状に沈線を施し、沈線屈曲部の上位に円形刺突文をもつ径12mm程のボタン状貼付文を施しているもの。

IV群土器縄文時代晩期の土器

- a 類 羊歯状文が施文されるもの。
- b 類 沈線文が施されるもの。
- c 類 沈線区画の磨消し縄文が施されるもの。

V群土器 I～IV群のいずれに所属するか判別し難いもの、区画文や沈線文が施文されず、縄文や撚糸文のみが施文される粗製土器

- 14 石器の説明文中、表面とは実測図左側の面を、裏面とは同右側の面を指す。

目 次

	序	
	例言	
	凡例	
	目次	
第1章	はじめに	1
第1節	発掘調査に至るまで	1
第2節	調査の組織と構成	3
第2章	遺跡の立地と環境	5
第1節	遺跡の位置と立地	5
第2節	歴史的環境	6
第3章	発掘調査の概要	16
第1節	遺跡の概観	16
第2節	調査の方法	17
第3節	調査経過	18
1	第一次調査の経過	18
2	第二次調査の経過	19
3	第三次調査の経過	20
第4章	調査の記録	23
第1節	検出遺構と出土遺物	23
1	縄文時代の遺構と遺物	25
2	古代(平安時代)の遺構と遺物	63
3	古代～中世の遺構	92
4	中世の遺構と遺物	98
5	中世～近世の遺構と遺物	139
6	近代現代および時期不明の遺構と遺物	145
7	時期不明の遺構と遺物	147
第2節	遺構外出土遺物	155
1	縄文時代の遺物	155
2	古代(平安時代)の遺物	165

3 中世の遺物	165
4 近代現代の遺物	167
第5章 分析と考察	171
第1節 縄文時代の遺構と遺物	171
第2節 古代(平安時代)の遺構と遺物について	175
第3節 中世城館としての山王岱遺跡	177
第4節 墓と火葬場および火葬人骨	181
第5節 近世の煙管(キセル)について	188
第6章 まとめ	190

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

県土木部北秋田土木事務所は、国道103号線の大館市内における交通混雑の緩和を目指し、昭和55年度から国の補助事業として大館市山館を起点とし、大館市根下戸を終点とする延長7,677mの国道改良工事(国道103号大館南バイパス)を計画した。路線は、山館から萩ノ台までは大館市東部に延びる山地から連なる台地上を通り、萩野台から北西部では市街地を避けて沖積地を通して根下戸の台地上に計画されたが、路線のうち山館から萩ノ台に至る間は、標高70～90mの段丘縁辺部にあたり、各種調査及び大館市への問い合わせの結果、計画路線内に埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることが判明した。この事実確認と今後の対応について県教育委員会に調査と指導の依頼があった〔昭和60年4月25日付 北土-320 土木部北秋田土木事務所長から教育庁文化課長あて「国道改良工事(国道103号大館南バイパス)に伴う埋蔵文化財の調査について(依頼)」〕。

県教育委員会では、昭和60年10月8日、9日の2日間分布調査を実施する旨回答〔昭和60年9月20日付 秋教文課発第400号 教育庁文化課長から土木部北秋田土木事務所長あて「国道改良工事に伴う埋蔵文化財の調査について(回答)」〕し、調査の結果、埋蔵文化財包蔵地及び包蔵地と推測される地区は6地域であり、今後範囲確認調査が必要であることと、範囲確認調査の結果記録保存の必要なものについては発掘調査を実施すべきことを回答した〔昭和60年10月19日付 秋教文課発第83号 教育庁文化課長から土木部北秋田土木事務所長あて「国道103号大館南バイパスの埋蔵文化財の調査結果について(回答)」〕。

昭和61年度に、上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・餌釣・山王岱(遺跡推定範囲の一部)の4ヶ所の範囲確認調査を県埋蔵文化財センターが実施し、記録保存のため発掘調査が必要であることがわかった。^(註1)

昭和62年度に上ノ山Ⅰ遺跡と上ノ山Ⅱ遺跡及び山王岱遺跡の一部(市道の東側地区、第1次調査)の発掘調査が実施され、調査報告書(上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡)と概報(山王岱遺跡)を刊行した。山王岱遺跡の発掘調査後、山王岱遺跡を南北に横断する市道の西側地区の範囲確認を実施した。^(註4)

昭和63年度に、同改良事業の計画変更があり、路線幅が拡幅されることになった。昭和62年度に発掘調査を終了した3遺跡(調査区)も拡幅部分の発掘調査を追加することとなった。

このため、平成元年5月から上ノ山Ⅱ遺跡第2次発掘調査^(註5)、同年7月より山王岱遺跡第2次発掘調査(市道の南東地区)を実施した。

平成2年度に餌釣遺跡発掘調査^(註6)と上ノ山Ⅰ遺跡第2次発掘調査^(註7)を実施した。また、山王岱遺



第1図 計画路線図

跡の拡幅部分と上野遺跡の範囲確認調査^(註8)を実施した。この結果、山王岱遺跡の調査対象面積が10,200㎡、上野遺跡が2,400㎡となった。

平成3年度には、山王岱遺跡第3次発掘調査と上野遺跡発掘調査を実施することとなった。

註

- 1 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第155集
1987(昭和62)年
- 2 秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
－上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第173集
1988(昭和63)年
- 3 秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報
－山王岱遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第170集 1988(昭和63)年
- 4 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第174集
- 5 秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
－上ノ山Ⅱ遺跡第2次調査－』 秋田県文化財調査報告書第193集
1990(平成2)年
- 6 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
－餌釣遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第210集 1991(平成3)年
- 7 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
－上ノ山Ⅰ遺跡第2次調査－』 秋田県文化財調査報告書第211集
1991(平成3)年
- 8 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集
1991(平成3)年

第2節 調査の組織と構成

所在地	秋田県大館市餌釣字山王岱3番地、12番地の2、30番地の1、外
調査期間	第1次調査 昭和62(1987)年5月6日～7月14日 第2次調査 平成元(1989)年7月17日～8月31日 第3次調査 平成3(1991)年5月13日～11月9日
調査面積	第1次調査 3,450㎡(対象面積3,890㎡) 第2次調査 2,300㎡

第3次調査 10,200㎡

(総面積 15,950㎡)

調査主体者

秋田県教育委員会

調査担当者

第1次調査

大野 憲司 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)

第2次調査

高橋 学 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)

藤原 司 (秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

(現 大曲市立大曲中学校教諭)

第3次調査

櫻田 隆 (秋田県埋蔵文化財センター文化財主査)

高橋 学 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)

小山内 透 (秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

藤岡 光男 (秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

石川 真一 (秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

総務担当者

第1次調査

加藤 進 (秋田県埋蔵文化財センター主査)

(現 秋田県民会館施設課長)

高橋忠太郎 (秋田県埋蔵文化財センター主事)

第2次調査

佐田 茂 (秋田県埋蔵文化財センター主査)

高橋忠太郎 (秋田県埋蔵文化財センター主事)

(現 秋田県立農業科学館主任)

第3次調査

佐田 茂 (秋田県埋蔵文化財センター主査)

佐々木 真 (秋田県埋蔵文化財センター主任)

調査協力機関

秋田県土木部北秋田土木事務所

大館市役所企画室市史編さん係

大館市教育委員会生涯学習課

大館市社会福祉協議会

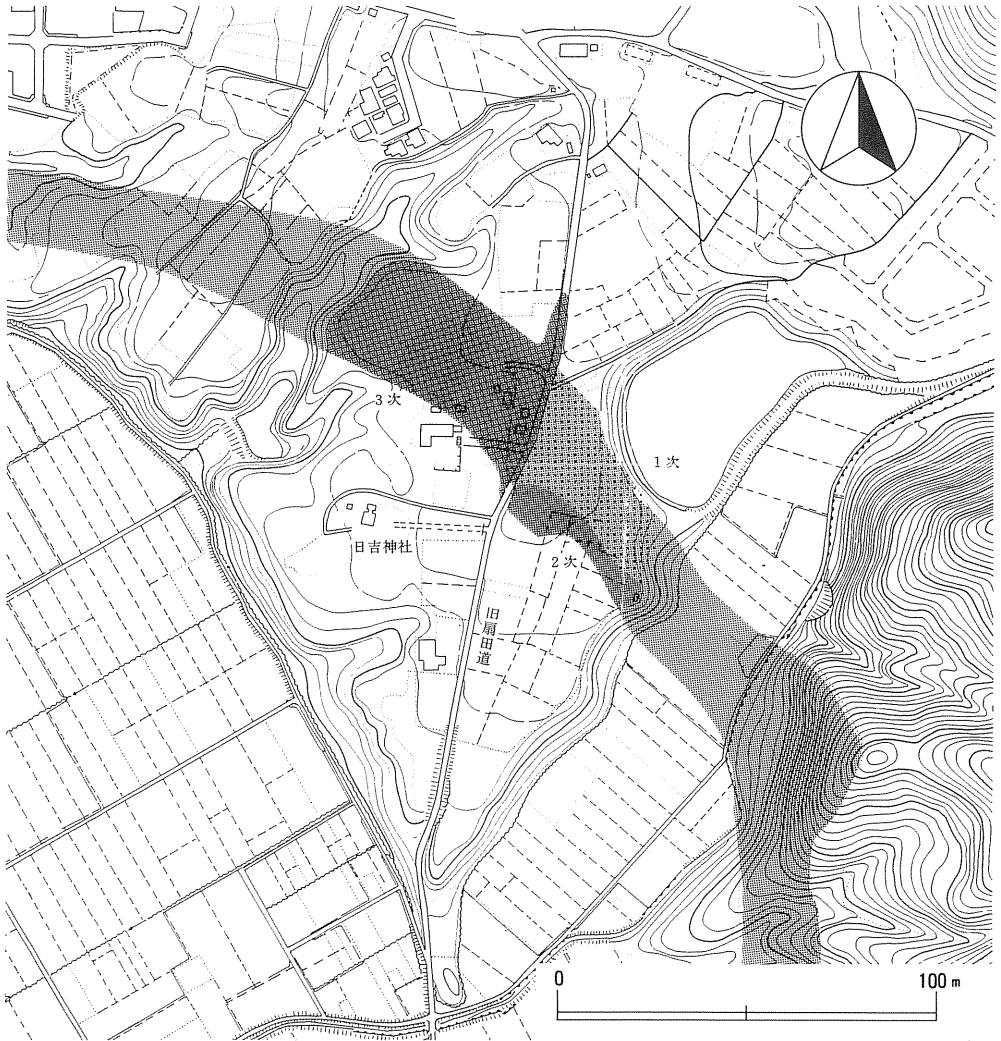
比内町教育委員会

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と立地（第2図、図版1）

山王岱遺跡の所在する大館市は、秋田県北東部、奥羽脊梁山脈の西縁に位置する大館盆地にあり、北緯40度9分から40度26分、東経140度28分から140度44分の地域を占めている。大館盆地には、米代川とその支流群によって形成された段丘面が発達している。この段丘面は、小支谷の水流に開析されて台地群となっている。

遺跡は、大館市街地の南東側に広がる標高70～80mの台地群のうち、最も南の台地上に立地



第2図 遺跡周辺地形と調査区

する。遺跡の所在する台地の東側は餌釣沢によって開析され、西側は池内方面に続く沖積地となっている。このため、遺跡部分は平面的には、南に突き出た二等辺三角形の半島状を呈し、北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。西側沖積地との比高差は約17mである。

台地を形成している黄褐色粘土質火山灰層の上位は波状を呈しており、この凹部に大礫を含む砂礫層が堆積している。それらの上位に所謂黒ボク土が堆積している。この所謂黒ボク土の中に十和田火山噴出物である大湯浮石層が不連続的に堆積している。

台地の西縁近くに日吉神社(旧山王大権現)が鎮座するが、神社境内を区画するように大きな空堀跡が巡っている。このため『秋田県の中世城館』においては、この神社境内を「餌釣館」の範囲としている^(註1)。発掘調査の範囲は、この「餌釣館」の北東側を南東から北西に横断する道路建設予定区域であるが、その後に公刊された『秋田県大館市遺跡詳細分布報告書』と『秋田県遺跡地図(県北版)』では、「餌釣館」の範囲を北側に拡大し、山王岱遺跡も含めている。

台地の中央部を南北に近世の脇街道である「扇田道」が通っている。

第2節 歴史的環境 (第3図・第1表)

山王岱遺跡では、縄文時代、古代(平安時代)、中世、近世及び現代の遺構・遺物を検出・出土したが、大館盆地には、旧石器時代から近世までの遺跡が数多く知られている。

ここでは、山王岱遺跡の周辺にあって発掘調査され、類似の様相を呈する遺跡を中心に歴史的な環境を概観する。なお、遺跡名は、『秋田県大館市遺跡詳細分布報告書』と『秋田県遺跡地図(県北版)』登載の遺跡名とした。文中()内の数字は『秋田県遺跡地図(県北版)』での遺跡登録番号であり、第3図・第1表と対応する。

米代川流域は、縄文時代から北と南の「文化圏」の接触地帯であったと言われており、大館地方は、古くは「ひない」と呼ばれ、火内・比内・肥内と記述された地域である。史書『日本三代実録』に、元慶2(878)年に蝦夷12ヶ村による秋田城襲撃が起こった際に「火内」が奥地の村の1つとして参加したことが記されているのが初見である。

大館盆地内で旧石器時代の遺跡として知られているのは、大型石刃の出土した松木高館平(4-30)1カ所だけである。

縄文時代の主な遺跡としては、中羽立(4-6)・福館橋桁野(4-13)・鍛冶屋敷(4-32)・長瀬I(4-38)・餅田屋敷添(4-43)・諏訪台(4-51)・塚ノ下(4-53)・玉林寺跡(4-56)・萩ノ台II(4-67)・池内(4-68)・上野(A)・餌釣(C)・山館上ノ山(4-71)・野沢岱III(4-78)・上聖(B)・家ノ後(D)・萩峠(4-81)・鳶ヶ長根II(4-121)・鳶ヶ長根III(4-122)・鳶ヶ長根IV(4-123)・芋掘沢(4-125)・鳴滝(4-41)・横沢(12-13)・本道端(12-19)・柏木(15-8)・矢石館(15-12)の各遺跡がある。このうち、これまでに発掘調



第3図 周辺の遺跡

査され、報告書等が刊行された遺跡は、福館橋桁野・鍛冶屋敷・餅田屋敷添・諏訪台^(註2)・塚ノ下・玉林寺跡・餌釣・山館上ノ山^(註2)・萩峠・鳶ヶ長根Ⅱ・鳶ヶ長根Ⅲ・鳶ヶ長根Ⅳ・芋掘沢・鳴滝・柏木・矢石館・本道端・横沢・上野・上聖の20遺跡である（家ノ後遺跡は刊行準備中）。

早期の遺跡としては、鳶ヶ長根Ⅳ・本道端・山館上ノ山・横沢遺跡があげられ、鳶ヶ長根Ⅳ・横沢遺跡では尖底貝殻文土器が出土している。前期の遺跡としては、福館橋桁野・山館上ノ山・芋掘沢遺跡があげられ、福館橋桁野では竪穴住居跡1軒が、山館上ノ山では竪穴住居跡とフラスコ(袋)状土坑などの遺構と捨て場等が、芋掘沢遺跡では土器棺1基が検出されている。中期の遺跡としては、福館橋桁野・玉林寺跡・餌釣・山館上ノ山・野沢岱Ⅲ・鳴滝・柏木・本道端・横沢遺跡があげられ、福館橋桁野では竪穴住居跡1軒が、玉林寺跡では竪穴住居跡1軒が、餌釣では竪穴住居跡1軒と焼土遺構1基が、山館上ノ山遺跡では竪穴住居跡が、野沢岱Ⅲでは青竜刀形石器が、鳴滝では竪穴住居跡2軒とフラスコ状土坑2基などが、柏木では竪穴住居跡6軒などが、本道端では竪穴住居跡23軒と土坑6基など、横沢では竪穴住居跡1軒やフラスコ(袋)状土坑25基などが検出・出土している。後期の遺跡としては、諏訪台・塚ノ下・餌釣・家ノ後・萩峠・鳶ヶ長根Ⅳがあげられ、諏訪台では竪穴住居跡2軒とフラスコ状土坑3基などが、塚ノ下では目に天然アスファルトを埋め込んだ土偶などが、餌釣では竪穴住居跡1軒が、山館上ノ山遺跡では竪穴住居跡とフラスコ(袋)状土坑などが、家ノ後では竪穴住居跡4軒と土坑などが、萩峠では竪穴住居跡10軒と土坑20基が、鳶ヶ長根Ⅳでは竪穴住居跡1軒が検出・出土している。晩期の遺跡としては、山館上ノ山・家ノ後・鳶ヶ長根Ⅲ・矢石館遺跡があげられ、山館上ノ山では竪穴住居跡とフラスコ(袋)状土坑などが、家ノ後では土坑と土壙墓などが、鳶ヶ長根Ⅲでは竪穴住居跡6軒と土坑33基が、矢石館では組石棺墓5基を検出している。

続縄文・弥生時代の遺跡は、粕田(4-8)・釈迦池(4-10)・片山館(4-44)・諏訪台・鳶ヶ長根Ⅳ・鳴滝・柏木の6遺跡が発掘調査されている。粕田では土坑から砂沢式の壺形土器が出土し、片山館では竪穴遺構10基から江別Ⅲb式土器片・天王山式土器片が出土している。諏訪台では竪穴住居跡5軒と焼土遺構5基などのほか砂沢式の土器が出土している。諏訪台は、米代川流域で弥生時代の竪穴住居跡が初めて調査された遺跡である。鳶ヶ長根Ⅳでは天王山式の土器片が多く出土している。柏木では頭骨に小形扁平片刃石斧が副葬された土壙墓と配石土壙墓のほか小坂X式に近い土器の出土した土坑が検出されている。

古代の大館地方の情勢については、元慶2(878)年の秋田城襲撃(所謂「元慶の乱」)の際に「火内」の村が参加しており、律令収奪体制の北進とそれに対する在地住民の抵抗の様子を窺うことができる。この時陸奥国から小野春風らの援兵が上津野(鹿角)から米代川沿いに西進・南下して秋田城に入っており、当時既に陸奥国と出羽国を結ぶ最北ルートとしての交通路があったことも理解できる。『吾妻鏡』によれば、古代末期には農耕生活に基づく経済力と武

力を身につけた在地領主としての河田氏が「陸奥国肥内郡」に君臨していた。その河田次郎は、文治5(1189)年に肥内郡贄柵で平泉の藤原泰衡を殺害し、鎌倉幕府の目指す中世封建制による全国支配の最大障壁を取り除く役目を果している。古代(平安時代)の遺跡としては、大館野(4-5)・粕田・諏訪台・塚ノ下・扇田道下(4-65)・池内(4-68)・上野・餌釣・山館上ノ山・横沢・大日堂前(12-7)・袖ノ沢(12-12)・谷地中館(12-24)・細越(12-25)の各遺跡が発掘調査されている。大館野では、「ムラ」を区画する道路・溝が、64軒の竪穴住居跡・20棟の掘立柱建物跡・3基の製鉄遺構・2基の井戸等が検出され、扇田道下では竪穴住居跡約70軒・掘立柱建物跡12棟が検出されている。池内では埋土中に降下火山灰(大湯浮石層)が堆積する竪穴住居跡1軒を検出し、底部に砂粒を付着させている土師器甕形土器所謂「砂底土器」が出土した。横沢では土坑の埋土中に降下火山灰(白頭山・苫小牧火山灰)が検出された。上野では擦文土器の伴出する竪穴住居跡1軒を検出している。この地域の古代の遺跡では、噴出源の異なる2枚の広域降下火山灰が検出されており、遺構の構築―廃棄の年代と遺跡相互の関連および所謂「砂底土器」の年代を検討する好資料となっている。また、古代の住居が近世になって大館市真中出川と板沢の二カ所で洪水に洗われて出現した、所謂埋没家屋についての記録も菅江真澄の随筆『さくらがり』に残されており、住居の上屋構造を知るてがかりとなっている。

中世の大館地方の情勢は以下のとおりであり、この状況の中で城館が多く構築されたと考えられる。

鎌倉幕府の中世封建制による全国支配の中で大館・北秋田の所謂比内地方にも幕府御家人である甲斐源氏の浅利氏が地頭として入部している。元弘3(1333)年に鎌倉幕府が滅び建武元(1334)年に南部師行に比内郡南河内の支配権を付与する国宣が発せられたことから浅利氏(浅利清連)は建武3(1336)年に北朝を奉じて鹿角国代成田小次郎が守護する大里城等に対し攻撃を開始している。建武5(1338)年に南部師行が畿内で戦死したのを境に南朝方の勢力が衰え、比内地方の南部氏は一掃され、比内が浅利氏の所領に復していたことが文和3(1354)年の比内浅利氏の惣領とみられる沙弥浄光の『譲状』からうかがわれる。また、天文19(1550)年の『浅利與市侍分限』からは、戦国期の浅利領内では村落名を姓とする武士団が広範に分布し、在地支配体制が確立していたことを知ることができる。永禄5(1562)年に浅利則祐が安東愛季に長岡城で敗死させられ、天正11(1583)年と天正14(1586)年には浅利頼平が旧領回復のため津軽大浦為信の後援を得て比内に攻め入り、文禄4(1595)年にも浅利頼平が秋田実季と合戦している。

天正末期に秋田実季の領有に帰した比内郡は、陸奥国から出羽国に区画され秋田郡に含まれたが慶長7(1602)年の佐竹入部により中世支配体制が終わり、近世大名知行制へと移行した。

中世の遺跡は、矢立廃寺(4-4)・大館野・長森(4-15)・白沢(4-9)・福館(4-12)・七ツ館(4-20)・花岡城神山(4-21)・釈迦内古館(4-25)・釈迦内館(4-26)・高館(4-29)・押館(4-39)・片山館・川口館(4-4

第1表 周辺遺跡地名表

地図番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・遺物
4-4	矢立麿寺	松原字ハゲノ下	寺院跡	礎石建物跡、掘立柱建物跡、柵列、カワラケ、珠洲系陶器、白磁四耳壺、クソペラ
4-5	大館野	白沢字大石・上ハ野・大館野	集落跡	平安時代竪穴住居跡、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、掘立柱倉庫跡、井戸跡、製鉄炉
4-6	中羽立	粕田字道ノ下	遺物包含地	フラスコ状ピット、縄文土器片(中期・大木10式土器)
4-8	粕田	花岡字大森上岱	集落跡	平安時代竪穴住居跡、掘立柱建物跡、砂沢式土器、土師器、須恵器陶器
4-9	白沢	白沢字古館	館跡	空堀、段築、土師器、須恵器、中世陶器
4-10	釈迦池	商人留字大沢口	集落跡	竪穴遺構・縄文土器(前～晩期)、弥生土器、石器
4-11	橋桁	橋桁字前田	遺物包含地	縄文土器(後期・晩期)
4-12	福館	釈迦内字福館	館跡	空堀
4-13	福館橋桁野	橋桁字前田	集落跡	縄文時代竪穴住居跡、縄文土器(前期・中期・晩期)土師器
4-15	長森	花岡町字大森	遺物包含地	珠洲系陶器(短頸壺、白磁四耳壺)、土師器
4-18	根井下	花岡町字根井下	遺物包含地	縄文土器片(中期・円筒上層式)
4-19	十三森	花岡町字根井下	遺物包含地	円墳状遺構、縄文土器片(前期・晩期)、土師器、須恵器中世陶器
4-20	七ッ館	花岡町字七ッ館	遺物包含地・館跡	堀、段築、縄文土器(晩期)、土師器、須恵器、中世陶器、石器、石製品、土製品
4-21	花岡城・神山	花岡町字神山、アセ石	館跡	空堀、土師器、須恵器、中世陶器
4-25	釈迦内古館	釈迦内	遺物包含地	段築、空堀
4-26	釈迦内館	釈迦内字館	遺物包含地	空堀、段築、中世陶磁器
4-29	高館	松木字高館平	館跡	空堀、段築
4-30	松木高館平	松木字高館平	遺物包含地	大型石刃
4-31	松木	松木字家後	遺物包含地	縄文土器(前期・円筒下層a・b式)
4-32	鍛冶屋敷	沼館字鍛冶屋敷	遺物包含地	縄文土器(後期)、土師器、須恵器、石器
4-34	沼館	沼館字細越	館跡	
4-38	長滞I	沼館字長滞	遺物包含地	縄文土器(中期～晩期)、石器
4-39	押館	川口字十三森	館跡	空堀
4-41	鳴滝	川口字下鳴滝岱	集落跡	縄文時代竪穴住居跡、フラスコ状ピット、組石土坑、縄文土器(中・後・晩期)
4-42	川口館	川口字長里	館跡	空堀
4-43	餅田屋敷添	餅田字中道下屋敷添	遺物包含地	不整形円形土坑、縄文土器(前期・円筒下層a・b式)
4-44	片山館	片山字上抗上岱	館跡	続縄文時代竪穴遺構、掘立柱建物跡、中世竪穴遺構、空堀、土壘、後北C式土器、鉄器
4-45	土飛山館	字宗福寺後	館跡	空堀、段築
4-46	大館城	大館市字中城・三の丸・桂城・長倉・片町	館跡	内堀土居
4-51	諏訪台	大茂内	集落跡	縄文・弥生・平安時代竪穴住居跡、配石遺構、縄文土器(前期～晩期)、弥生土器、石器
4-53	塚ノ下	茂内字塚下	集落跡	縄文・平安時代竪穴住居跡、フラスコ状ピット、石囲炉、縄文土器(中期・円筒上層式)
4-54	茂内	茂内字膳棚下	遺物包含地	縄文土器(中期・円筒上層a・b式)
4-55	鬼ヶ城	茂内字鬼ヶ台	館跡	空堀、段築、榊形遺構
4-56	玉林寺跡	茂内字鬼ヶ台	寺院跡	縄文時代竪穴住居跡、土坑、中世配石土坑、縄文土器(中期)、陶磁器
4-59	水沢館	雪沢字水沢谷地	館跡	空堀、縄文土器、土師器
4-63	太平山	神明堂後	遺物包含地	縄文土器(晩期)、土製品
4-64	小館花館	小館花	館跡	空堀、段築、土師器、中世陶器

第2章 遺跡の立地と環境

地図番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・遺物
4-65	扇田道下	扇田道下	集落跡	平安時代堅穴住居跡・掘立柱建物跡、土坑、縄文土器(中期・後期)、土師器、須恵器
4-67	萩ノ台Ⅱ	小館花字萩ノ台・池内字上野	遺物包含地	縄文土器(前期・中期)
4-68	池内	池内字上野	集落跡	平安時代堅穴住居跡、土師器、刀子
4-69	餌釣館	餌釣字山王岱・柄沢字山王台	館跡・集落跡	縄文・平安時代堅穴住居跡、建物跡柱穴、土坑、空堀、溝、縄文土器(前期～晩期)、土師器、須恵器、中国陶磁器、珠洲系陶器
4-70	山館	山館字館の上	館跡	土師器、中世陶磁器
4-71	山館上ノ山	山館字上ノ山	集落跡	縄文・平安時代堅穴住居跡、土坑、フラスコ状ピット、縄文土器、石器、土師器
4-78	野沢岱Ⅲ	曲田字野沢岱	遺物包含地	縄文土器、青竜刀型石器、磨製石器
4-81	萩峠	軽井沢字萩峠	集落跡	縄文時代堅穴住居跡、中世空堀、縄文土器(後期)、土師器、中世陶磁器
4-82	軽井沢新館	軽井沢字新館	遺物包含地	土師器、中世陶器
4-83	葛原館	葛原字古館・堀間・館ノ下・狐森・膳棚	館跡	空堀、土師器、須恵器、中世陶磁器
4-89	別所館	別所字一の地	館跡	郭、段築、空堀
4-90	十二所古館	十二所字中藤原	館跡	郭、空堀
4-91	十二所城	十二所字台・真山岱・藤原	館跡	土師器、須恵器、鉄滓、中世陶磁器
4-92	大滝古館	十二所字古館	館跡	土師器、中世陶器
4-94	二井田館	二井田字館	館跡	
4-97	本宮館	本宮字熊ノ下	館跡	郭、空堀、中世陶磁器
4-102	前田館	比内前田字前田山根	館跡	堅穴住居跡、掘立柱建物、板塀遺構、谷地堀、土師器、中世陶器、木製黒塗り椀
4-103	杉沢館	杉沢字姥沢出口	館跡	
4-105	大子内館	大子内字三ッ梨	館跡	
4-106	林ノ上	大子内字林ノ上	遺物包含地	石器片
4-108	大披館	大披字大披	館跡	郭、空堀
4-109	櫃崎館	櫃崎字館宅地	館跡	
4-110	高戸谷館	櫃崎字上坂上	館跡	空堀、土師器、中世陶器
4-111	赤石館	赤石字屋敷	館跡	
4-121	蒿ヶ長根Ⅱ	軽井沢字蒿ヶ長根	集落跡	土坑、縄文土器(晩期)、石器
4-122	蒿ヶ長根Ⅲ	軽井沢字蒿ヶ長根	集落跡	縄文時代堅穴住居跡、土坑、縄文土器(晩期)、石器
4-123	蒿ヶ長根Ⅳ	軽井沢字蒿ヶ長根	集落跡	縄文時代堅穴住居跡、埋甕塚、埋設土器、土坑、縄文土器(早～晩期)、弥生土器
4-125	芋堀沢	餅田字根下戸道下芋堀沢	遺物包含地	石蓋カメ棺、縄文土器(前・中期)
4-126	根下戸道下	餅田字根下戸道下芋堀沢	遺物包含地	縄文土器(後期)、土師器
12-6	独鈷	比内町独鈷字大日堂前3-1外	館跡	郭、空堀
12-7	大日堂前	独鈷字大日堂前10外	館跡	堅穴住居跡、溝状遺構、土坑、縄文土器片、土師器片
12-8	十狐城	独鈷字大日字館間22外	館跡	郭、空堀
12-12	袖ノ沢	味噌内字宿内袖ノ沢67-2外	集落跡	平安時代堅穴住居跡、土坑、溝状遺構、柱穴様土坑、土師器片
12-13	横沢	扇田字横沢3外	集落跡	縄文・平安時代堅穴住居跡、土坑、フラスコ状土坑、板状土偶、縄文土器片(早期～中期)、土師器片
12-15	横沢	扇田字横沢128-1	遺物包含地	土師器片
12-16	真館	新館字真館100-1外	館跡	堅穴住居跡、土坑、土師器片、須恵器
12-17	長岡城	扇田字長岡41外	館跡	腰郭、堀跡
12-19	本道端	扇田字本道端44外	集落跡	堅穴住居跡、土坑、集石遺構、縄文土器(早～中・晩期)
12-20	中野八幡台館	扇田字中野八幡台42外	館跡	土師器片
12-21	中野城	扇田字中野八幡台10外	館跡	空堀、郭

地図番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・遺物
12-24	谷地中館	谷地中宇谷地中20、21	館跡	竪穴住居跡、焼土遺構、縄文土器(前・後・晩期)、土師器片、須恵器
12-25	細越	笹館字細越60外	集落跡	竪穴住居跡、土師器片、須恵器片
12-26	笹館城	笹館字笹館189-4外	館跡	
12-33	八木橋城	八木橋字八木橋63外	館跡	郭、空堀
15-3	赤川	赤川字狐森	遺物包含地	縄文土器(前期・円筒下層b・c式)
15-4	茂屋下岱	茂屋	遺物包含地	縄文土器片(前期・円筒下層a~c式)、岩偶
15-7	越山向館	岩瀬字越山向館9-2	遺物包含地	縄文土器(中期)
15-8	柏木	山田字柏木1-2	遺物包含地	組石土墳墓、竪穴住居跡
15-11	下館務沢	山田字下館務沢	館跡	
15-12	矢石館	早口字矢石館60	配石	石棺状組石、縄文土器、土師器、須恵器片
15-17	越山薬師堂下	岩瀬字越山	遺物包含地	縄文土器片
15-18	越山館	岩瀬字越山	館跡	空堀
15-19	野突館	山田字野月	館跡	空堀、陶器片、鉄滓
15-20	山田館	山田字山田171	館跡	空堀
15-21	向家下館	山田字向家下	館跡	
15-22	一本柳館	山田字向家下	館跡	
A	上野	大館市池内字上野	集落跡	縄文・平安時代竪穴住居跡、土坑、フラスコ状土坑、縄文土器(前~晩期)、弥生土器片、石器、土師器、須恵器、捺文土器、小刀、刀子
B	上聖	曲田字上聖3-2外	集落跡	土坑、焼土遺構、縄文土器(前~晩期)、石器
C	家ノ後	曲田字家ノ後96-2外	集落跡	縄文時代竪穴住居跡、土墳墓、粘土採掘坑、土坑、焼土遺構、土器捨て場、縄文土器(中~晩期)、石器
D	餌釣	餌釣字館27外	集落跡・館跡	縄文・平安時代竪穴住居跡、中世竪穴建物跡、建物跡柱穴、空堀、柵列、積石塚、縄文土器(中期~後期)土師器、中国陶磁器

2)・土飛山館(4-45)・大館城(4-46)・鬼ヶ城(4-55)・小館花館(4-64)・餌釣・山館(4-70)・萩峠・軽井沢新館(4-82)・葛原館(4-83)・別所館(4-89)・十二所古館(4-90)・十二所城(4-91)・大滝古館(4-92)・二井田館(4-94)・本宮館(4-97)・前田館(4-102)・杉沢館(4-103)・大子内館(4-105)・大披館(4-108)・櫃崎館(4-109)・高戸谷館(4-110)・赤石館(4-111)・独鈷(12-6)・十狐城(12-8)・真館(12-16)・長岡城(12-17)・中野八幡台館(12-20)・中野城(12-21)・谷地中館・笹館城(12-26)・八木橋城(12-33)・下館務沢(15-11)・野月館(15-19)・山田館(15-20)・向家下館(15-21)・一本柳館(15-22)が所在する。発掘調査は、矢立廃寺・大館野・長森・片山館・餌釣・萩峠・前田館・真館・谷地中館の9遺跡でおこなわれたが、片山館・餌釣・萩峠・前田館・真館・谷地中館は空堀等が検出された城館遺跡であり、^(註2)矢立廃寺・大館野・長森の3遺跡は集落・祭祀遺跡である。〇〇館・〇〇城と名称されていても館主・創建年代・規模の明確なものは少ない。館主については、七ツ館は出羽の庄司・浅利定頼、花岡城神山は浅利則頼・定頼・次郎吉、釈迦内館は浅利家の女性、高館は工藤信久、片山館は片山弥伝治(大学)、川口館は佐藤兵助、大館城は浅利勝頼・秋田実泰、小館花館は小立塙兵部、山館は山館刑部、山館右衛門、軽井沢新館は額田淡路、十二所城は十二所信濃・五城目兵庫、二井田館は川口安芸、本宮館は本宮弥九郎、前田館は前田清左衛門、杉沢館は武田與左エ門豊信・四郎太豊俊・杉沢数馬、大子内館は大子内三十郎、大披館は武田太郎作・弥蔵掃部助、十狐城は浅利則頼・則祐

勝頼、真館は真館九蔵、長岡城は浅利勝頼・頼平、中野城は浅利勝頼・頼広・片山駿河、笹館城は浅利勘兵衛、八木橋城は浅利牛蘭、野月館は野突助三郎・野突助右衛門、山田館は蟹沢庄兵衛と伝えられている。

片山館は、空堀で区画された2つの郭からなる館跡で、腰郭と三重の土塁も現存していた。郭内には角柱の掘立柱建物跡3棟・5軒の竪穴建物跡・7基の土坑等が検出された。餌釣では、空堀1条・柵列1条・竪穴建物跡4軒と12～13世紀の中国産白磁碗が出土しており、館跡と考えられている。矢立廃寺では、5次にわたる発掘調査の結果12世紀から13世紀初頭の中国産陶磁器(白磁碗と四耳壺・珠洲系片口鉢)とカワラケが出土し、仏殿跡・総門跡・三門跡とされた建物跡も他の建物跡と想定され、定説化していた14世紀前半の禅宗寺院説が否定され、新たに12世紀から13世紀初頭の建造物群である可能性が指摘されている。厠と考えられる土坑も検出され、内部から食物残渣である種子がクソベラとともに出土している。カワラケは、米代川流域では初めての出土である。大館野では、竪穴建物跡3軒と12世紀と思われる白磁片が出土している。長森では、沢奥の水田中から13世紀初頭の珠洲系陶器の短頸壺1個と四耳壺2個が発見され、水口祭りのような農耕祭祀が行われたことを想起させる。

註

- 1 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 1981(昭和56)年

この中で、餌釣館については以下のように記されている。「館は単郭で南北約120m、東西約85mの矩形の北西部に約45m、幅約25mの張出部がつく。郭の南北は古米代川に向かって台地を下刻した浸蝕谷を利用して空堀とし、東側は両浸蝕谷を結ぶように幅約10mの空堀を配して台地と切り離している。館の東側山王岱の台地上を南北に通る旧扇田道は、大館と扇田を結ぶ重要路である。郭上の16番地には日吉神社が座すが、これは廃館後に祀られたもので、館跡に直接関係する信仰遺跡は不明である。

この館に関する直接の記録は不明であるが、『浅利與市侍分限』に生内権助の名がみえ、当館の西約100mに池内集落があって、生(池)内権助の居館跡であったと考えられる。『長崎氏旧記』によると、生内権助は浅利勝頼を刺殺、勝頼の嫡子勝平の次男頼広が市里(餌釣)で権助をみつけ、南部門野まで追って討ち取ったという。山王岱15・21番が空堀、16～20番が郭と改租図に明瞭にあらわれている。」

補註 日吉神社は、明治時代初期の廃仏毀釈前には「山王大権現」とされていた。

佐藤久治氏は、日吉神社について「祭神は大山咋命(おおやまぐいのみこと)である。

浅利氏支配下の地侍が居住した餌釣館の館神であった。」としている。

佐藤久治 『秋田の神々と神社』 秋田真宗研究会 1981(昭和56)年

2 山館上ノ山遺跡は、合計7回の発掘調査が実施され、上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、上ノ山遺跡等の遺跡名で報告書が刊行されている。諏訪台遺跡は、諏訪台C遺跡として報告書が刊行されている。

片山館は、3回の発掘調査が実施され、いずれも片山館コの遺跡名で報告書が刊行されている。

参考文献

各々の遺跡は、以下の参考文献に示すもの以外は、大館市教育委員会『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』1990(平成2)年、大館市『大館市史』第1巻1979(昭和54)年及び秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県北版)』1991(平成3)年による。

比内町教育委員会	『真館緊急調査報告書』	1973(昭和48)年
比内町教育委員会	『谷地中「館」遺跡発掘調査報告書』	1978(昭和53)年
比内町教育委員会	『本道端遺跡発掘調査報告書』	1986(昭和61)年
大館市史編さん委員会	『北秋田郡田代町山田字柏木岱縄文期竪穴群 続縄文期配石土坑』	1971(昭和46)年
大館市教育委員会	『芋掘沢遺跡発掘調査報告書』	1972(昭和47)年
大館市史編さん委員会	『館コ発掘調査報告書 第1次』	1973(昭和48)年
大館市史編さん委員会	『福館遺物包蔵地、橋桁野竪穴住居址発掘調査概報』	1973(昭和48)年
大館市教育委員会	『柏田遺跡発掘調査報告書』	1974(昭和49)年
大館市史編さん委員会	『館コ発掘調査報告書 第2次』	1974(昭和49)年
大館市教育委員会	『山館上ノ山遺跡発掘調査報告書』	1975(昭和50)年
大館市教育委員会	『大館市玉林寺跡発掘調査報告書』	1986(昭和61)年
大館市教育委員会	『大館市矢立廃寺発掘調査報告書』	1987(昭和62)年
大館市教育委員会	『大館市山王台遺跡発掘調査報告書』	1990(平成2)年
奥山 潤	「松木鍛冶屋敷採集の石器」『北海道考古学』第五輯	1969(昭和44)年
奥山 潤	「福館遺跡」『北海道考古学』第五輯	1969(昭和44)年
秋田県立大館桂高等学校社会部	『池内発掘』	1973(昭和48)年
秋田県立大館鳳鳴高等学校社会部考古学班	『鳴滝遺跡発掘調査報告書』	1966(昭和51)年
秋田県立大館鳳鳴高等学校社会部考古学班	『鳴滝遺跡発掘調査報告書』	1977(昭和52)年
秋田県教育委員会	『塚の下遺跡発掘調査報告書』	秋田県文化財調査報告書第61集 1979(昭和54)年
秋田県教育委員会	「鶯ヶ長根Ⅱ遺跡」「鶯ヶ長根Ⅲ遺跡」「鶯ヶ長根Ⅳ遺跡」「萩峠遺跡」 『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』	秋田県文化財調査報告書第84集 1981(昭和56)年

第3章 発掘調査の概要

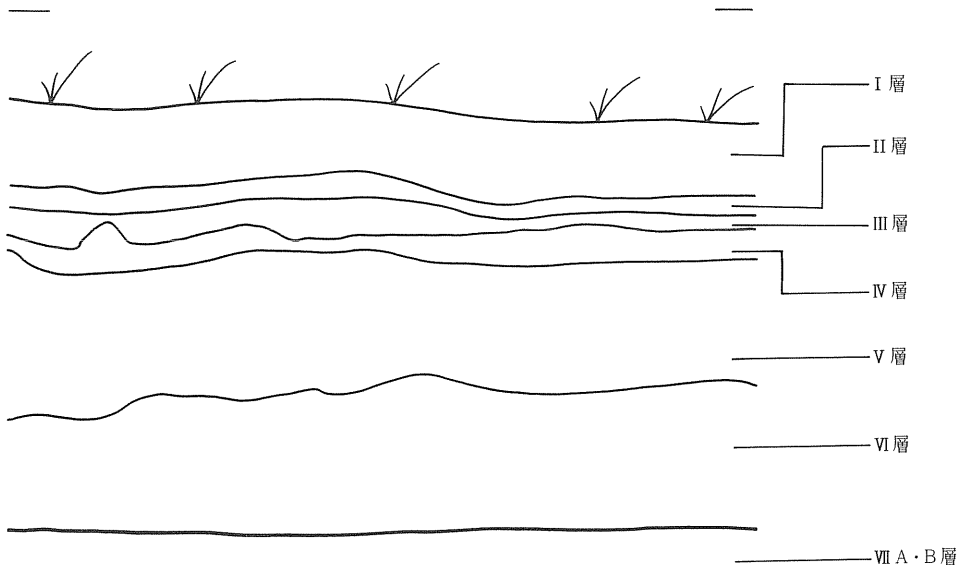
- 秋田県教育委員会 『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一袖ノ沢遺跡・横沢遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第169集 1988(昭和63)年
- 秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報一山王岱遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第170集 1988(昭和63)年
- 秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ一上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第173集1988(昭和63)年
- 秋田県教育委員会 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ一上ノ山Ⅱ遺跡第2次調査一』 秋田県文化財調査報告書第193集 1990(平成2)年
- 秋田県教育委員会 『諏訪台C遺跡発掘調査報告書一釈迦内地区農免農道整備事業一』 秋田県文化財調査報告書第196集 1990(平成2)年
- 秋田県教育委員会 『片山館コ遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第203集 1990(平成2)年
- 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ一餌釣遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第210集 1991(平成3)年
- 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ一上ノ山Ⅰ遺跡第2次調査一』 秋田県文化財調査報告書第211集 1991(平成3)年
- 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ一上野遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第222集 1992(平成4)年

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

遺跡の立地する台地には、南西方向からの開析谷(沢)が入り込んでいる。この開析谷(沢)を利用して中世城館の空堀が掘削され、その排土を土塁の盛土としていたことが、現地形からも確認できる。本遺跡は、現況が畑地・山林・宅地・道路であり、地山まで攪乱を受けている所もあった。特に、現市道東側の畑地では、耕作土である黒土採取のため重機で地山直上まで削平され地山の段丘礫層がむきだしになっていた。本遺跡の基本土層は、第1次の調査区であるMB59グリッド付近のものであるが、第Ⅲ層は黒褐色の耕作土で、細かい浮石をまばらに含む。第Ⅱ層は赤黒色土で、粒径0.5~1cm未満の浮石を霜降り状に含む。第Ⅲ層は黄褐色~極暗赤褐色を呈する火山灰層で、十和田火山起源の大湯浮石層である。10cm近い厚さに堆積している箇所もあれば、痕跡程度の堆積しか見られない箇所もある。第Ⅳ層は黒褐色土である。浮石は含

まず、よくしまっている。古代の竪穴住居跡はこの層から掘り込んでいる。第V層は所謂黒ボク土と呼ばれる黒褐色土である。縄文土器がこの層の上位に散見される。第VI層は極暗褐色の地山漸移層である。第V層との境目が強く波打っている。第VII層は黄褐色～明黄褐色の地山土である。地山土は所によって粘質土層(VII A)であったり、砂礫層(VII B)だったりして一様ではない。(第4図)



第4図 基本土層図

第2節 調査の方法

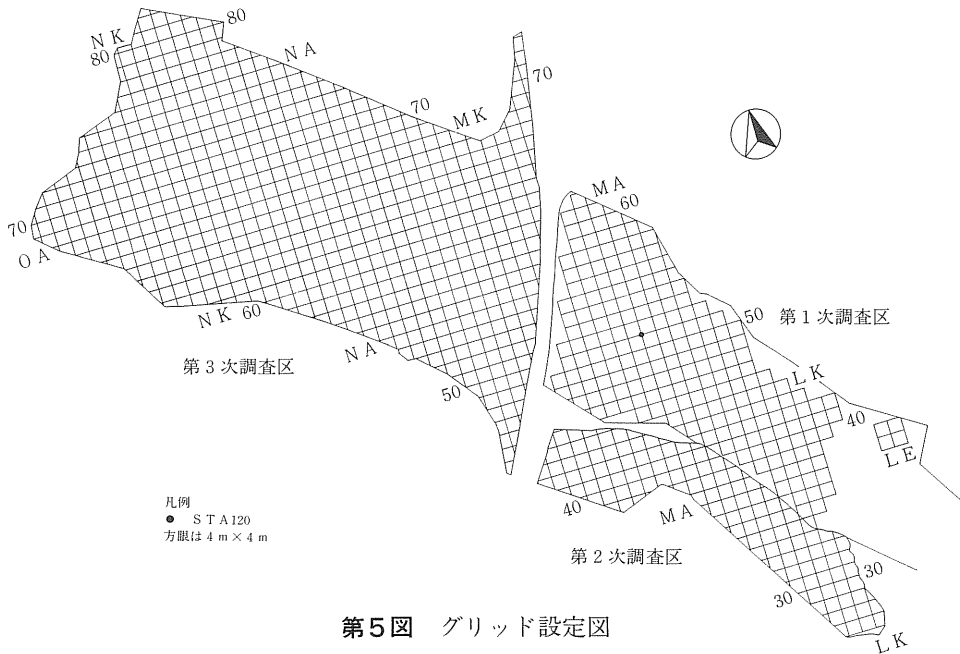
1 調査区の設定

山王岱遺跡として発掘調査する区域は、南に突き出た二等辺三角形の半島状を呈する台地のほぼ中央を幅60mで東西に横断する形になっている。この区域は『秋田県の中世城館』にいう狭義の「餌釣館」の北隣りに位置するが、拡大された「餌釣館」では神社境内となっている郭を仮に主郭とすればそれに付属する郭群を南側からⅡ郭・Ⅲ郭・Ⅳ郭・Ⅴ郭とすればⅡ郭の北東区域・Ⅲ郭・Ⅳ郭の南側区域ということになる。

北秋田土木事務所が調査区内に打設した中心杭No.120を原点として、これを通る座標北を求め、4m×4mの方眼(グリッド)をつくるように杭を調査区内に打設した。グリッドの呼称は、2桁のアラビア数字と2文字のアルファベットを組み合わせで行うこととし、原点をMA50とし、南北方向は原点から北が昇順(51.52.・・・)、南が降順(49.48.・・・)とし、東西方向は原点から東にLT.LS.・LA.、西にMB.MC.・MT.NA.NB.・・・と付した。そして、グリッドの南

第3章 発掘調査の概要

東隅の杭でグリッド名を呼称することとした。なお、原点とした中心杭No.120の国家座標第X系における座標値は、X : 27860.7590 Y : -21279.3905 である。この原点における座標北と磁北との偏角は東に $0^{\circ} 9' 48''$ である。(第5図)



第5図 グリッド設定図

2 発掘調査方法

昭和61年度の範囲確認調査の結果、縄文土器片と土師器片が出土しており、縄文時代と古代の集落であると思われたため、それを念頭に置き調査を進めることとした。調査が進展するにつれ、中世や近世と思われる遺構が確認されたため、4つの時期の複合遺跡であるとの認識に立って進めることにした。層位毎に遺構プランの確認作業を繰り返し、検出した遺構には遺構略記号を冠したあと種別を問わず一連の番号を付した。掘立柱建物跡の柱穴については、Pを冠し001から番号を付した。遺構の測量は、縮尺1/20を原則とし、微細図は縮尺1/10、地形測量は縮尺1/50とした。また、遺構の一部を写真測量した。遺物は、出土層位と位置、レベルを記録してから取り上げた。掘立柱建物跡の柱穴については、埋土の土色と土性を記録した。

第3節 調査経過

1 第一次調査の経過

第一次調査は昭和62年5月6日から諸準備に入り、プレハブ事務所の設置、排土運搬車、ベ

ルトコンベアーの到着を待って、8日から粗掘りを開始した。粗掘りは調査区南端から始めたが、畑の耕作土である黒色土を20cm～30cm除去すると段丘砂礫層に達する。柱穴様の小ピットが検出されるも、建物プランとすることのできるものはなかった。12日に調査区南部を東西に通る農道の南側に2本のトレンチを入れたところ、空堀跡であることが判明したのでこれをSD01空堀跡とした。14日からベルトコンベアーの設置を行い、調査区北部からの粗掘りを開始した。早速、焼土を伴う土坑(SK04土坑)の北東から同様の土坑が検出されたが、長方形の長軸に直交するような張り出し部(溝状部)が伴っているので、これをSX05とした。18日までに、この周辺で溝状遺構などを検出したが、遺物はほとんど出土しなかった。27日までに、調査北端にあるSD09空堀跡と、やや中央寄りにあるSD10空堀跡の間の粗掘りと一部精査を終えた。この間には、SE12井戸跡、SK08土坑などから土師器が若干出土したのみで、遺物は相変わらず少なく、各遺構の年代推定を困難にした。また、SX05火葬墓では精査中に人骨を検出した。時期は不明だが火葬墓のようで、SK04・13も同様と考えられ、SX04・SX13火葬墓とした。SD10は調査前の現況でも帯状の浅い窪地となっており、空堀跡と考えられていたものであるが、調査の結果、予想以上に浅い空堀跡であることが判明した。SD10空堀跡以北の諸遺構の精・実測を進める一方、その南側の粗掘り・遺構検出に努めたが、6月13日に至っても明確な遺構を検出できなかった。27日までに、調査区南東部から平安時代の土坑(SK25土坑)と縄文時代後期の竪穴住居跡(SI28竪穴住居跡)を検出し、SD01空堀跡の全面掘り下げを継続した。7月11日までに検出した遺構の精査・実測・写真撮影をほぼ終え、14日までに補足の調査を行って、発掘調査を終了した。

2 第二次調査の経過

第二次調査は、平成元年7月17日より実施した。初日は、事務所・作業員休息用のプレハブ周辺及び、調査区内に繁茂する雑草の刈り払いを行った。夏草の成長は著しく1日では完了できなかった。19日、調査区の大部分は畑地であるが、畑の土の一部が調査前に不法に土取りされ、一ヶ所に盛り上げられており、まずこの土を除去することがスコップを持っての第一の仕事となった。24日にこの盛土内から縄文土器片・古銭が、27日には土師器・陶磁器片が、28日には土師器・陶磁器・金属器(皿・燭台)が少量出土した。28日に盛土の除去がほぼ終了した。それにしても調査開始以来10日間雨なく、カラカラ天気続きのため風でほこりが舞いあがり、作業には不快である。

31日から粗掘りを開始した。LT39グリッドで耳付きの土師器甕形土器を確認した。遺構に伴うのだろうか。8月1日にLT38グリッドで前日出土した耳部の対をなすと見られる耳部が出土した。この東側で焼面、焼けた砂質系の石が確認でき、カマドであった可能性が高いが、

第3章 発掘調査の概要

一応SX50の名称を与えて写真撮影を行った。3日に遺跡の北東方向に位置する山地中腹から遠景写真撮影を行った。4日、本日も晴れ、12日連続の真夏日となった。10日～16日はお盆休みとした。

17日に調査区全体のジョレンがけを行い、遺構の有無を確認した。18日から第一次調査で確認していた空堀跡(SD01空堀跡)の延長部分の掘り下げに入った。SD01空堀跡の埋土上位から煙管(キセル)が出土した。23日にSK53土坑～SK59土坑を登録し、確認面での写真撮影を実施した。また調査区南東側の柱穴様ピット群のプランを確認した。同日午後、待望久しい雨が降った。

28日からSD01空堀跡掘り下げに時間がかかるため、先週で作業の終了した大館市片山館コ遺跡の作業員を本遺跡調査に動員した。また、地形測量開始。29日にはSD01空堀跡の土層断面図及び写真撮影を行った。30日になってSX50としていた遺構は精査の結果、平安時代の堅穴住居跡であることが明らかになった。「館」期に伴う整地作業等で上部を削平されていた。従って、焼土の広がりやカマドに、耳付きの土師器甕形土器も本住居跡のほぼ床面出土となった。同日、撤収の準備に入った。8月31日午前、遺跡全景の写真撮影を行い第二次の調査を終了し、同日午後には機(器)材を乗せたトラックと共に埋蔵文化財センターに戻った。

3 第三次調査の経過

第三次調査は、平成3年5月13日に現地で作業員説明会のあと開始した。14日から範囲確認時のトレンチ排土の除去と刈払い、グリッド杭の打設を開始した。また、東側の山から遠景写真を撮影した。16日に遺跡基本土層ベルトを① MTライン、② 58ライン、③ MM70-ML65-MK60-MK57-範確トレンチ、④ 66ラインに設定した。20日に現地地形に明瞭に残る土塁(SF101・SF102土塁)・空堀跡(SD09空堀跡)の写真撮影と地形測量(20cm等高線)を実施(22日まで)した。SF101土塁は、現長90m、高さ1.2m、基底幅6～7mを測り、SF102土塁は、現長70m、高さ1.4m、基底幅4～7mを測る。調査区東側から粗掘りを開始。23日に調査区東側からの粗掘中、第1次調査で検出・調査していたSD10空堀跡のプランを確認した。27日にMJ56グリッドで南壁にかまどを付設した古代の堅穴住居跡プラン(SI144堅穴住居跡)を検出。ML53の黒色土中に隅丸長方形に砂質粘土が巡るプラン(SK103土坑)を検出し、精査を開始。SD10空堀跡は、東側から西側に延び、北側に屈曲したあとまた西側に続いていることが判明した。この鍵形に屈曲する形態は、第2次調査時のSD01空堀跡の形態と一致する。30日にSK103土坑の北側で南壁にかまどを付設した古代の堅穴住居跡プラン(SI108)を検出。また、土木事務所の工事として市道部分のアスファルトと路盤の碎石の撤去作業が始まった(31日まで)。31日からSD09空堀跡の粗掘りと、SD10空堀跡の精査を開始した。6月3日にSI108堅穴住居跡を掘り込み、

SD10空堀跡に掘り込まれた溝跡のプラン(SD110溝状遺構)を検出。5日に市道部分で土坑・堅穴住居跡・溝跡プランを検出。7日から桜田 隆 文化財主査が現場に復帰し、それまで指揮を執っていた高橋 学 学芸主事と交替した(高橋 学 学芸主事はセンターで「秋田ふるさと村」の整理作業に従事)。天候に恵まれ、粗掘りとプラン確認が大いに進捗した。11日にSD10空堀跡プラン上を南北に横断する溝跡プラン(SD113溝状遺構)を検出した。18日に検出済みの各プランに消石灰でラインを入れた。19日にSD09空堀跡に設定したトレンチの横断面の土層断面写真撮影と実測開始。24日にSD10空堀跡の底面に、空堀跡に直交するように「溝」を多数検出した。(この「溝」は、第1次調査時にも確認されたが、その後の精査で空堀が埋没し始めてから掘り込まれたものと確認された。)また、SD09空堀跡も鍵形に屈曲することが確認され、3条の空堀が平行するかのよう鍵形に屈曲しながら東西に伸びていることがわかった。28日から柱穴様ピット群の掘り下げと実測を開始した。

7月4日に比内町立三岳小学校の6年生一行(渡辺教諭引率)が社会科見学の途中、郷土学習のため遺跡を見学。5日からSD10空堀跡底面の「溝」の掘り下げと実測を開始。11日によりやく買収交渉が成立した東南区の草刈りを開始した。16日には掘り下げ精査中のSD09・SD10空堀跡の壁面地山が粘土質火山灰土層と礫層からなっているため、埋土との識別が困難を極めた。しかし、SD09空堀跡の鍵形屈曲部で、空堀の掘り下げ仕事の区域が明瞭に残っていたのを確認できた。土木事務所から「調査区西側の工事区に進入する道路を他に確保できないので、調査区内に工事用道路を作りたい」との要請があり、調査区北側に10m幅の道路用地を提供することになり、その区域(通称10m道路)の粗掘りを開始した。(工事用道路の工事自体は、現調査範囲の航空写真撮影の終了する8月15日以降という条件付きである。)17・18日は、終日大雨のため遺構内への流入水が多く、排水ポンプをフル稼働させても水没し調査ができなかった。19日に現場を訪れた郷土史家の鷺谷 豊氏から「空堀の形態からは、中世城館というよりも近世の城館ではないか」との疑問がだされた。『鉦釣館』そのものの年代に対する当初からの疑問であり、この解明がこの発掘調査での課題のひとつとなった。22日からSI108堅穴住居跡の精査を開始した。25日からSF101土塁の盛土撤去を開始した。29日に古建築に詳しい県立由利工業高校建築科教諭五十嵐典彦氏が来跡されたので、古代・中世の掘立柱建物跡と堅穴建物跡についてご指導いただいた。

8月2日から実測作業の完了した遺構から航空写真撮影のための清掃と、消石灰のライン引きを開始した。また、平行して地上写真撮影も行った。9日午前中に飛行機が飛来したが、雲の状態が悪いため撮影できず延期となった。午後から発掘調査現地説明会の準備を行った。10日午後2時から3時30分まで山王岱遺跡発掘調査現地説明会を行った。参加者は127名であった。11日から18日までお盆休みとした。19日に航空写真撮影が終了した。20日にSF101土塁の

第3章 発掘調査の概要

盛土下から張り出し部をもつ方形の竪穴建物跡プラン(SI176竪穴建物跡)を検出した。21日から精査を開始したところ、床面西側に禾本科植物灰が、柱穴の周囲に粘土質火山灰土が厚く堆積していた。22日にSF101土塁の盛土下から大観通寶・白磁片・青磁片・刀子(以上MR63)、珠洲系播鉢片(MT64)が出土した。29日にSD09空堀跡より北側の地区の最終写真撮影を行った。東南区では、SD10空堀跡を掘り込む溝(SD159溝状遺構)の埋土中から染付皿の破片が出土した。また、第1次・第2次調査で検出していたSD01空堀跡の西側延長部分と、土塁の痕跡を検出した。

9月2日に10m道路地区のプラン確認作業を行ったところ、縄文時代の竪穴住居跡3軒(SI185・SI187・SI189竪穴住居跡)・土坑1基(SK188土坑)を検出した。風倒木痕による攪乱を受けプランが明確でなかったが、掘り下げ精査したところ、SI185竪穴住居跡では石囲炉に深鉢土器が埋設されていた。SI189竪穴住居跡では掘り込みのプランに比べて大きすぎる石囲炉が構築されていた。7日の午前中に10m道路地区の遺構実測と最終写真撮影が終了した。

9月9日から2回目調査区(調査区全体の西側1/3)の粗掘りを開始したが、1回目調査区から排出された土砂が盛られているためその周囲を粗掘りした。9月17日から20日の間に土木事務所工事として、1回目調査区から排出された土砂を1回目調査区に移動させた。

9月21日から10月1日まで山王岱遺跡の西方約1kmに位置する池内遺跡と萩ノ台Ⅱ遺跡の詳細分布調査(範囲確認調査)に従事するため、山王岱遺跡の発掘調査を中断した。(この間、台風19号のためプレハブ事務所の屋根に被害を受けたが、遺跡自体には影響はなかった。)

10月2日に調査区南西部から粗掘りを再開した。4日から測量業者によるグリッド杭打設開始(11日まで)。14日からプラン確認作業を北西側から開始した。縄文時代の竪穴住居跡群・土坑・土器埋設遺構のほか溝(SD168溝状遺構の延長)・柱穴様ピット群などを検出した。

このころから雨天日が多くなり、調査が遅滞気味になった。17日に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の職員3名が来跡されたので、関東地方に検出例が多く、第1次調査時に検出した中世～近世の所産と思われる火葬墓・火葬施設についてご教示いただいた。23日から各遺構の掘り下げ・実測作業を開始した。縄文時代の竪穴住居跡には、石囲炉に円～楕円形のくぼみが付属していた。25日になって溝(SD168溝状遺構の延長)が南側でSD212・SD213溝状遺構と重複し、SD09空堀跡に切られていることがわかった。

調査も大詰めになったが、雨も降り続き竪穴住居跡の精査に支障がでてきたので、雨対策として工事用足場と鉄パイプ及び4間×10間の農業用ビニールハウスの透明ビニールで、各竪穴住居跡に覆屋を作った。(この覆屋は、雨には有効であったが横風に弱い欠点があった。)久しぶりに晴天となった7日に各遺構の最終写真と全景写真を撮影した。8日に補充調査と撤収作業に入った。9日にすべての作業を完了し3次にわたった山王岱遺跡の発掘調査を終了した。

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構と出土遺物

3回にわたる発掘調査では、縄文時代・古代(平安時代)・古代～中世・中世・中世～近世・近現代・時期不明の7時期の遺構・遺物を検出・出土した。この7時期は、出土遺物から時期の明確な遺構、遺物の出土はないが形態から時期が判断された遺構、時期の明確な遺構との重複関係から時期が判断された遺構、単独で検出され時期が明確でない遺構などがあり、統一された明確な根拠に基づくものではない。古代～中世と中世～近世の時期区分に関しては、あくまでも調査中のデータ(時期の明確な遺構との重複もなく単独で検出され時期が明確でない遺構であるが、プランの確認状況や層位・堆積土等)に基づくものであり、今後の他遺跡に於いて類似遺構の発掘調査成果次第で時期が変更となる可能性も含んでいる。時期不明という区分は、発掘調査中にも判断できなかった遺構である。各時期の遺構の種別と数量は以下のとおりである。

縄文時代

竪穴住居跡	14軒	(S I	27・30・185・187・189・200・201・202・203・206・222 223・224・225)
フラスコ状土坑	1基	(S K F	29)
土坑	5基	(S K	182・188・228・229・232)
土器埋設遺構	1基	(S R	226)
配石遺構	1基	(S Q	177)

古代(平安時代)

竪穴住居跡	5軒	(S I	50・108・144A・144B・160)
土坑	9基	(S K	08A・08B・25・147・151・174・214・216)
竪穴状遺構	1基	(S K I	19)
焼土遺構	1基	(S N	112)

古代～中世

井戸跡	1基	(S E	12)
土坑	5基	(S K	148・153・184・186・190)
焼土遺構	2基	(S N	115・116)
溝状遺構	19条	(S D	110・121・122・123・124・125・129・145・146・150・162 163・167・168・169・170・171・212・213)

中世

第4章 調査の記録

空堀跡	3条	(S D 01・09・10)
土塁	8カ所	(S F 101・102・251・252・253・254・255・256)
橋跡	2カ所	(S M 257・258)
竪穴建物跡	2棟	(S I 21・176)
掘立柱建物跡	43棟	(S B 01～43)
土坑	1基	(S K 117)
柱列	11条	(S A 44～54)

中世～近世

火葬墓	3基	(S X 04・05・13)
被火骨出土遺構	4基	(S X 14・15・16・26)
溝状遺構	97条	(S D 113・136・137・138・140・149・158・159 他 S D10空堀内溝89条)

近・現代

土坑	5基	(S K 103・111・173・204・209)
----	----	---------------------------

時期不明

竪穴状遺構	1基	(S K I 54)
溝状遺構	3基	(S D 06・07・52)
土坑	15基	(S K 51・55・59・60・61・62・64・66・210・211・218 219・220・221・230)
焼土遺構	1基	(S N 231)
柱穴	多数	

以下、各時期毎に検出した遺構と遺物について述べる。

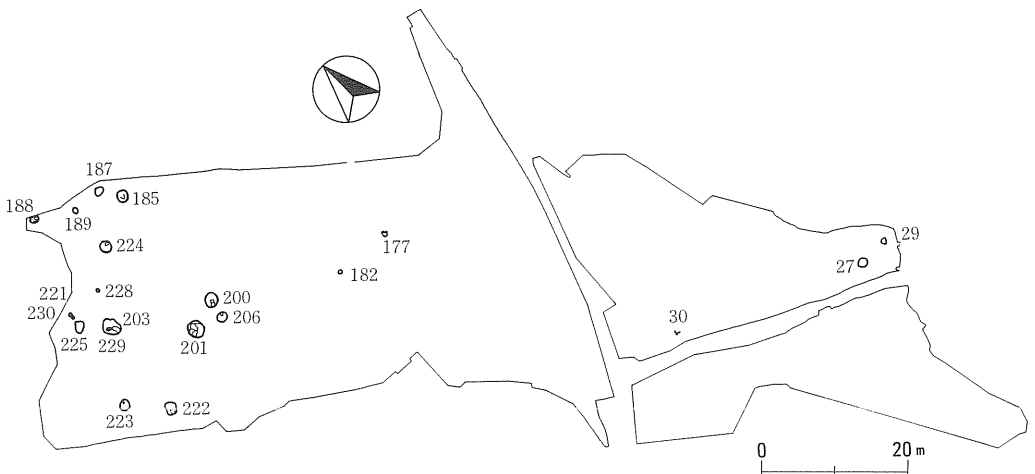
縄文時代の遺構は、調査区の東側と西側に検出したが、西側に濃密に分布している。地形と関連させて言い換えると、東西に入り込む開析谷の縁辺部に竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構が存在し、中央部には配石遺構が1基存在するのみである。東西の縁辺部でも遺構の大多数が、開析谷を挟んで山を望む東側よりも同じ高さの平坦面が広がる西側に集中している(第6図)。

古代(平安時代)の遺構は、調査区の中央から東側に多く、山王台遺跡として調査された遺構群をも考慮すると、縄文時代の遺構分布とは反対に台地東寄りに偏在している。竪穴住居跡は、ほぼ南北方向に主軸をもち南側壁にかまどを付設している。大湯浮石層が埋土中に混入・堆積しており、大湯浮石層の降下・堆積の年代と関連する。また、白頭山・苫小牧火山灰が埋土中に堆積している土坑も検出した。

中世の遺構のうち、空堀跡3条は、台地東側の縁辺部から鍵形に屈曲しながら西側に延びており、両側に土塁が付設している(第63・64図)。空堀跡は埋没しきらずに細長いくぼみとして、土塁は道路として使用されていたが現地地形からも確認できた。掘立柱建物跡は43棟検出したが、建物の性格と時期を追及するまでには至らなかった。また、掘立柱建物跡はいくつかのブロックに分けることができる。各ブロックでは数回の建て替えが見られ、生活が長期間にわたった可能性を示している。

中世～近世の火葬墓・被火骨出土遺構は、調査区東側に集中して検出した(第63図)。

1 縄文時代の遺構と遺物

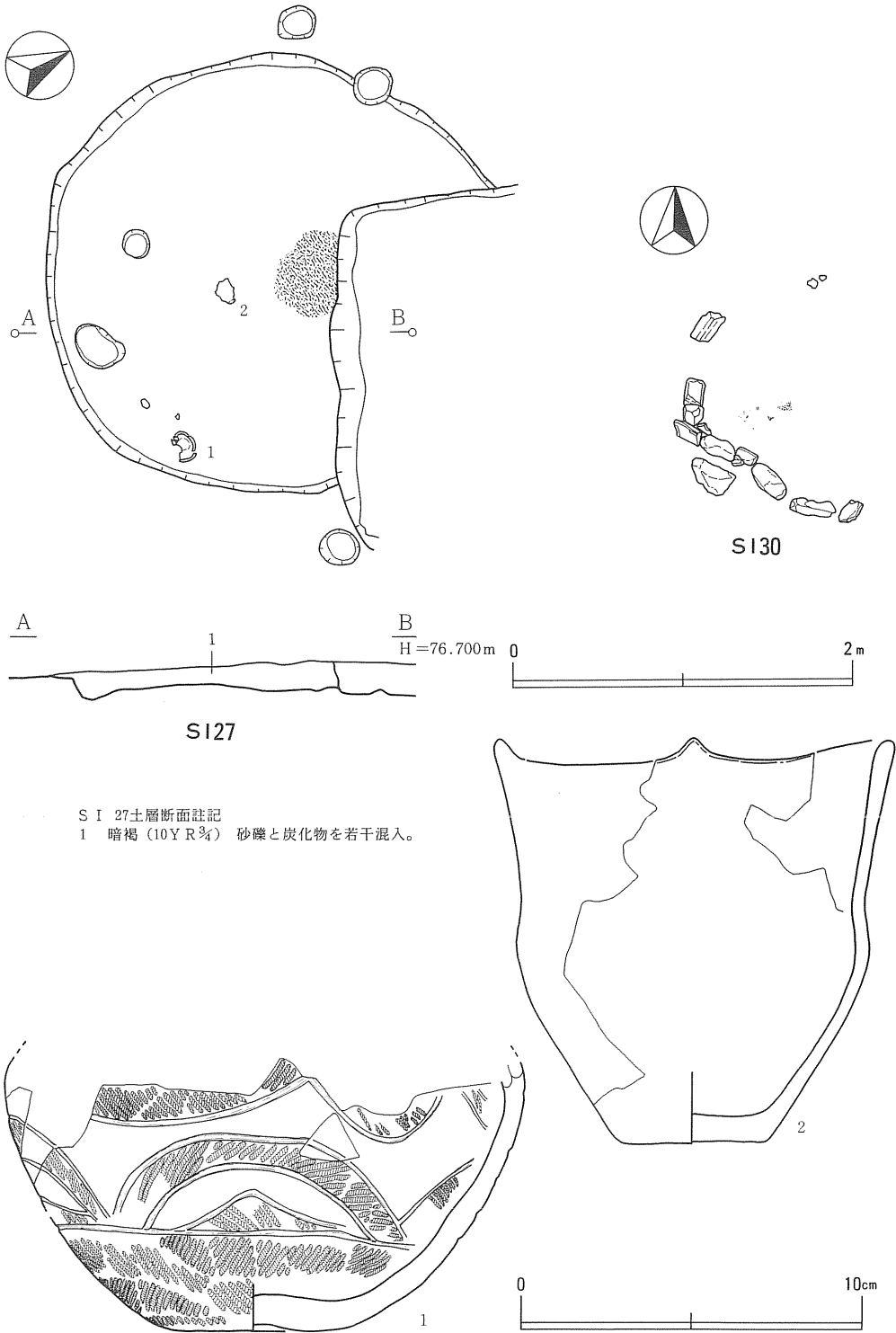


第6図 縄文時代の遺構配置図

(1) 竪穴住居跡

S I 27竪穴住居跡(第7図、図版3・10)

調査区東側、LK40・LL40グリッドで検出された。平面形は長径270cm、短径240cmの略円形を呈するが、北東側で平安時代の土坑SK25と重複している。床面は地山面を15cmほど掘り込んでいてほぼ平坦であるが、地山に包含されている礫があちこちに出ており、たたき締められた状況にはない。地床炉が床面の中央やや北東寄りにある。柱穴を床面に2本、住居跡外に3本検出しているが、本住居跡に伴うものか否かわからない。壺形土器(第7図1)が南西側壁近くにほぼ正立して、小型鉢形土器(第7図2)が炉近くの床面から出土した。2つの土器の時期などから、本住居跡は後期後葉のものと考えられる。



S I 27土層断面註記
 1 暗褐(10Y R 3/4) 砂礫と炭化物を若干混入。

第7図 S127・S130竪穴住居跡・S127竪穴住居跡出土遺物

壺形土器(1)は、体部上半を欠失する。文様は、磨消し手法による弧状文が体部中位に描かれ、下半は縄文である。その縄文は撚りの強さの異なるLR、RLの原体を横位に回転させて、羽状縄文に見せている。底部中央部がややくぼんでいる。小型深鉢形土器(2)は、体部上半に弱い屈曲部を持ち無文である。口縁部に小突起を有し、弱い波状口縁をなす。

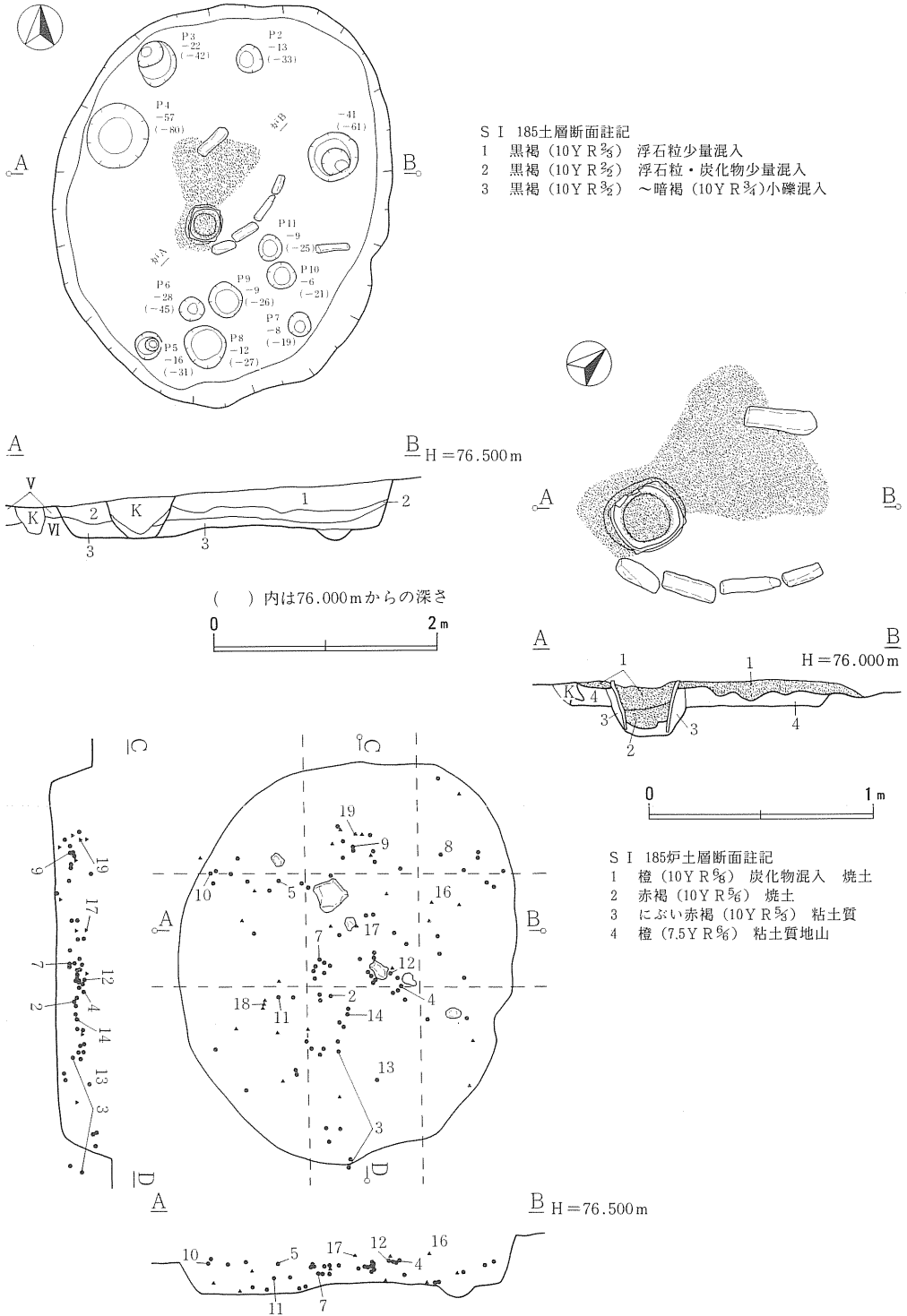
S I 30 竪穴住居跡(第7図、図版3)

調査区東側、MC45・MD45グリッドに位置する。地山(VII B 黄褐色礫層)直上で石囲炉のみを検出した。石囲炉は長径140cmの楕円形と思われるが、その半周分が残っていた。炉内側と石囲炉に使用された河原石が焼けている。地山礫層を掘り込んでいたのは炉部分のみで、緩いすり鉢状に落ち込んでいる。竪穴住居跡全体のプラン・柱穴は確認できなかった。石囲炉の近くから中期後葉と考えられる土器片が出土しているので、該期のものであろう。

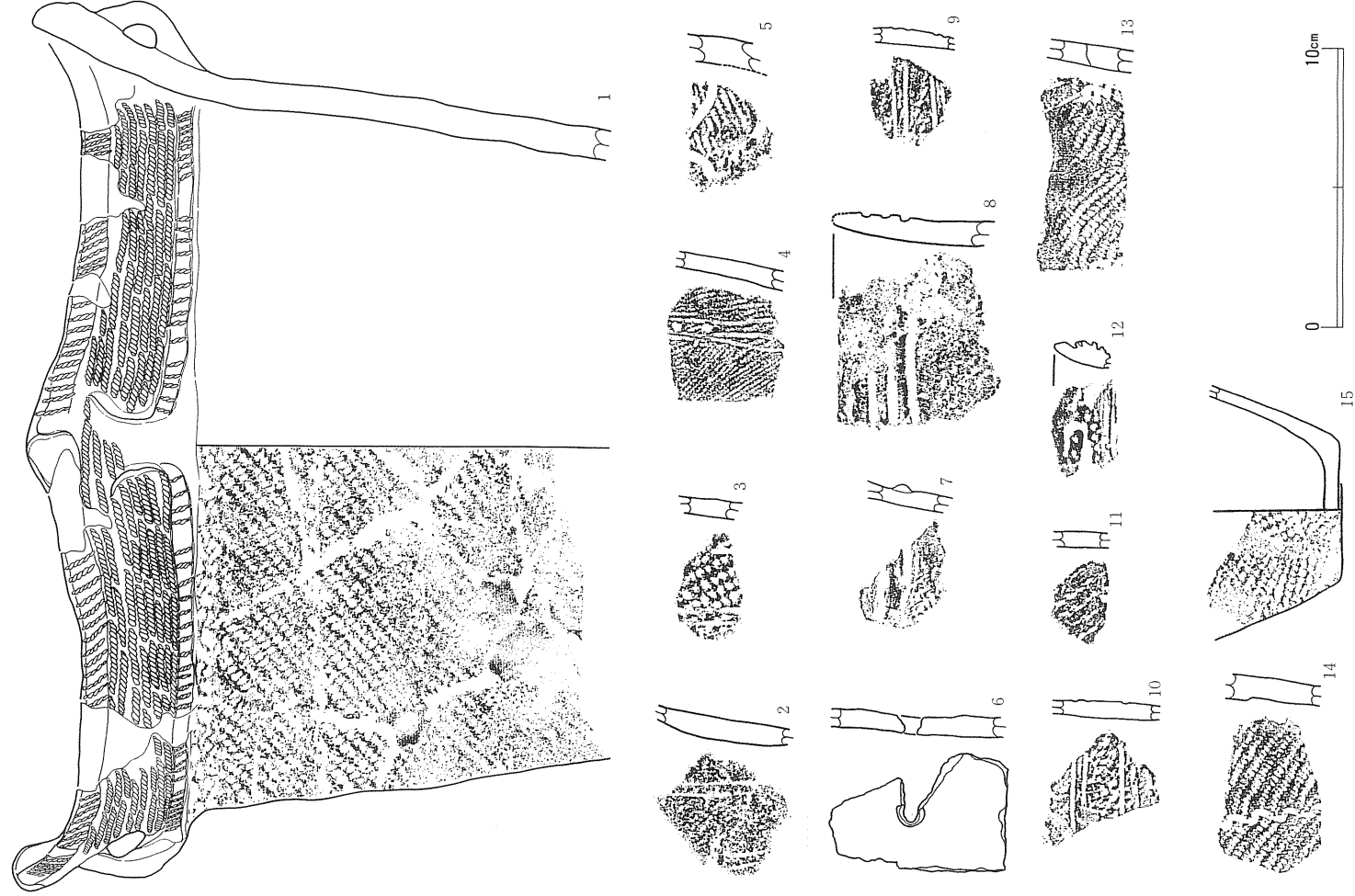
S I 185 竪穴住居跡(第8～10図、図版4・10)

調査区北西部のNE78グリッドに位置し、検出面は漸移層(VI層)上面である。平面形は長軸360cm、短軸300cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-7°-Eである。住居跡は地山(VII A層)を20cm掘り込み構築している。壁は外傾して急に立ち上がり、壁高は17～38cmを測る。床面は北東部が木根で攪乱されている外はほぼ平坦で、床面積は7.1㎡である。柱穴は11本検出したが、配置・規模・深さからP1・2・4・7・8が支柱穴と考えられる。炉は住居のほぼ中央に位置しており、埋設された土器と石組からなる土器埋設石囲炉である。埋設された土器は胴部下半を欠く、深鉢形土器である。石囲炉は東側に20～30cm大の垂角礫4個が現位置で遺存しており、他に1個が床面からやや浮いた状態で検出された。炉の西側では石の抜き取り痕は認められなかったものの焼土の広がりや遺存する石の配置から、本来は北側に開く馬蹄形に石組がなされていたものと考えられる。床面の焼土は埋設された土器を囲み、北側に撥形に広がっていた。炉の主軸方位は住居跡の長軸方向にほぼ一致するものと推定される。床面積に占める炉の占有率は11%である。

遺物は埋土の2層中に多く出土した。第9図1(Ⅱ群a類)は炉に埋設されていた土器で、胴部下半を欠く円筒形深鉢形を呈し、推定口径は約31cmである。口縁部はやや内湾する4つの波状口縁で、各波頂部下には橋状把手が付く。口縁部文様帯は粘土紐の貼り付け隆帯と橋状把手によって4区画され、口唇部外側にも隆帯が施される。上下2条の隆帯上には撚糸圧痕文が縦位に連続して施文され、隆帯間には8条の撚糸圧痕文が横位に施文される。体部文様帯には、末端結節LR縄文が横位回転施文される。結節部の綾絡文の間隔は約5cmである。第9図2～15は2層から出土した土器片で、2・3(Ⅱ群b類)は縄文地文に2条1組の縦位の沈線を描き、4(Ⅱ群c類)は2条の沈線の間にも刺突あるいはもう1条の沈線を施している。5(Ⅱ群d類)は縄文地文に曲線的な沈線が描かれる。6(Ⅲ群c類)は焼成前の穿孔がある。7(Ⅲ群d類)は



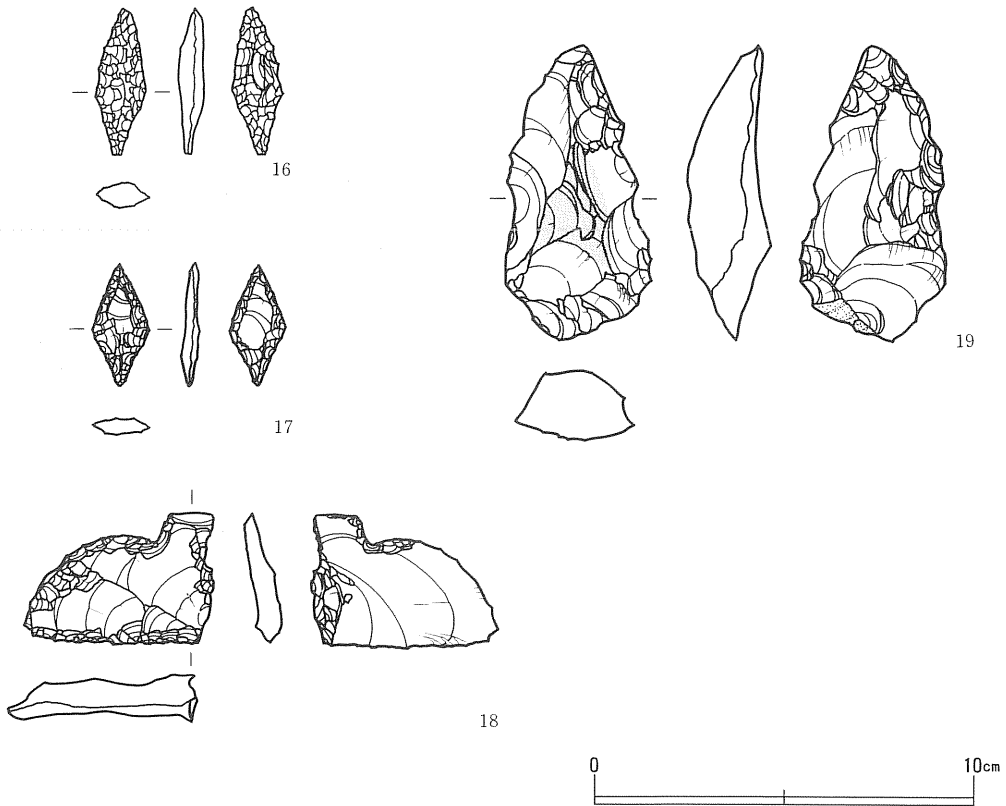
第8図 SI 185 竪穴住居跡・遺物出土状況図



第9図 SI185竪穴住居跡出土遺物(1)

隆沈線文で口縁部無文帯と下位の縄文部を区画している。8(Ⅲ群e類)は口縁に平行して3条の沈線が施される。9~11(Ⅲ群a類)は同一個体で縄文地に横位の沈線が施される。

石器は剥片石器が4点出土し、そのうちわけは石鏃2点、石匙1点、石槍1点である(第10図16~18)。その他剥片や礫等多数出土した。16は完形の凸基有茎鏃である。裏面の一部にやや大型の階段状剥離痕が認められるほかは、全面に細かな二次加工が施されている。長さ38mm、幅13mm、厚さ6mm、重さ1g、石質頁岩。17は16と同様に凸基有茎鏃に分類されるが、長さに対して幅広で、厚さが極めて薄い。表裏両面共に縁辺に細かな二次加工が施され、中央部分には素材の剥離面が残る。長さ32mm、幅19mm、厚さ4mm、重さ1g、石質頁岩。18は末端に石核座面の節理面を取り込んだやや縦長の剥片を素材とする。素材剥片の側縁打面側につまみ部が作出され、その反対側の側縁表面に二次加工が施され刃部が作出された横型石匙である。素材の末端部にも二次加工が施されるが、元の形状を大きくは変形させておらず、必ずしも充分な整形加工とはなっていない。長さ35mm、幅46mm、厚さ7mm、重さ13g、石質頁岩、刃部の長さ43mm。19は全体に不整形ではあるが、一端が尖頭状を呈し、他端が薄手に整形されていることから、ここ



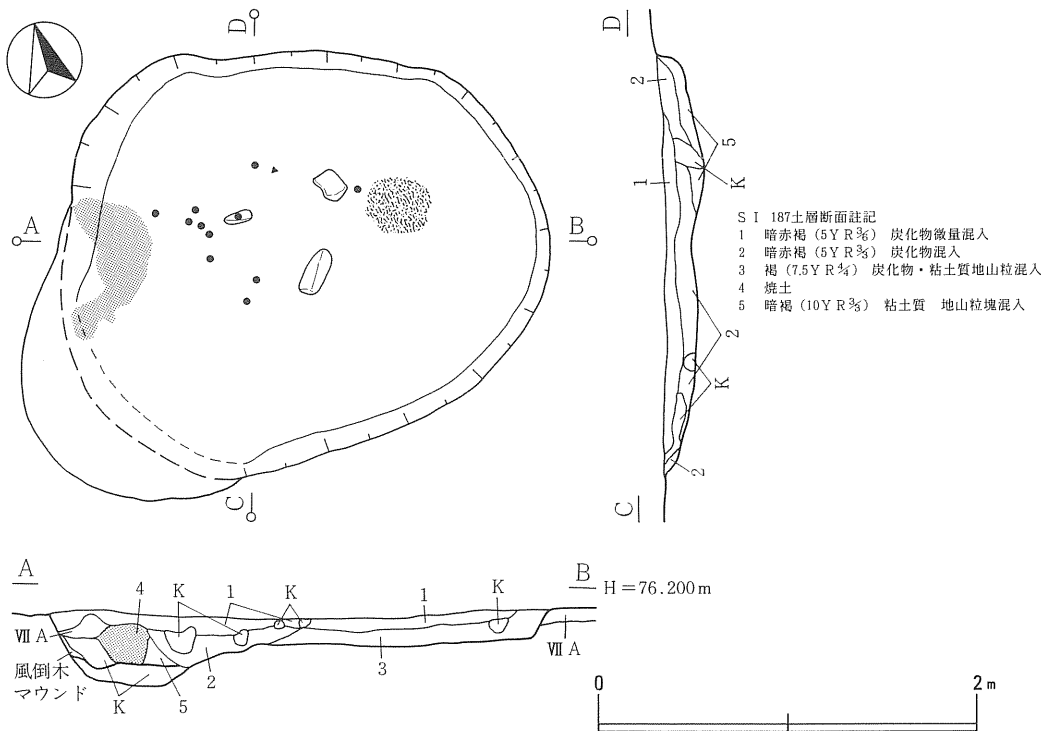
第10図 SI 185竪穴住居跡出土遺物(2)

では石槍とした。横長剥片を素材とするとみられるが、二次加工は比較的大型で全面には及ばず、表面左上には素材の先行剥離面、裏面左側には素材の主要剥離面を残している。長さ77mm、幅39mm、厚さ20mm、重さ42g、石質頁岩。その他凹部をもつ磨石が2点(S2・RQ30)と磨石1点(S6)が出土している。

S I 187 竪穴住居跡 (第11図、図版4)

調査区北西部のNF79・80・NE79グリッドに位置し、検出面は漸移層(VI層)上面である。平面形は長軸260cm、短軸200cmの楕円形を呈し、西側に存在する風倒木を切り地山面まで掘り込んで構築されている。長軸方位はN-80°-Wである。壁は北側から東側にかけては外傾して立ち上がり、南側はやや緩やかな立ち上がりで、壁高は6~15cmを測る。南西側の壁は掘り過ぎて不明である。埋土は6層に分層されるが、4層を除き全体的に焼土が混入する暗赤褐色系の土である。西側の壁寄りでは、長さ60cm、幅30cm、厚さ約25cmの焼土塊が廃棄状態で検出された。床面は木根によって凹凸が著しい。床面積はおよそ3.8㎡である。柱穴は検出されなかった。

炉は東側で床面が火熱のためわずかに赤色硬化した範囲(35×25cm)が認められた。床中央付近には、火熱による赤色変化が認められる15~25cm大の垂角礫3個が床面からやや浮いた状態



第11図 S I 187 竪穴住居跡

で点在していたことから石囲炉であった可能性が考えられる。

遺物は埋土中から少量出土したが、すべて粗製の縄文土器片で表面は摩耗が著しい。

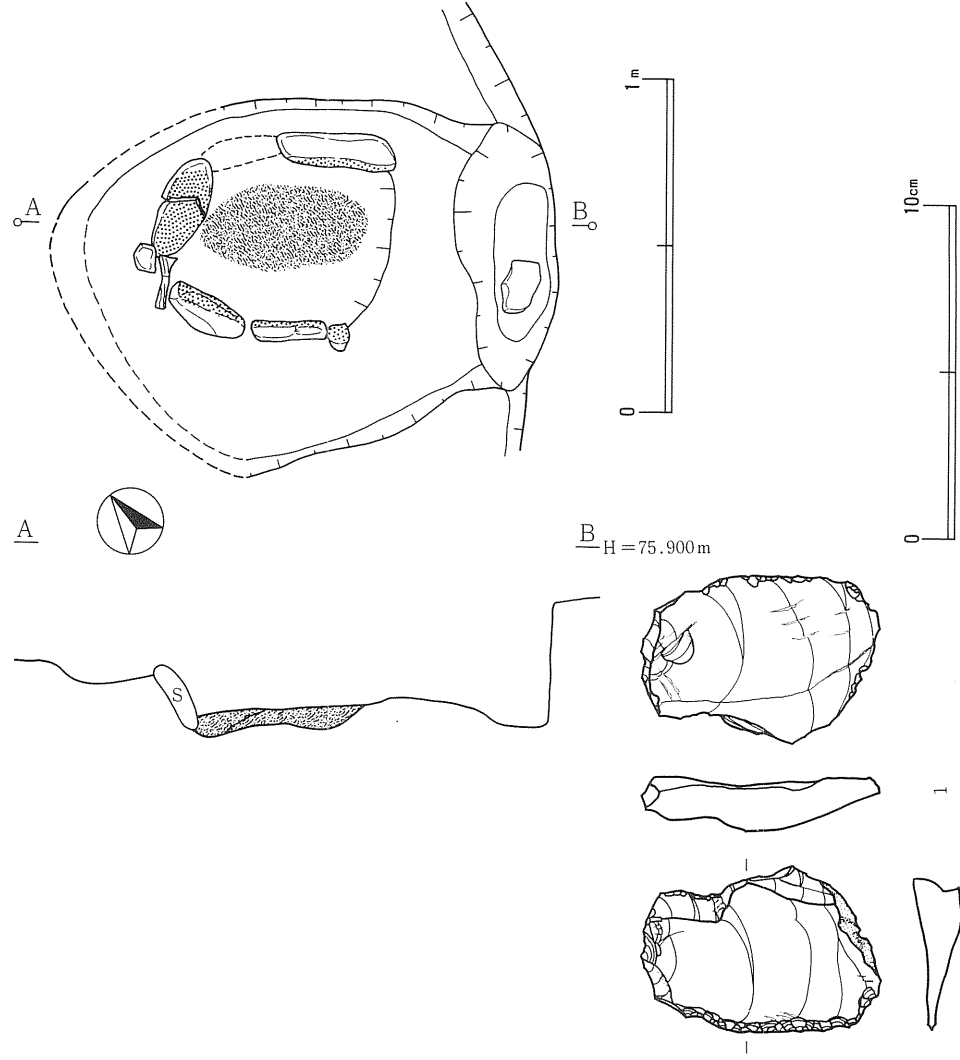
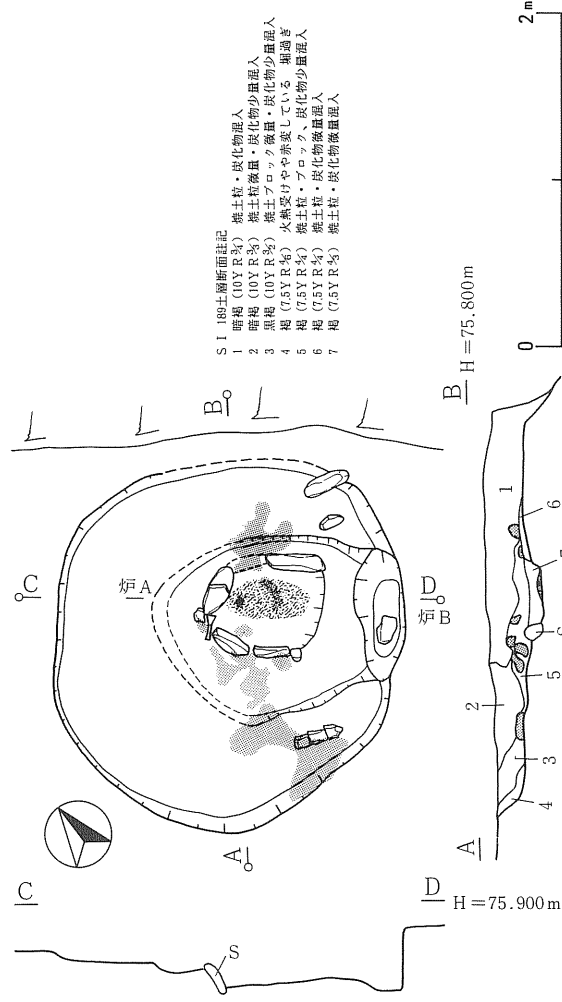
S I 189 竪穴住居跡 (第12図、図版5)

調査区北西端のNJ81グリッドに位置し、検出面は地山(VII A層)上面である。平面形は直径約210cmの円形を呈する。壁は北側が台地縁辺部の自然崩落により消失している外は、外傾して立ち上がり、壁高は5～14cmである。埋土は7層からなるが、全層に多量の焼土と炭化物が混入していた。下位には廃棄されたとみられる焼土ブロックがまとまって出土した。床面は中央部が一段低くなっている。床面積は3.3㎡である。柱穴は床面および竪穴外とも検出されなかった。炉は床面中央から南東壁に接して、長軸150cm、短軸100cmの楕円形で約5cmの深さに掘りくぼめ、さらに、そのほぼ中央を長軸72cm、短軸62cmの楕円形に約10cm程掘りくぼめて周囲に20～30cm大の垂角礫を南東側に開く略馬蹄形に配置した石組炉である。炉の長軸方位はS-55°-Eである。火熱による赤色変化は石の内側面と石囲部底面に限られる。石囲部に連続する掘り込み部の南東側の壁下には壁に沿って長さ80cm、幅30cmの長楕円形で深さ約15cmのピット状の掘り込みがあり、底面からは10×15cmの偏平な石が出土した。

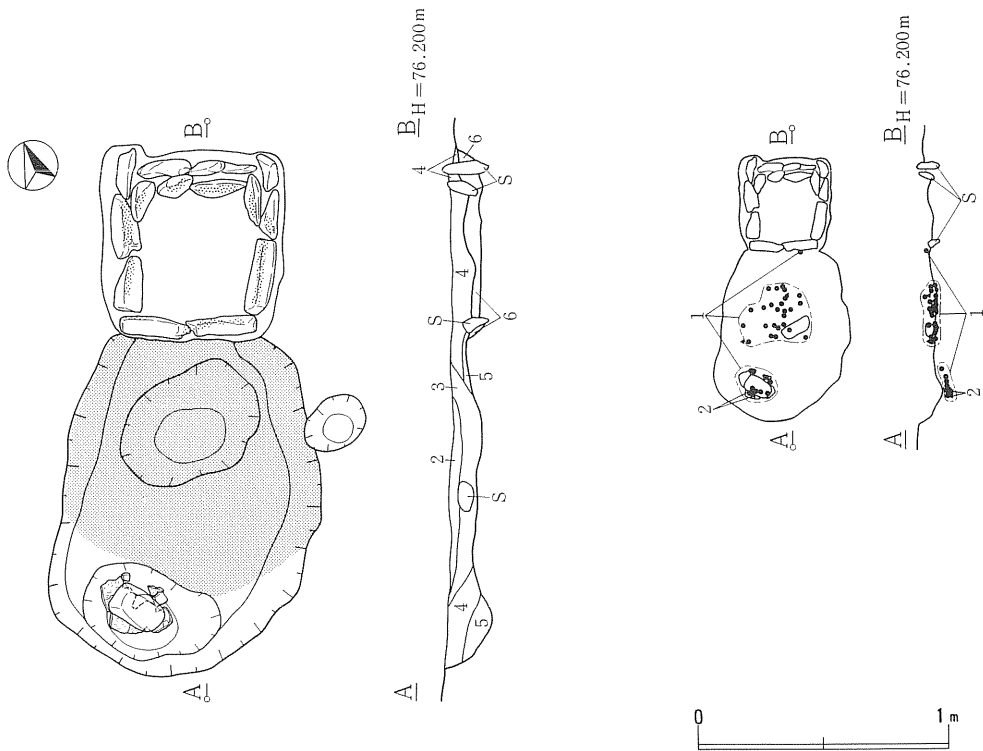
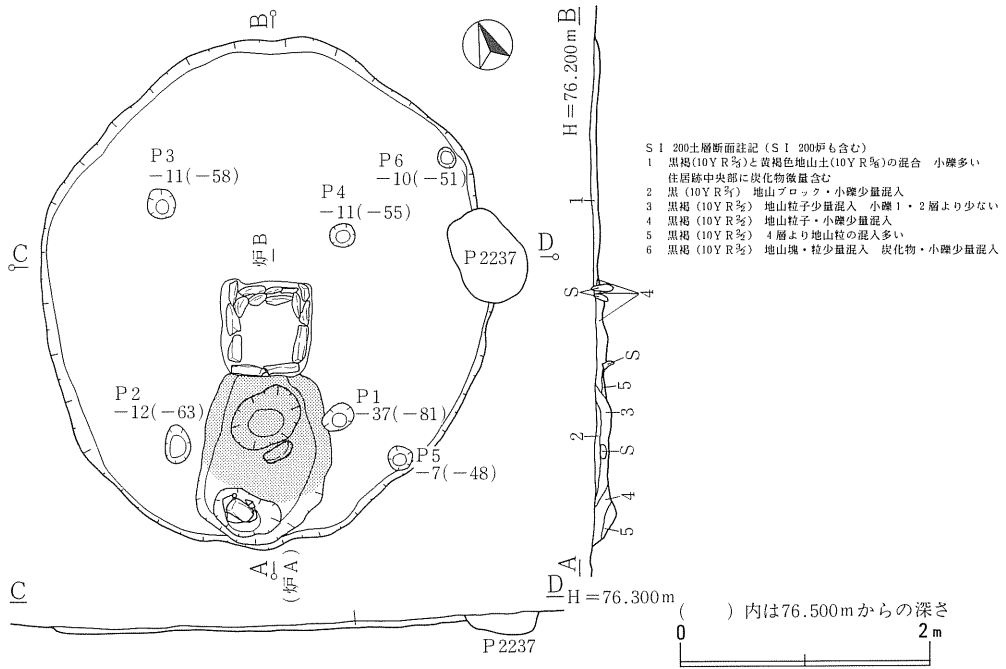
遺物は埋土中から出土のスクレイパー1点のみである。第12図1は末端に自然面を残す縦長剥片を素材とする。表面左側縁二次加工を加え刃部を作出している。表面左側縁の刃部とは別に右側縁上部にも微小な剥離痕があり、この部分も使用されたものと考えられる。長さ71mm、幅50mm、厚さ14mm、重さ41g、刃部の長さ41mm、石質頁岩。他に自然に割れた頁岩塊が2点、剥片が6点出土した。

S I 200 竪穴住居跡 (第13・14図、図版5・10)

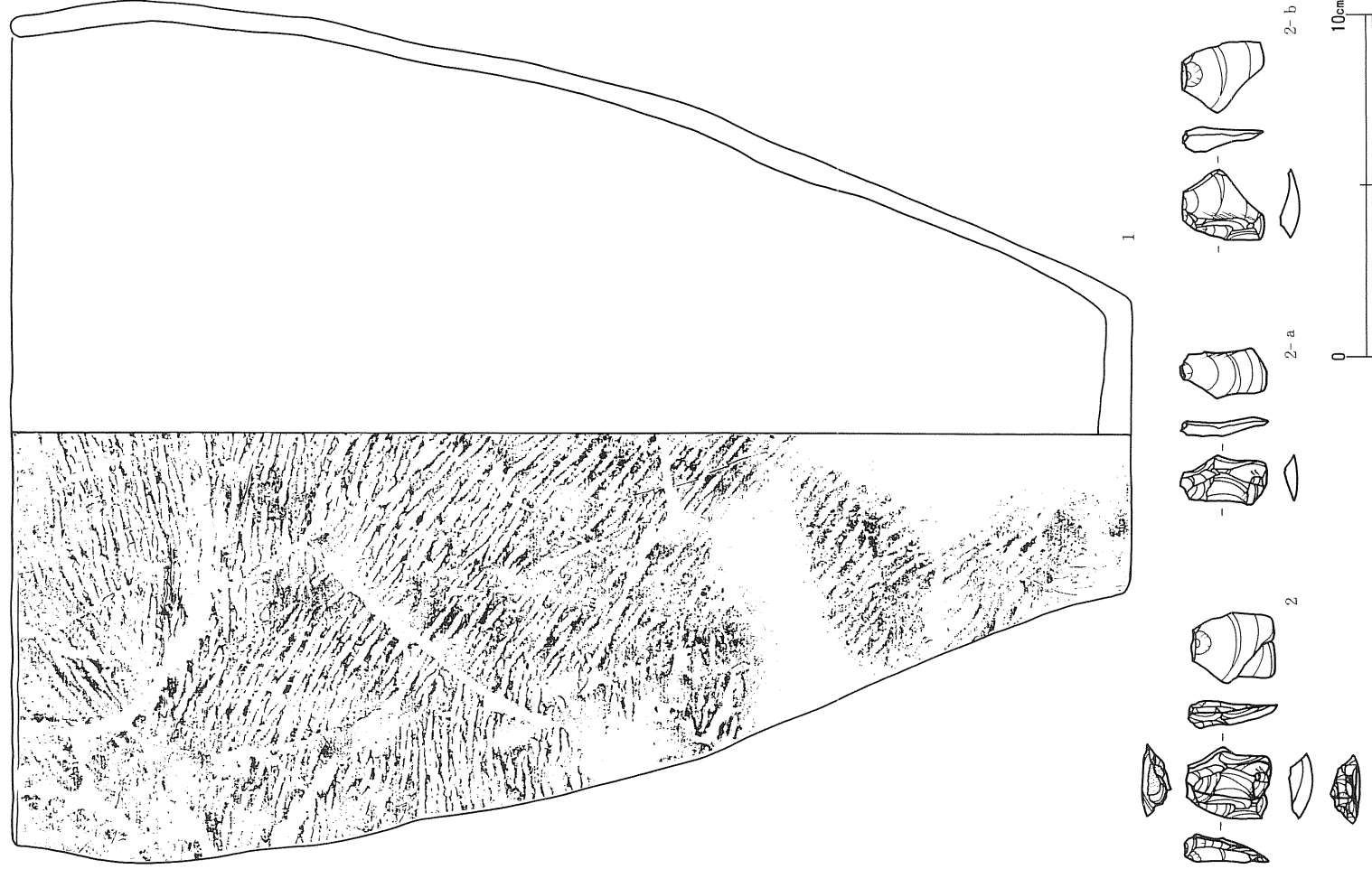
調査区西部のNE68・69グリッドに位置し、検出面は地山(VII A層)上面である。平面形は長軸410cm、短軸360cmの楕円形を呈し、長軸方位はS-25°-Wである。現状での壁高は2～5cm程が残るのみである。住居跡の掘り込み底面は地山の砂礫層(VII B層)で凹凸が著しい。土層断面の観察では黒褐色土の埋土である下位に黄褐色土と小礫が混合した薄い土層があり、明瞭に確認はできなかったものの、貼床ではないかと思われた。床面積は10.6㎡である。柱穴は6本検出したが、P1～P4が主柱穴と思われる。炉は南西側の壁に接し、石囲部と掘り込み部がセットになった所謂「石囲複式炉」の形態を呈する。炉の長軸は住居跡の長軸方向に一致する。住居中央に位置する石囲部は自然石を長軸方向に長い70×60cmの方形に配し、東・西・南辺には20～30cm大の垂角礫を一列に、北辺にはやや小ぶりの石を二重にしていた。掘り込み部と接する南辺の石は他の3辺に較べ一段低く埋置されていた。石囲部の内部は床面から3～8cmの深さに掘りくぼめられているが、火熱による赤色変化は石の内面に限られ、石組に囲まれた底面には焼土・炭化物等は視認できなかった。掘り込み部は石囲部に接し、南西側壁との間に長軸135cm、



第12図 SI 189竪穴住居跡・出土遺物



第13図 SI 200竪穴住居跡・遺物出土状況図



第14図 SI 200 竪穴住居跡出土遺物

短軸100cmの楕円形で2～5cmの深さに鍋底状に掘りくぼめられ、さらに石組に隣接するように長径60cm、短径40cm、深さ7cmの不整な楕円形を呈する浅いくぼみと南西側壁の下方に接して長径55cm、短径30cm、深さ15cmの楕円形を呈するピット状の掘り込みを有する。床面積に占める炉の占有率は16%である。掘り込み部底面はピット状掘り込みを除いて黄褐色粘質土で極めて堅く締まっていた。掘り込み部の底面中央と壁下方のピット状掘り込み底面に同一個体の深鉢形土器片が破碎された状況で出土した。ピット状掘り込み内では、胴部上半1/3周分の土器片直上に20×10cmの垂角礫が横置状況で検出された。

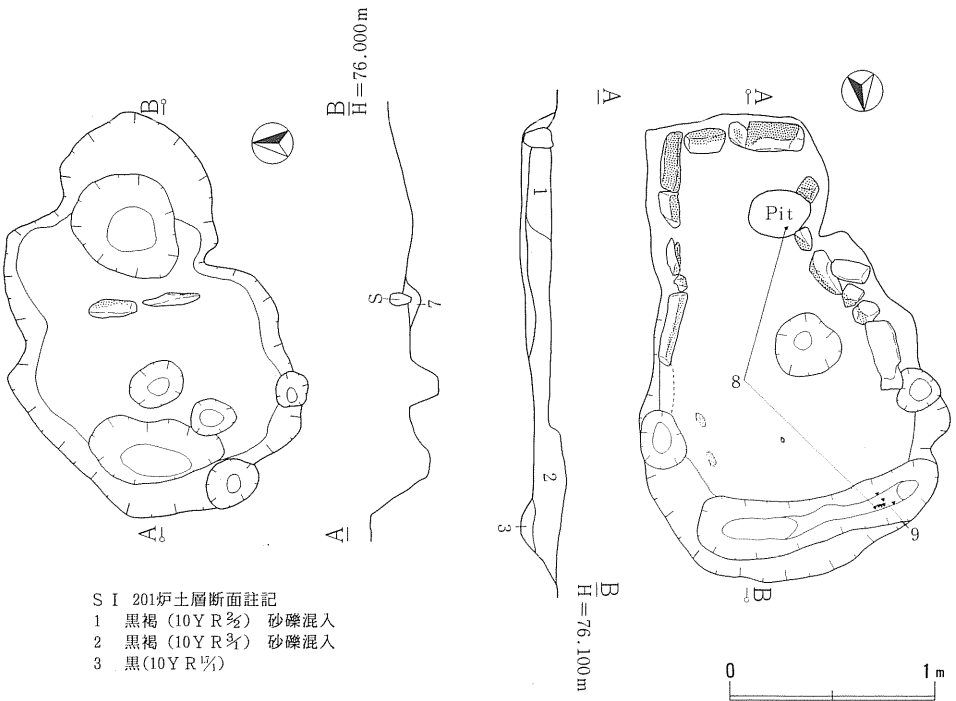
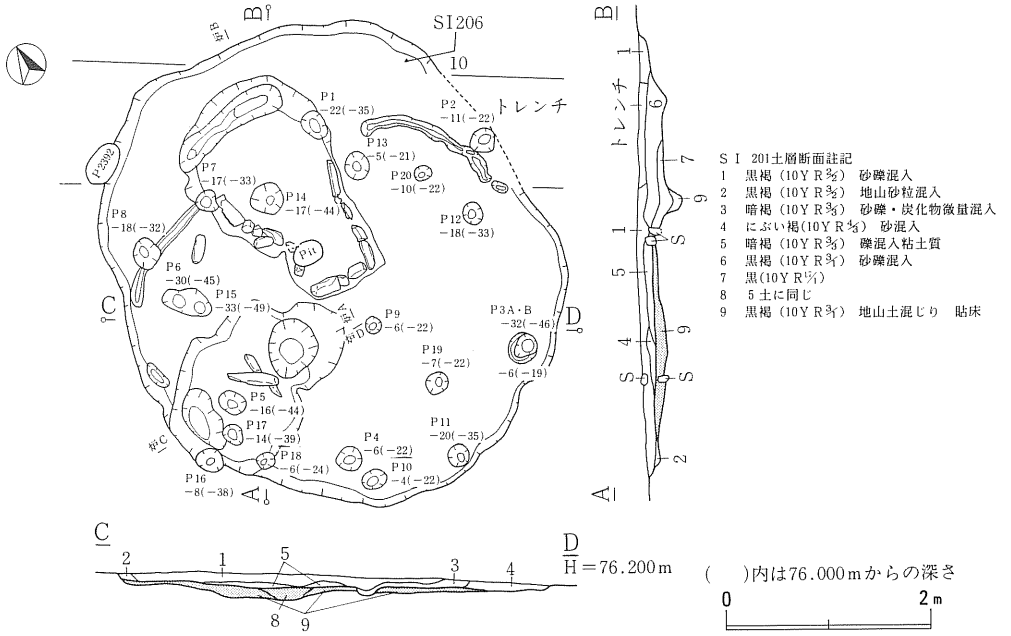
遺物は、炉の掘り込み部から復元可能な一個体の土器と剥片2点・礫1点が出土した(第14図)。1(V群)は深鉢形土器で口縁部がやや内湾し、推定口径23.7cm、推定底径8.5cm、器高32.7cm、推定最大径25.2cmを測る。地文はLLrの半撚で縦位・横位・斜位様々な回転方向で施文されている。2点の剥片は接合し、両者は剝離面打面を共有し共に長さ2.5cm前後の小型の剥片である(a・b)。

S I 201(A・B) 竪穴住居跡 (第15～17図、図版6・10)

調査区西部のNG67・68・NH67・68グリッドに位置する。本住居跡は範囲確認調査時に確認していたが、最終的に地山(VII A層)上面での検出となってしまった。検出プランは南北に長い楕円形を呈していたが、精査の過程で、一度建て替え(拡張)が行われ、新旧2時期の竪穴住居跡であることが判明し、建て替えた住居プランをA、当初の住居プランをBとした。

S I 201A

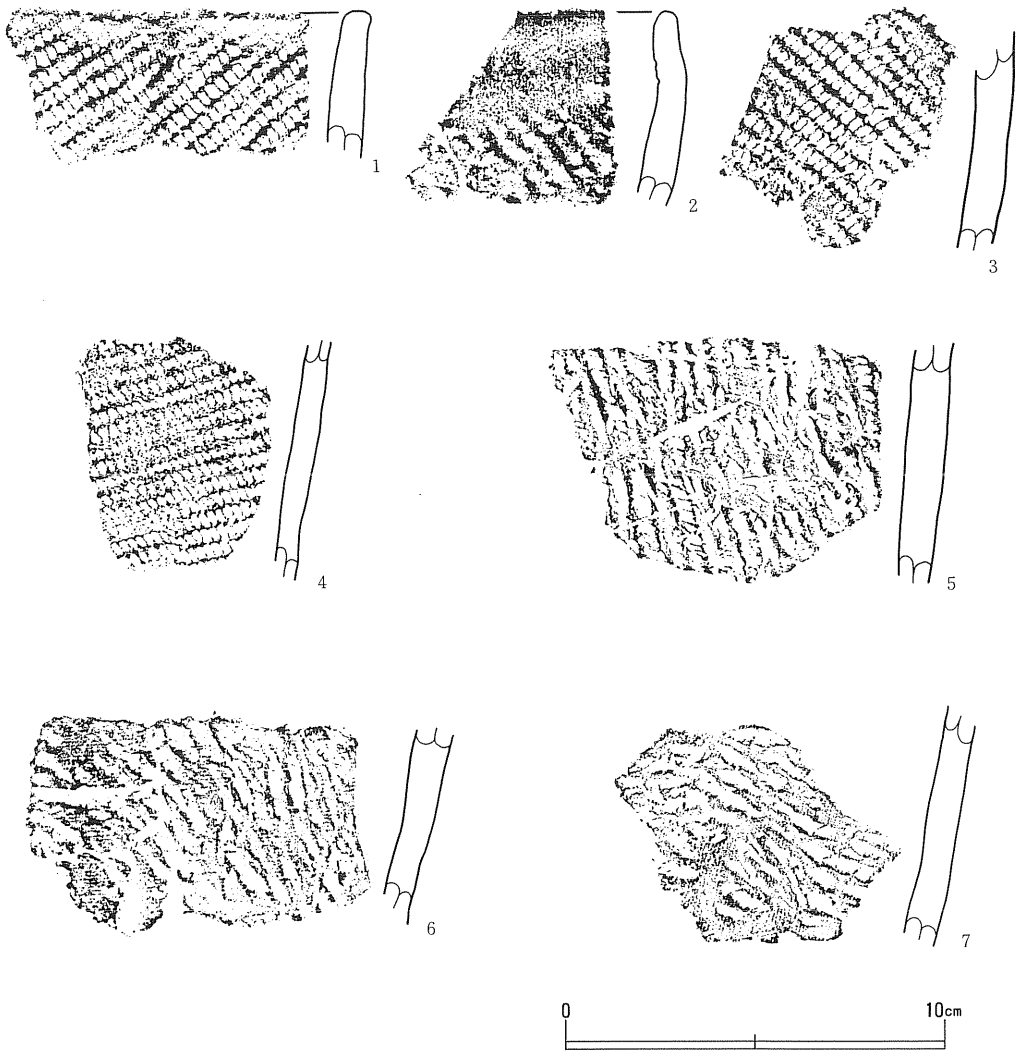
平面形は長軸480cm、短軸400cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-4°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は5～10cmである。床面はB住居跡床面に3～5cmの厚さで粘質土を貼り、平坦に整地している。床面積は14.8㎡である。柱穴はA・B合わせて20本を検出した。配置からP1～9・3BがAに属し、そのうちP1～P7を支柱穴と判断した。炉は北側壁寄りに位置する南半の石囲部と北半の掘り込み部からなる石囲炉である。炉の長軸方位は住居跡の長軸方向に一致する。炉は全体が長軸230cm、短軸80～140cmの規模の南半が方形、北半が楕円形のプランに床面から10～15cmの深さで掘りくぼめられており、床面積に占める炉の占有率は17%である。石囲部は北側に開く略コの字形に、拳大から20～30cm大の垂角礫が連続して配置されている。一部古代～中世の柱穴様ピットによって破壊されていた。掘り込み部の底面は石囲部底面から緩やかに高くなるが、境界は明瞭ではない。住居跡の北側壁に近い掘り込み部北端には、長さ120cm、幅20～30cmの溝状を呈するピットが掘り込み部底面から更に5～8cmの深さに掘り込まれていた。このピットの西端で接合可能な石器素材と思われる剥片が8片重なって出土している。炉内の底面には焼土等は視認できなかったが、石囲部の各石の内側面に火熱による赤色変化がみられた。



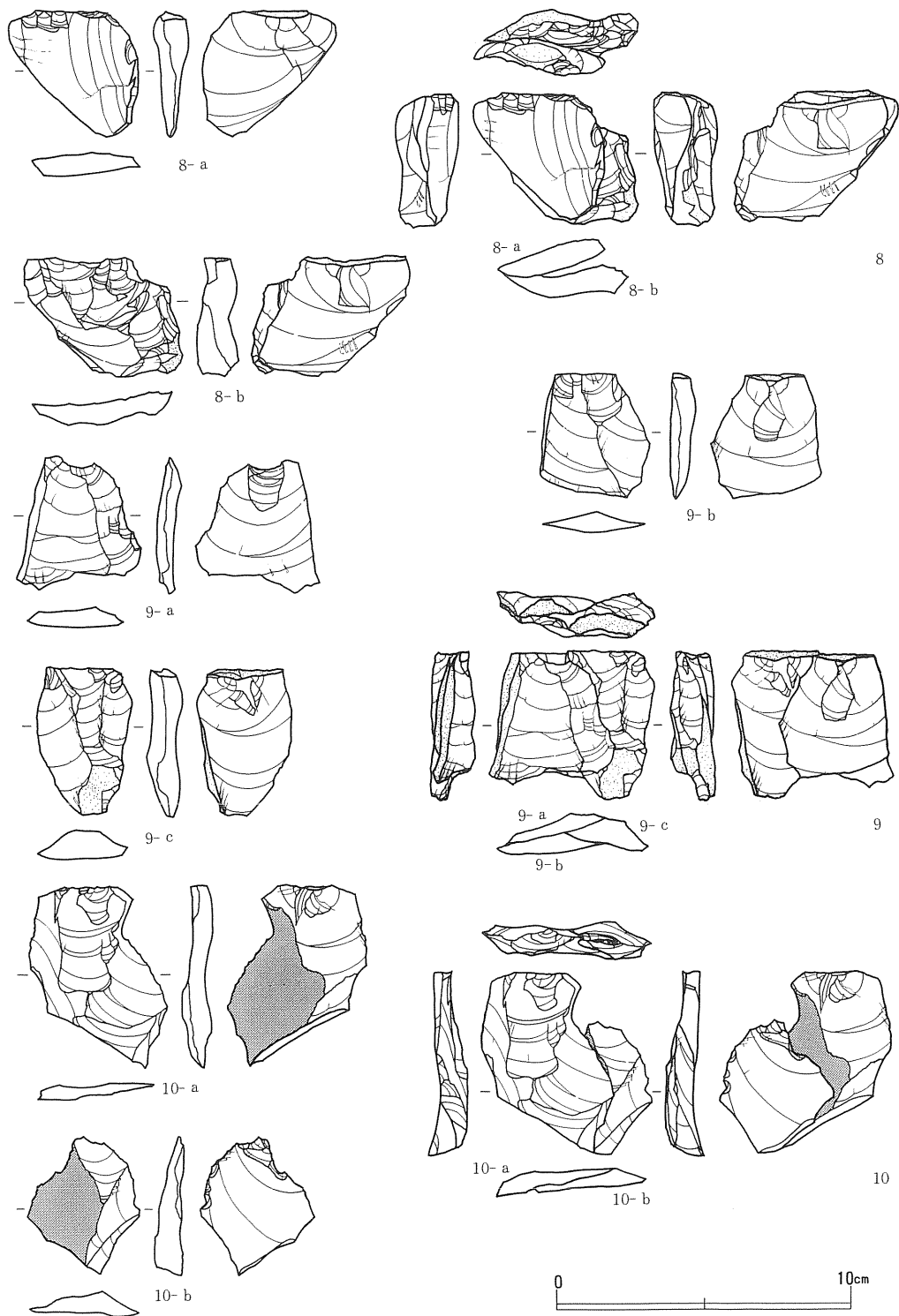
第15図 SI 201竪穴住居跡

S I 201B

北側の壁がA住居跡建て替え(拡張)時に削平されているが、埋め戻されていた周溝を検出した。平面形は長軸400cm、短軸350cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-75° -Wである。床面積は11.3㎡を測る。柱穴配置からP3A・10~15の7本を主柱穴と判断した。北側に遺存する周溝は幅約10cm、深さ約5cmである。炉はその痕跡を止めるのみであるが、石囲部と掘り込み部がセットになった所謂「石囲複式炉」の形態を呈すると推定され、南西壁に接して長さ200cm、幅80~100cmで中央からやや東寄りにくびれ部をもつ不整な隅丸長方形プランで、10~15cmの深さに掘りくぼめられている。炉の主軸方位は住居跡の長軸方向に一致する。床面積に占める炉の占



第16図 S I 201竪穴住居跡出土遺物(1)



第17図 SI 201 竪穴住居跡出土遺物(2)

第4章 調査の記録

有率は17%である。埋土中には多量の焼土粒と炭化物が混入していた。くびれ部の東側(住居跡中央部)に長軸58cm、短軸50cmの楕円形で深さ約5cmの鍋底状ピットが、また、反対側の南西側壁下方には長軸70cm、短軸30cm、深さ5～10cmの楕円形ピットが存在する。くびれ部に一列に並ぶ2個の約20cmと30cmの長さの亜角礫は、東側の面が火熱による赤色変化しており、鍋底状ピットを囲むように埋置された炉石であると判断されたが、この鍋底状ピットとそれに連続する掘り込み部の底面と壁面には赤色変化や焼土等は確認できなかった。

遺物はA住居跡の埋土中からの出土で、土器は粗製の土器片のみである(第16図1～7)。石器は、それぞれ剝離面打面を共有する未加工の9点の剥片が出土した(第17図8～10)。そのうち5点が同一母岩に属し、それぞれ2組(8・9)の接合資料となる。10はSI206竪穴住居跡出土の剥片1点と接合した。両者は被熱によって剝離したものである。

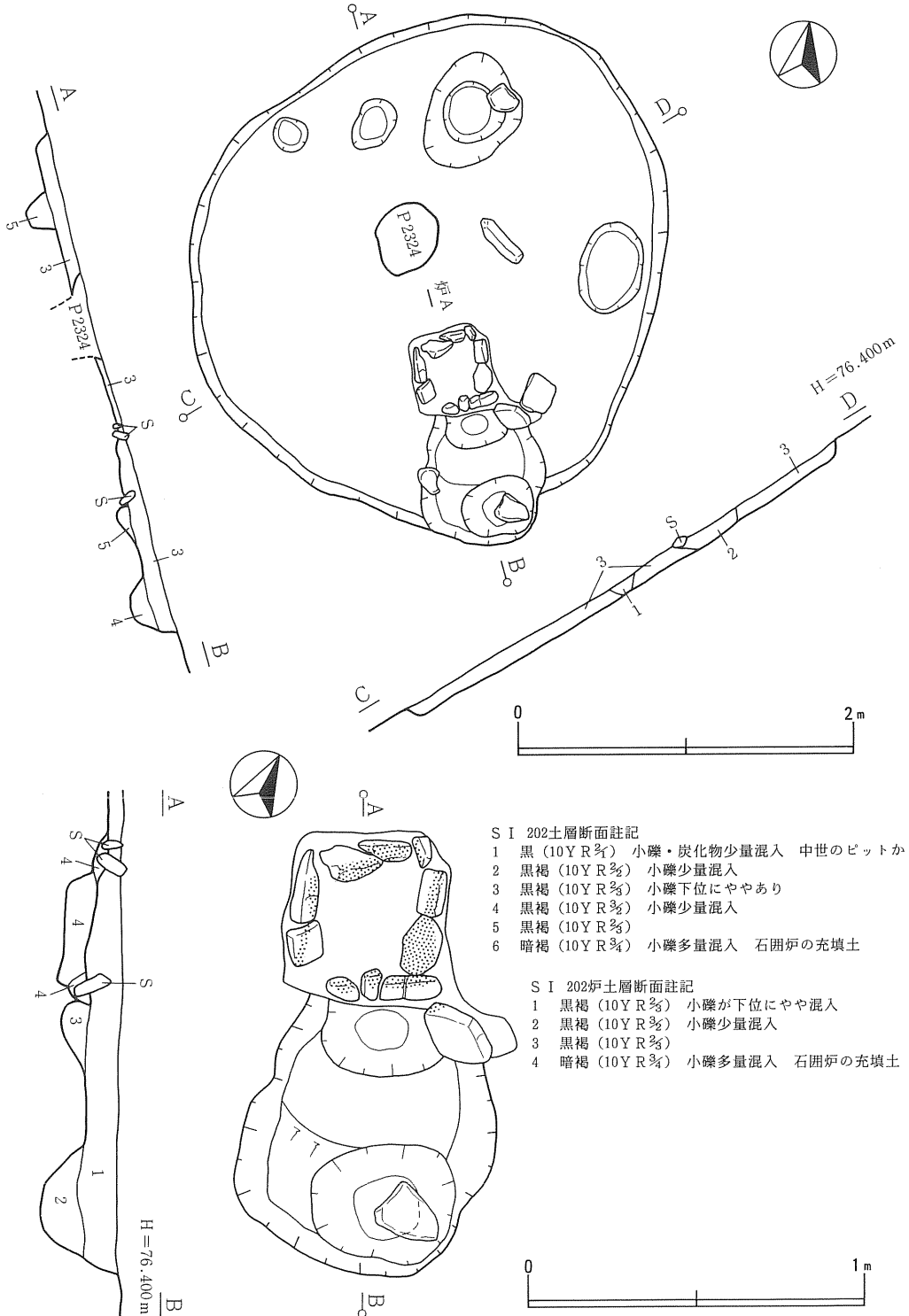
S I 202竪穴住居跡 (第18図、図版6)

調査区北西部寄りのNE73グリッドに位置し、検出面は地山(VII B層)上面である。平面形は直径約290cmの円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり、壁高は7～10cmである。床面はほぼ平坦で、床面積は6.2㎡である。柱穴は4本検出したが、配置に規則性は認められない。

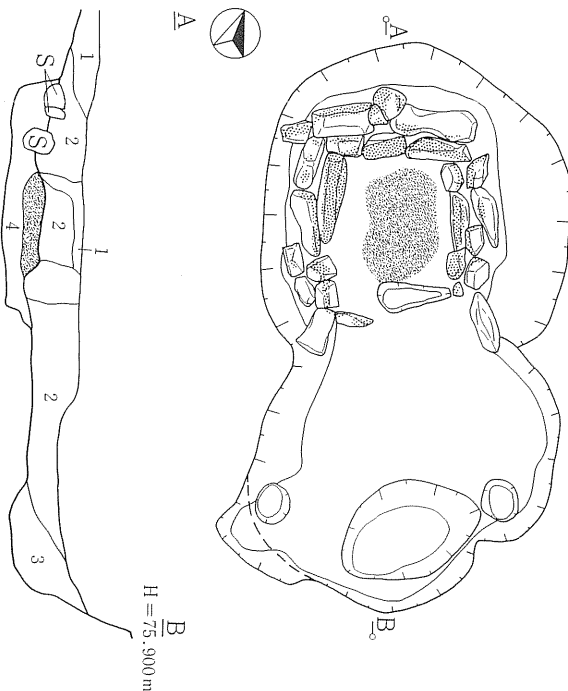
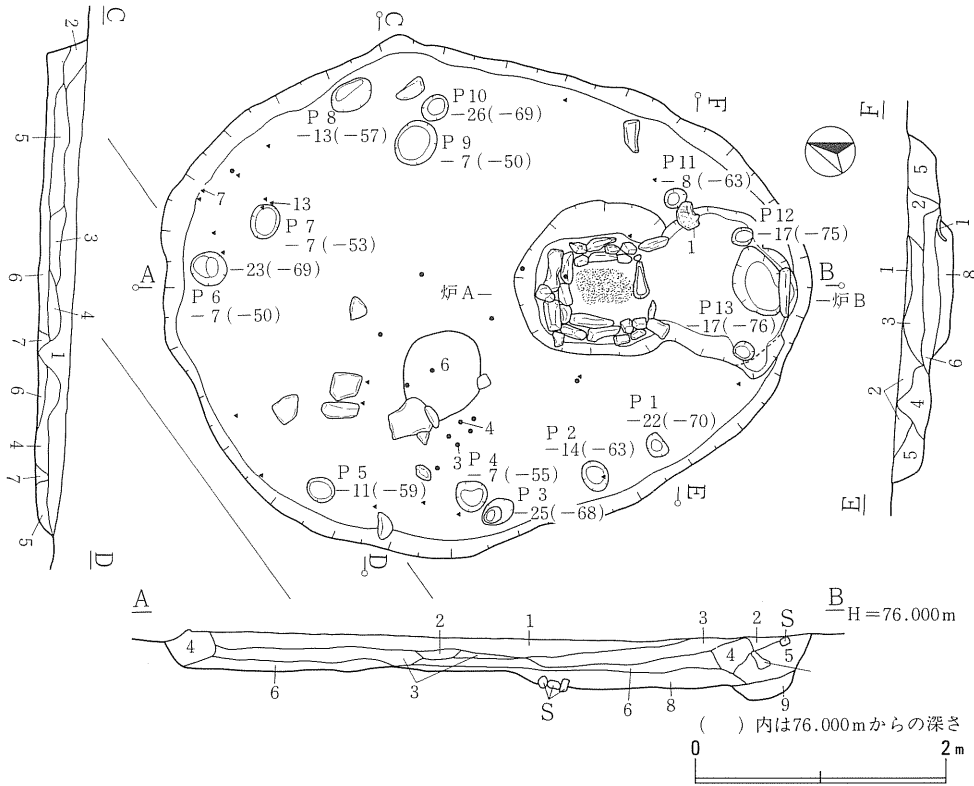
炉は南東側壁に接し、石囲部と掘り込み部がセットになった所謂「石囲複式炉」の形態を呈し、主軸方位はS-20° -Eである。石囲部は拳大から人頭大の自然石を40cm角の方形に配し、石囲内部は床面から3～7cmの深さに掘りくぼめられている。掘り込み部は長軸80cm、短軸70cmの不整楕円形で3～9cmの深さに掘りくぼめられており、床面積に占める炉の占有率は11%である。掘り込み部の底面には石囲部に接して長軸40cm、短軸20cm、深さ9cmの楕円形の掘り込みが、また、南東側壁下方には長さ40cm、幅35cm、深さ約15cmの隅丸方形ピットが存在する。このピット中には偏平な自然石1個が出土した。石囲部と掘り込み部の底面には焼土・灰・炭化物あるいは火熱による赤色変化は視認できなかったが、石囲部の石の内側の面が火熱によって赤色変化していた。また、床面には炉石と同程度の大きさの自然石が散在していた。遺物は出土しなかった。

S I 203竪穴住居跡 (第19～21図、図版7・11)

調査区西端のNK71・72、NL71・72グリッドに位置する。検出面は漸移層(VI層)上面で、地山を掘り込んで床面としている。本住居跡は範囲確認調査時に確認していたものであり、検出プランは東側が狭まる略楕円形を呈していた。完掘平面形は長軸510cm、短軸は420～340cmの略楕円形を呈し、長軸方位はS-20° -Eである。壁は外傾して立ち上がり、範囲トレンチで一部上位が削平された西側部分を除き、壁高は20～30cmを測る。床面は中央がやや低くなるが、ほぼ平坦で総床面積は14.2㎡である。柱穴は13本検出したが、配置と深さからP1・2・4・5・7・9・11・12・13の9本を支柱穴と判断した。P3とP10は、それぞれP4、P9の建て替えの柱穴であると判

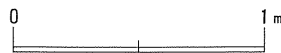


第18図 SI 202 竪穴住居跡



- S I 203土層断面註記
- 1 黒 (10Y R $\frac{1}{4}$) 礫混入
 - 2 暗褐 (10Y R $\frac{2}{3}$) 褐色砂礫混入
 - 3 暗褐 (10Y R $\frac{2}{3}$) 礫混入
 - 4 にぶい黄褐 (10Y R $\frac{3}{4}$) 礫混入
 - 5 暗褐 (10Y R $\frac{2}{3}$) 明黄褐色砂粒混入
 - 6 にぶい黄褐 (10Y R $\frac{3}{4}$) 礫混入
 - 7 明黄褐 (10Y R $\frac{2}{6}$) 砂質
 - 8 にぶい黄褐 (10Y R $\frac{3}{4}$)
 - 9 5に同じ

- S I 203炉土層断面註記
- 1 にぶい黄褐 (10Y R $\frac{3}{4}$) 礫混入
 - 2 にぶい黄褐 (10Y R $\frac{3}{4}$)
 - 3 暗褐 (10Y R $\frac{2}{3}$) 明黄褐色砂粒混入
 - 4 焼土



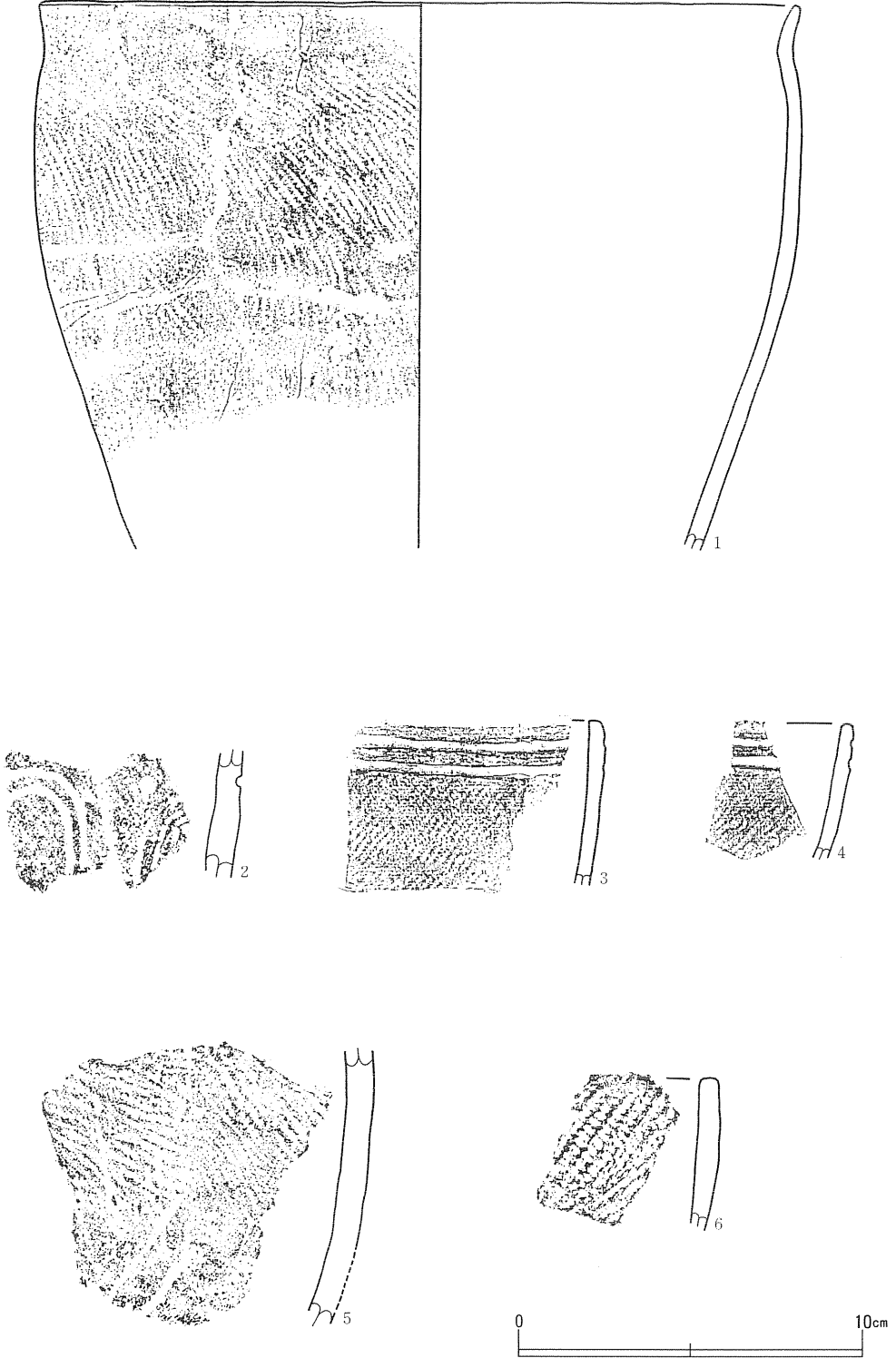
第19図 SI 203竖穴住居跡

断され、断面の土層の観察と確認プランの状況からみて拡張(建て替え)されたものと思われる。

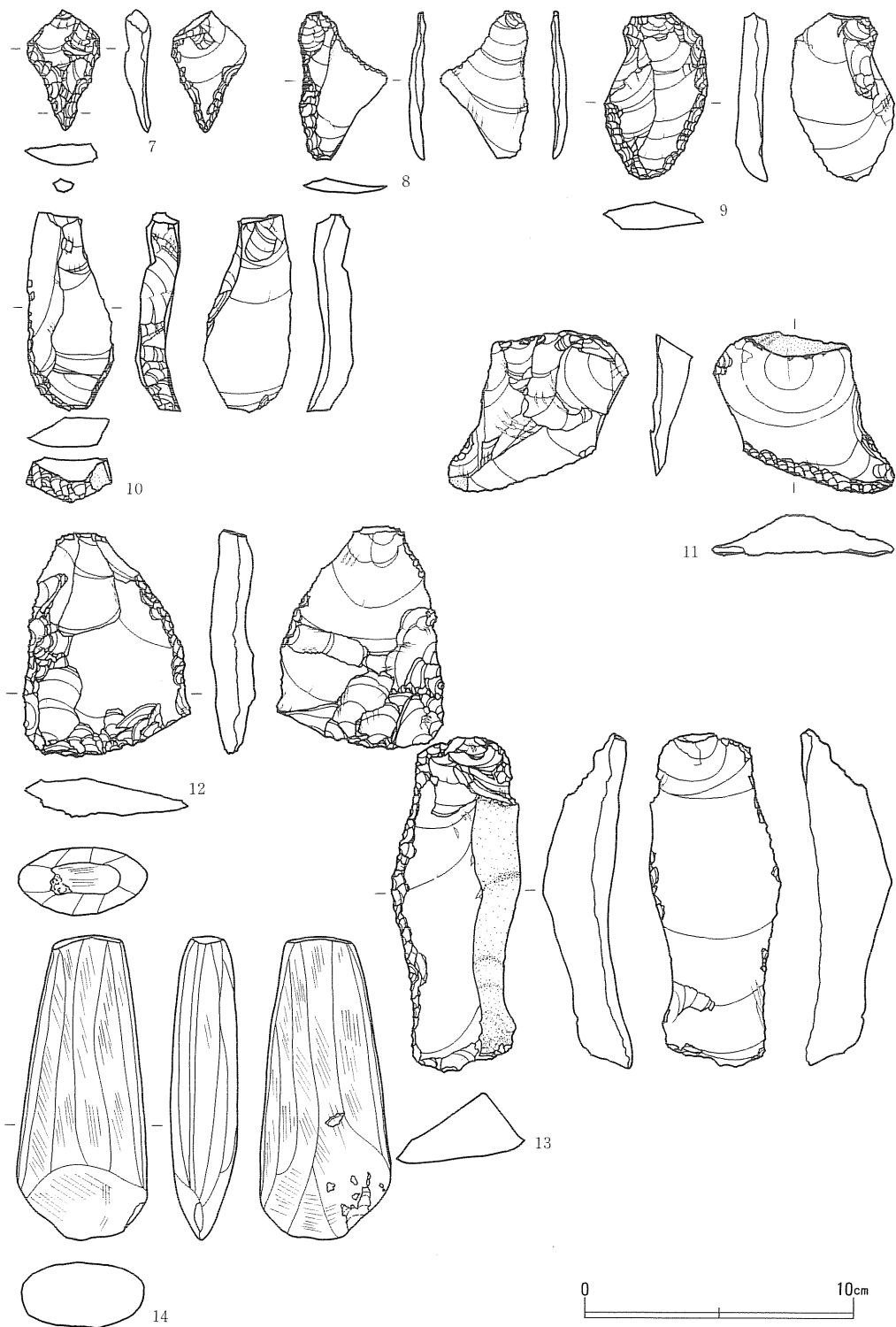
炉は南東側の壁に接し、石囲部と掘り込み部がセットになった所謂「石囲複式炉」の形態を呈する。炉の長軸方位は長軸方向に一致する。石囲部は自然石を北辺60cm、東・西両辺70cmのコの字形に配し、拳大から20～35cm大の亜角礫を用いて二重に組んでいた。南辺には拳大の石1個が遺存し、それに隣接して長さ30cm程の石の抜き取り痕が認められたことから南辺も一重に組まれた方形の石組であったものと思われる。石囲部の底面は床面から約15cmの深さに掘りくぼめられ、火熱による赤色変化は石囲の内面と底部に限られる。掘り込み部は長軸120cm、短軸110cmの不整楕円形で約10cmの深さに掘りくぼめられており、南東側壁の下方長軸60cm、短軸40cmの楕円形で深さ約10cmのピット状の掘り込みが存在する。床面積に占める炉の占有率は16%である。床面の中央西寄りには、本住居跡の床面でプランを確認したが、埋土中位からの掘り込みと判断された晩期のSK229土坑が存在する。

遺物は3・5層中から多く出土し、土器(第20図1～5)は住居跡の中央やや西寄りにまとまる傾向にあった。2(Ⅱ群c類)は縄文地文に2条1組の沈線で区画文を垂下し、区画外に刺突が施される。3と4(Ⅳ群b類)は3層中から出土した晩期の口縁部で口縁に平行して2条の沈線が巡るものである。本住居跡床面でプラン確認した晩期のSK229土坑に近接していることから、本来はSK229土坑に伴うものと思われる。

石器は剥片石器7点、磨製石斧1点が出土した(第21図7～14)。剥片石器は石錐1点、スクレイパー6点である。7は床面北端から出土した石錐である。縦長剥片を素材とし、表面右側縁から末端にかけて両面に二次加工を加え、錐部を作出している。錐部は摩滅して丸みがある。長さ45mm、幅27mm、厚さ9mm、重さ8g、石質頁岩。12は床面北西から出土した。縦長剥片を素材とし表面左側縁と末端の両面に大型の剥離からなる二次加工を施し、三角形に整形し右側縁に細かい二次加工を施し刃部を作出する。長さ83mm、幅62mm、厚さ16mm、重さ172g、刃部の長さ57mm、石質頁岩。9は床面から出土したスクレイパーである。縦長剥片の表面の縁辺に二次加工を施し、刃部を作出している。長さ62mm、幅48mm、厚さ9mm、重さ23g、石質頁岩。10は3層から出土した。厚手の縦長剥片の末端に急角度の二次加工が施され、平面円形の刃部を作出している。また表面左側縁には微小剥離痕が認められる。長さ73mm、幅32mm、厚さ12mm、重さ35g、刃部の長さ47mm、石質頁岩。13はP7付近床面から出土したスクレイパーである。断面形が三角形を呈する大型縦型剥片を素材として、表面左側縁に二次加工を施し、刃部を作出している。長さ125mm、幅48mm、厚さ2mm、重さ120mm、刃部の長さ113mm、石質頁岩。11は床面から出土したスクレイパーである。横長剥片を素材とし、裏面末端と表面左縁末端側に細かい二次加工を施し、一端が尖頭状を呈する刃部を作出している。長さ59mm、幅67mm、厚さ13mm、重さ34g、刃部の長さ56mm、石質頁岩。8は3層から出土した。極薄手の三角形の剥片の両側縁に刃部を持つスク



第20図 SI 203 竖穴住居跡出土遺物(1)

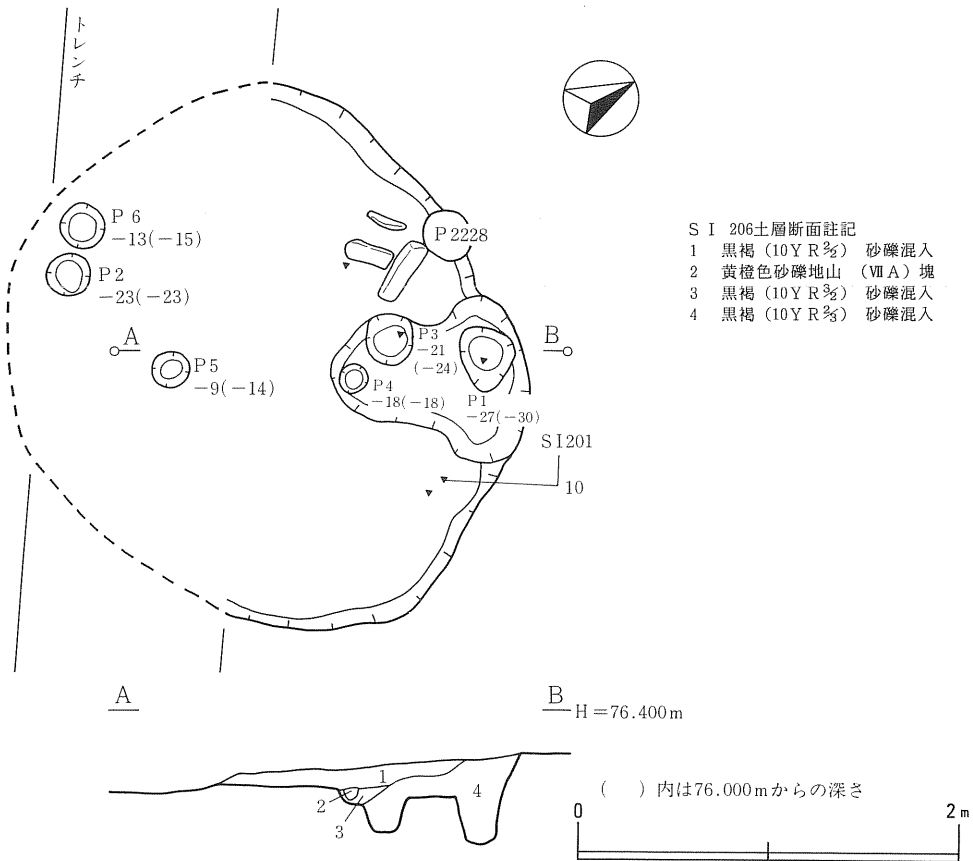


第21図 SI 203竖穴住居跡出土遺物(2)

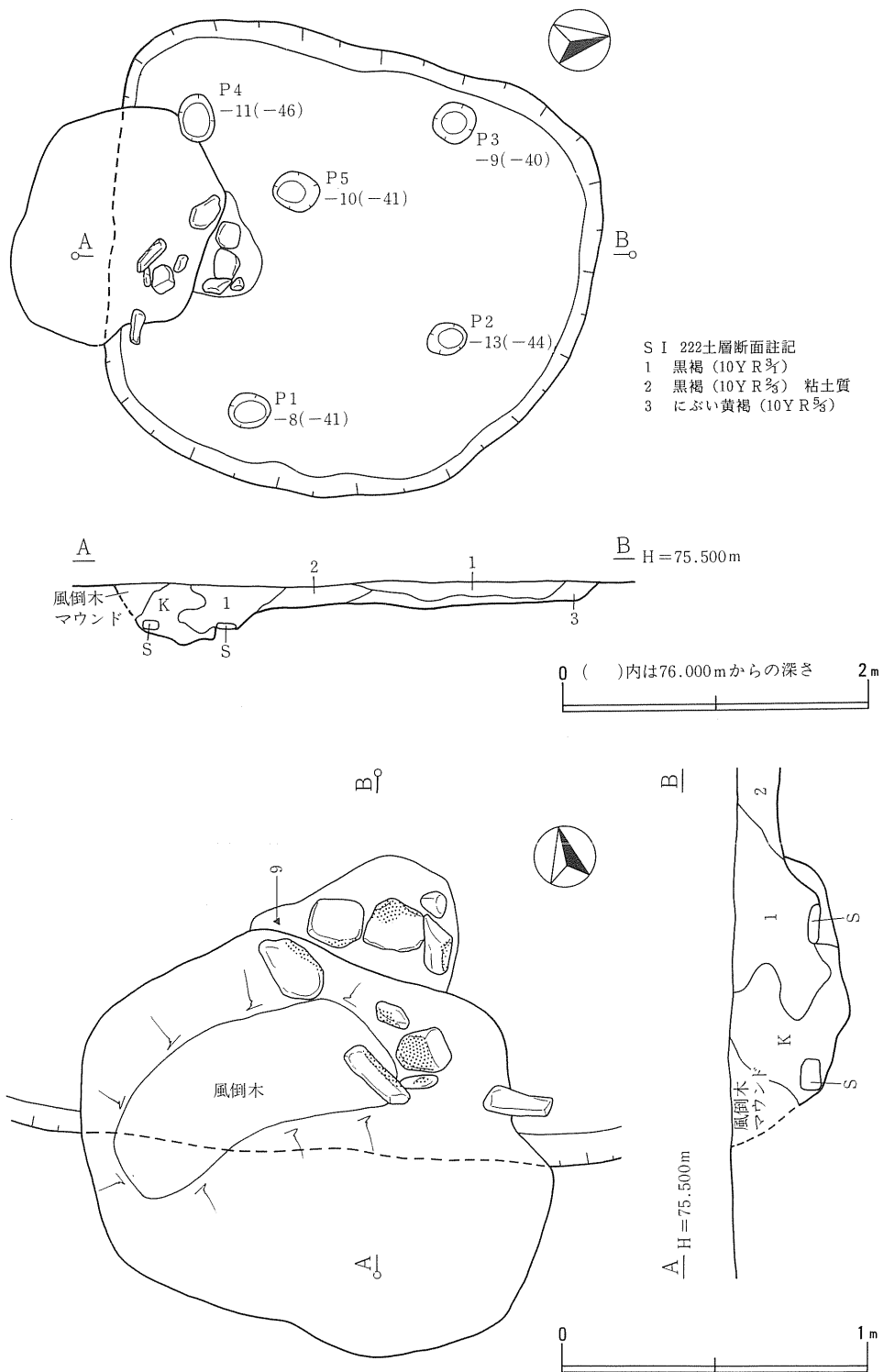
レイパーである。刃部は裏面からの細かな二次加工が主となって作出されている。長さ55mm幅38mm、厚さ6mm、重さ6g、刃部の長さ54mm、石質頁岩。14は床面北西端から出土した両凸円刃磨製石斧である。全面よく研磨され横断面形はいわゆる三味線胴形をなし、定形式石斧に属する。裏面刃部右側の欠損は使用によるものと思われるが、その後再度研磨を受け再生されている。長さ113mm、幅(上)23mm/(下)49mm、厚さ25mm、重さ208g、石質緑色凝灰岩。

S I 206 竪穴住居跡 (第22図、図版7)

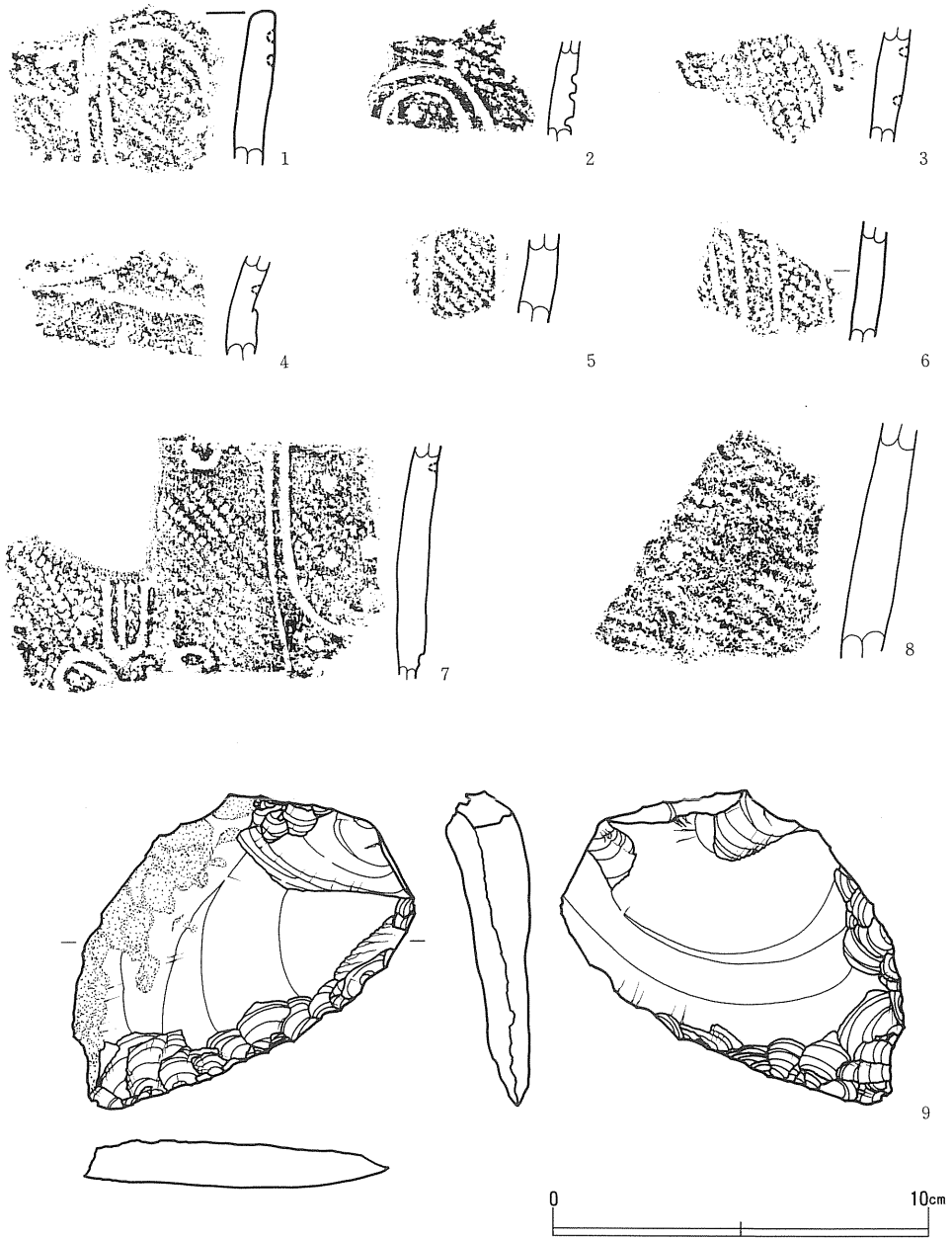
調査区西部のNE・NF67グリッドに位置する。本遺構は範囲確認調査時に確認していたものだが、最終的には地山(VII A・B層)上面での検出となってしまった。南西半側が範確トレンチに、西側が木根により破壊されており、平面形は判然としないが、直径250cm前後の円形プランを呈していたと思われる。壁は外傾して立ち上がり、壁高は8~15cmである。床面は木根によりやや凸凹しているものの概ね平坦である。推定される床面積は5.1㎡である。柱穴は6本検出したが、配置に規則性は認められなかった。



第22図 SI 206 竪穴住居跡



第23図 SI 222竪穴住居跡



第24図 SI 222竖穴住居跡出土遺物

床面に炉と考えられる焼土・灰の堆積や、火熱により赤色変化した範囲等は確認できなかったが、北東側壁に接して長軸100cm、短軸50～80cmのひょうたん形の掘り込みが存在し、その西側に20～30cm程の垂角礫が3個残存していた事から、石囲炉であった可能性が考えられる。遺物は、剥片が1点出土したが、S I 201竪穴住居跡出土の剥片と接合した。

S I 222竪穴住居跡（第23・24図、図版8・11）

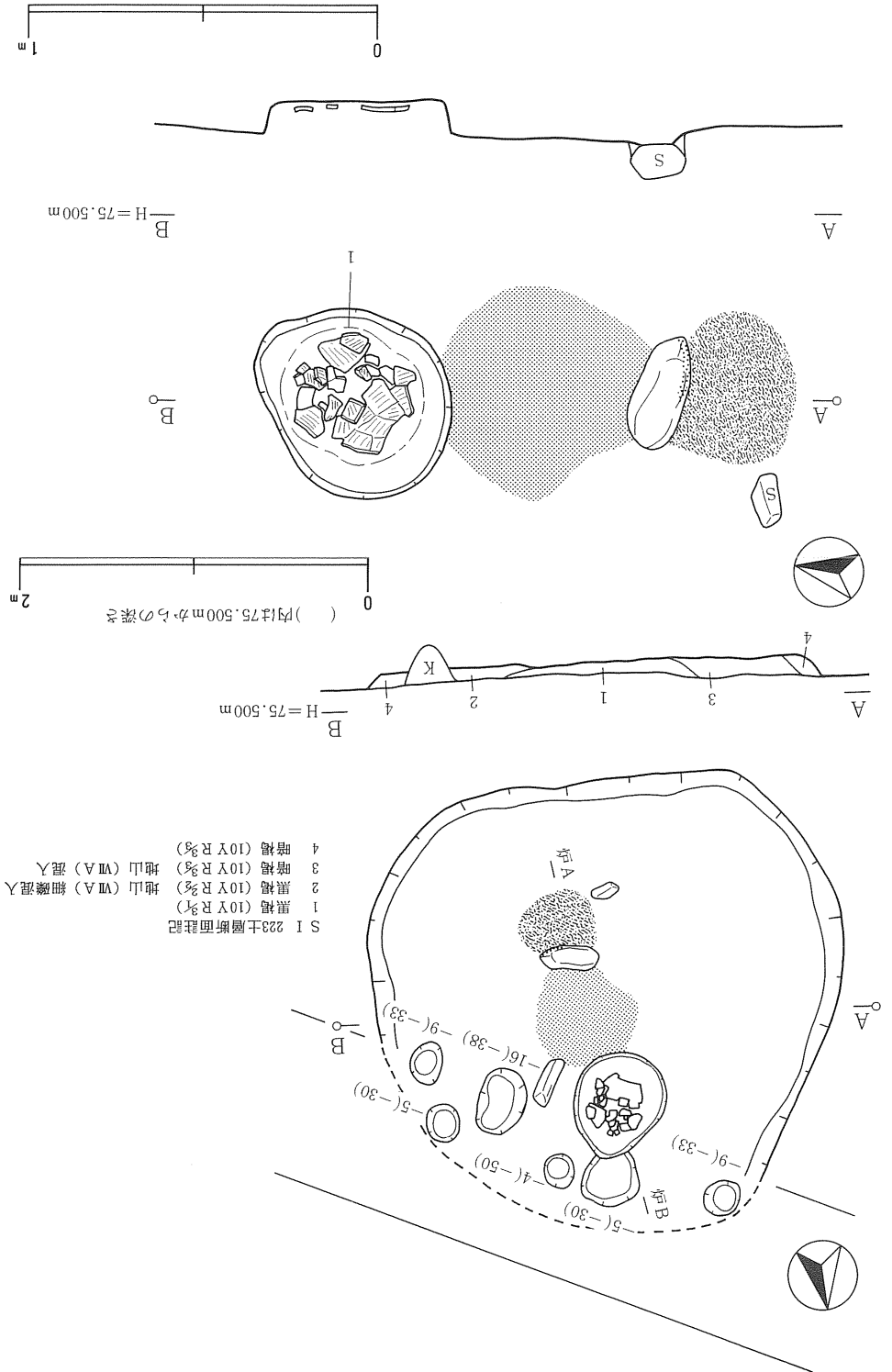
調査区南西部のNM65グリッドに位置し、検出面は地山(VII B層)上面である。平面形は長・短軸方向とも300cmの北側と東側が膨らむ隅丸方形形状プランを呈するが、南側は風倒木により一部破壊されていた。壁は外傾して立ち上がり、壁高は8～15cmである。床面は西側にやや傾斜するものの概ね平坦で、床面積は7.1㎡である。柱穴は5本検出し、P1～P4を支柱穴と判断した。炉は南西壁側に位置し、床面から約10cmの深さに掘りくぼめたあと、自然石を組んだ石囲炉であるが、風倒木によりその大半が破壊され、遺存状態は極めて不良である。火熱により赤色変化した10～20cm程の自然石10個が出土したが、現位置に遺存するものは北側の4個のみである。本住居跡の炉も石囲部と掘り込み部がセットになった所謂「石囲複式炉」であった可能性があり、推定される主軸方位はS-20° -Wである。床面積に占める炉の占有率は8%と推定される。出土遺物(第24図1～9)はわずかで、土器は2層からの出土である。1～7(II群C類)は同一個体である。RL縄文地文に1～2条の沈線文で区画文を垂下し、主として区画内に径2mm程の深い円形刺突を施している。石器は、炉の組石脇から出土したスクレイパー1点(9)のみである。9は表面左側面に自然面を残す比較的厚手の横長剥片を素材とする。表面の末端側と裏面の右側の縁面に二次加工を施し、一端が若干尖頭状を呈する刃部を作出している。長さ83mm、幅92mm、厚さ19mm、重さ111g、刃部の長さ84mm、石質頁岩。

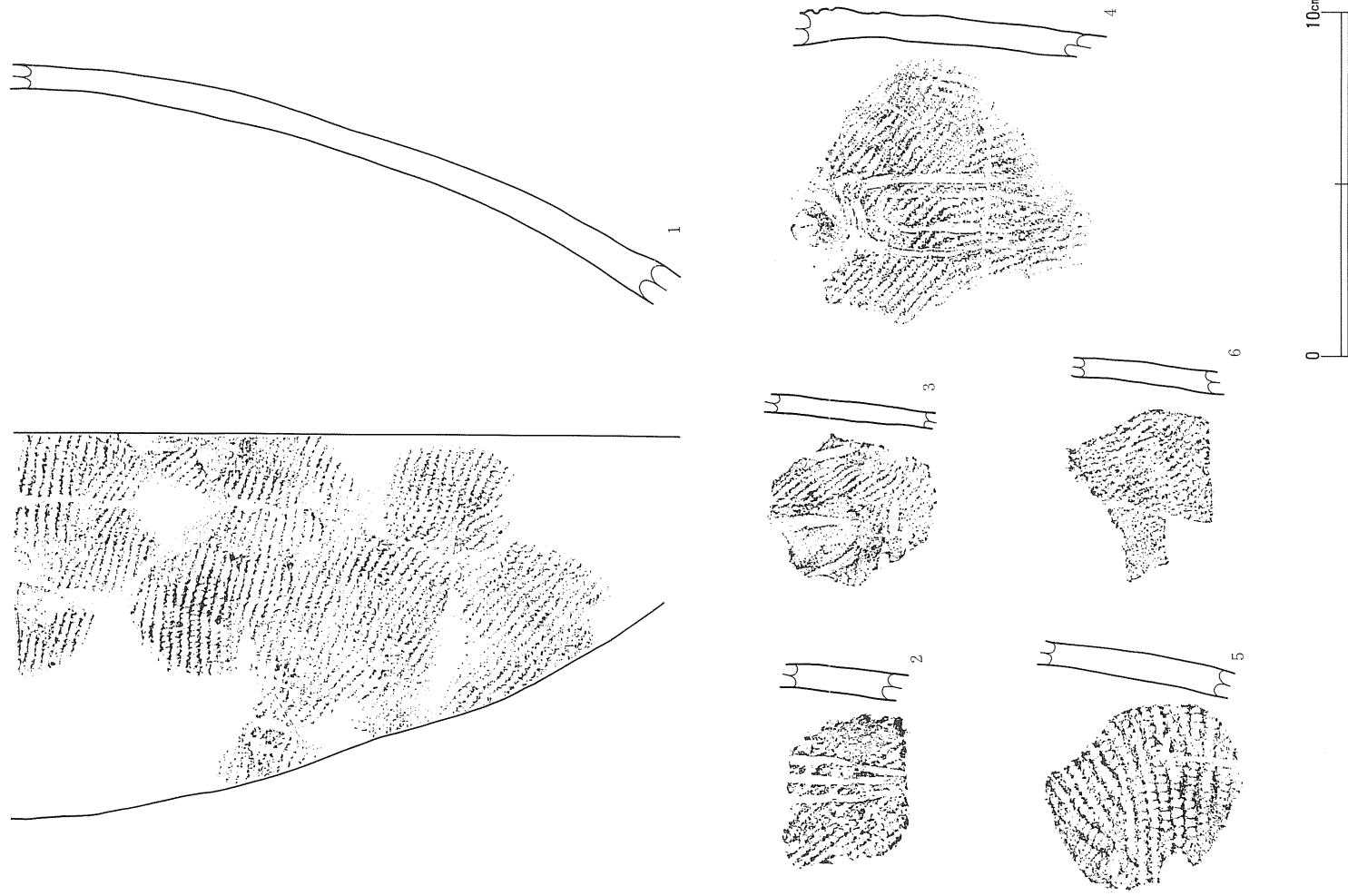
S I 223竪穴住居跡（第25・26図、図版8・11）

調査区西南部のNO67・68・NN67・68グリッドに位置する。本住居跡は範囲確認調査時に確認していたが、最終的には地山(VII A層)上面の検出となってしまった。平面形は北半が範確トレンチで削平され、南半も木根によって攪乱されており、極めて遺存状況は悪いが、直径約270cmの円形を呈すると推定される。壁は外傾して立ち上がり、壁高は2～5cmである。床面は木根の攪乱で凸凹している。床面積は5㎡と推測される。柱穴は北側に6本検出したに止まり、支柱穴の配置等は不明である。

炉は住居中央やや南寄りに長軸45cm、短軸32cmの範囲で火熱により赤色変化しているのが確認され、それに接して北側に出土した約35cmの長さの垂角礫1個の南側の面の上半に火熱による赤色変化が認められることから、炉石の大部分が欠失するがこの区域が石囲炉であったと判断した。この石囲炉の北側には堅く踏み固められた不整楕円形区域、さらに深鉢形土器の胴部破片が出土した長軸62cm、短軸50cm、深さ10cmの不整楕円形ピットが連続している。遺存状態

第25図 S1 223竪穴住居跡





第26圖 SI 223竪穴住居跡出土遺物

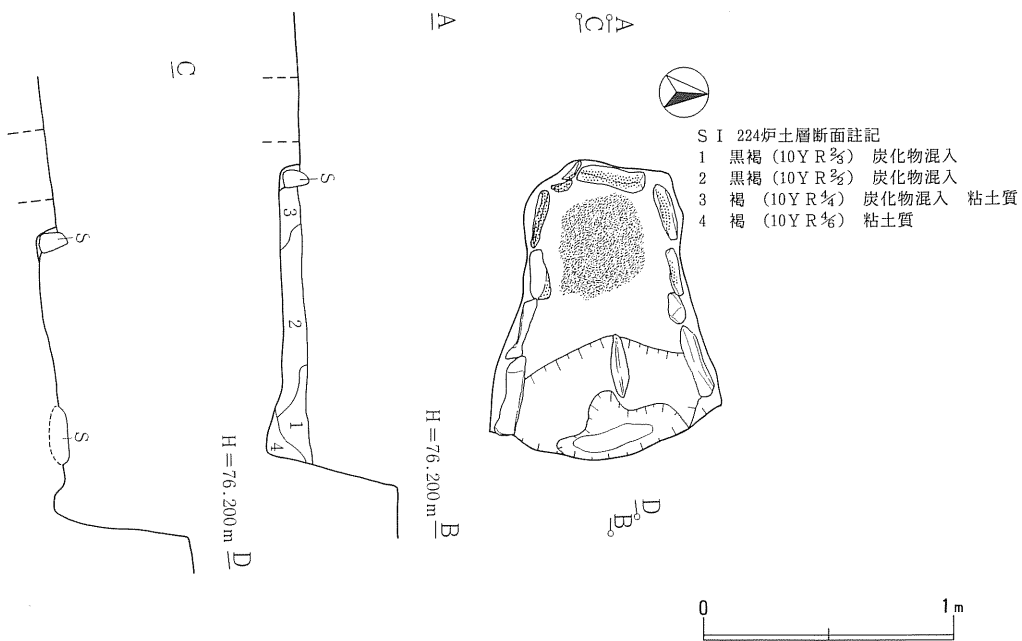
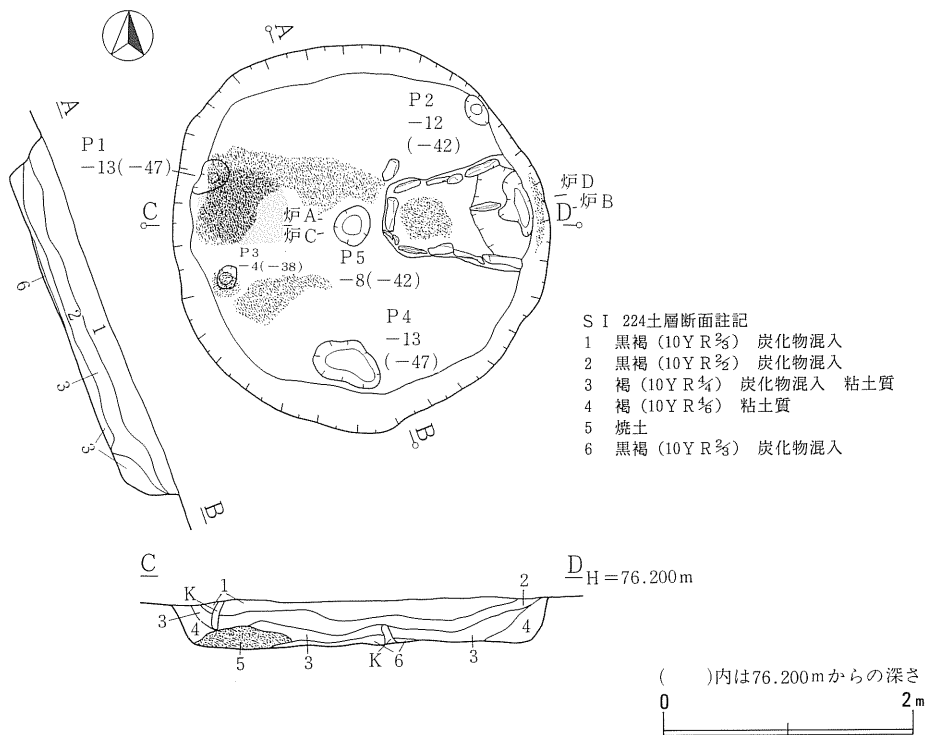
からS I 200竪穴住居跡に類する炉の形態を呈していた可能性がある。

遺物(第26図1～6)は埋土中と床面から出土したが、埋土が木根により攪乱されており、現位置を止めるものはピット状掘り込み底面出土の1個体の土器だけである。1(V群)は掘り込み底面から出土した底部を欠く深鉢形土器の胴部下半である。地文はRL原体を縦位・横位・斜位様々な回転方向で施文している。3(II群d類)は曲線的な沈線で無文部を区画し、4(III群f類)は縄文地文に2条1組の逆U字状に沈線を施し、沈線屈曲部の上位に円形刺突文をもつ径12mm程のボタン状貼付文を施している。5はLR原体を回転施文した土器片であるが、割口の半周に調整の痕がみられることから円盤状土製品の可能性も考えられる。

S I 224竪穴住居跡 (第27・28図、図版9・11)

調査区北西部のNH76グリッドに位置し、検出面は漸移層(VI層)上面である。平面形は直径約300cmの円形を呈する。壁は外傾して急に立ち上がり、壁高は35cmを測る。東側の壁は一部焼けて赤色変化していた。埋土は6層からなり、全層に炭化物と焼土粒が多量に混入しており、西側壁際の埋土中(6層上面)には投棄されたと思われる焼土塊(5層)が検出された。床面は平坦で堅緻であるが、床面は中央から西側にかけて焼けて赤色変化していた。床面積は5.5㎡である。柱穴は5本検出したが、配置には規則性は認められなかった。炉は東側の壁に接する石囲炉で、主軸方位はN-80°-Eである。炉は全体が長軸120cm、短軸50～100cmの規模の馬蹄形に床面から約8cmの深さに掘りくぼめられている。床面積に占める炉の占有率は14%である。石組は掘り込みの壁面にそって20～30cm大の亜角礫を用い、馬蹄形に東側壁下まで配されている。長軸中心線のやや東側に、長さ約25cmの細長い自然石1個が他の組石よりも低く埋置されていた。炉の掘り込み内で住居跡の東側の壁下方には壁に沿って長軸50cm、短軸20cmの長楕円形で深さ20cmのピット状の掘り込みが存在する。火熱による赤色変化は掘り込みの中央部より西側の炉石の内側面と掘り込み底面に確認できた。本住居跡は床面及び壁面が火熱により赤色変化しており、焼失家屋の可能性も考えられる。

遺物(第28図1～5)は1層中に多く出土した。1と2(II群e類)は同一個体の土器片で複数の沈線によって曲線的な文様が描かれる。石器は剥片石器2点が出土した。4は厚みのある横長剥片を用いたスクレイパーである。横長剥片を素材とし、裏面打面側と末端側に二次加工を施した後、表面全面に細かい二次加工を施し、一端が尖った三角形に整形している。二次加工が比較的平坦な裏面左側縁から先端部にかけてが刃部と考えられる。長さ45mm、幅29mm、厚さ10mm、重さ12g、刃部の長さ48mm、石質頁岩。1層埋土から出土した5は上部が折損しており、本来の器種は確定できないが、ここでは二次加工のある剥片として扱うことにする。素材の縁辺の主に表面側に二次加工が施されており、石器製作途中で失敗し、放棄されたものであろう。長さ28mm、幅32mm、長さ6mm、重さ5g、石質頁岩。

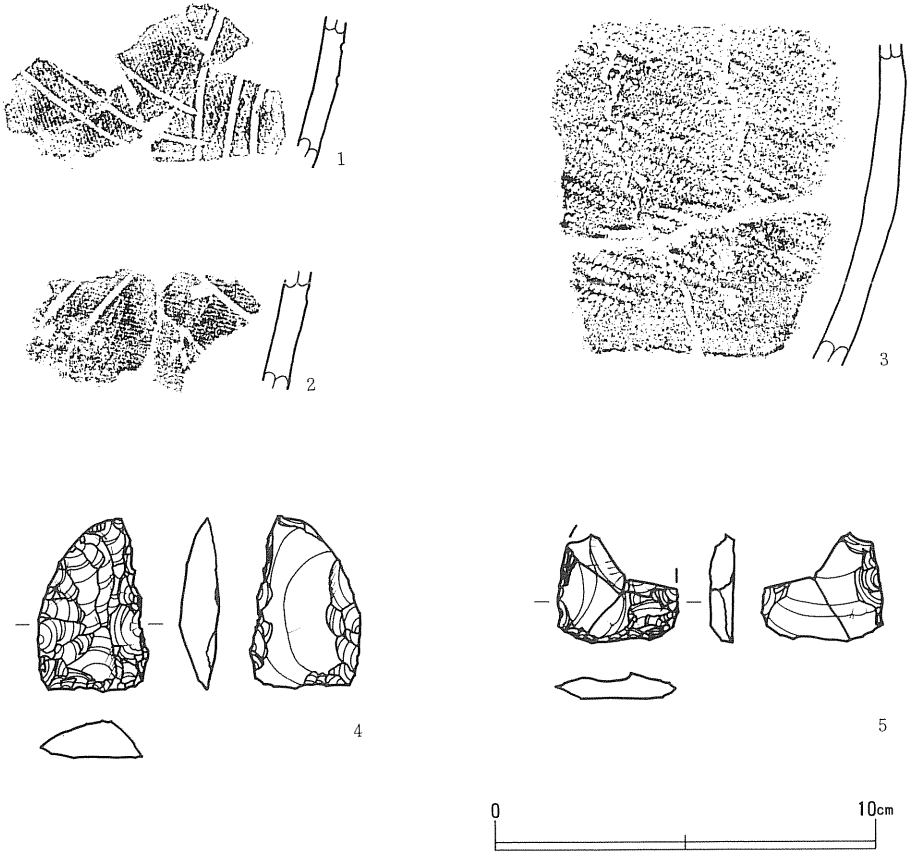


第27図 SI 224竖穴住居跡

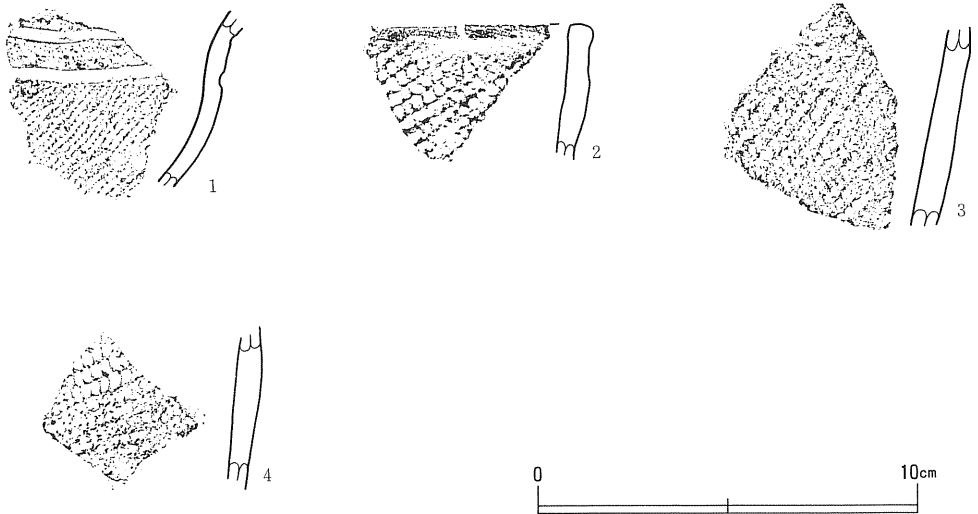
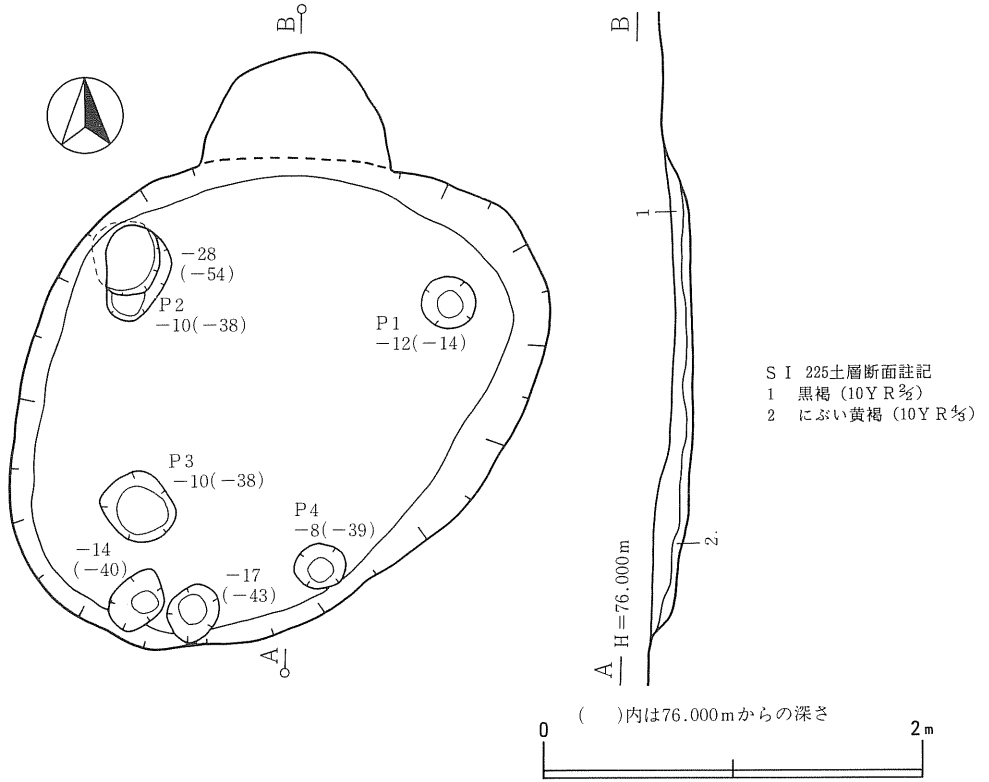
S I 225竪穴住居跡（第29図、図版9）

調査区西端のNM73・74グリッドに位置し、検出面は漸移層(VI層)上面である。平面形は長軸300cm、短軸240cmの楕円形を呈し、地山面まで掘り込まれて構築されている。長軸方位はN-40° -Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は約10cmを測る。床面は中央が低くなっており、締まりは弱い。床面積は4.5㎡である。柱穴は6本検出したが、P1~P4が支柱穴と考えられる。炉は認められなかった。

遺物は埋土中から少量出土した(第29図1~4)。1 (IV群b類)は口縁に平行する2条の沈線が巡る。



第28図 SI 224竪穴住居跡出土遺物



第29図 SI 225 竖穴住居跡・出土遺物

第4章 調査の記録

(2) フラスコ状土坑

SKF 29フラスコ状土坑(第30図、図版9・12)

SI27竪穴住居跡の東側、LT40グリッドに位置する。口径約110cm、底径約140cm、深さ60cmで断面形がフラスコ状を呈する。埋土中から晩期前葉の鉢形土器が数片に分かれて出土した。この土坑の時期も土器と同じものであろう。

1(IV群a類)の鉢形土器は口縁部がやや内弯する。口縁部に羊歯状文が施され、体部下半は無文である。

(3) 土坑

SK 182土坑(第31図)

MQ64・MR64グリッドのIV層で検出した。平面形は略円形、断面形は鍋底形である。長軸方向はN-8°-Wで、長軸88cm、短軸82cmを測る。坑底面はほぼ平坦でプラン確認面からの深さは15~18cmである。遺物は縄文土器(V群)の体部破片が1点のみ北側壁で出土した。

SK 188土坑(第31図、図版9・12)

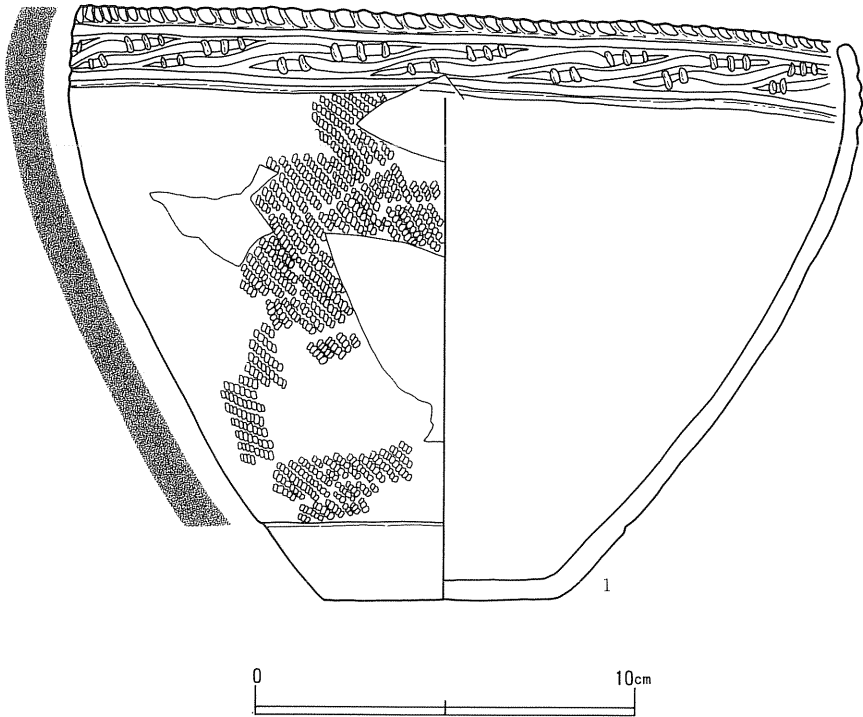
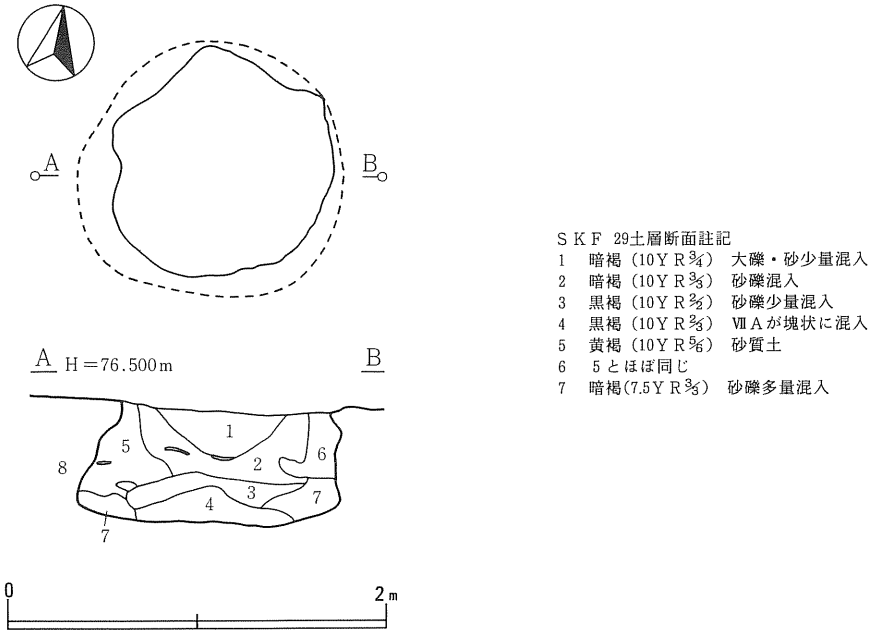
NH79・80グリッドのVII層上面で検出した。平面形は不整円形、断面形は円筒状を呈する。坑底面は北西側が一段高くなっており、最大底面は若干鍋底状をなす。長軸方向はN-57°-Eで、長軸148cm、短軸138cmを測る。プラン確認面からの深さは64~86cmである。遺物は埋土中より6片出土した(第31図1~4)。1~3(V群)はR捺糸文で2と3は同一個体である。4はLR捺糸文である。

SK 228土坑(第32図、図版12)

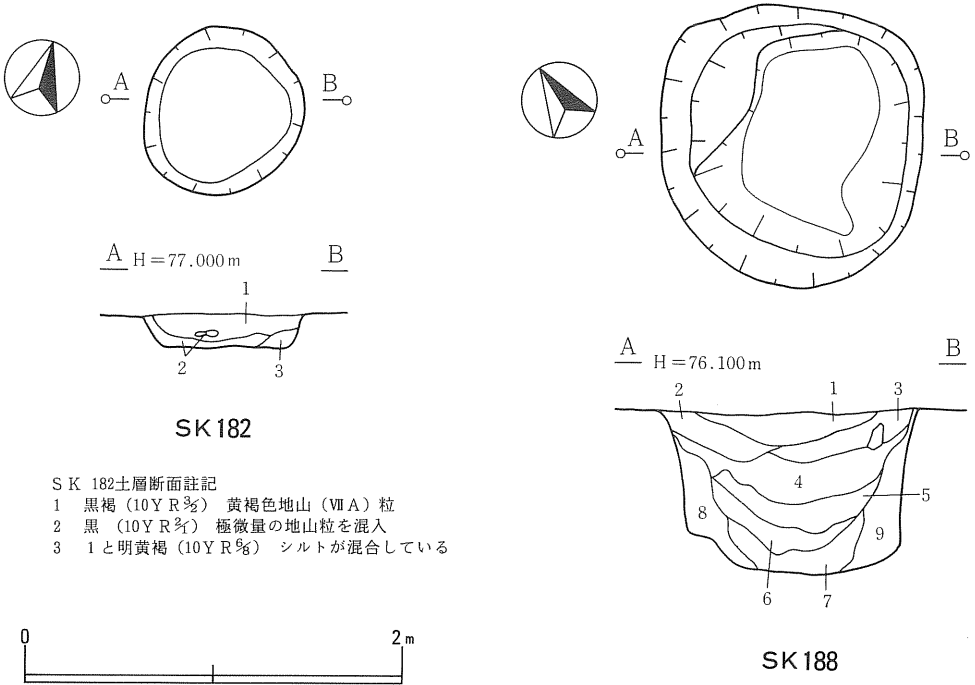
NJ74グリッドで検出した。平面形は不整円形を呈し、長軸方向はN-30°-Eで、長軸88cm、短軸74cmを測る。さらに南西隅には口径40cm、底径30cm、底面からの深さ13cmのピット様掘り込みがある。底面は平坦で深さ16cm前後である。遺物は埋土中から破砕された状況で出土した底部を欠く円筒形深鉢形土器1個体のみである。1(II群a類)は推定口径が20.3cmである。口縁には対極の位置に突起が付くものと思われる。口縁部文様帯の下端は粘土紐貼り付け隆帯で区画され、さらに口縁突起から2条の隆帯が垂下して貼り付けられるが、ほとんどは欠落している。口縁突起の中間の口縁部文様帯中位には貼瘤がある。口唇部外側と残存する隆帯、及び貼瘤上には捺糸圧痕文が縦位に施文される。口縁部文様帯には2条1組のR捺糸圧痕文が横位に巡り、文様帯上位と中位の間には部分的にC字状に、中位と下位の間には縦位に捺糸圧痕文が施される。体部文様帯には、LR縄文の横回転地文にLR結節の綾絡文を縦回転で8条施している。

SK 229土坑(第33図、図版12)

NL72グリッドに位置し、縄文時代中期のSI203竪穴住居跡と重複する。最終的なプランは



第30図 SKF29フラスコ状土坑・出土遺物

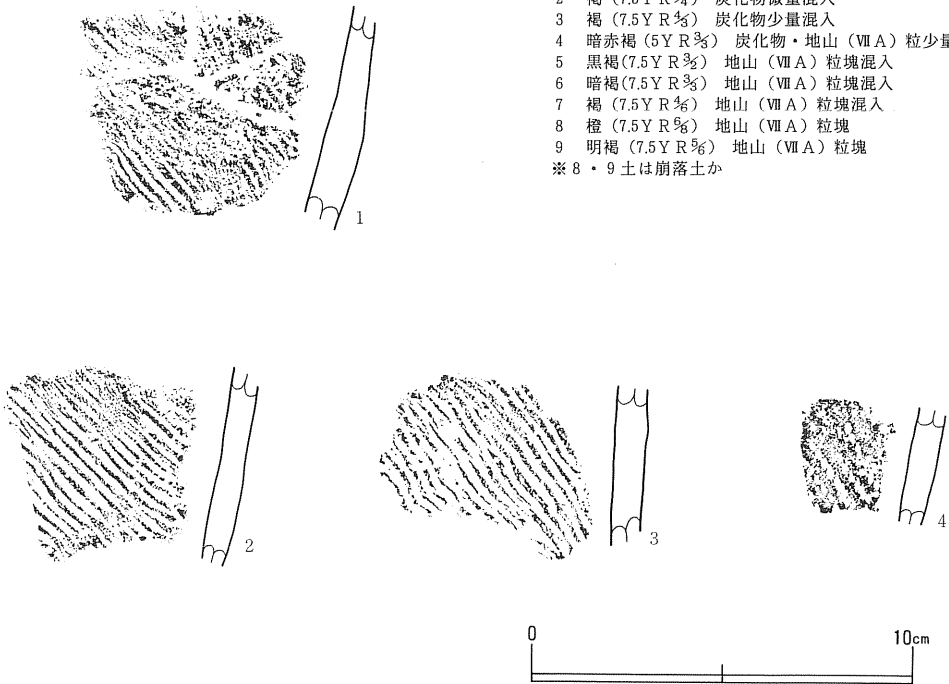


SK 182土層断面註記

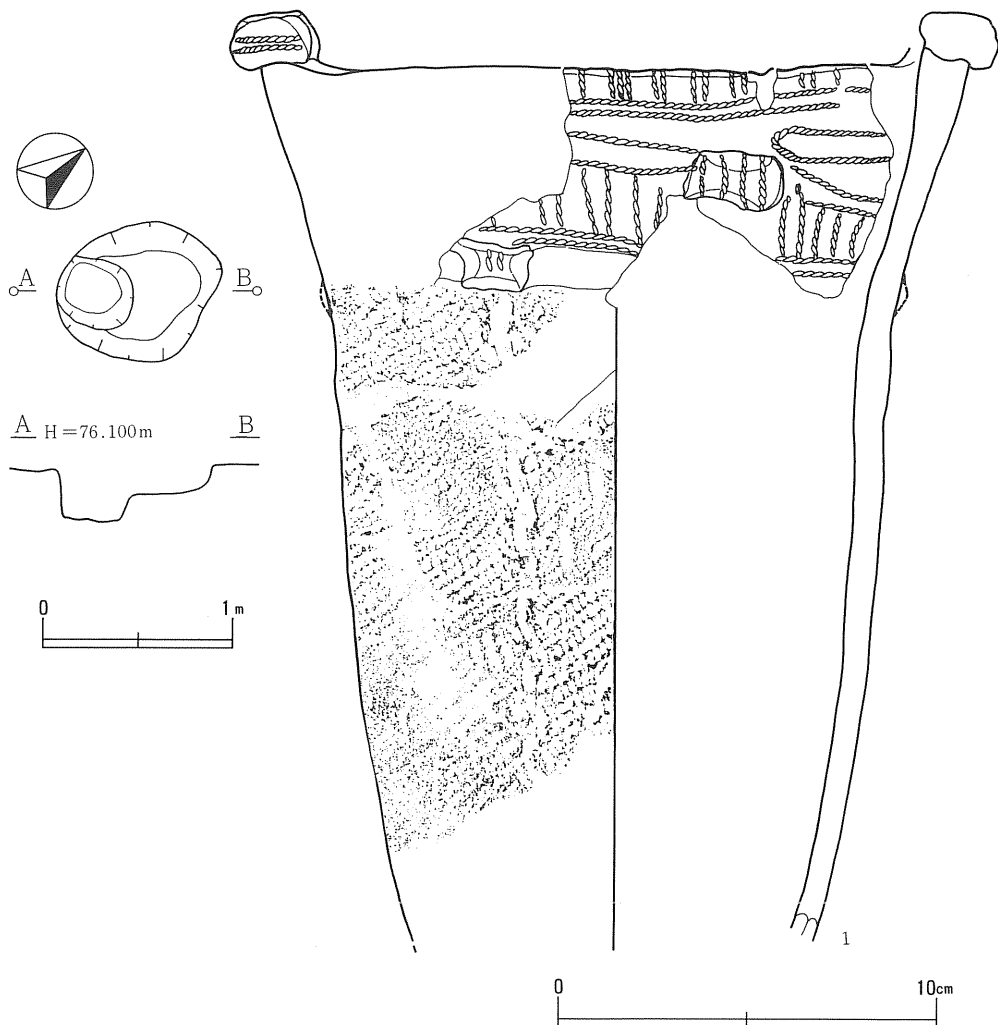
- 1 黒褐 (10Y R 3/2) 黄褐色地山 (VII A) 粒
- 2 黒 (10Y R 3/1) 極微量の地山粒を混入
- 3 1と明黄褐 (10Y R 6/2) シルトが混合している

SK 188土層断面註記

- 1 暗褐 (7.5Y R 3/4) 炭化物少量混入
 - 2 褐 (7.5Y R 3/4) 炭化物微量混入
 - 3 褐 (7.5Y R 3/6) 炭化物少量混入
 - 4 暗赤褐 (5Y R 3/5) 炭化物・地山 (VII A) 粒少量混入
 - 5 黒褐 (7.5Y R 3/2) 地山 (VII A) 粒塊混入
 - 6 暗褐 (7.5Y R 3/6) 地山 (VII A) 粒塊混入
 - 7 褐 (7.5Y R 3/6) 地山 (VII A) 粒塊混入
 - 8 橙 (7.5Y R 6/6) 地山 (VII A) 粒塊
 - 9 明褐 (7.5Y R 6/6) 地山 (VII A) 粒塊
- ※ 8・9土は崩落土か

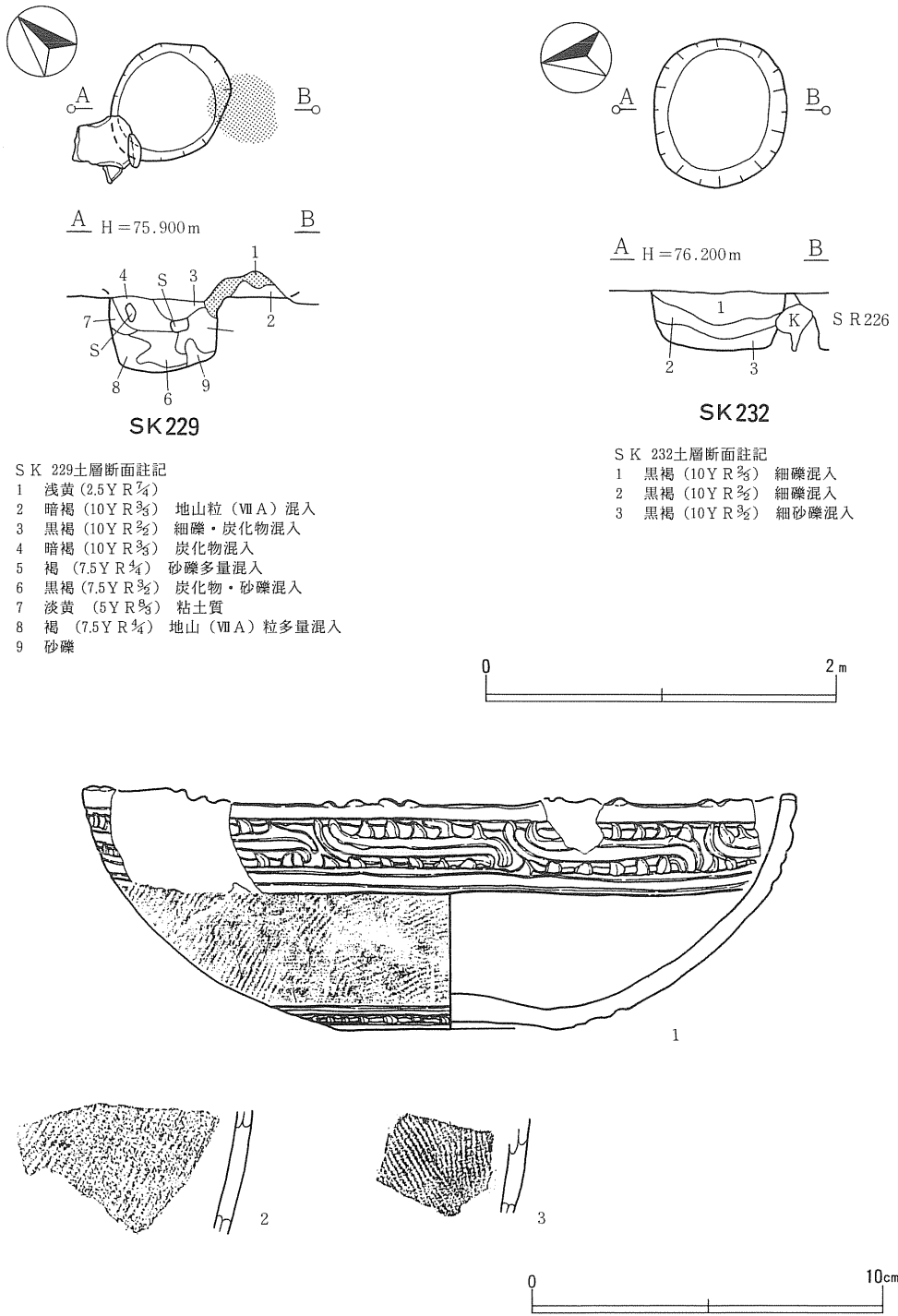


第31図 SK 182・SK 188土坑・SK 188土坑出土遺物



第32図 SK 228土坑・出土遺物

S I 203 竪穴住居跡の床面で確認したが、確認面の上位で本土坑に伴うとみられる縄文時代晩期の遺物が出土していることから、本来はS I 203の埋土上層から掘り込まれていると判断される。本土坑は遺物の分布及び土層断面の観察から、直径150cm前後の円形プランの土坑底面にさらに長軸76cm、短軸62cm、深さ40cmの掘り込みをもつ有段の形態をとるものと推定される。現状で残存する埋土は地山土を多量に混入し、土坑掘削土の埋め戻し土と判断される。土坑下段の埋土中位からは縄文時代晩期の浅鉢の比較的大型の破片(第33図1)が出土しており、本土坑は該期土坑墓の可能性が強いものと推定される。1(VI群)は、晩期の浅鉢形土器で全体の1/3程が残る破砕状態で埋土中位からまとも出土した。口径20.2cm、底径6.2cm、器高6.4cmを測る。口縁部文様帯下端は1条の沈線で区画され、右傾の羊歯状文が施文され、口唇部には



第33図 SK 229・SK 232土坑・SK 229土坑出土遺物

頂部に刻みのある小突起が2個1組で付く。体部下端には3条沈線が横位に施され、2条の沈線間に連続して刻みが施される。体部の地文はLR縄文の横位回転施文である。

SK 232土坑 (第33図)

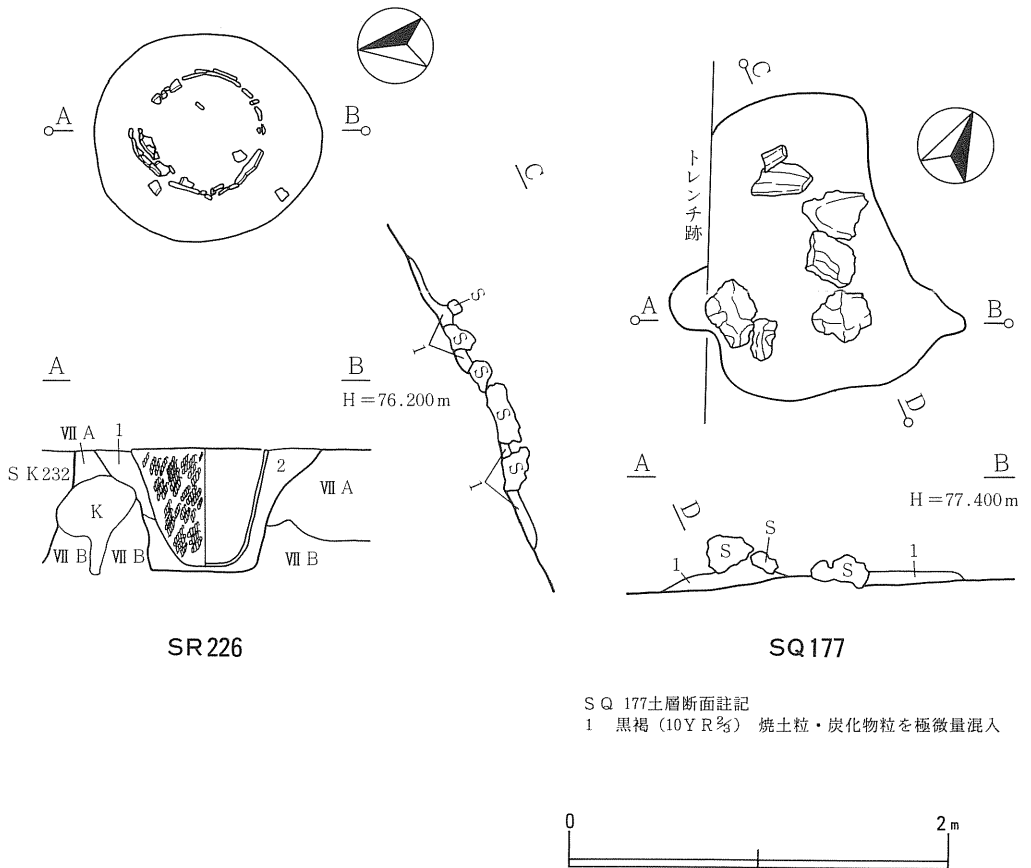
NM74グリッドで検出した。南側は攪乱を受けているため明確ではないが、平面形は楕円形、断面形は鍋底形であると考えられる。長軸方向はN-78° -W、推定で長軸87cm、短軸71cm、プラン確認面からの深さは26~34cmである。遺物は出土しなかった。

(4) 土器埋設遺構

SR 226土器埋設遺構 (第34・35図、図版9・12)

NM74グリッドの漸移層(VI層)上面で検出した。北側にはSK232土坑が隣接しており、確認時には円形の連続したプランであったが、土層断面の観察で両遺構間は攪乱を受けているもので、互いに独立した遺構であることが判明した。

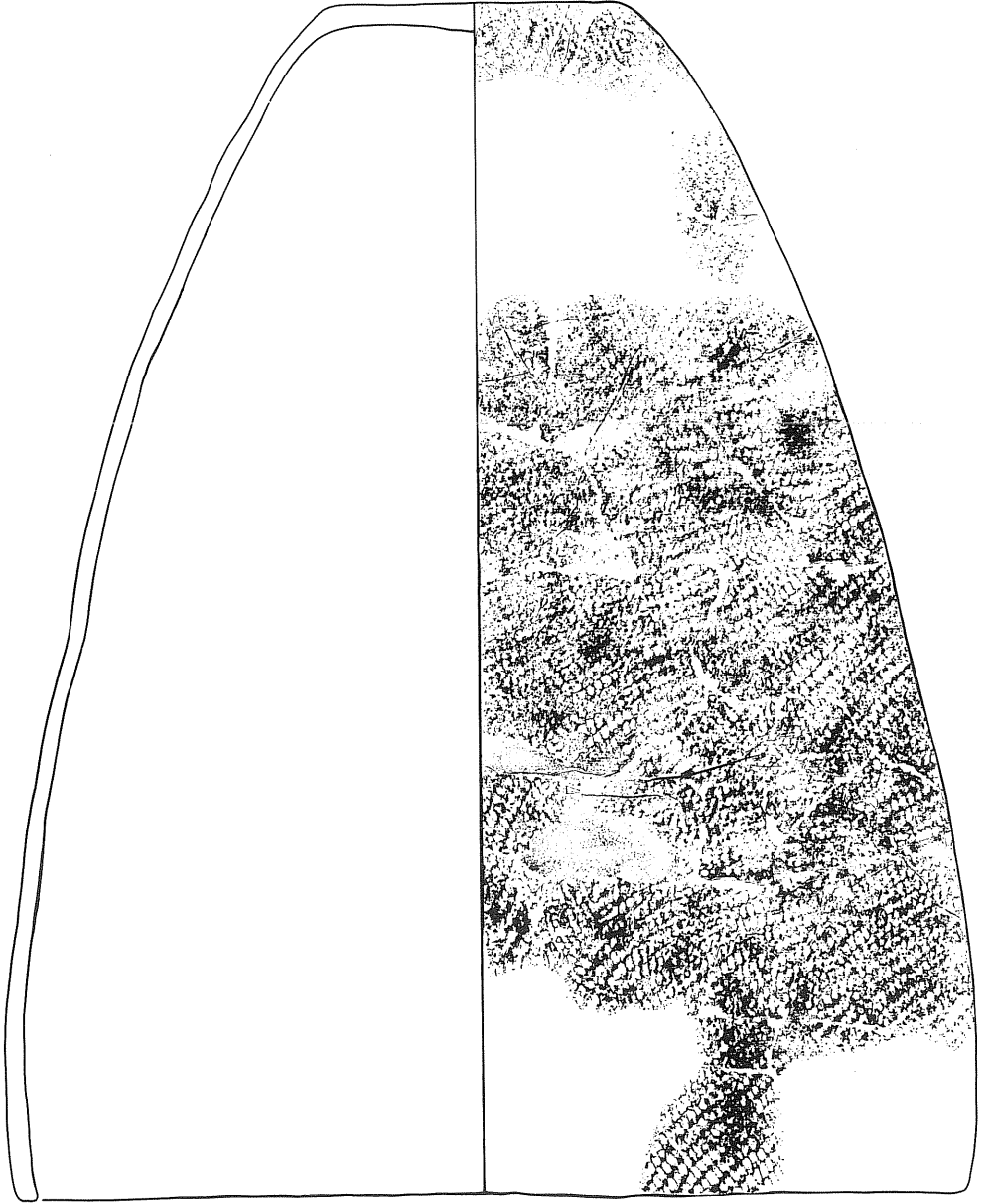
平面形が上部径60cm、底面径25cmの円形を呈し、深さ32cmで開口部が外湾する掘り込み中に



SQ 177土層断面註記
1 黒褐 (10Y R 2.5) 焼土粒・炭化物粒を極微量混入

第34図 SR 226土器埋設遺構・SQ 177配石遺構

第35図 S R 226土器埋設遺構出土遺物



深鉢形土器を正位に埋設していた。

第35図(V群)は埋設されていた土器で、口縁部がやや内湾する粗製の深鉢形土器である。推定口径31.5cm、底径9.8cm、器高39.7cm、最大径32.3cmを測る。施文はLR原体が斜位に回転施文される。

(5) 配石遺構

SQ 177配石遺構 (第34図、図版9)

MM64・MN64グリッドのVI層上面で、SF101土層除去後に検出した。南西部はトレンチによって破壊されているが、現状で径14～30cm前後の7点の礫が長軸110cm前後の弧状に配されている。配石の周囲及び配石下には現状で層厚10cm前後の若干の焼土・炭化物混じりの黒褐色土が堆積する。配石の弧内面側には煤の付着が認められる。これらのことより、調査時には明瞭な掘り込みは確認できなかったが、本遺構は浅い掘り込みに礫を組んだ石囲炉であった可能性も想定される。

2 古代(平安時代)の遺構と遺物

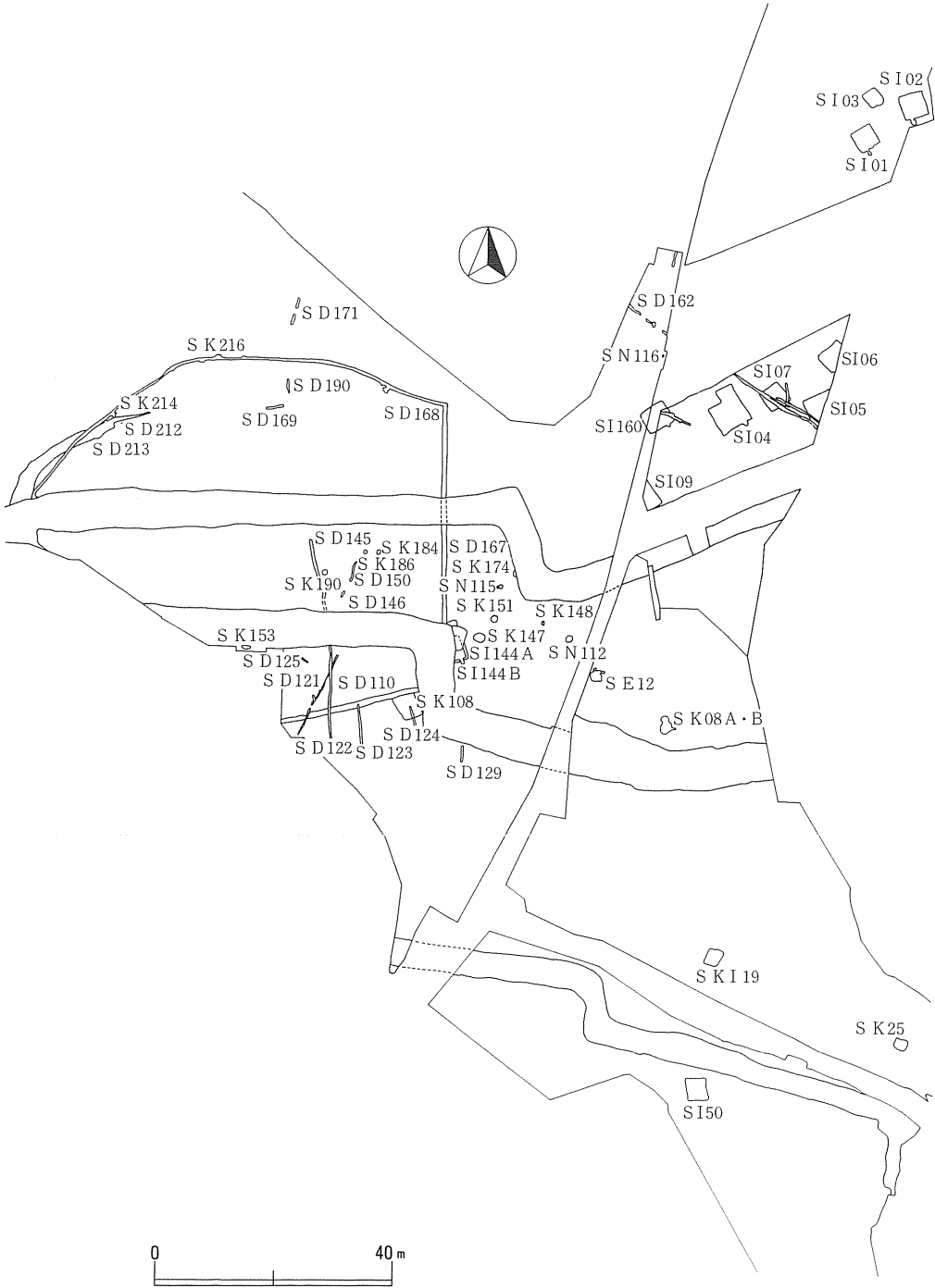
(1) 竪穴住居跡

SI 50竪穴住居跡 (第37～39図、図版16・21)

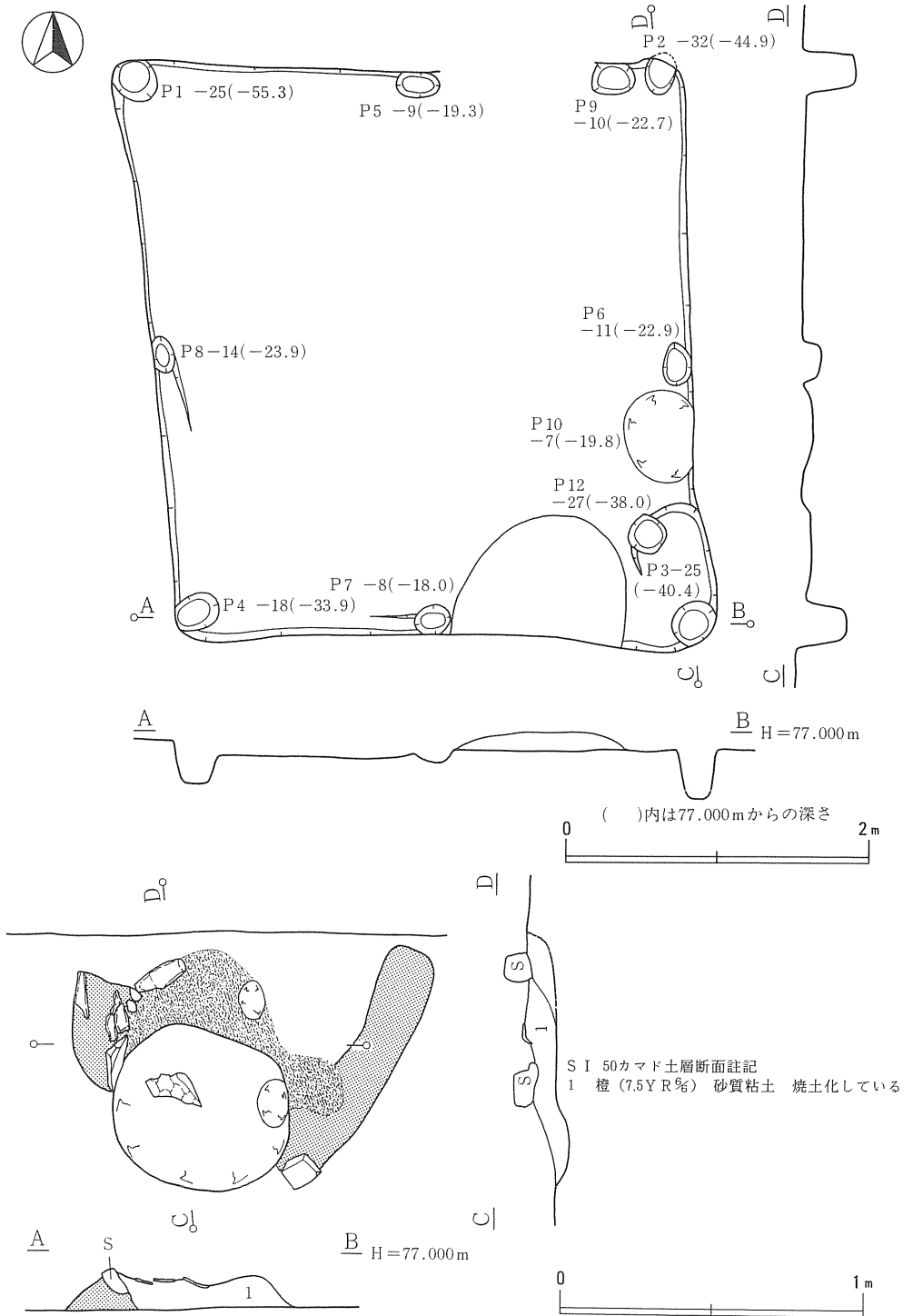
LS38・39、LT38・39グリッドで検出した。粗掘り段階で遺物の集中箇所(RP15・16)と焼土の広がりを確認していたが、掘り込み等のプランを明確にできずSX 50(性格不明遺構)として扱っていたものである。地山面での精査の結果、方形のプランと焼土がかまどに伴うものであることを確認でき、SI 50として再登録したものである。

規模は、南北長370～390cm、東西長360～380cmの方形を呈するが、各辺は直交せず、平行四辺形様に変形している。従って、主軸方位はN-3°～10°-Wの幅が生じている。柱穴は、四隅(P1～P4)と各壁中央部(P5～P8)の8本からなる。前者は直径30cm前後の円形を呈し、深さ18～32cm、後者は長径25～30cm、短径20cm前後の楕円形を呈し、深さ8～14cmを計測する。後者は断面長方形の柱を建てていたのであろうか。床面は、地山(VIIB層)の上に黒～黒褐色シルト質土を貼っているが、特別に堅く締まっていたりはない。床面積は13.6㎡である。

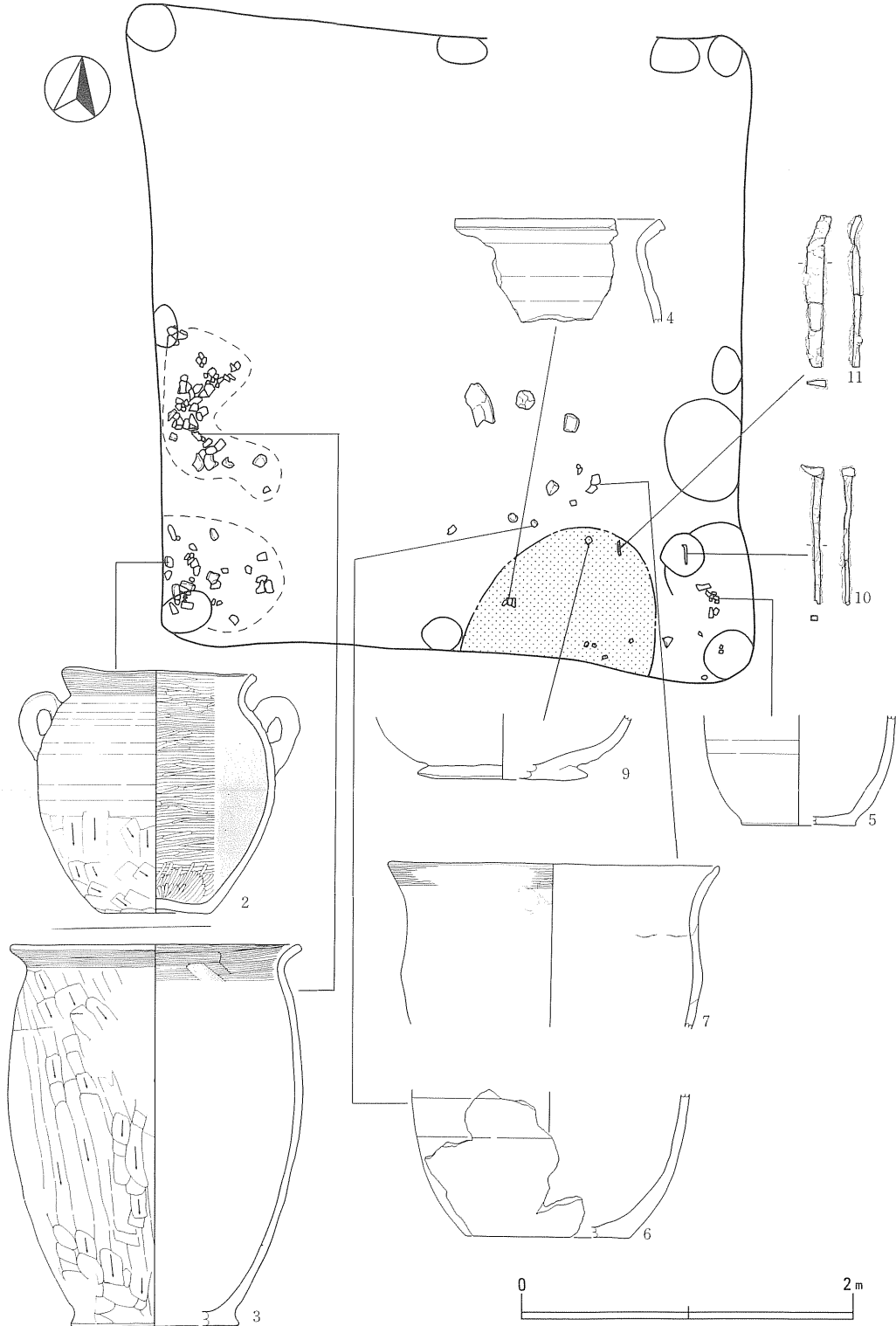
かまどは、南壁東寄りで確認している。上面は削平され、基底部のみである。左袖部を見ると、切石(S1・2=砂岩)を芯材とし、この間に黒褐色シルト質土を充填させている。この上には、燃焼部内に堆積している埋土を観察すると、砂質粘土を用いているようである。推定右袖下部にも石の抜き取り穴を2箇所を確認でき、燃焼部の内法幅は約45cmとなる。かまど東側、東壁に接して浅い土坑(P11・12)が取り付く。焼土・炭化物などを含むことから、かまどに伴う施設と考えられる。



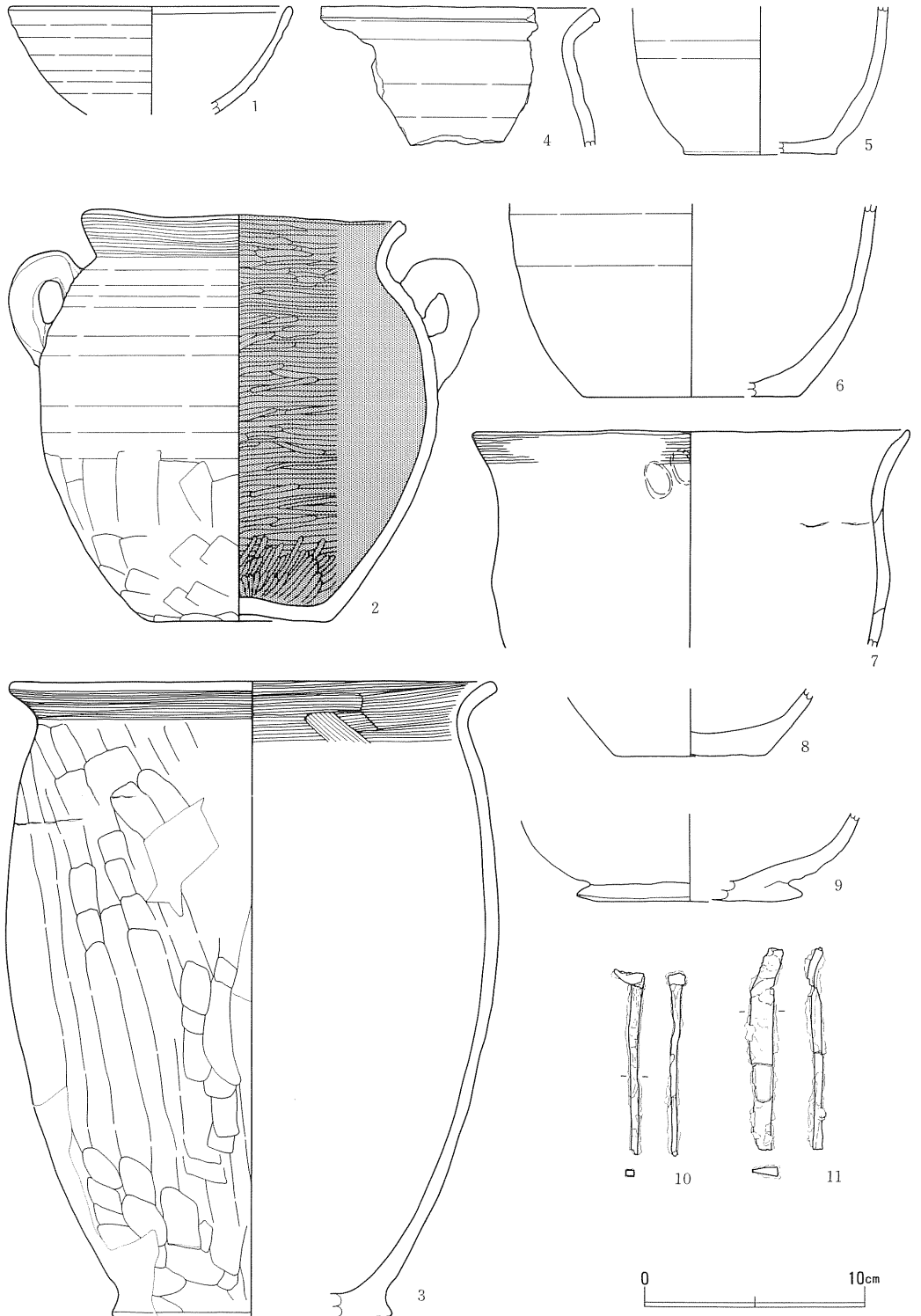
第36図 古代・古代～中世の遺構配置図



第37図 SI 50竪穴住居跡



第38図 SI 50竪穴住居跡遺物出土状況図



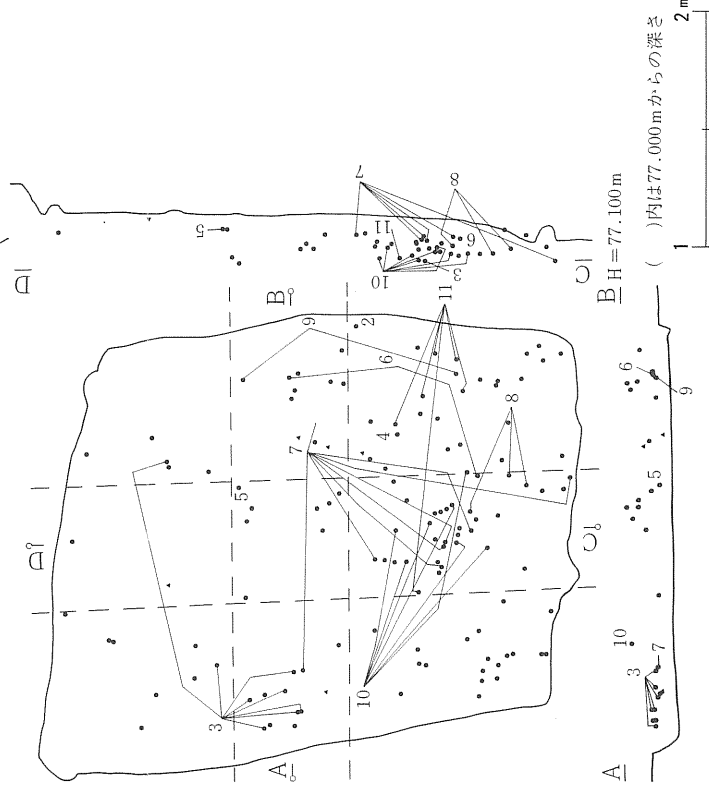
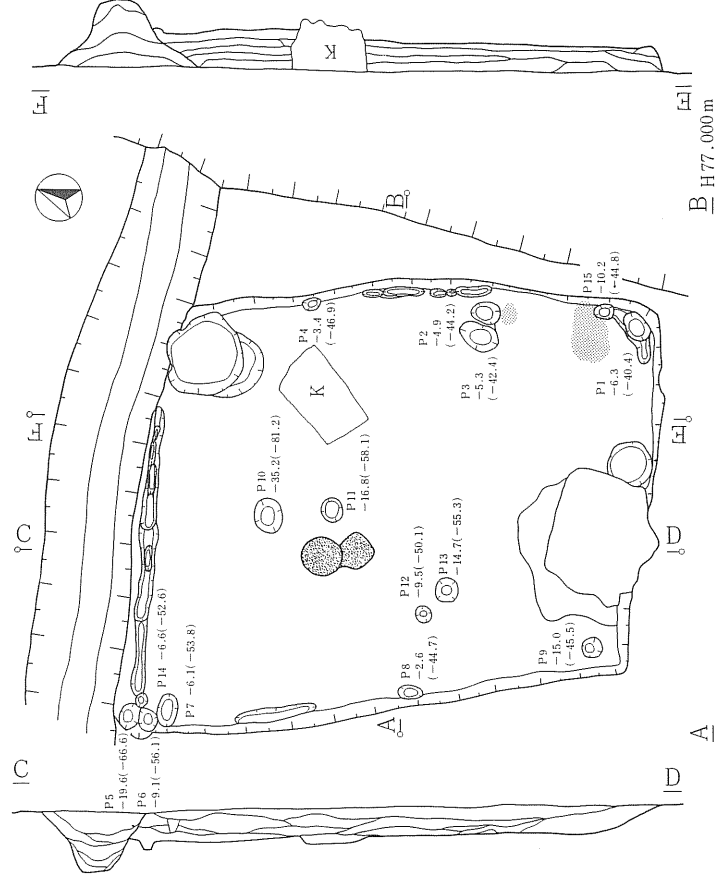
第39図 SI 50 竖穴住居跡・出土遺物

遺物はかまど周辺及び、西壁南半部で土師器坏形土器1点・土師器壺形土器1点・土師器甕形土器6点、鉄製品2点(釘・刀子様)が出土している(第39図1～11)。

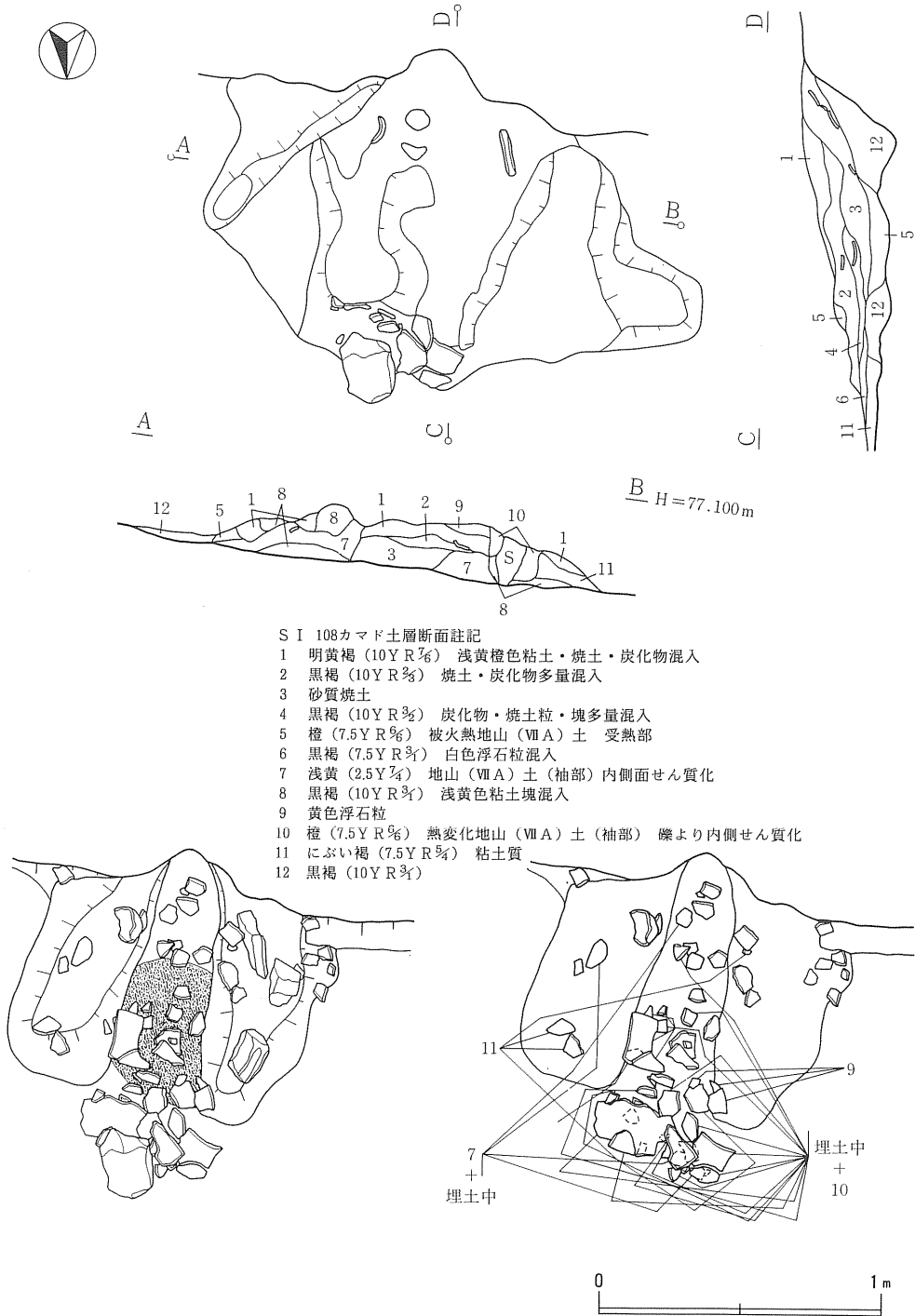
1は、推定口径12.8cm、現高4.9cmで底部を欠失する土師器坏形土器である。轆轤で成形し、切り離し後の再調整はない。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。2は、口径14.2cm、器高18.5cm、底径8.2cmで粘土紐巻き上げにより成形されている土師器壺形土器である。短い口縁部は緩やかに外反し、外面は下半に粗い篋削り調整している。肩部の2カ所に把手状の耳を付けている。内面は細かい篋磨きの後黒色処理している。底部は上げ底となっている。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。外面の色調は浅黄橙色を呈する。3は、口径21.8cm、器高29cm、推定底径13cmで粘土紐巻き上げにより成形され、短い口縁部が緩やかに外反し、底縁部が張り出している土師器甕形土器である。外面は口縁部を除き全面粗い篋削り調整している。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも暗褐色～浅黄橙色を呈する。4と7は土師器甕形土器の胴部上半の破片である。4は口唇部を篋なでしている。5・6・8・9は土師器甕形土器の胴部下半～底部の破片である。9は底縁が大きく張り出している。10は現長8.4cmの釘状鉄製品、11は両端が欠損している現長9.2cmの刀子様鉄製品である。

S I 108 竪穴住居跡(第40～43図、図版17・21)

MK54・ML53・54・55・MM54グリッドで第V層上面で、SD110溝状遺構・SD124溝状遺構と重複して検出したが、2条の溝状遺構とも本竪穴住居跡より新しい。また、北東部で長さ76cm、幅46cmの長方形に現地表面から床面まで掘り込む攪乱穴が1カ所存在する。浮石粒が霜降り状に混入している暗褐色土の平面プランは、北側壁がSD110溝状遺構の掘削により上部を欠損するが、ややいびつな長方形を呈し、主軸方位はS-25°-E、床面積は15.5㎡である。遺存している壁の長さは南側壁310cm、東側壁395(推定420)cm、北側壁280(推定368)cm、西側壁488cmである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は南側壁14～20cm、東側壁3～13cm、北側壁3～6cm、西側壁15～20cmである。床面は地山の黄褐色粘質土(VIIA)を堅く踏み固め平坦である。柱穴は15本検出したが、P1～P9が支柱穴(P2-P3・P5-P6-P7は建て替え)と考えられる。また、床面中央の長軸方向に並ぶP10・11は桁を支える柱穴とも考えられる。壁溝は、南東隅部(長さ30cm、幅10～15cm、深さ3～4cm)、東側壁下方(長さ110cm、幅6～9cm、深さ2～10cm)、北側壁下方(長さ247cm、幅7～16cm、深さ3～11cm)、西側壁下方北寄り(長さ69cm、幅8～12cm、深さ3cm)に存在するが、長さ10～25cmの長楕円形の掘り込みが連続して「壁溝」となっている。かまどは南側壁中央からやや西寄りに板状角礫と土師器甕形土器の破片を架構材・芯材として構築している。天井部は崩落しているが両袖部の遺存状況は良い。煙道部は短く急角度で立ち上がるが、竪穴住居のプランを掘り下げた後、かまど部分を埋め戻して傾斜させている。また、か



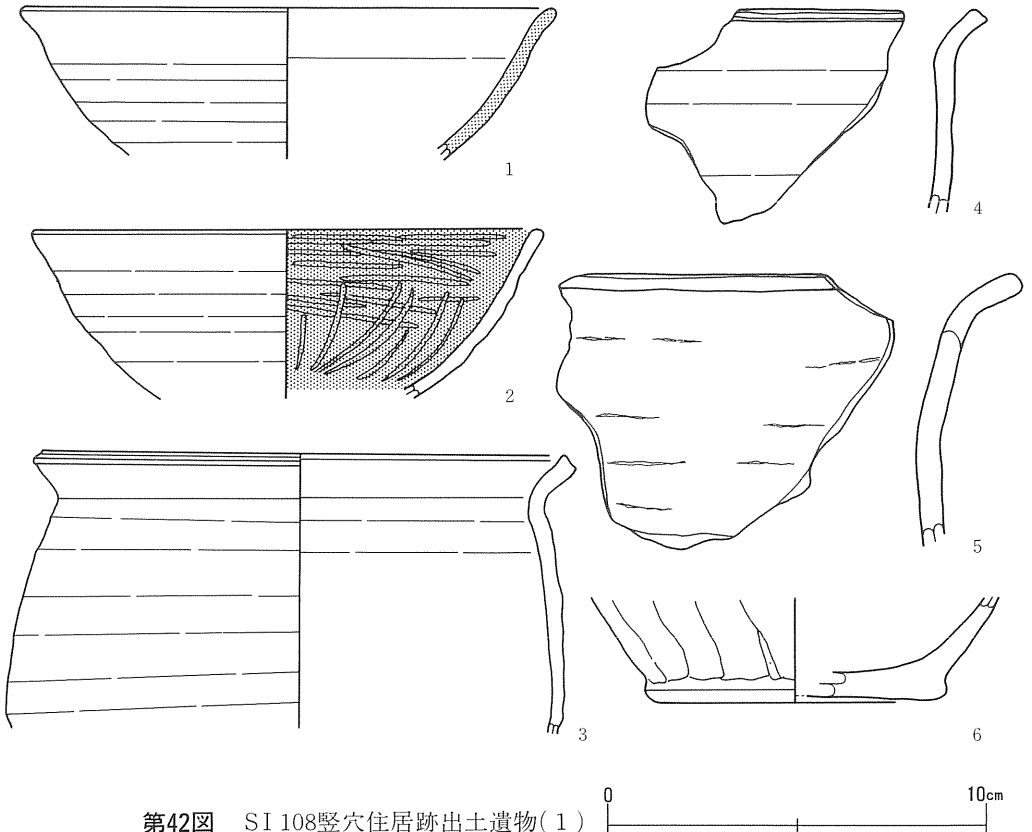
第40図 SI 108竪穴住居跡・遺物出土状況図



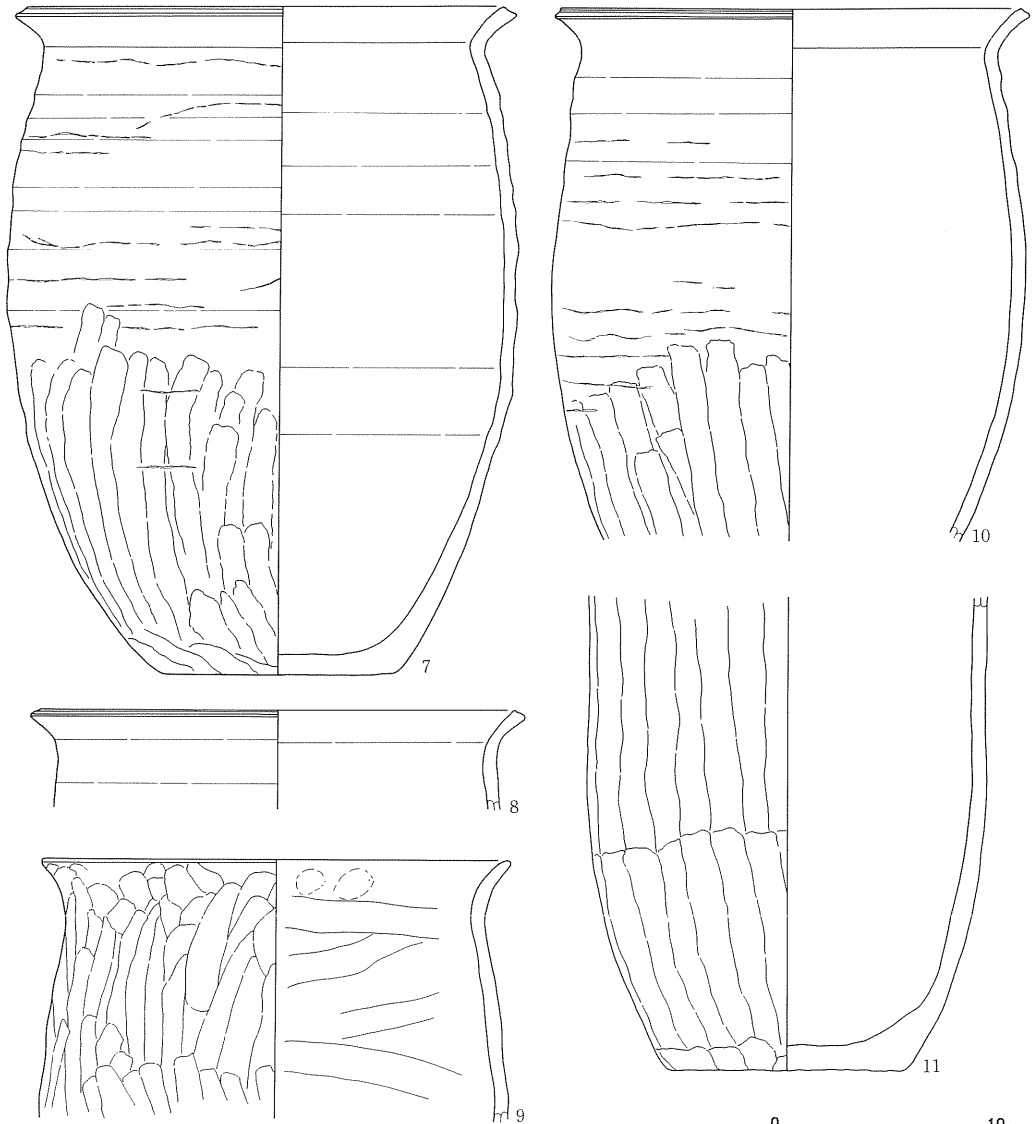
第41図 SI 108竪穴住居跡かまど

まどの袖部粘質土と住居跡壁面との間に浮石粒が堆積していた。北東隅部とかまど東側の床面にはほぼ円形プランを呈するピット(直径70cmで深さ30cmのピットと直径40cm深さ15cmのピット)が掘られ、柱穴P11の西側床面には北側へ移動した痕跡のある直径約35cmの円形プランを呈する地床炉が、東側壁の中央から南寄りの床面に20×12cmと51×33cmの楕円形範囲に白色粘質土が堆積していた。

遺物(第42図1～6・43図7～11)は、土師器の坏形土器・甕形土器および須恵器の坏形土器で、埋土中からとかまど付近およびかまど中からの出土が多い。土師器坏形土器は轆轤を使用しているが、内面を黒色処理しているものが少量みられる。1は、推定口径14cm、現高4cmで底部を欠失している須恵器坏形土器である。胎土には砂粒が混入している。焼成は還元不良である。色調は外面が灰白色、内面浅黄橙色を呈する。2は、口径13.4cm、現高4.5cmで底部を欠失している土師器坏形土器である。轆轤成形後内面は篋磨きのあと黒色処理している。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。3は、口径13.7cm、現高7.4cmで底部を欠失している土師器甕形土器で、轆轤成形されている。短い口縁部は緩やかに外反し、口唇内側が垂直に立ち上がっている。胎土は精選されており焼成良好で堅緻であ



第42図 SI 108竖穴住居跡出土遺物(1)



第43図 SI 108竪穴住居跡(2)

る。色調は内外面ともにおい黄橙色を呈するが、外面には煤状炭化物が付着している。7は、口径19.7cm、現高23cmで、胴部中央に最大径(20.5cm)をもち、粘土紐巻き上げにより成形されている土師器甕形土器である。底辺部を欠失する。短い口縁部は緩やかに外反し、口唇内側が垂直に立ち上がる。外面は下半に粗い篋削り調整している。胎土に多量の砂粒を混入しているが、焼成良好で堅緻である。色調は内外面ともにおい褐色を呈する。9は、推定口径20cm、現高11.2cmの土師器甕形土器胴部上半の破片である。粘土紐巻き上げ成形し、口縁部は両面から指で押さえ付けて緩やかに外反させている(両面に指頭圧痕が認められる)。外面は頸部から下半に粗い篋削り調整している。胎土に多量の砂礫を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は外

面には煤状炭化物が付着しているが淡黄色～にぶい黄橙色、内面が浅黄橙色を呈する。10は、口径20.5cm、器高28.3cm、底径10.1cmで、胴部中央に最大径(22cm)をもち、粘土紐巻き上げにより成形されている土師器甕形土器である。短い口縁部は緩やかに外反し、口唇内側が垂直に立ち上がる。外面は下半に粗い篋削り調整している。胎土に多量の砂粒を混入しているが、焼成良好で堅緻である。色調は外面が薄い黒斑があるもののにぶい黄褐色、内面が灰褐色～にぶい黄褐色を呈する。4・8の口唇部のつくりもおなじである。6・11は胴部下～底部の破片である。底面は平滑である。

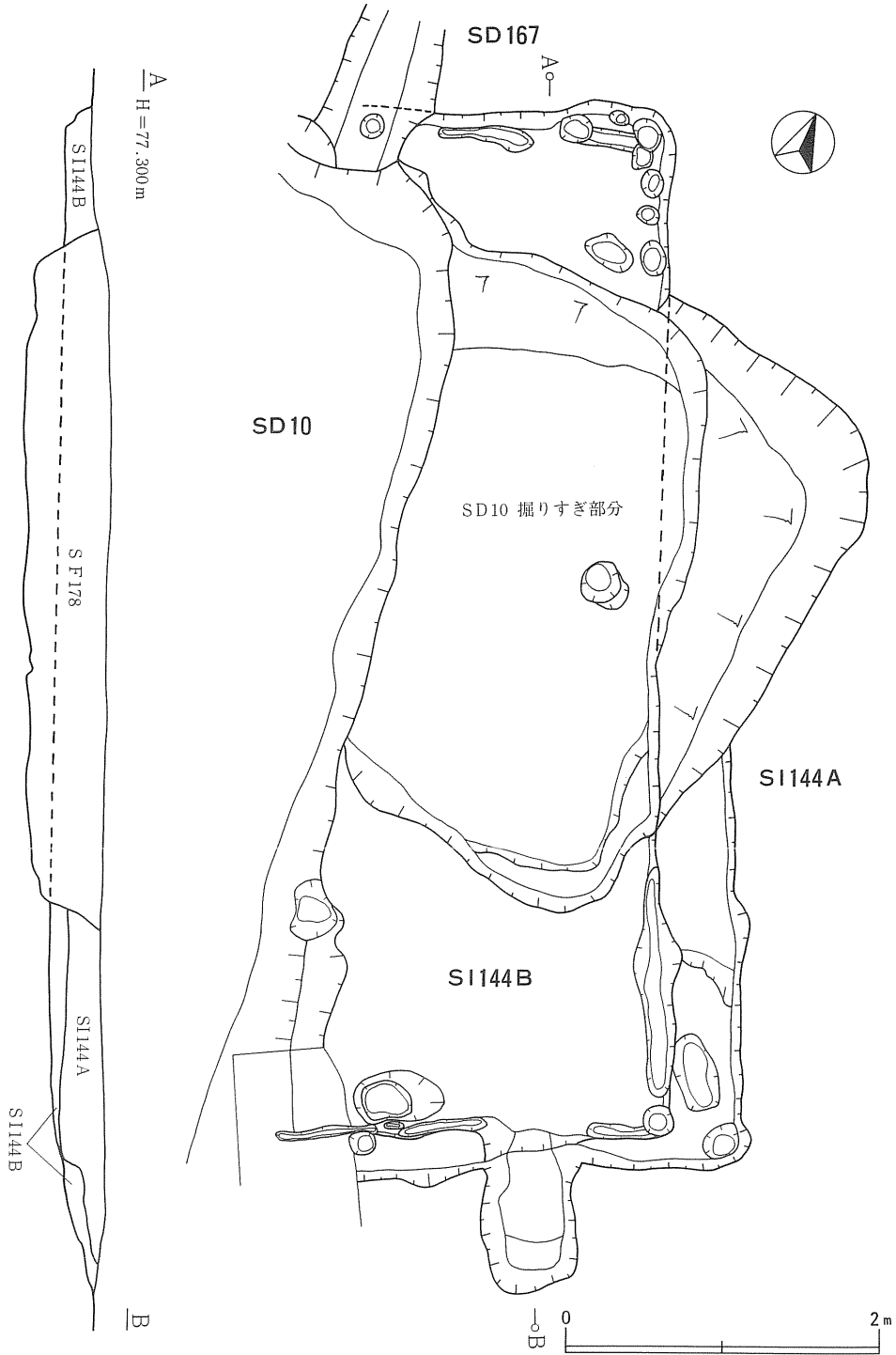
S I 144A・B 竪穴住居跡(第44図、図版18)

MJ56・57グリッドに位置するが、範囲確認調査時に確認されており、検出面はV層上面である。検出時にSD167溝状遺構およびSD10空堀跡と重複しているのを確認した。さらに本竪穴住居跡自体も建て替え(拡張)が行われていることが判明した。各遺構の新旧関係は、(古) S I 144B→S I 144A→SD167→SD10(新)である。

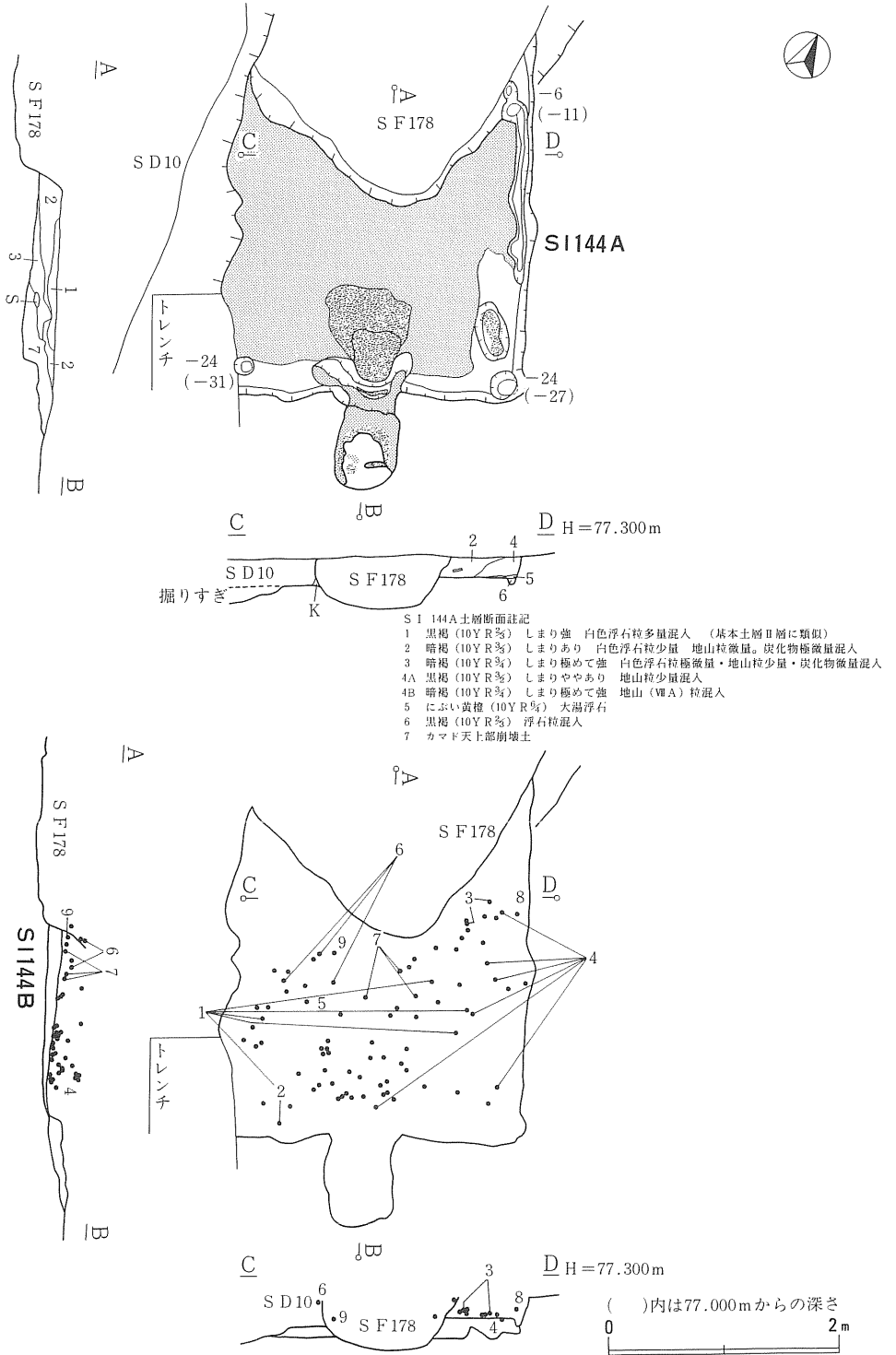
S I 144A 竪穴住居跡(第45～48図)

北側と西側をSD10空堀跡の掘削により破壊されているが、平面プランは方形で主軸方位はS-20°-Eである。遺存している壁の長さは東側壁320cm、南側壁250cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約20cmである。床面は黄褐色粘質土を貼っており平坦で堅く踏み固められている。柱穴は、南東隅に1本、かまどの西側約60cmに1本、さらに東側壁の北寄り下方に1本を検出した。壁溝は東側壁下方に検出され、長さ150cm、幅7～10cm、床面からの深さが約5cmである。南東隅部には、廃棄されたと思われる焼土塊が内部に堆積している長軸50cm、短軸25cm、深さ14cmの楕円形プランを呈するピットを検出した。かまどは南側壁の隅寄りに付設されていた。かまど本体は崩落して原形を止めておらず、天井部の架構に使用していたと思われる長さ40～60cmの加熱によりもろくなった扁平な自然石が散在していた。袖部には芯材としての石の使用は認められなかった。煙道部は比較的遺存状態は良く、土師器片を架構の芯材として黄褐色粘質土でトンネル状に構築していた。

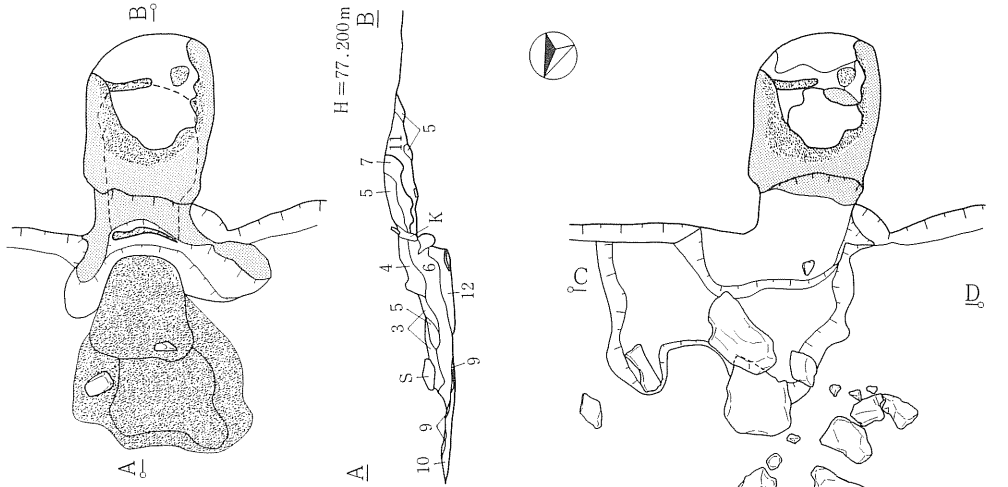
遺物(第47図1～5・第48図6～9)は土師器の坏形土器・甕形土器(大型・小型)・壺形土器・鍋形土器と須恵器の坏形土器で、埋土中からとかまど付近、およびかまど中からの出土が多い。土師器坏形土器は轆轤を使用しているが、内面を黒色処理している破片も少量みられる。1は、推定口径14cm、現高5.9cm、推定底径5cmの轆轤成形した土師器坏形土器である。轆轤からの切り離しは回転糸切りである。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。2は、推定口径13cm、現高4.6cm、推定底径5cmの轆轤成形した須恵器坏形土器である。轆轤からの切り離しは回転糸切りである。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも灰白色を呈する。3は、推定口径24cm、現高25.9cmの底辺部を



第44図 SI 144(A・B)竪穴住居跡・SD10空堀跡・SD167溝状遺構関連図



第45図 SI 144 竪穴住居跡・遺物出土状況図

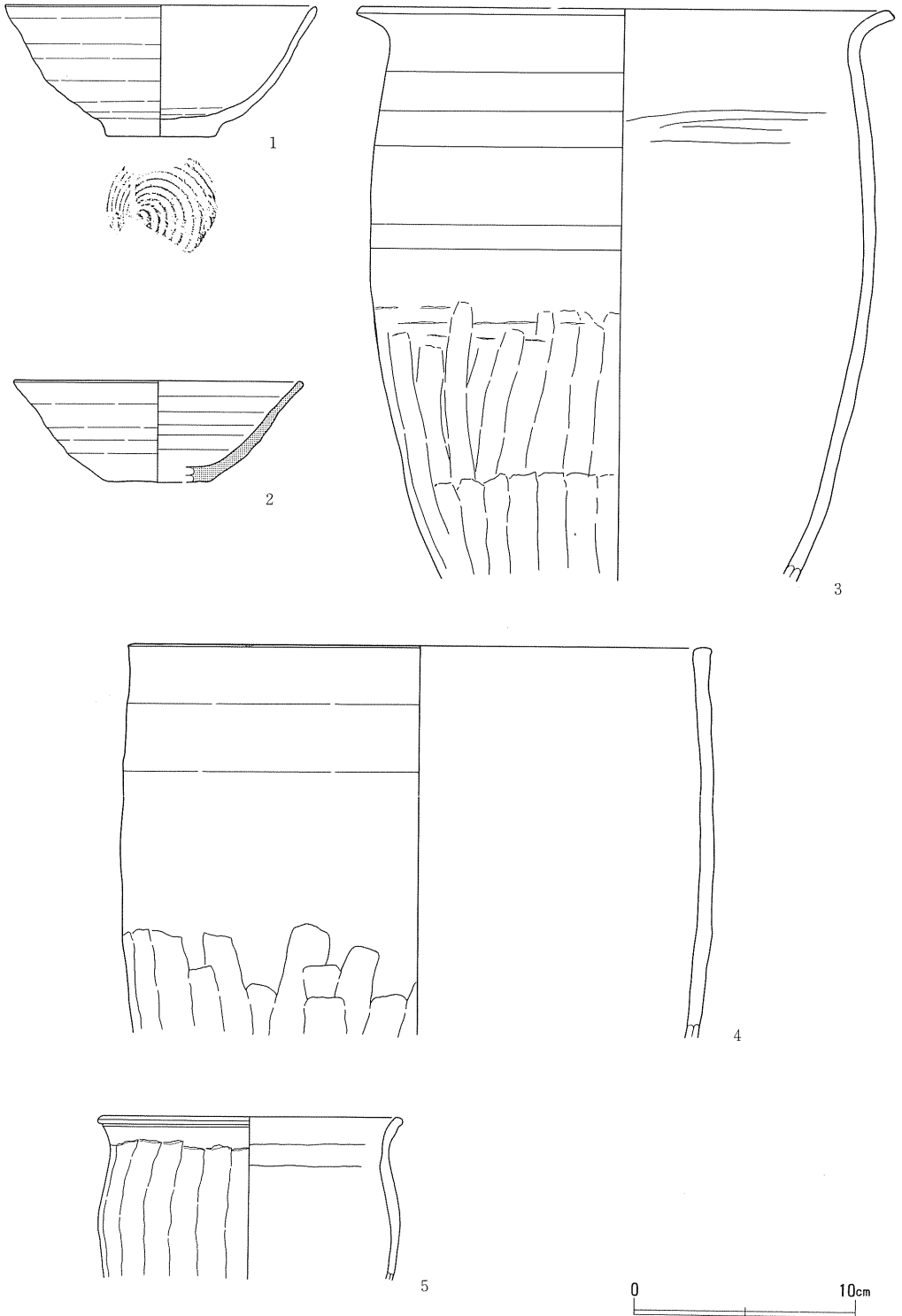


SI 144A カマド土層断面註記

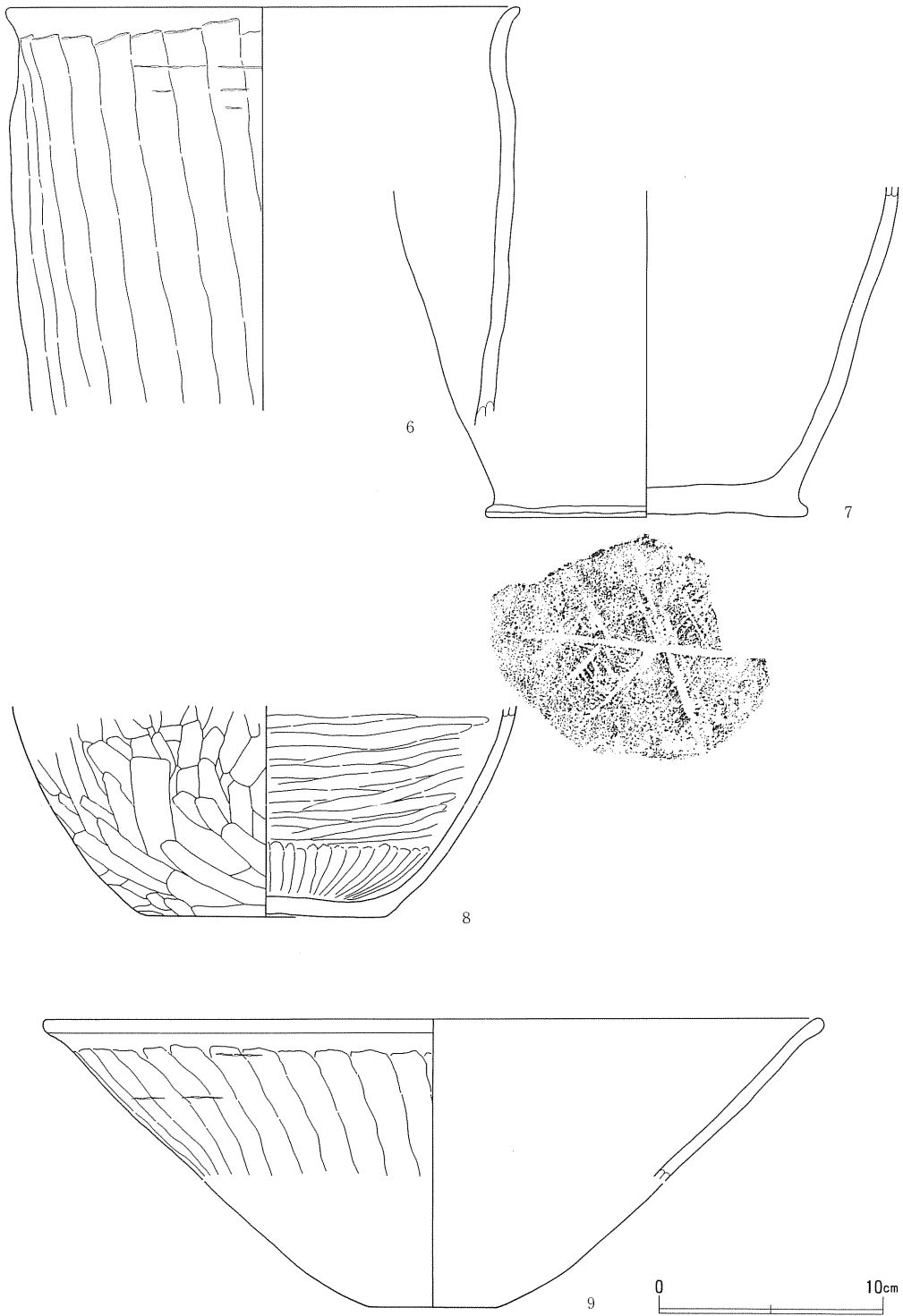
- 1 暗褐 (10Y R 3/4) 白色軽石粒・地山 (VII A) 粒少量・炭化物微量混入
- 2 暗褐 (10Y R 3/4)
- 3 黒褐 (10Y R 2/4) 白色軽石粒・地山 (VII A) 粒混入
- 4 暗褐 (10Y R 3/4) 地山粒混入
- 5 褐 (10Y R 5/6) 煙道部天上構築土
- 6 暗褐 (10Y R 3/4) 地山粒多量混入
- 7 暗赤褐 (5Y R 3/4)
- 8 黒褐 (10Y R 2/4) 白色軽石粒・地山 (VII A) 土微量混入
- 9 にぶい黄 (2.5Y R 3/4) 白色粘土
- 10 暗褐 (10Y R 3/4) 地山粒・塊及び白色浮石粒微量混入
- 11 暗褐 (10Y R 3/4) しまり強 煙道内部埋土 白色浮石粒少量・焼土粒微量混入
- 12 褐 (7.5Y R 3/4) 焼土

第46図 SI 144A 竪穴住居跡かまど

欠失する土師器甕形土器である。粘土紐巻き上げにより成形されている。短い口縁部を大きく外反させ、外面下半に粗い篋削り調整している。胎土に細砂を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は外面が淡黄色、内面が褐灰色を呈する。4は、推定口径26cm、現高17.7cmの土師器甕形土器胴部上半の破片である。成形後、ほぼ垂直に立ち上がる口唇を篋状工具で撫でて整形している。外面は下半を粗い篋削り調整している。胎土には砂礫を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は外面が浅黄橙色を呈するが、火熱を直接受けたためか赤変・黒斑も認められる。内面はにぶい黄橙色を呈する。5は、推定口径13.5cm、現高7.4cmの胴部下半を欠失する小型の土師器甕形土器である。粘土紐巻き上げで成形し、口縁部は緩くわずかに外反している。頸部から胴部にかけて粗い篋削り調整している。口縁部内側に糊状炭化物が付着している。胎土に多量の砂礫を混入している。焼成は良好で堅緻である。色調は内外面ともににぶい黄橙色～にぶい黄褐色を呈する。6は、推定口径23cm、現高18.6cmの胴部下半を欠失する土師器甕形土器である。粘土紐巻き上げで成形し、口縁部は緩くわずかに外反している。頸部から胴部にかけて粗い篋削り調整している。胎土に多量の砂礫を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色～黄褐色を呈する。7は、現高17.7cm、推定底径14cmの土師器甕形土器胴部から底部にかけての破片である。胎土に多量の砂礫を混入し、器壁が荒れているため調

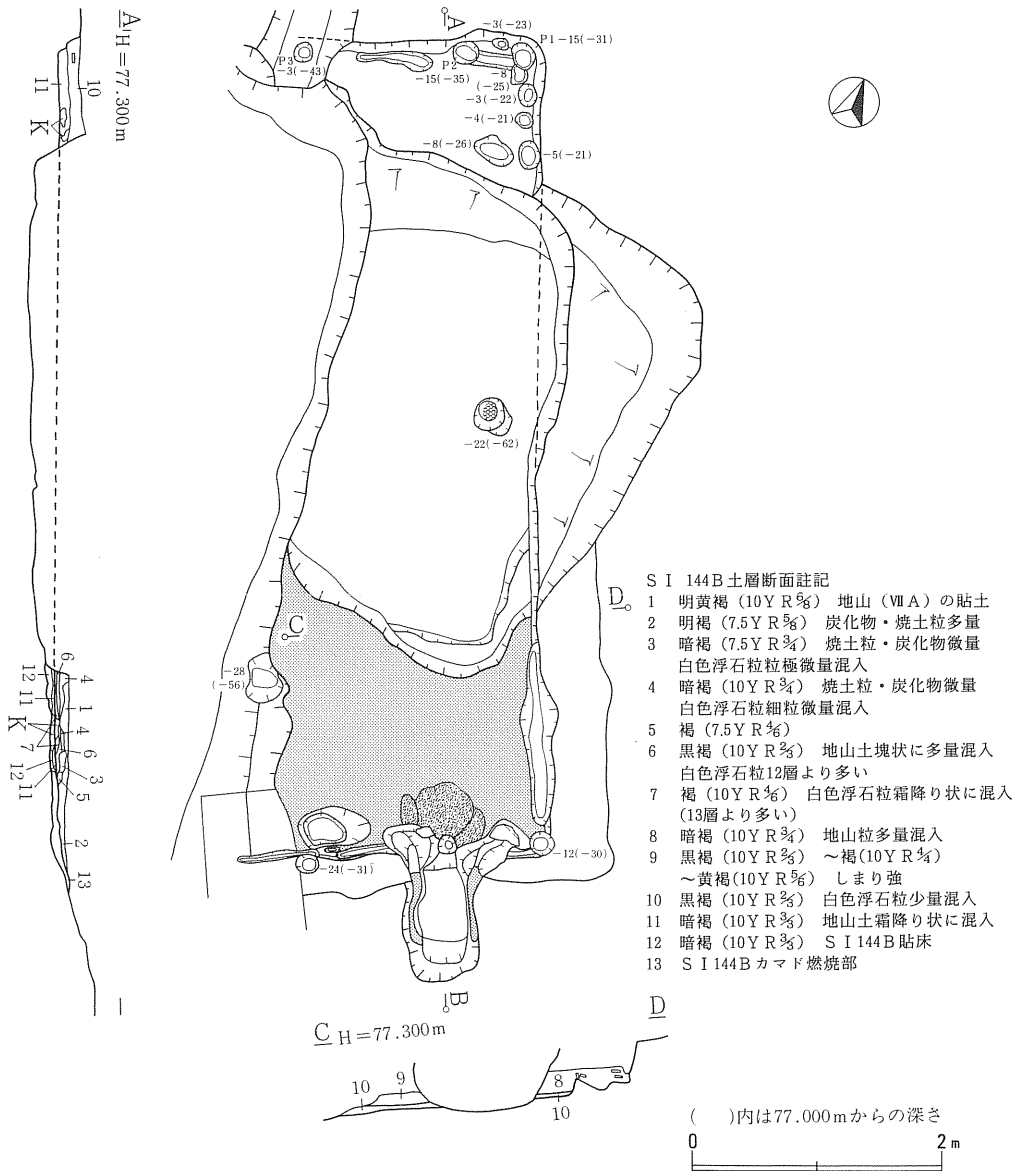


第47図 SI 144A 竖穴住居跡出土遺物(1)

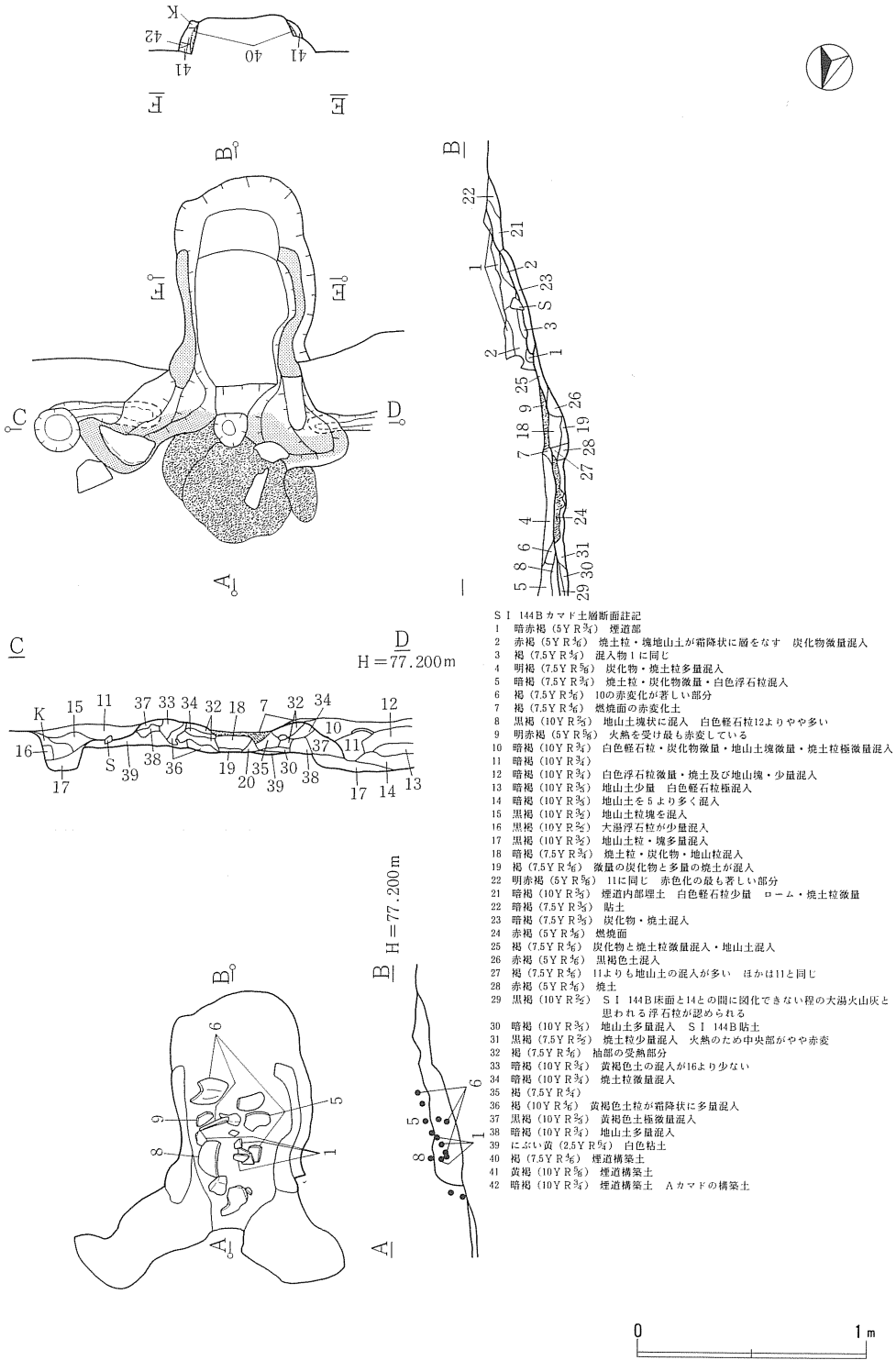


第48図 SI 144 A 竪穴住居跡出土遺物(2)

整は不明である。底面に木葉痕が認められる。焼成良好で堅緻である。色調は外面が浅黄橙色～にぶい黄褐色、内面がにぶい橙色を呈する。8は、現高9.5cm、底径10.8cmの土師器壺形土器の胴部から底部にかけての破片である。成形方法は不明であるが、調整は外面が篋撫で、内面が篋磨きのあと黒色処理されている。底部外面も篋撫でしている。胎土は良く精選され、焼成良好で堅緻である。外面の色調は黒斑もあるが淡黄色～浅黄橙色を呈する。9は、推定口径34.5cm、現高7.3cmの土師器鍋形土器の体部上半の破片である。粘土紐巻き上げで成形し、口縁



第49図 SI 144B 竪穴住居跡



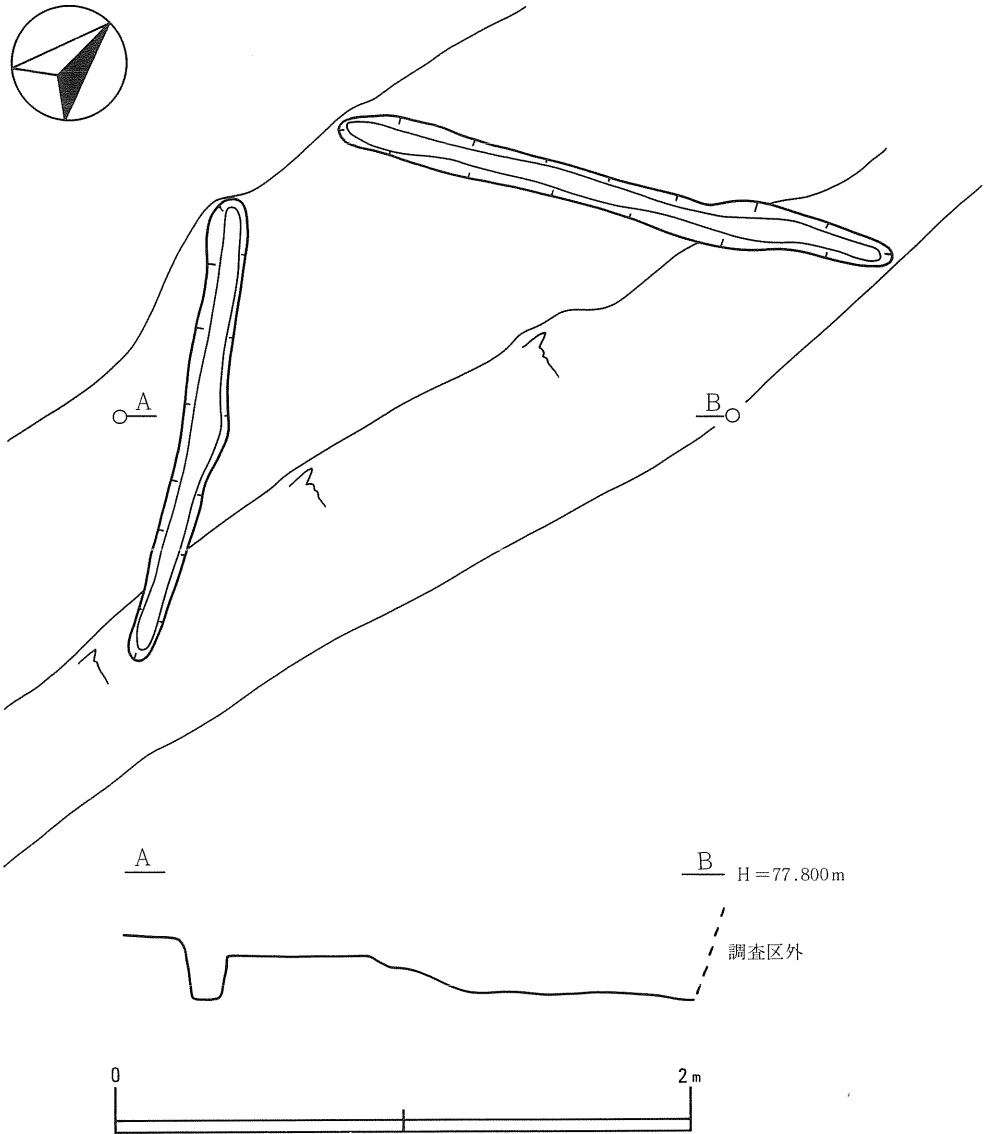
- SI 144B カマド土層断面註記
- 1 暗赤褐 (5Y R 3/4) 煙道部
 - 2 赤褐 (5Y R 6) 焼土粒・塊地山土が霜降状に層をなす 炭化物微量混入
 - 3 褐 (7.5Y R 3/4) 混入物1に同じ
 - 4 明褐 (7.5Y R 8) 炭化物・焼土粒多量混入
 - 5 暗褐 (7.5Y R 4) 焼土粒・炭化物微量・白色浮石粒混入
 - 6 褐 (7.5Y R 5) 10の赤変化が著しい部分
 - 7 褐 (7.5Y R 6) 燃焼面の赤変化した土
 - 8 黒褐 (10Y R 3/4) 地山土塊状に混入 白色軽石粒12よりやや多い
 - 9 明赤褐 (5Y R 8) 火熱を受け最も赤変している
 - 10 暗褐 (10Y R 3/4) 白色軽石粒・炭化物微量・地山土塊微量・焼土粒極微量混入
 - 11 暗褐 (10Y R 3/4)
 - 12 暗褐 (10Y R 3/4) 白色浮石粒微量・焼土及び地山塊・少量混入
 - 13 暗褐 (10Y R 3/4) 地山土少量 白色軽石粒極混入
 - 14 暗褐 (10Y R 3/4) 地山土を5より多く混入
 - 15 黒褐 (10Y R 3/4) 地山土粒塊を混入
 - 16 黒褐 (10Y R 2/4) 大量浮石粒が少量混入
 - 17 黒褐 (10Y R 3/4) 地山土粒・塊多量混入
 - 18 暗褐 (7.5Y R 3/4) 焼土粒・炭化物・地山粒混入
 - 19 褐 (7.5Y R 6) 微量の炭化物と多量の焼土が混入
 - 20 明赤褐 (5Y R 8) 11に同じ 赤色化の最も著しい部分
 - 21 暗褐 (10Y R 3/4) 煙道内部埋土 白色軽石粒少量 ローム・焼土粒微量
 - 22 暗褐 (7.5Y R 3/4) 粘土
 - 23 暗褐 (7.5Y R 3/4) 炭化物・焼土混入
 - 24 赤褐 (5Y R 6) 燃焼面
 - 25 褐 (7.5Y R 6) 炭化物と焼土粒微量混入・地山土混入
 - 26 赤褐 (5Y R 6) 炭化物と焼土混入
 - 27 褐 (7.5Y R 5) 11よりも地山土の混入が多い ほかは11と同じ
 - 28 赤褐 (5Y R 6) 焼土
 - 29 黒褐 (10Y R 2/4) SI 144B床面と14との間に図化できない程の大湯火山灰と思われる浮石粒が認められる
 - 30 暗褐 (10Y R 3/4) 地山土多量混入 SI 144B 粘土
 - 31 黒褐 (7.5Y R 2/4) 焼土粒少量混入 火熱のため中央部がやや赤変
 - 32 褐 (7.5Y R 6) 煙道の受熱部分
 - 33 暗褐 (10Y R 3/4) 黄褐色土の混入が16より少ない
 - 34 暗褐 (10Y R 3/4) 焼土粒微量混入
 - 35 褐 (7.5Y R 5)
 - 36 褐 (10Y R 3/4) 黄褐色土粒が霜降状に多量混入
 - 37 黒褐 (10Y R 2/4) 黄褐色土極微量混入
 - 38 暗褐 (10Y R 3/4) 地山土多量混入
 - 39 ぐい黄 (2.5Y R 5) 白色粘土
 - 40 褐 (7.5Y R 6) 煙道構築土
 - 41 黄褐 (10Y R 6) 煙道構築土
 - 42 暗褐 (10Y R 3/4) 煙道構築土 Aカマドの構築土

第50図 SI 144B 竪穴住居跡かまど

部は緩くわずかに外反している。外面は粗い篋削り調整している。胎土には砂礫を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は内外面ともにぶい褐色～浅黄橙色を呈する。

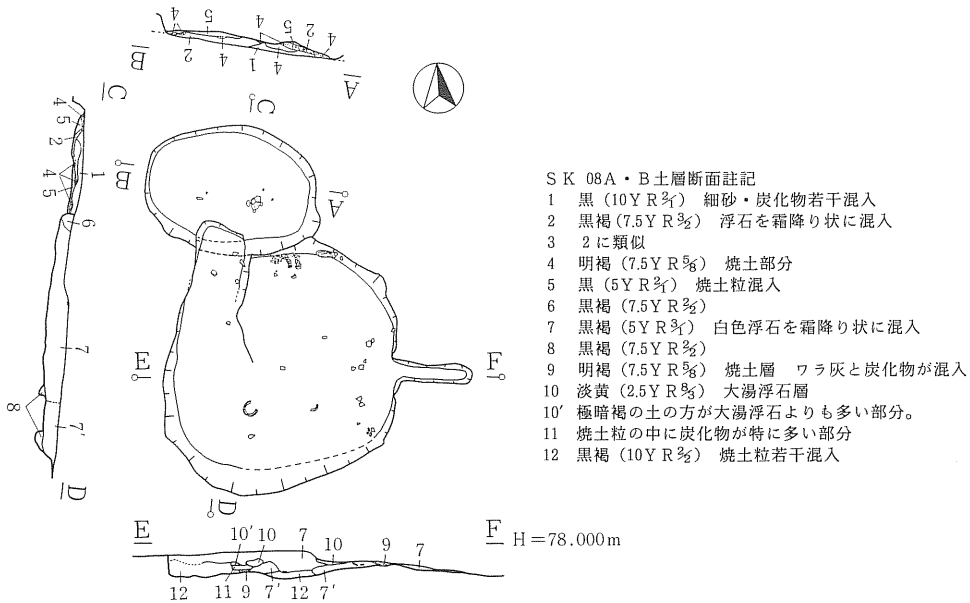
SI 144B 竪穴住居跡(第49・50図)

本住居跡の埋め立てと拡張により114A 竪穴住居跡を構築しており、また、SD167 溝状遺構の掘削、それに続くSD10 空堀跡掘削時の掘り過ぎと思われる掘り込みにより大きく破壊されており原形を失っている。遺存している壁の長さは北側壁150cm、東側壁660cm、南側壁200cmである。壁は北側を除き上部を削平されているが各側壁とも外傾して立ち上がり、遺存する壁

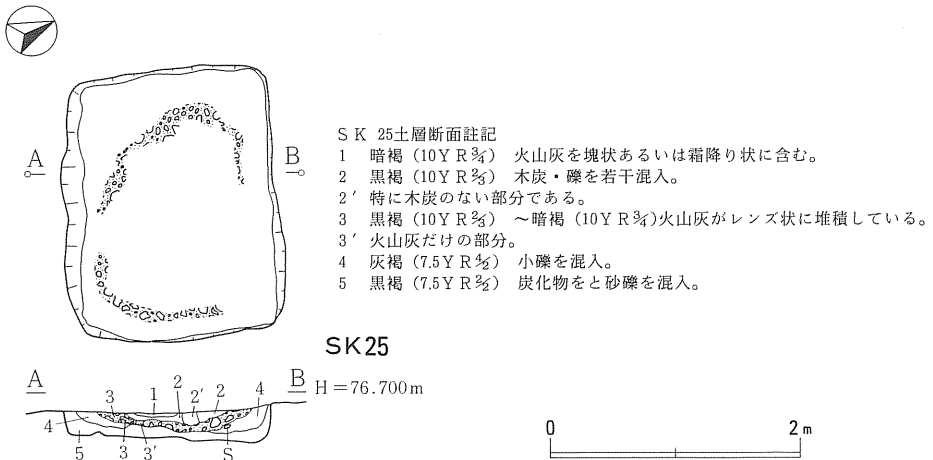


第51図 SI 160 竪穴住居跡

高は北側壁15~16cm、東側壁7~16cm、南側壁12~19cmである。(114竪穴住居跡のプラン確認面までの高さは34~40cmである。)床面は、黄褐色粘質土を貼って堅く踏み固められているが南側にわずかに傾斜している。柱穴は、各壁面下方の床面に合計12本検出したが、P1~P5が位置関係から主柱穴と考えられる。壁溝は、各壁下方に部分的に検出した。南側では長さ160cm、幅7cm、深さ5~10cmと、長さ65cm、幅3~8cm、深さ5~10cmの2条、東側では長さ142cm、幅10~30cm、深さ5cm、北側では長さ30cm、幅12cm、深さ5cmと、長さ61cm、幅6~15



SK08A・B



SK25

第52図 SK08A・SK08B・SK25土坑

cm、深さ5cmの2条である。南側壁下東寄りの1条は、かまど本体構築時に一部埋め戻されていた。かまどは、位置、規模、主軸方向とも144A竪穴住居跡と一致するが、燃烧部と両袖部の痕跡が残るのみである。燃烧部には支脚の抜き取り痕と思われるピットが検出された。かまど右袖部から約50cm西側に長軸55cm、短軸30cmの楕円形プランをもつ深さ23cmのピットを検出した。

遺物は土師器の坏形土器と甕形土器で、埋土中からとかまど付近からの出土が多い。土師器坏形土器は轆轤を使用している。(図化できたものはない。)

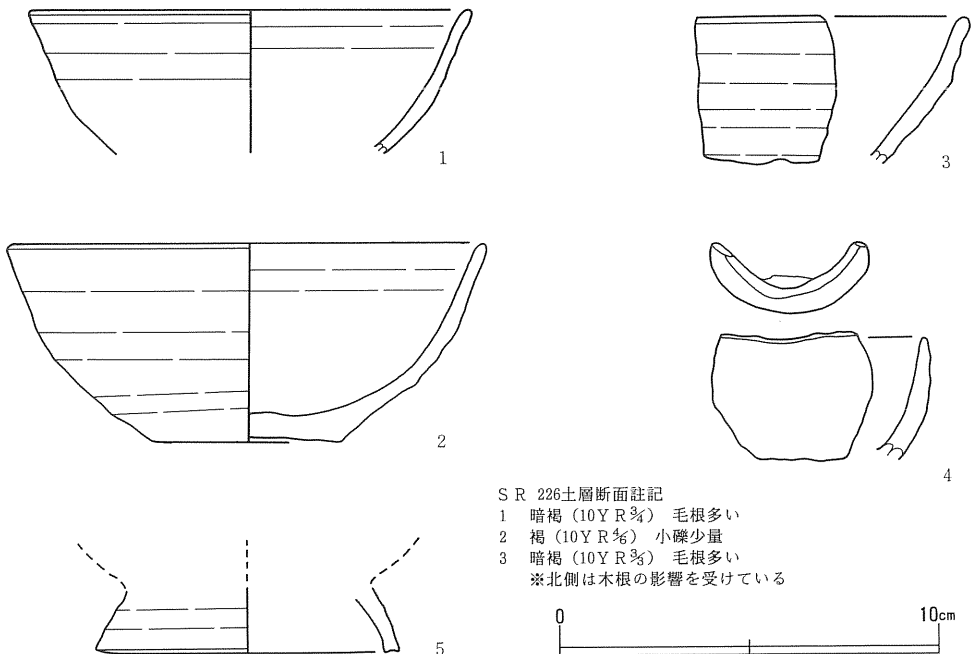
S I 160竪穴住居跡(第51図)

MB66・67グリッドの地山(VII A黄褐色粘質土)を掘り込む竪穴住居跡の北西側隅部付近の壁溝を2条検出したのみである。北側の壁溝は長さ200cm、幅約15cm、深さ13~24cm、西側の壁溝は長さ165cm、幅10~13cm、深さ23~27cmを測る。遺物は出土しなかった。調査区内は、市道の道路基盤工事と水道管理設のため掘削・破壊されているが、東側に隣接して調査された「山王台遺跡第8号竪穴住居跡」の一部であることが判明した。推定される規模は、東西4.6m、南北4m、主軸方位S-22°-Eの長方形プランを呈し、南側壁の中央から東寄りにかまどが付設されている。

「山王台遺跡第8号竪穴住居跡」では、埋土中から土師器の坏(内面黒色処理)・甕が、床面からは土師器の坏・甕と須恵器の長頸壺が、かまどから土師器の皿・甕・鍋が出土している。

(2) 土坑

S K 08土坑(第52・53図、図版19)



第53図 SK08土坑出土遺物

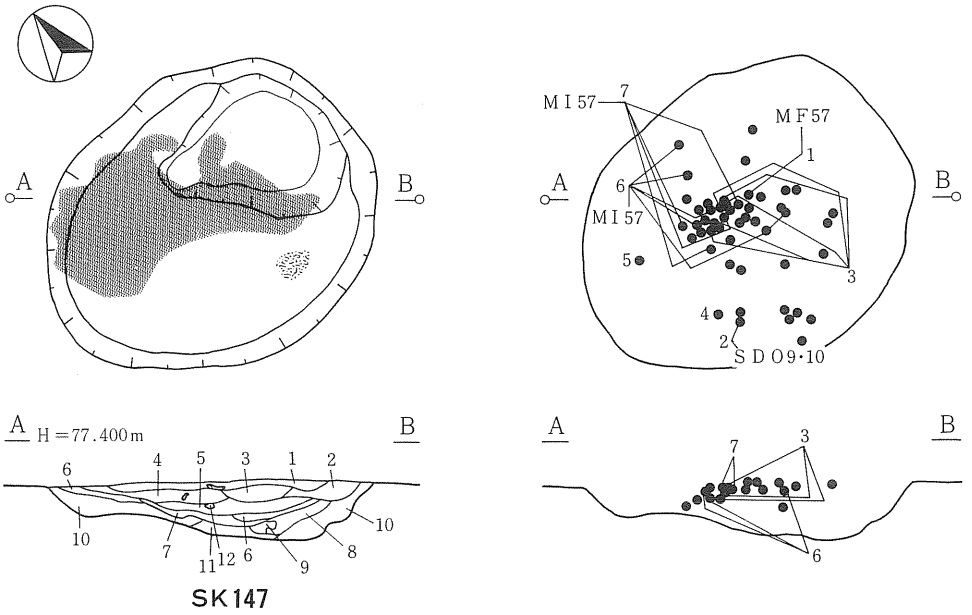
MA53・54グリッドで検出した。当初、基本層位の第V層上面で、焼土を伴う1基の土坑として検出したが、精査の結果2つの土坑の重複であることが判明した。小さい方をSK 08A、大きい方をSK 08Bとした。両者は、埋土中に大湯浮石層と思われる浮石粒を霜降り状に含むことから、大湯浮石層降下後のものと考えられる。底面は地山まで達していない。

SK 08A土坑は、上面で長径約150cm、短径約100cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは10cmと浅い。壁はゆるやかに立ち上がり、壁面から底面の一部にかけて焼けており、木炭が若干含まれている(図中のスクリーン部分)。底面はほぼ平坦であるが、堅くはない。埋土中に土師器の坏形土器や甕形土器の破片等が散在していたが、大部分が二次的な火熱を受けていた。第53図1は、口径11.6cm、現高3.8cmの轆轤成形した土師器坏形土器である。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。2は、口径12.6cm、器高5.3cm、底径5cmの轆轤成形した土師器坏形土器である。轆轤からの切り離しは回転糸切りである。胎土には砂粒を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は外面が淡橙色～明褐灰色を呈する。内面は淡橙色を呈するが、筥磨きの痕跡も残っていることから、黒色処理されていた土器が二次的な火熱によって変化したものと思われる。3は、轆轤成形した土師器坏形土器の口縁部破片である。外面に水挽き痕が明瞭に残る。内面を細かい筥で磨いており、部分的に黒色を呈する。胎土には細砂粒を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は内面の一部を除き内・外面とも浅黄橙色を呈する。4は、手づくねの土器の口縁部から胴部下半にかけての破片である。胎土には細砂粒を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は内・外面とも浅黄橙色を呈する。5は、高台付土器(身部の形態不明)の高台部破片である。底面に1条の凹線を巡らしている。胎土は精選され、焼成良好で堅緻である。色調は内・外面とも赤褐色を呈する。

SK 08B土坑は、直径が180～200cmのほぼ円形のプランを呈する土坑で、東側に溝状の張り出し部を持つ。確認面からの深さは15～20cmである。壁は外傾して立ち上がる。東側から北西側の壁と底面の一部が焼けており、木炭と灰状が残っている。東辺中央に、長さ約60cm、幅約15cm、深さ数cmの張り出し部があるが、埋土の状況から本土坑に伴うものと判断した。SK 08Aとの前後関係については、北東では08Bが古いように見えるものの、北西では08Bが08Aを切っているようにも見える。あるいは北西部のそれは、他の溝状遺構との重複があったかもしれない。

SK 25土坑(第52図、図版19)

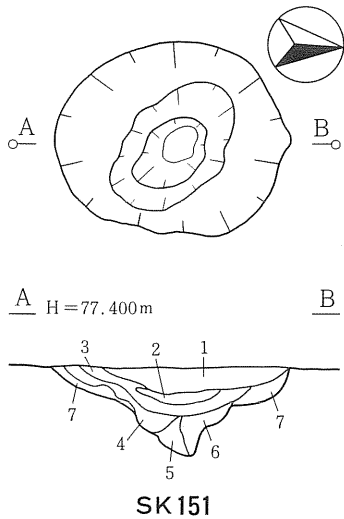
LJ40・41・LK40・41グリッドで、SI 27竪穴住居跡を掘り込んでいる土坑である。長さ215cm、幅約170cmの長方形を呈し、プラン確認面からの25cmの深さを測る。埋土上位に白頭山起源の火山灰と思われる灰白色の火山灰が楕円形に堆積していた。埋土中から縄文土器片と土師器甕



SK 147土層断面註記

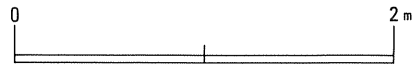
- 1 暗褐 (10Y R 3/4) 白色浮石粒・塊混入
- 2 褐 (10Y R 4/6) 白色・黄色浮石粒、炭化物多量混入
- 3 褐 (10Y R 4/6) 2に同じ
- 4 明褐 (7.5Y R 3/6) 炭化物少量混入 焼土
- 5 2に同じ 炭化物多い
- 6 炭化物

- 7 炭化物と浮石の混合層
- 8 暗褐 (10Y R 3/4) 炭化物微量混入
- 9 白色粘土層
- 10 暗褐 (10Y R 3/4) 地山粒 (VII A)・塊混入
- 11 褐 (10Y R 4/6)
- 12 黄色浮石粒塊



SK 151土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R 2/2) 黄褐色地山 (VII A) 粒塊混入
- 2 1に同じ
- 3 黒褐 (10Y R 2/2) 地山 (VII A) 粒微量混入
- 4 黒 (10Y R 2/1) 地山 (VII A) 塊混入
- 5 黒褐 (10Y R 2/3) 4に同じ
- 6 黒褐 (10Y R 2/2) 4に同じ
- 7 黒褐 (10Y R 2/2) 掘り過ぎた部分



第54図 SK147・SK151土坑

形土器の破片、土師器坏形土器の底部破片が出土した。(土師器で図化できたものはない。)

S K 147土坑(第54・55図、図版19・21)

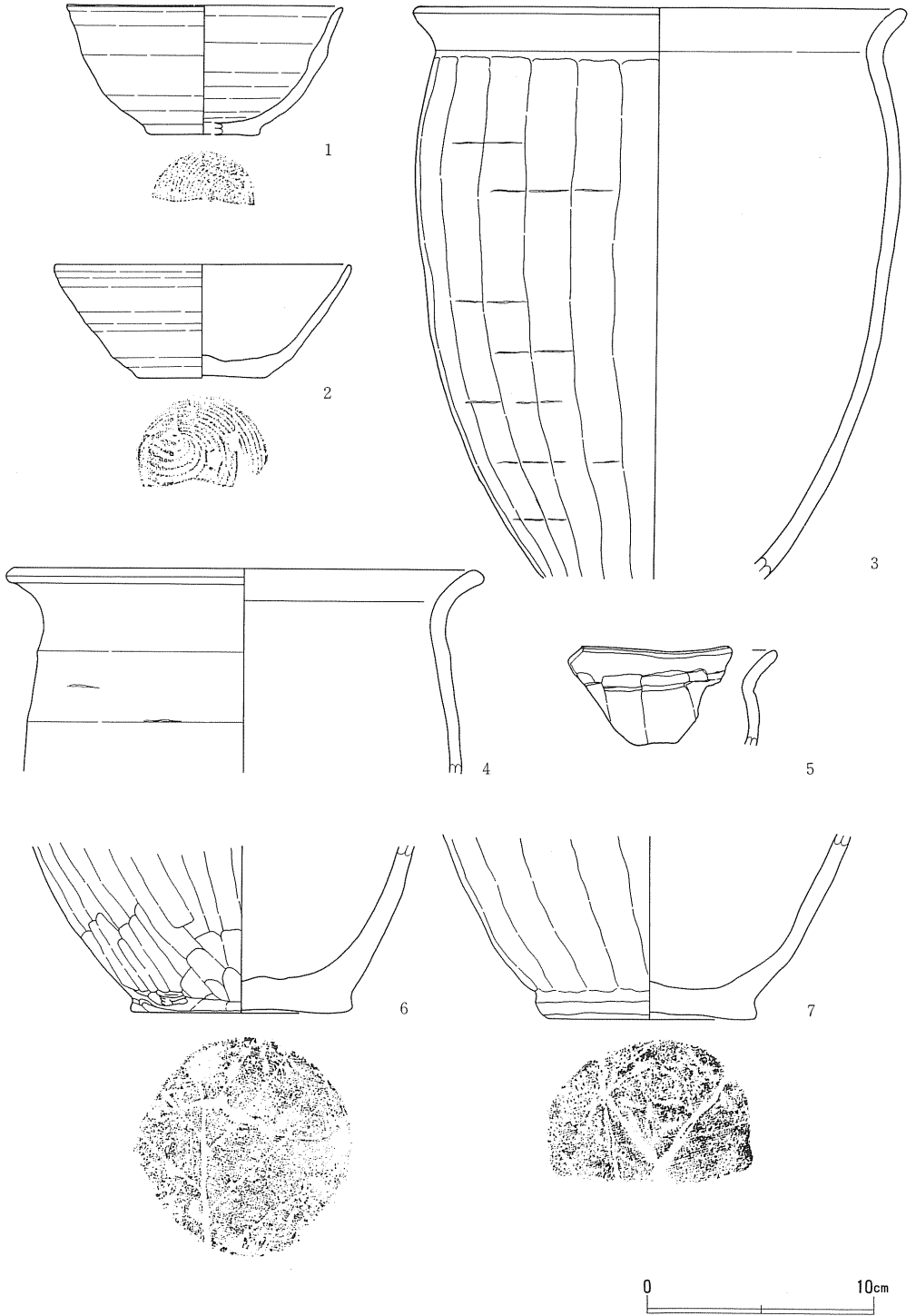
MI57グリッドのV層上面で検出した。長軸方向をN-89° -Eにもち長軸184cm、短軸152cmの楕円形を呈する土坑である。埋土の中位には炭化物と焼土が多量に混入・堆積している。プラン確認面からの深さは16~32cmである。底面は凹凸が激しい。遺物は炭化物層の上面から土師器の坏形土器と甕形土器(大型・小型)が出土した(第55図1~7)。1は、推定口径12cm、現高5.7cm、推定底径5cmの轆轤成形した土師器坏形土器である。轆轤からの切り離しは回転糸切りである。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。2は、推定口径13cm、現高5cm、推定底径5.6cmの轆轤成形した土師器坏形土器である。轆轤からの切り離しは回転糸切りである。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。3は、推定口径22cm、現高25.2cmの底辺部を欠失する土師器甕形土器である。粘土紐巻き上げにより成形されている。短い口縁部を大きく外反させ、外面は肩部から粗い篋削り調整している。胎土に砂礫を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は内外面ともぶい黄橙色~にぶい橙色を呈する。5も同様の器形・調整の小型の甕形土器である。第55図6・7は、土師器甕形土器の底部の破片である。6は現高7.4cm、底径9.2cm、7は現高8.2cm、底径9.2cmで胎土に多量の砂礫を混入し、外面が篋削り調整されている。底面に木葉痕が認められる。焼成良好で堅緻である。色調は外面が明黄褐色~浅黄橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

S K 151土坑(第54図)

MH58・MI58グリッドのV層上面で検出した。長軸方向をN-5° -Wにもち長軸124cm、短軸102cmの楕円形を呈する土坑である。プラン確認面からの深さは20~46cmである。遺物は埋土中から土師器の坏形土器体部破片1点と甕形土器胴部破片1点が出土した。(図化できたものはない。)

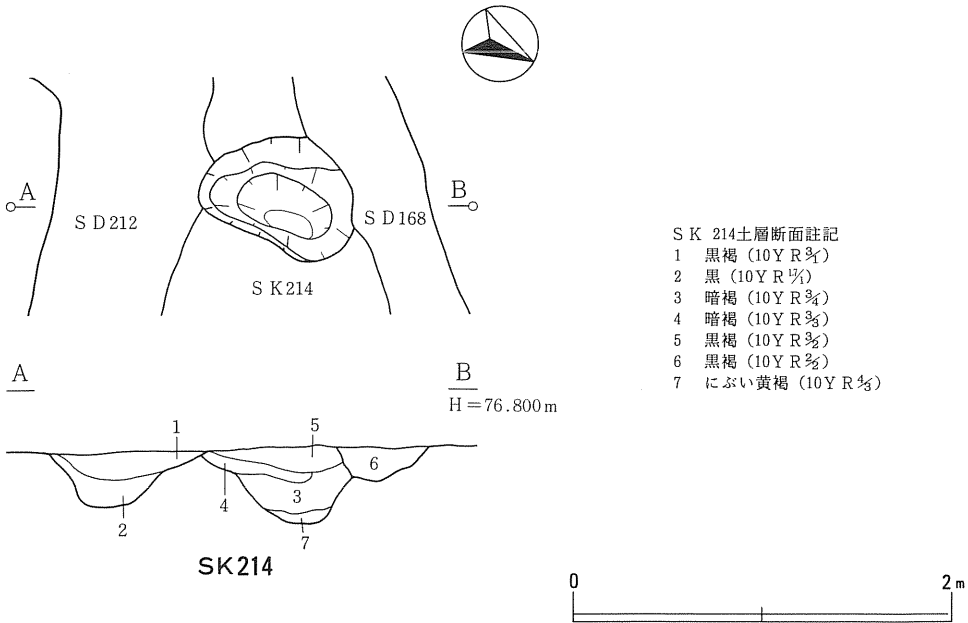
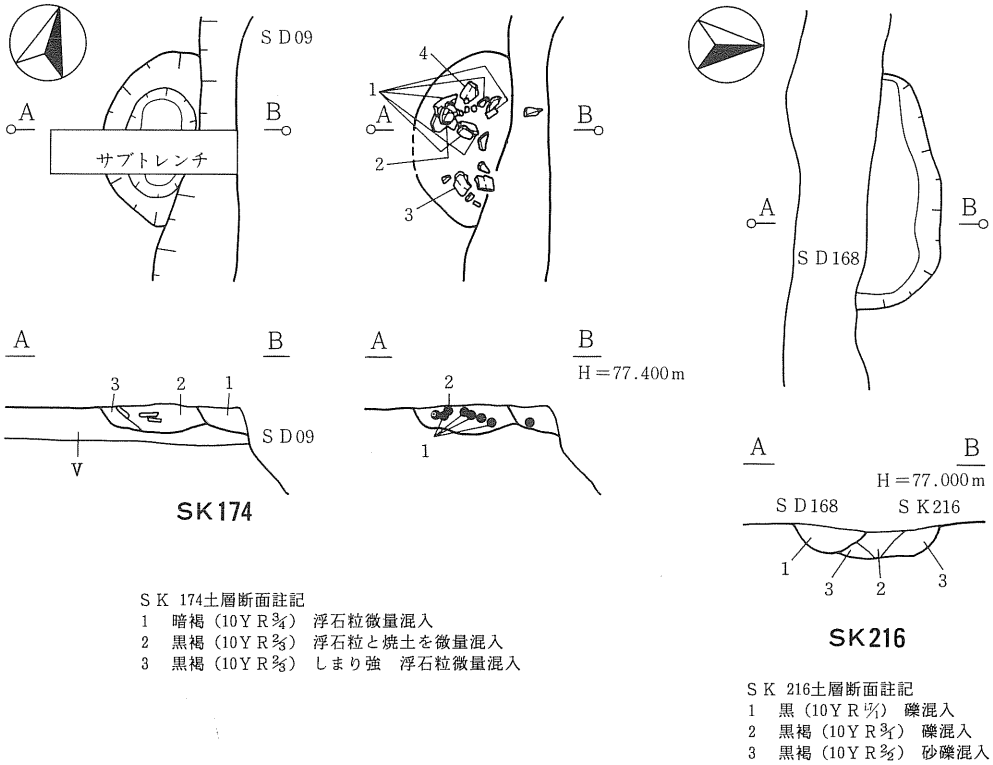
S K 174土坑(第56・57図)

MH60グリッドのV層上面で検出したが、S D 09空堀跡の掘削により東側が破壊されていた。残存部分から推定すると長軸方向をN-10° -Wにもち長軸93cm、短軸70cmの楕円形を呈する土坑である。底面には焼土が薄く堆積していた。プラン確認面からの深さは10~16cmである。遺物は埋土中から土師器の坏形土器破片11点(3点は内面黒色処理)と甕形土器破片13点が出土した(第57図)。1は、推定口径24cm、現高26.6cmで胴下半から底部を欠損する土師器甕形土器で、胴部上半に最大径をもつ。粘土紐巻き上げにより成形され、短い口縁部は大きく外反し、口唇内側は垂直に立ち上がる。外面は下半に粗い篋削り調整している。胎土には砂礫を多く混入している。焼成は良好で堅緻である。色調は外面に火熱による赤斑がみられるが明黄褐色~灰黄褐



第55図 SK147土坑出土遺物

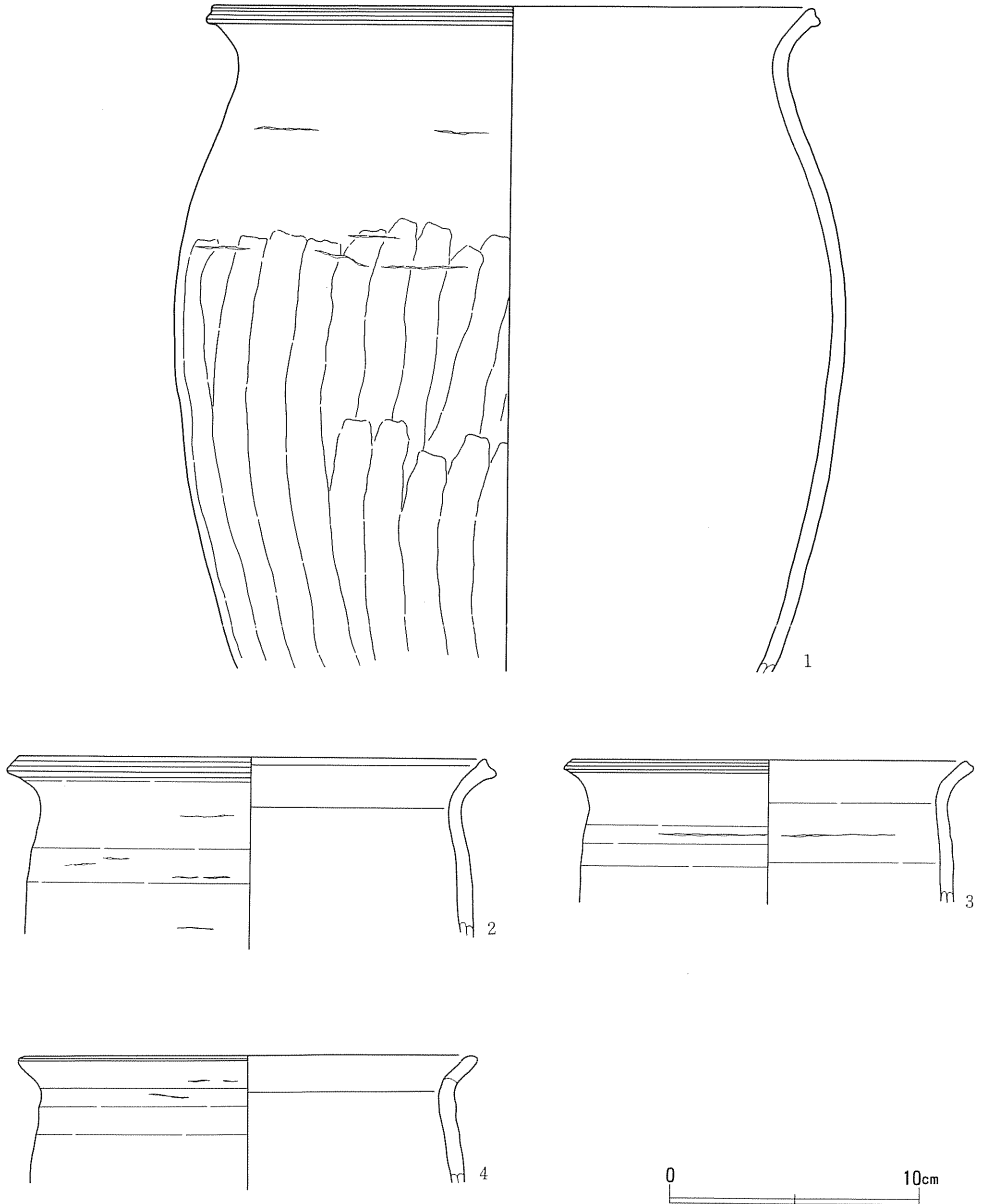
第4章 調査の記録



第56図 SK174・SK214・SK216土坑

色、内面が黄褐色～灰黄褐色を呈する。2・3も口縁部と口唇部の形状は1と同じであるが、胴部の膨らみはない。2は推定口径19cm、現高7.7cmで3は推定口径16cm、現高5.8cmである。4は、推定口径18cm、現高5.1cmで胴下半から底部を欠損する土師器甕形土器の破片で、粘土紐巻き上げにより成形され、短い口縁部は大きく外反する。胎土には砂礫を多く混入している。焼成は良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

SK 214土坑(第56図)



第57図 SK174土坑・出土遺物

NE66グリッドで2条の溝状遺構(SD168とSD212)に挟まれていたため確認が遅れ漸移層(VI)上面で検出した。2条の溝状遺構よりも古い。残存部分から推定すると長軸方向をN-15° - Wにもち長軸86cm、短軸56cmの楕円形を呈する土坑である。プラン確認面からの深さは40cmである。遺物は出土しなかった。

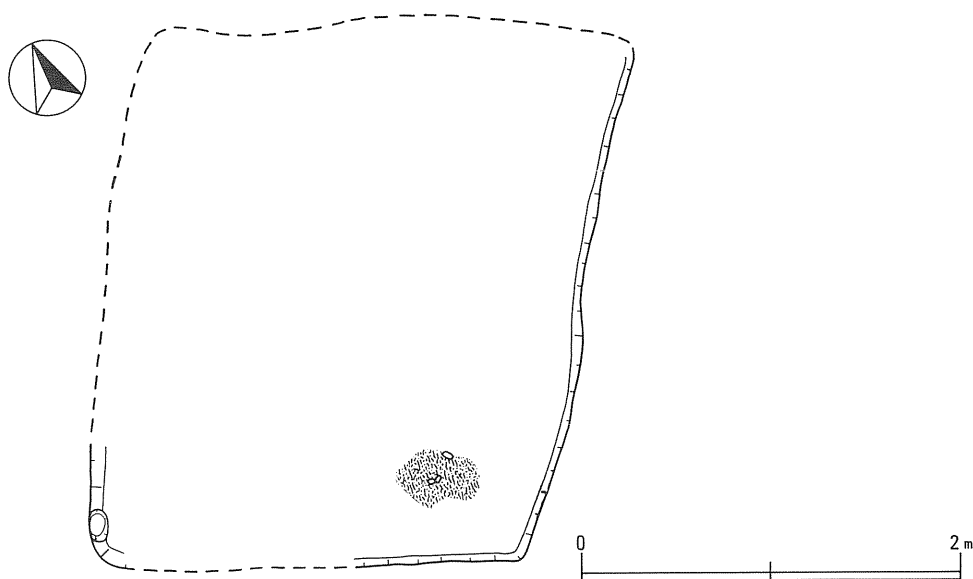
SK 216土坑(第56図)

MT69・NA69グリッドで掘り過ぎからVI層上面での検出となった。SD168溝状遺構の掘削により南側を破壊されていたため、全容は不明であるが、残存部分から推定すると長軸方向をN-85° -Wにもち長軸125cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは20cmである。遺物は出土しなかった。

(3) 竪穴状遺構

SKI 19竪穴状遺構(第58図)

LR44・LS43・44グリッドの地山(VIIA)上面で検出した。この部分は黒土取りによる攪乱が激しく、遺構全体のプラン等は明確にできなかったが、長さ約300cm、幅約250cmのほぼ長方形を呈すると思われる。かまど等は検出できなかったが南東隅に焼土があり、土師器甕形土器の破片が出土した。(細片のため遺物の図化はできなかった。)

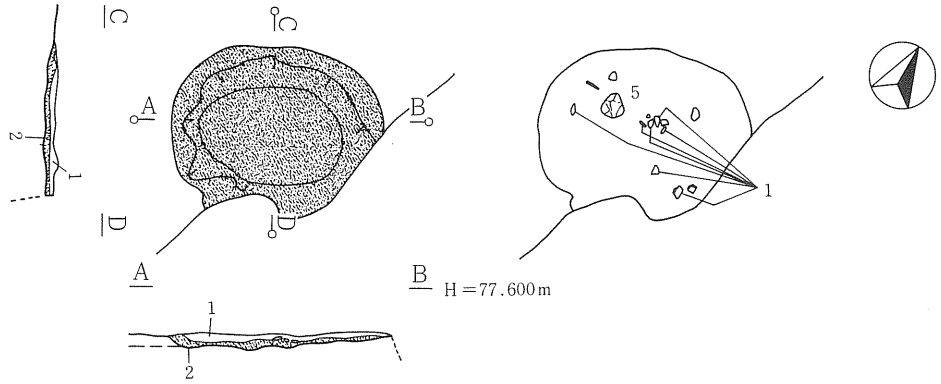


第58図 SKI 19竪穴状遺構

(4) 焼土遺構

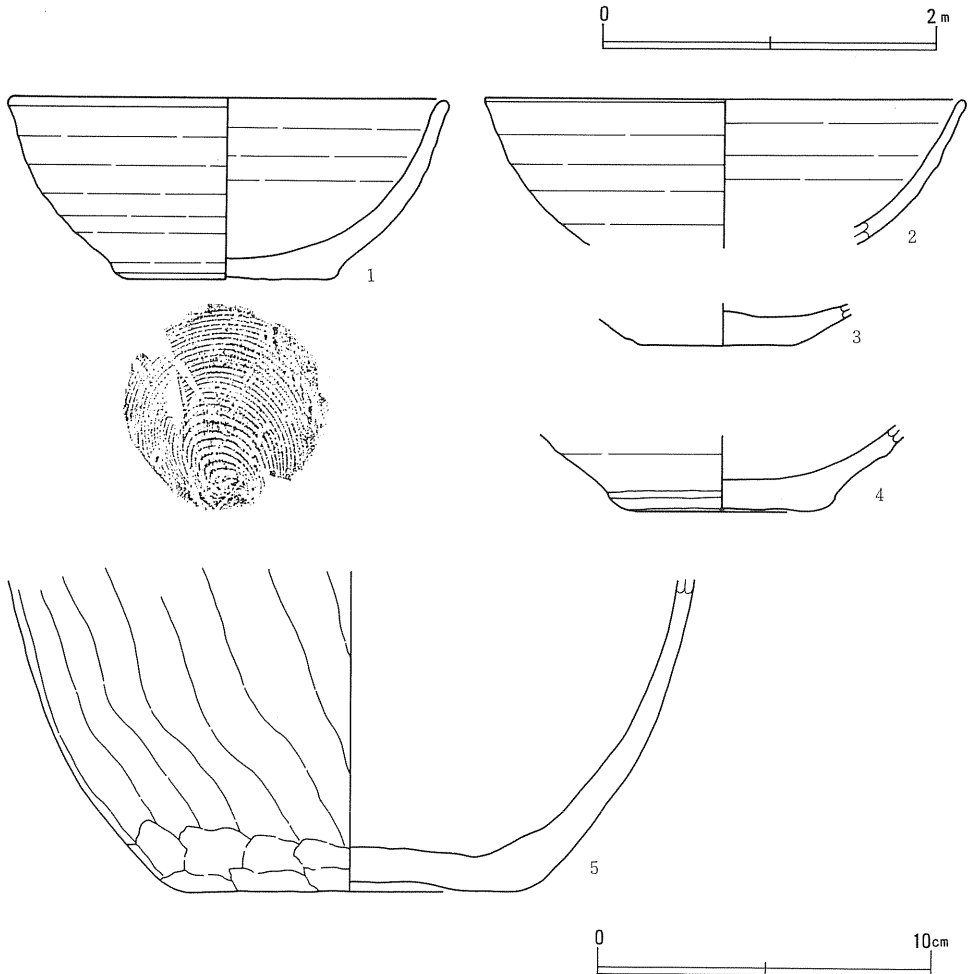
SN 112焼土遺構(第59図、図版19・21)

ME57グリッドのV層上面で検出したが、水道管を埋設するための掘削により南東側を破壊



SN 112土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R $\frac{5}{2}$) 基本的にV層土 焼土・地山粒・白色浮石粒を霜降り状に多く混入
- 2 明赤褐 (5Y R $\frac{5}{6}$) V層の焼土化



第59図 SN112焼土遺構・出土遺物

されているが、長軸方向をN-58° -Eにもち長軸128cm、短軸100cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、確認面からの深さは4～10cmである。素掘りの底面・壁面とも火熱を直接受けて堅く焼き締まっていた。底面には土師器の坏形土器破片と甕形土器破片が出土した。第59図1は、推定口径13cm、器高5.5cm、推定底径6cmの轆轤成形した土師器坏形土器である。轆轤からの切り離しは回転糸切りである。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。2は、推定口径14.5cm、現高4.5cmで底部を欠失する土師器坏形土器である。轆轤で成形しているが切り離しは回転糸切りである。胎土には砂礫を混入している。焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも赤褐色を呈するが、外面に赤斑も見られる。3は、土師器坏形土器の底部破片である。底部外面に回転糸切り痕がみられる。胎土は精選され、焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも橙色を呈するが、外面に赤斑も見られる。4は、土師器壺形土器の底部の破片である。現高3.3cm、底径5.5cmで縁辺部を篋で面取りしている。内面は篋磨きされている。焼成良好で堅緻である。色調は内外面とも灰黄褐色～にぶい黄橙色を呈する。5は、土師器甕形土器の底部の破片である。現高9.7cm、推定底径10cmで胎土に砂礫を混入し、外面が篋削り調整されている。底面は上げ底である。焼成良好で堅緻である。色調は外面が黄褐色～浅黄橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

3 古代～中世の遺構

(1) 井戸跡

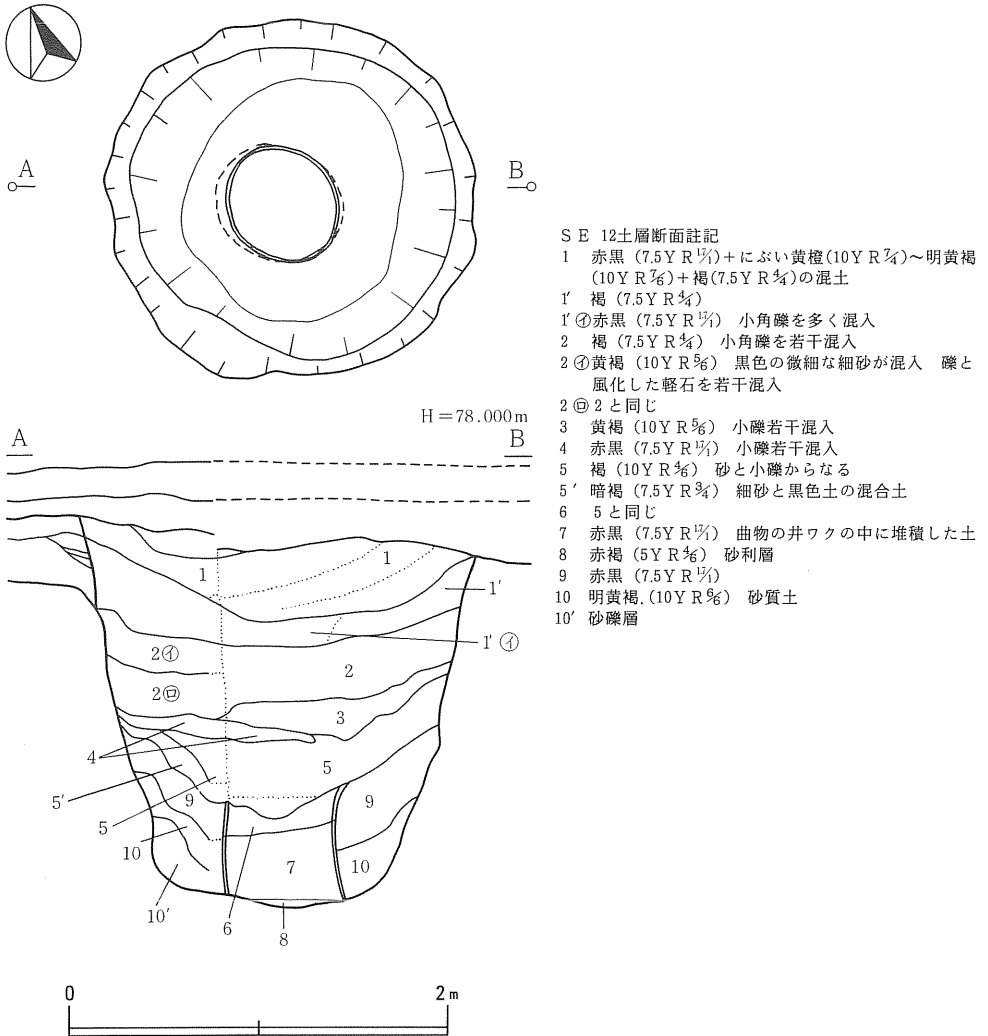
SE 12井戸跡(第60図、図版19)

MD55・56グリッドで検出した素掘りの井戸跡である。確認面での平面プランは直径185～195cmの円形を呈し、底部も直径115～125cmの円形を呈する。深さは約200cmである。地山の段丘礫層を掘り込んでいるが、現在は水の湧出がない。底部中央には直径60cm、深さ53cmの曲物を正立させた痕跡が残っており、その中の埋土は非常に軟らかい黒色土であった。この曲物痕跡よりも上部の埋土には、砂礫や地山土などが多く入っているところから、この井戸跡は廃棄後、人為的に埋められたものと考えられる。埋土中(上部に多い)から土師器甕形土器の小破片が少量出土しているので、古代(平安時代)の井戸跡かも知れない。

(2) 土坑

SK 148土坑(第61図)

MF58・MG58グリッドで検出した。東側はSD149溝状遺構に、北西隅はP553柱穴に各々切られており、確定できないが、平面形は略楕円形、断面形は逆台形と考えられる。長軸方向をほぼ南北にとり、現状で長軸58cm、短軸24cmを測る。プラン確認面からの深さは10～12cmで、坑底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分かれる。下層には大湯浮石粒が混入し、上層はよく

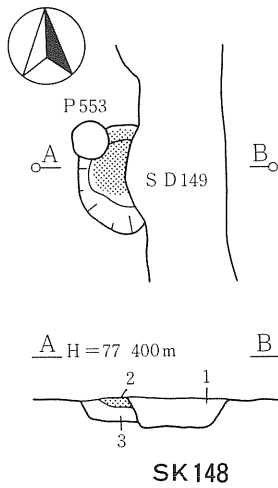


第60図 SE12井戸跡

締まった地山土で上面は焼土化している。遺物は出土しなかった。

SK 153土坑 (第61図)

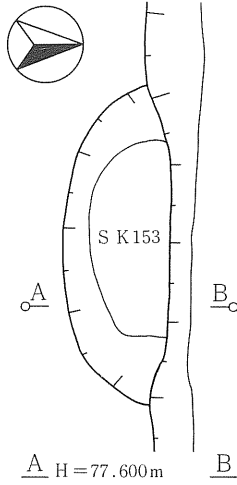
MS56グリッドで検出した。SD10空堀跡により北側が切られているが、平面形はほぼ楕円形、横断面形は鍋底状を呈するものと思われる。長軸方向はS-87° -Wで、現状で開口部は長軸168cm、短軸58cmを測る。遺物は出土しなかった。



SK 148

SK 148土層断面註記

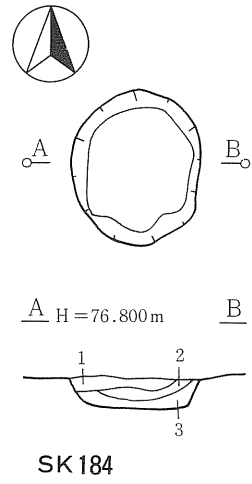
- 1 黒褐 (10Y R 2/6) 浮石粒極微量混入
S D 149の埋土
- 2 黄褐 (10Y R 2/6) やや火熱を受けた粘土
- 3 黒褐 (10Y R 2/6) 地山土・浮石粒混入



SK 153

SK 153土層断面註記

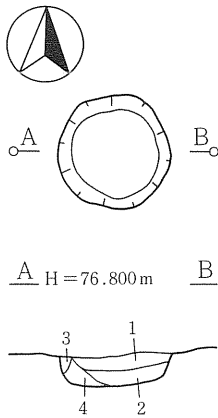
- 1 明黄褐 (10Y R 2/6) 粘土質地山土
- 2 暗褐 (10Y R 2/6) 地山粒多量混入
- 3 黒褐 (10Y R 2/6) 地山粒・塊混入
- 4 3に同じ
- 5 黒 (10Y R 1/6) 地山粒塊混入



SK 184

SK 184土層断面註記

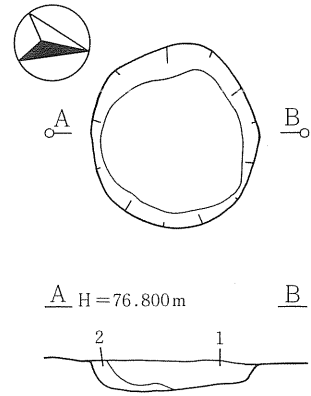
- 1 黒褐 (10Y R 2/6) 白色浮石粒微量混入
- 2 黒褐 (10Y R 2/6) 白色浮石粒極微量混入
- 3 黒褐 (10Y R 2/6)



SK 186

SK 186土層断面註記

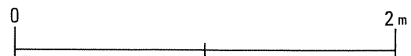
- 1 黒褐 (10Y R 2/6) 地山粒微量混入
- 2 黒褐 (10Y R 2/6) 地山粒微量混入
- 3 黒褐 (10Y R 2/6) 褐色地山土(壁崩壊土)
- 4 黒褐 (10Y R 2/6) 地山粒微量混入



SK 190

SK 190土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R 2/6) 黄褐色粒・白色軽石粒微量混入
- 2 暗褐 (10Y R 2/6) 地山土混入



第61図 SK 148・SK 153・SK 184・SK 186・SK 190土坑

SK 184土坑 (第61図)

MM61グリッドのVI層で検出した。平面形は略楕円形、断面形は鍋底形である。長軸方向をN-3°-Eに持ち、長軸82cm、短軸66cmでプラン確認面からの深さは16cmである。坑底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

SK 186土坑 (第61図)

MN61グリッドのVI層上面で検出した。平面形は円形で、断面形は鍋底形である。直径約60cmで坑底面も平坦である。プラン確認面からの深さは約14cmで遺物は出土しなかった。

SK 190土坑 (第61図)

MP60グリッドで検出した。平面形は略円形、断面形は鍋底形である。長軸方向はS-85°-W、長軸98cm、短軸88cmを測る。プラン確認面からの深さは12~16cmである。遺物は出土しなかった。

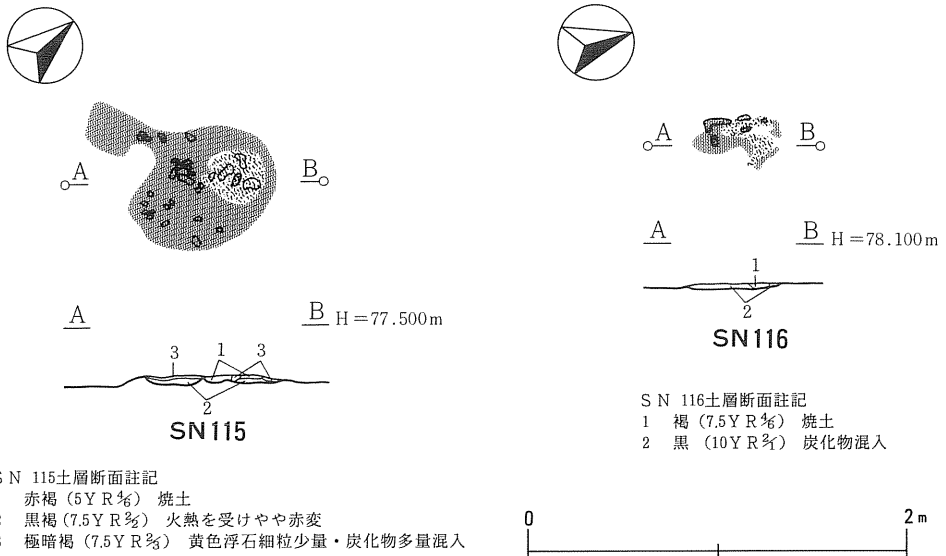
(3) 焼土遺構

SN 115焼土遺構(第62図)

MB69グリッドのV層上面で確認した焼土と炭化物が2~3cmの厚さで堆積していた。南北方向80cm、東西60cmの楕円形の西側に、張り出しをもつプランである。

SN 116焼土遺構 (第62図)

MB69グリッドのV層上面で検出した。長軸46cm、短軸30cmの規模の不整形の焼土面である。中央部に厚さ1~2cm前後の赤色化した焼土層が形成され、その周囲に大型の炭化物を含む被熱層が形成されている。



第62図 SN 115・SN 116焼土遺構

(4) 溝状遺構 (付図2)

SD 110溝状遺構

ML55、MM54、MN54、MO54、MP53、MQ53グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ24m、幅0.6~1.3m、深さ0.56~0.63mである。横断面は箱葉研形を呈する。遺物は埋土中から土師器环形土器口縁部破片が2点出土した。

SD 121溝状遺構

MO56、MP54グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ15m、幅0.2~0.3m、深さ0.07~0.1mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 122溝状遺構

MP52~57グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ16m、幅0.2~0.5m、深さ0.34mである。横断面はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 123溝状遺構

MN52~55グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ6.7m、幅0.3~0.4m、深さ0.31mである。横断面はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 124溝状遺構

ML53・54グリッドに古代のS I 108竪穴住居跡に重複して検出した。S I 108竪穴住居跡の埋土を掘り込んでいるので本溝状遺構が新しい。V層上面で確認され、長さ3.4m、幅0.2~0.3m、深さ0.04~0.05mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 125溝状遺構

MP56、MI56グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ1.4m、幅0.2m、深さ0.04~0.05mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 129溝状遺構

MI52グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ2.9m、幅0.3~0.4m、深さ0.08~0.13mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 145溝状遺構

MP58~61グリッドに検出した。V層上面で確認されたがS F 102土塁の盛土下に入っており、S F 102土塁よりも古い。長さ12.5m、幅0.4~0.6m、深さ0.19~0.33mである。横断面はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 146溝状遺構

MO59グリッドに検出した。VI(漸移)層上面で確認され、長さ1.1m、幅0.2~0.3m、深さ0.06~0.12mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 150溝状遺構

MN60、MO59グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ3.5m、幅0.2～0.3m、深さ0.19～0.21mである。横断面はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 162溝状遺構

MB70、MC71グリッドにSD137溝状遺構と交差・重複して検出したが本溝状遺構が古い。VI(漸移)層上面で確認され、長さ8m、幅0.2～0.8m、深さ0.17～0.19mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 163溝状遺構

MA73・74グリッドに検出した。VI(漸移)層上面で確認され、長さ2.6m、幅0.2～0.5m、深さ0.18～0.25mである。横断面はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 167溝状遺構

SD09空堀跡とSD10空堀跡に挟まれるようにMK58～62グリッドに検出した。V層上面で確認され、SF102土塁の盛土下に入っているため、SD09・SD10空堀跡とSF102土塁より古い。長さ16.8m、幅0.6～0.8m、深さ0.38～0.44mである。横断面は逆台形～U字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 168溝状遺構

MK63～67、ML67、MM67、MN68、MO68、MP69、MQ69、MR69、MS69、MT68、NA68、NB68、NC68、ND67、NE66、NF66、NG65、NH64～62グリッドのV層上面で検出した。西側が開き気味の「コ」の字形プランを呈する。SF101土塁・SD212溝状遺構・SD213溝状遺構と重複するが、SD212・213溝状遺構より新しくSF101土塁より古い。長さ94.7m、幅2.2～5.3m、深さ0.14～0.4mである。横断面は箱葉研形～U字形を呈する。南側のSD167・SD110溝状遺構と連結すると考えられる。遺物は出土しなかった。

SD 169溝状遺構

MR67・68グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ3m、幅0.3～0.4m、深さ0.18～0.21mである。横断面はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 170溝状遺構

MR67・68グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ2.2m、幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.11mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 171溝状遺構

MQ70グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ4.8m、幅0.4～0.5m、深さ0.06～0.1mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 212溝状遺構

NC67、ND66、NE66、NF66、NG63～65、NH64～62グリッドに検出した。SD213溝状遺

構と重複するが、本溝状遺構が古い。VI(漸移)層上面で確認され、長さ9.9m、幅0.2～1m、深さ0.02～0.22mである。横断面は鍋底形～U字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 213溝状遺構

NE65、NF65、NG65グリッドに検出した。VI(漸移)層上面で確認され、長さ20.8m、幅1.8～3.4m、深さ0.3～0.8mである。横断面は鍋底形～箱葉研形を呈する。遺物は出土しなかった。

4 中世の遺構と遺物

(1) 空堀跡(第64図)

調査区内に、3条の空堀跡を検出したが、このうち北側と中央の2条は埋まり切らずに帯状のくぼみとなっていたため、現地形からも確認できた。南側からSD 01・SD 10・SD 09と名称した。3条の空堀跡とも鍵形に屈曲しており、所謂「横矢掛り」の形態をもつ。

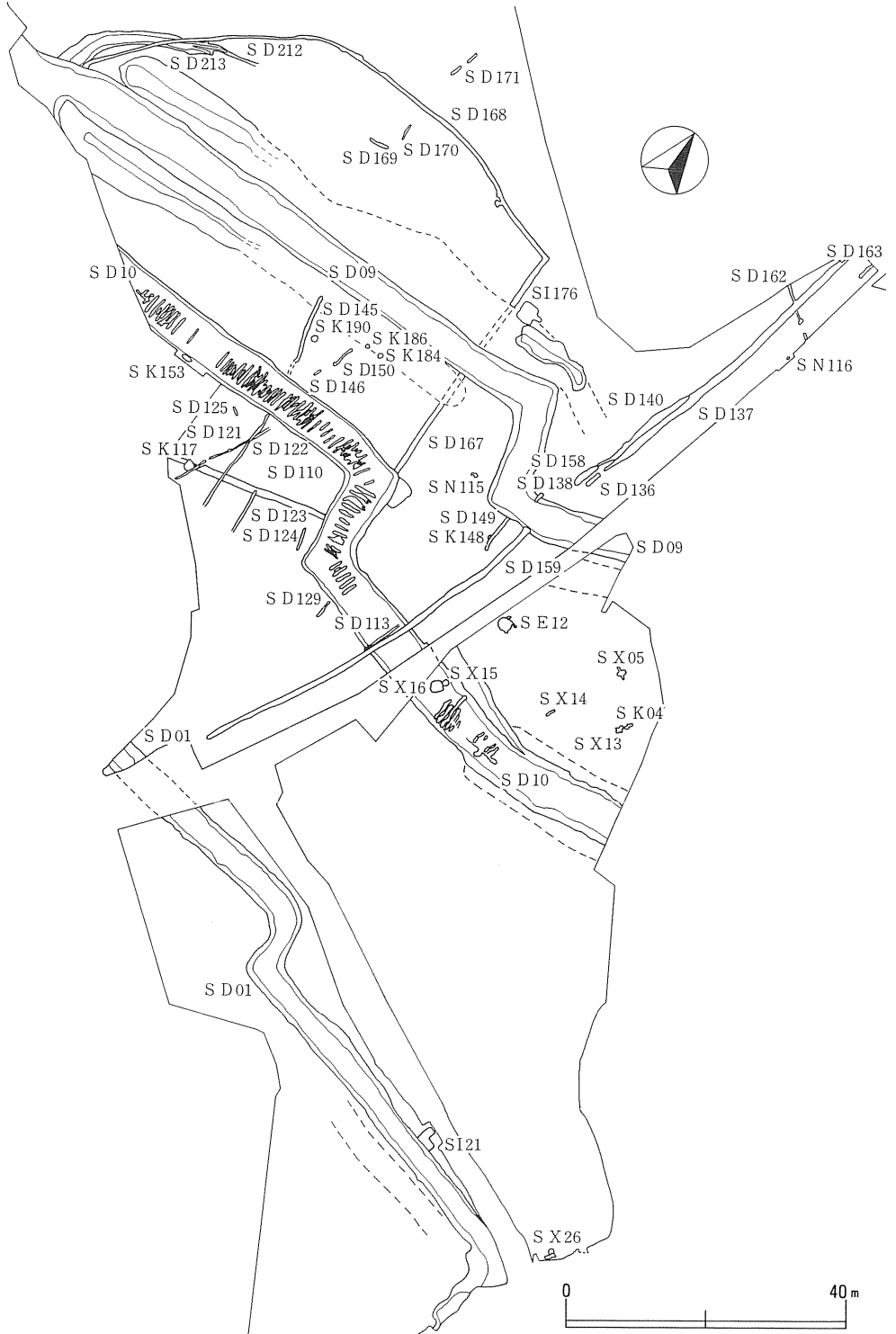
SD 01空堀跡(第65・68図、図版22・23)

調査区の東南部を東～西に横断する農道の南側に接するように検出された空堀跡である。現況では台地東縁から小さな沢が入っているように思われたが、埋没しきらない空堀跡の東端部分であった。西側部分は調査区域外に続いており、神社を囲む空堀に連結するものと思われる。精査した空堀跡の総延長は95m、上幅4～4.5m、基底幅約2.5m、深さ0.9～1.2mで断面形は箱葉研形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、地形に沿うような形で東側程深くなる。掘削に際しては、旧表土から地山まで掘り込み、排土は空堀の両側に盛土し、土塁としたものと思われる。その際、南側の旧表土を2.2m幅で0.6m掘り下げ、「犬走り」状の小テラスを作出している。

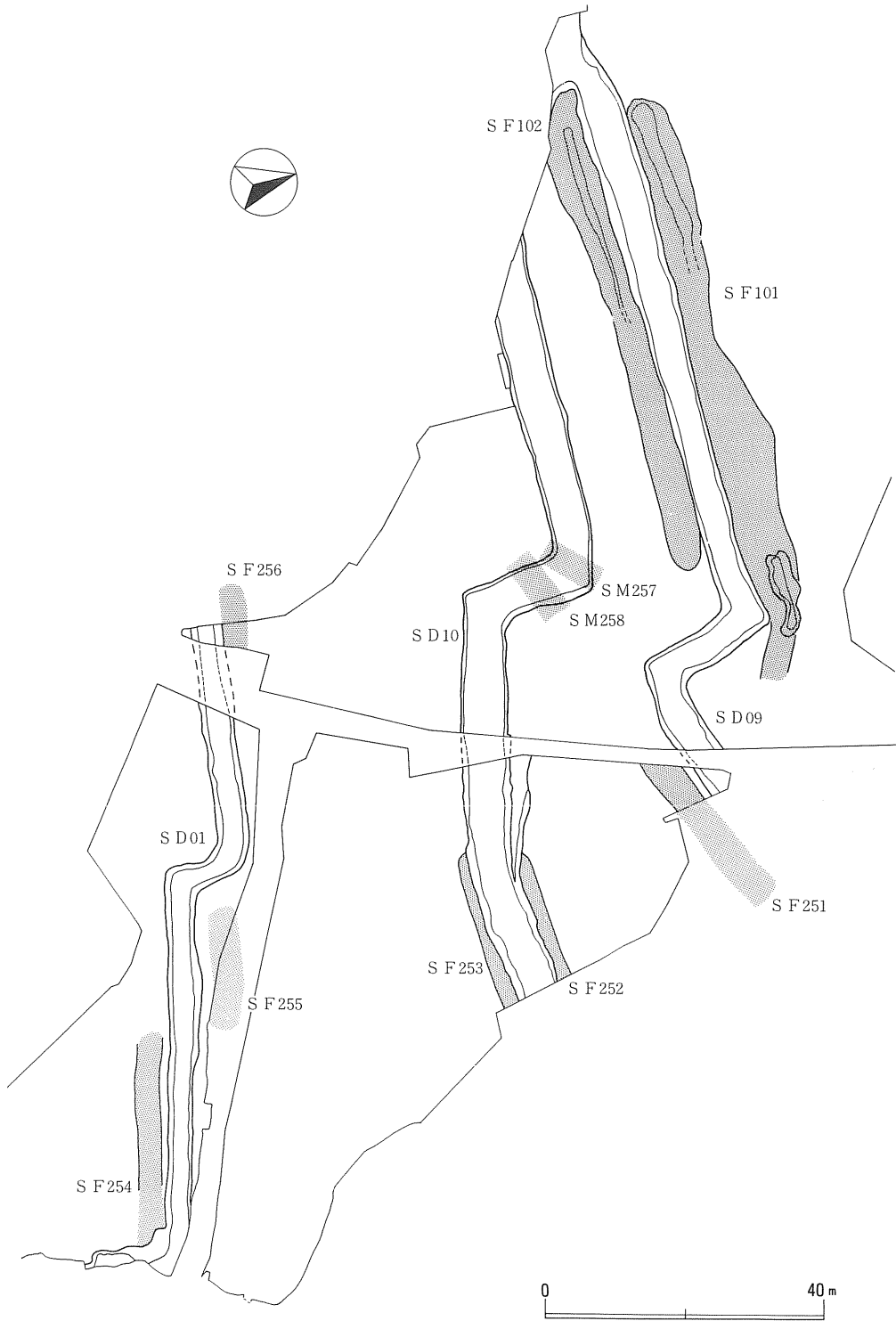
遺物は、埋土下位から灰釉平茶碗口縁部破片1点と銅製品(煙管)が出土した。灰釉平茶碗(第68図1)は、二次的火熱を受け、釉面がブツブツした状態になっている。14～15世紀にかけての瀬戸窯産。煙管(第68図2)は銅製である。吸口の先端部を欠く。火皿と首部の接合部には痕跡程度の補強帯が残る。火皿上面は、使用に伴うと考えられる小さな凹凸がある。雁首をラウ(羅宇)結合部から見て、首部の左横には継目が認められる。雁首内部には径7mmの竹管が遺存していた。吸口部には肩が付く。各部の法量は、雁首部の長さ46mm、火皿径15mm、ラウ結合部の径9mmを計測する。

SD 09空堀跡(第66図、図版24～26)

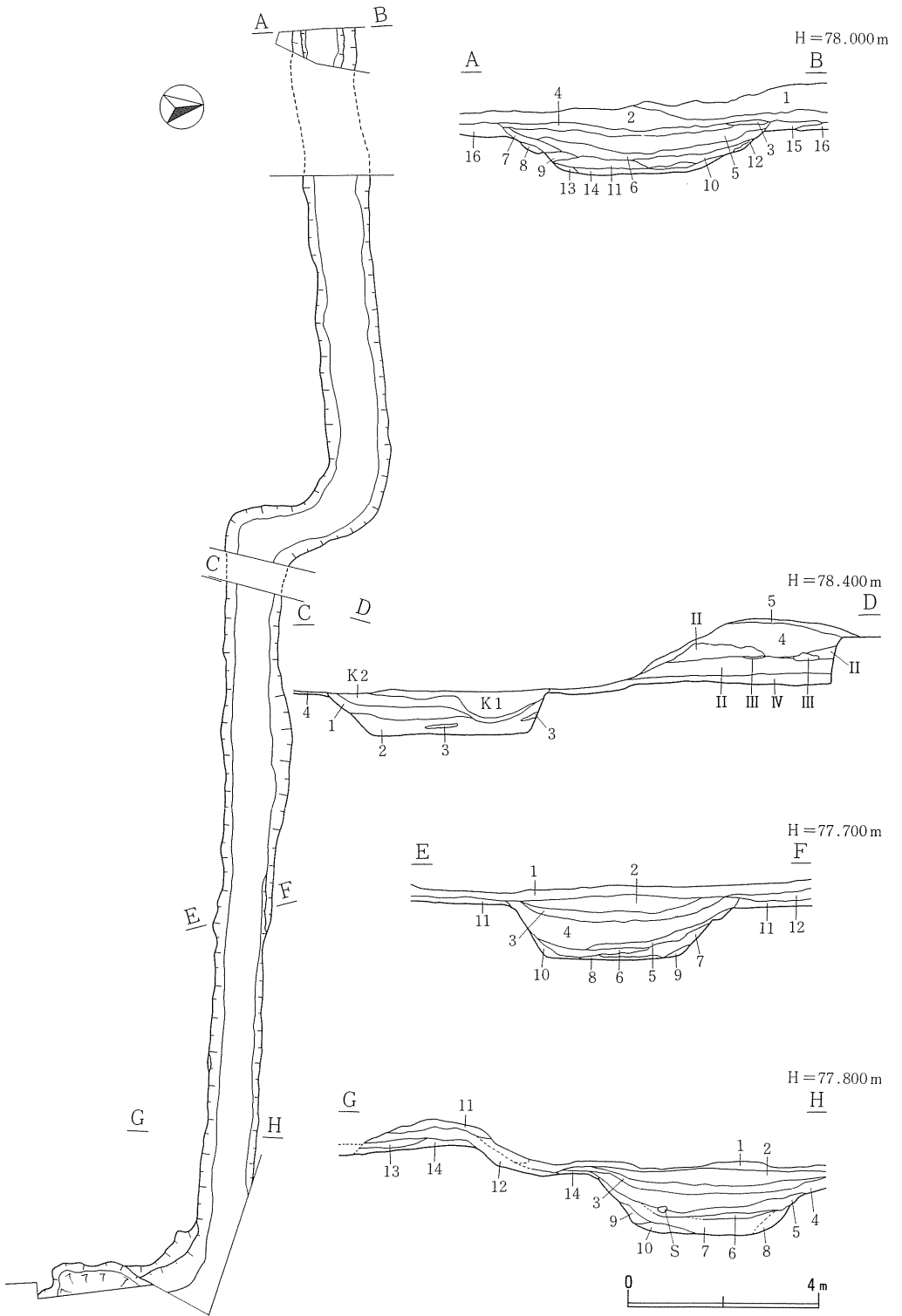
3条の空堀跡では一番北側に位置する。調査区の東端では埋没した空堀跡の北半分が農道として使用されている。西側部分は南東側からの開析谷に続いており、この開析谷もその一部として利用したものと思われる。精査した空堀跡の総延長は143.4m、上幅5～6.5m、基底幅3.7～4m、深さ0.9～1.1mで断面形は箱葉研形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、地形に沿う



第63図 近代～中世・中世・中世～近世の遺構配置図



第64図 空堀跡・土塁・橋跡位置図

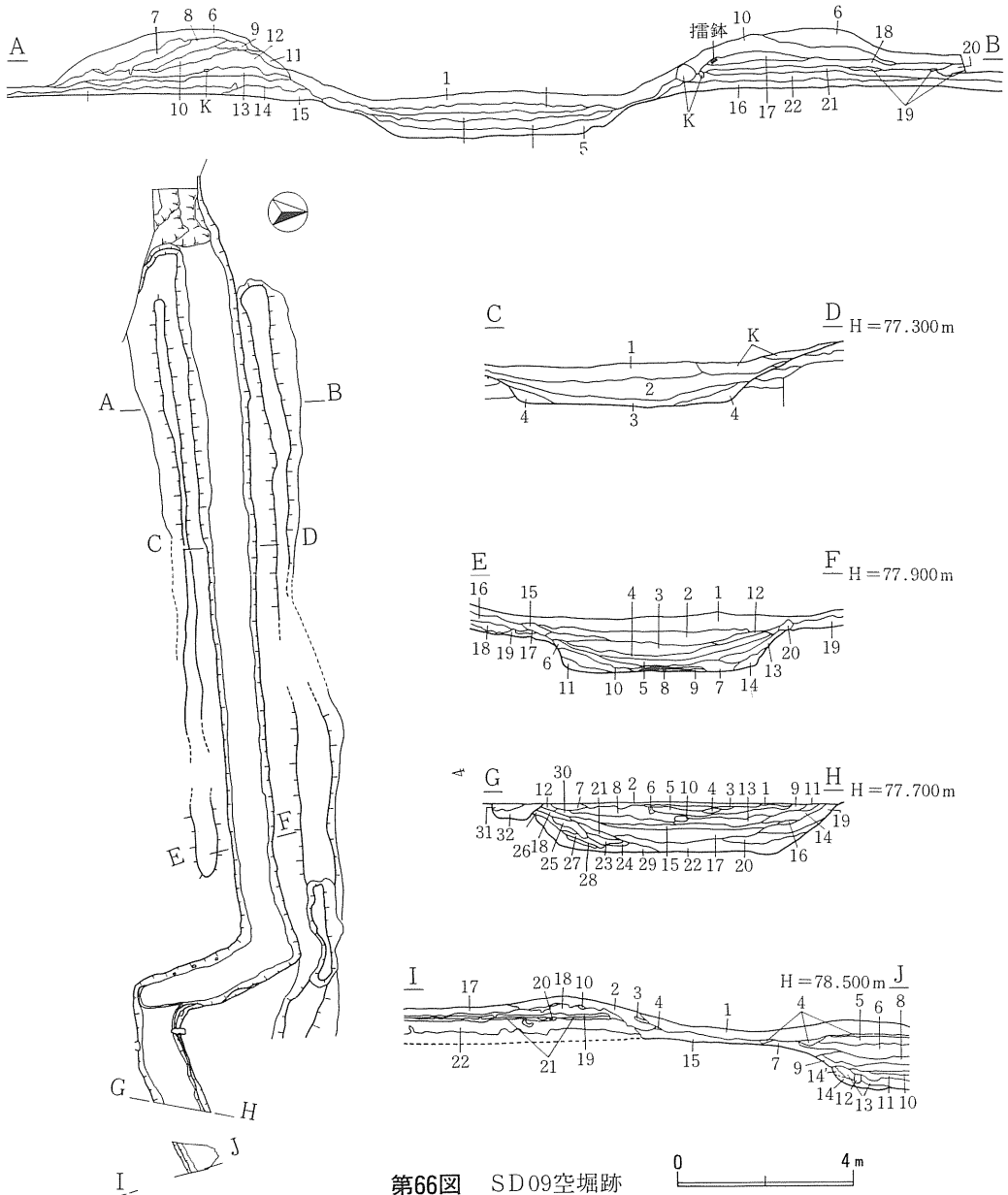


第65図 SD01空堀跡

ような形で西側に緩やかに傾斜している。屈曲部は他の底面よりも一段深くなっており、「仕事の範囲」であるかもしれない。掘削に際しては、旧表土から地山まで掘り込み、排土は空堀の両側に盛土し、土塁としたものと思われる。その際、南側の旧表土を幅0.5～1mの「犬走り」状の小テラスを作出している。遺物は古代の土師器の小破片が1点出土したにとどまる。

SD 10空堀跡(第67・68図、図版26～28)

東側は調査区域外に続いているがすぐ台地斜面となるため東端との距離はほとんどない。ま



第66図 SD09空堀跡

S D 01A - B 土層断面註記

- 1 現代盛土(層下位にビニール製品出土)
- 2 黒褐(10Y R_{2/2})
- 3 黒褐(10Y R_{3/1})
- 4 黒褐(10Y R_{2/2}) 小礫多量混入 非常に緻密でしまっている
- 5 黒褐(10Y R_{2/2}) 砂礫多量混入
- 6 黒褐(10Y R_{2/2}) 微量の黄褐色地山粒・少量の砂礫混入
- 7 黒褐(10Y R_{2/2}) 微量炭化物・黄褐色地山粒・細礫混入
- 8 黒褐(10Y R_{3/1}) 微量炭化物・黄褐色地山粒混入
- 9 黒褐(10Y R_{2/2}) 黄褐色粘土質地山塊多量混入
- 10 黒褐(10Y R_{2/2}) 基本的に9に同じ(塊が大きい)
- 11 暗褐(10Y R_{2/2}) 黄褐色粘土質地山粒混入
- 12 黒褐(10Y R_{3/1}) 砂混入
- 13 暗褐(10Y R_{2/2}) 黄褐色地山粒多量混入
- 14 黒褐(10Y R_{2/2}) 黄褐色地山粒混入 強い粘土質
- 15 黒褐(10Y R_{3/1}) 小礫混入
- 16 暗褐(10Y R_{2/2}) 小礫多量混入

S D 01G - H 土層断面註記

- 1 黒褐(10Y R_{2/2}) 耕作土 小礫多量混入
- 2 黒褐(10Y R_{2/2})
- 3 黒(7.5Y R_{2/1}) 大礫を多量混入
- 4 暗褐(7.5Y R_{2/2}) 小凹礫・木炭片・地山塊少量混入
- 5 暗褐(10Y R_{3/1}) 小礫を若干混入
- 6 5層中の地山土が部分的に霜降り状に入る層
- 7 黒褐(10Y R_{2/2})
- 8 7層に地山土がわずかに霜降り状に混入
- 9 褐～暗褐の砂利層
- 10 暗褐色砂利層
- 11 1と同じ
- 12 黒褐(10Y R_{2/2}) 2と同じ
- 13 2と同じ
- 14 黄褐(10Y R_{2/2}) 基本層序第V層

S F 101～S D 09～S F 102A - B 土層断面註記

- 1 暗褐(10Y R_{2/2}) 小砂礫多量混入
 - 2 黒褐(10Y R_{2/2}) 細礫混入
 - 3 黒褐(10Y R_{2/2}) 細礫多量混入
 - 4 黒(10Y R_{2/1}) 細礫多量混入
 - 5 黒褐(10Y R_{2/2}) 細礫・大礫混入
 - 6 暗褐(10Y R_{3/1}) 細礫混入
 - 7 明黄褐(10Y R_{2/2}) 砂礫少量混入 粘土質
 - 8 黄褐(10Y R_{2/2}) 細礫少量混入 粘土質
 - 9 暗褐(10Y R_{3/1}) 細礫少量混入 粘土質
 - 10 にぶい黄褐(10Y R_{2/2}) 黄褐色地山粒多量混入
 - 11 暗褐(10Y R_{3/1}) 黄褐色地山粒少量混入
 - 12 黒褐(10Y R_{2/2}) 細礫・明褐色地山粒混入
 - 13 黒褐(10Y R_{2/2}) 細粒浮石・細礫混入
 - 14 黒褐(10Y R_{2/2}) 大粒黄色浮石・細礫混入
 - 15 明褐(7.5Y R_{2/2}) 砂礫層
 - 16 褐(10Y R_{3/1}) 細砂礫少量混入
 - 17 黒褐(10Y R_{2/2}) 細礫混入
 - 18 黒(10Y R_{2/1}) 白色浮石粒混入 本層上面が土塁構築時の地表面
 - 19 大湯浮石層
 - 20 黒褐(10Y R_{2/2}) 細礫・大湯浮石粒混入
 - 21 黒褐(10Y R_{2/2}) 細礫少量混入
 - 22 黒褐(10Y R_{3/1}) 細礫少量混入
- K 木根による攪乱

S D 01C - D 土層断面註記

- 1 暗褐(10Y R_{2/2}) 地山礫・地山粒子を少量含む
- 2 暗褐(10Y R_{3/1}) しまりは中なれど1よりややある地山礫・地山粒子を比較的多く含む
- 3 褐(10Y R_{2/2}) 地山の二次堆積 帯状(ブロック状)に入り込んでいるもの
- 4 空堀を掘った土 砂利を多く含む
- 5 盛土

S D 01E - F 土層断面註記

- 1 黒褐(5Y R_{2/2}) 浮石・小礫多量混入
- 2 黒褐(5Y R_{3/1}) 砂礫・炭化物少量混入
- 3 黒(5Y R_{2/1}) 小礫(円礫)少量混入
- 4 黒褐(10Y R_{2/2}) 砂礫混入
- 5 極暗褐(7.5Y R_{2/2})
- 6 5と同じ 砂礫多量混入
- 7 黒褐(7.5Y R_{2/2}) 砂礫少量混入
- 8 黒褐(7.5Y R_{2/2}) 小礫混入
- 9 黄褐(10Y R_{2/2})
- 10 黒褐(7.5Y R_{2/2}) 砂礫層 壁崩壊土か
- 11 暗褐(10Y R_{3/1}) 小礫多量混入
- 12 黒褐(7.5Y R_{2/2}) V層

S D 09C - D 土層断面註記

- 1 黒褐(10Y R_{2/2}) 小礫混入
- 2 黒褐(10Y R_{2/2}) 大礫少量混入
- 3 黒～黒褐(10Y R_{2/1}～_{2/2})
- 4 黒褐(10Y R_{2/2}) 小礫混入

S D 09E - F 土層断面註記

- 1 黒褐(10Y R_{2/2}) 白色浮石粒・砂礫混入
- 2 黒褐(10Y R_{2/2}) 礫混入
- 3 黒褐(10Y R_{2/2}) 砂礫・明黄褐色地山粒混入
- 4 黒(10Y R_{2/1}) 礫少量混入
- 5 暗褐(7.5Y R_{3/1}) 礫混入
- 6 黒褐(10Y R_{2/2}) 明黄褐色砂質地山粒塊・細礫混入
- 7 黒褐(10Y R_{2/2}) 黒褐色土混入礫層
- 8 明褐(7.5Y R_{2/2}) 砂層
- 9 6と同じ
- 10 黄褐(10Y R_{2/2}) 礫・明黄褐色地山塊混入(地山再堆積か)
- 11 黒褐(10Y R_{2/2}) 礫混入
- 12 黒褐(7.5Y R_{2/2}) 細礫混入
- 13 暗褐(7.5Y R_{3/1}) 小礫混入
- 14 暗褐(7.5Y R_{2/2}) 砂礫層
- 15 黒褐(10Y R_{2/2}) 白色浮石塊・明黄褐色地山粒塊混入
- 16 黒褐(10Y R_{2/2}) 白色浮石粒混入
- 17 黒褐(10Y R_{2/2}) 礫混入
- 18 黒褐(10Y R_{2/2}) 明黄褐色砂質地山粒塊・礫混入
- 19 基本層序第V層
- 20 木根による攪乱

S D 10K - L 土層断面註記

- 1 黒褐(7.5Y R_{2/2}) 表土
- 1' 1と同じ 大礫を上部ほど多く混入
- 2 黒褐(7.5Y R_{2/2}) 浮石・砂礫を霜降り状に混入
- 3 黒褐(10Y R_{2/2})
- 4 極暗褐(7.5Y R_{3/1}) 砂礫を若干混入
- 4' 4と同じ
- 5 赤黒(7.5Y R_{2/1})
- 6 黒褐(7.5Y R_{2/2}) 砂礫若干混入
- 7 黒(5Y R_{2/1})と黄褐(10Y R_{2/2})の混合土 砂礫混入
- 8 黄褐(10Y R_{2/2})
- 9 黒褐(7.5Y R_{2/2}) 砂礫若干混入
- 10 暗褐(7.5Y R_{3/1}) 地山漸移層

第4章 調査の記録

SD 09G - H土層断面註記

- 1 明赤褐 (5Y R^{5/6}) 砂質
- 2 黒褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒少量混入
- 3 黒褐 (10Y R^{2/3}) 白色浮石微量混入
- 4 黒 (10Y R^{1/1}) 黄褐色地山塊混入
- 5 黒褐 (7.5Y R^{2/3}) 強い粘土質
- 6 黒褐 (10Y R^{2/3}) 砂質
- 7 暗褐 (7.5Y R^{3/4}) 明褐色砂多量混入
- 8 暗褐 (10Y R^{3/4}) 黄褐色地山砂礫多量混入
- 9 黒褐 (10Y R^{3/4}) 明黄褐色地山粒・塊混入
- 10 黒褐 (10Y R^{2/3}) 強い粘土質
- 11 黒褐 (10Y R^{2/3}) 明黄褐色地山塊少量混入
- 12 11に同じ
- 13 黒褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒少量混入
- 14 暗褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒微量混入
- 15 黒褐 (7.5Y R^{2/3}) 強い粘土質
- 16 暗褐 (10Y R^{3/4}) 黄褐色地山粒少量混入
- 17 黒褐 (10Y R^{2/3}) 強い粘土質
- 18 暗褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒・砂礫混入
- 19 11に同じ
- 20 暗褐 (7.5Y R^{3/4}) 黄褐色地山粒・塊多量混入
- 21 暗褐 (7.5Y R^{3/4}) 礫混入
- 22 黒褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒混入
- 23 褐 (7.5Y R^{2/3}) 黄褐色地山塊多量混入
- 24 6に同じ
- 25 黒褐 (10Y R^{2/3}) 砂礫多量混入
- 26 暗褐 (10Y R^{3/4}) 礫混入
- 27 褐 (10Y R^{3/4}) 礫混入
- 28 21に同じ
- 29 暗褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒混入
- 30 黒褐 (10Y R^{2/3}) 強い粘土質
- 31 2に同じ
- 32 黒褐 (10Y R^{2/3}) 巨礫・礫混入

SD 09I - J土層断面註記

- 1 赤黒 (2.5Y R^{3/1}) 表土
- 2 褐 (7.5Y R^{3/4}) 表土
- 3 赤褐 (5Y R^{4/6}) 4と同じ
- 4 褐 (10Y R^{4/6}) 赤黒土が塊状に混入
- 5 黒褐 (5Y R^{3/1}) 砂礫若干混入
- 6 黒褐 (7.5Y R^{2/3}) 砂礫若干混入
- 7 黒褐 (5Y R^{3/1}) 浮石粒霜降り状に混入
- 8 黒褐 (10Y R^{2/3}) 浮石粒霜降り状に混入
- 9 黒 (5Y R^{3/1}) 浮石粒若干混入
- 10 黒褐 (10Y R^{3/1}) 大湯浮石多量混入
- 11 赤黒 (2.5Y R^{3/1})
- 12 黒褐 (5Y R^{3/2})
- 13 褐 (7.5Y R^{3/4})
- 14 黄褐 (10Y R^{5/6})
- 15 黒褐 (7.5Y R^{2/3})
- 16 4・15に類似
- 17 黒褐 (7.5Y R^{2/3}) 耕作土
- 18 赤黒 (2.5Y R^{1/1}) 浮石粒が霜降り状に混入
- 19 極暗赤褐 (2.5Y R^{2/2}) 浮石粒を多量に混入
- 20 黄褐 (10Y R^{5/6}) 大湯浮石層
- 21 黒褐 (5Y R^{2/2})
- 22 黒 (5Y R^{1/2})
- 23 極暗褐 (7.5Y R^{2/3}) 22と地山との漸移層

SD 10G - H土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山塊・砂礫多量混入
- 2 黒褐 (10Y R^{2/3})
- 3 黒褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒微量混入
- 4 極暗褐 (7.5Y R^{2/3}) 強い粘土質
- 5 暗褐 (7.5Y R^{3/4}) 黄褐色地山粒・砂礫少量混入
- 6 暗褐 (7.5Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒・砂礫多量混入
- 7 黒褐 (7.5Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒・砂礫多量混入
- 8 礫層
- 9 道路盤

SD 10A - B土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R^{2/3}) 細礫・白色浮石粒混入 (ガラス瓶・亜鉛板・ビニール等の混入から攪乱層と推定)
- 2 黒褐 (10Y R^{2/3}) 白色浮石粒・塊多量混入
- 3 におい黄橙 (10Y R^{3/4}) 粘土質 (明黄褐色粘土質地山の再堆積か)
- 4 黒褐 (10Y R^{2/3}) 白色浮石粒・塊が2より多い
- 5 黒褐 (10Y R^{2/3}) 白色浮石粒・塊混入
- 6 黒褐 (10Y R^{2/3}) 白色浮石粒・塊が5より少ない
- 7 黒褐 (10Y R^{2/3}) 明黄褐色粘土質地山粒塊混入

SD 10C - D土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R^{2/3}) 白色浮石多量混入
- 2 暗褐 (10Y R^{3/4}) 黄褐色地山粒混入
- 3 暗褐 (10Y R^{2/3}) 黄褐色地山粒多量混入
- 4 黒褐 (10Y R^{2/3}) 小礫・黄褐色地山粒混入
- 5 暗褐 (10Y R^{3/4}) 黄褐色地山粒混入
- 6 黒褐 (10Y R^{2/3})
- 7 暗褐 (10Y R^{3/4}) 小礫混入
- 8 砂礫混入地山
- 9 黒褐 (10Y R^{2/3}) 小礫少量混入

SD 10E - F土層断面註記

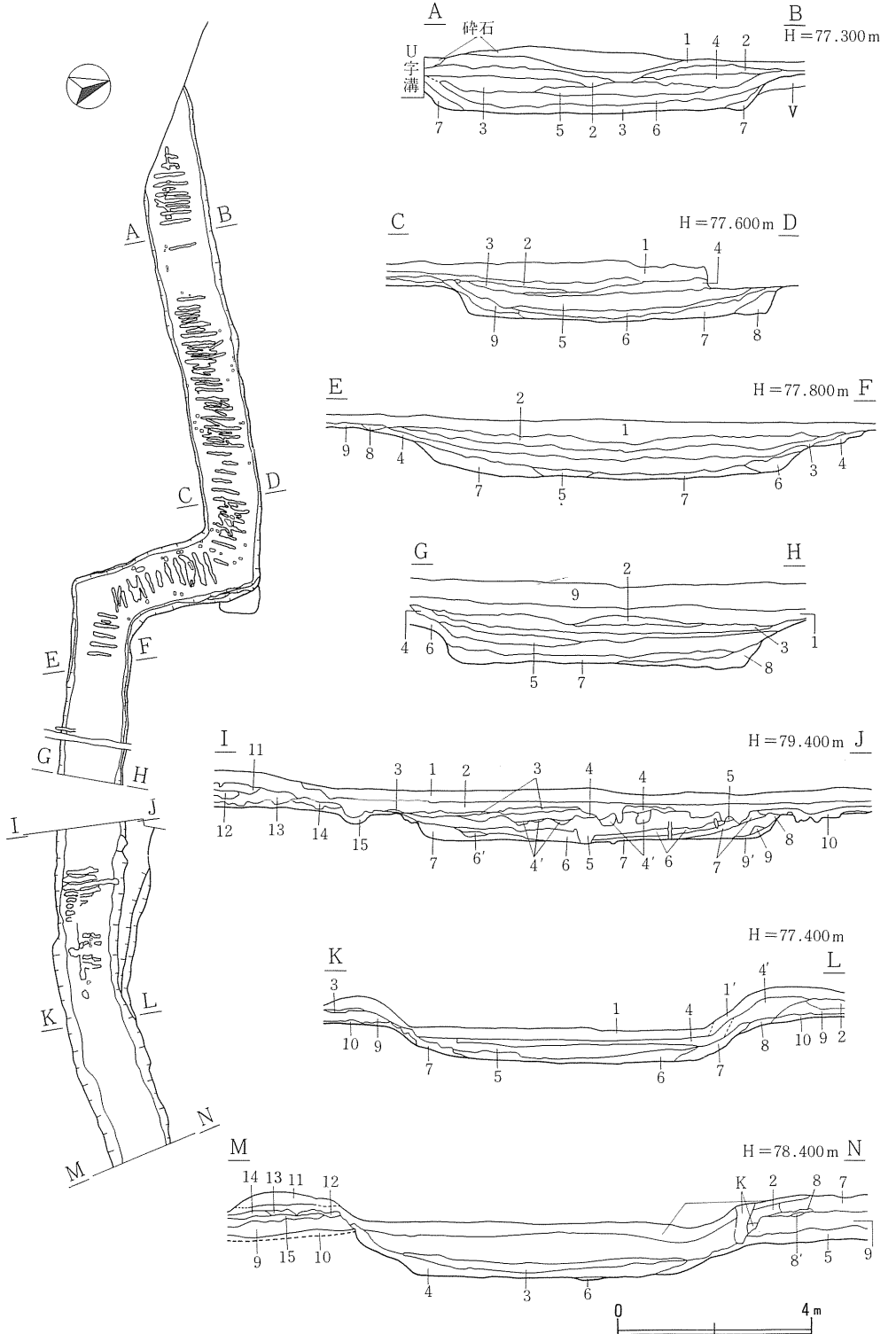
- 1 黒褐 (10Y R^{2/3}) 白色浮石粒混入
- 2 黒褐 (10Y R^{2/3}) 明黄褐色地山粒多量混入
- 3 黒 (10Y R^{3/1}) 礫少量混入
- 4 暗褐 (10Y R^{2/3}) 礫混入
- 5 黒褐 (5Y R^{3/1}) 礫混入
- 6 明黄褐 (10Y R^{5/6}) 礫少量混入 砂質
- 7 褐 (10Y R^{4/6}) 砂質明黄褐色地山土混入礫層
- 8 黒褐 (10Y R^{2/3})
- 9 基本層序第V層

SD 10I - J土層断面註記

- 1 黒 (10Y R^{3/1}) 耕作土
- 2 赤黒 (2.5Y R^{2/1}) 砂礫を霜降り状に混入
- 3 黒褐 (5Y R^{2/2}) 大湯浮石を若干混入
- 4 黒褐 (7.5Y R^{2/3})
- 4' 黒褐 (7.5Y R^{3/1})
- 5 黒褐 (10Y R^{2/2})
- 6 黒褐 (5Y R^{2/2}) ~ 黒褐 (5Y R^{2/2}) ~ 褐 (7.5Y R^{3/4}) が厚さ1~3cmの層をなす
- 7 極暗褐 (7.5Y R^{3/1}) + 黄褐 (10Y R^{5/6}) の混合土
- 8 暗褐 (10Y R^{3/4})
- 9 褐 (10Y R^{4/6})
- 10 黄褐 (10Y R^{5/6}) 土塁や堀壁の崩落土か
- 10' 黒褐 (10Y R^{2/2})
- 11 黒褐 (5Y R^{3/1})
- 12 黒褐 (5Y R^{2/2}) 大湯浮石が混入
- 13 極暗褐 (7.5Y R^{3/1})
- 14 極暗褐 (7.5Y R^{3/1}) 大湯浮石を若干混入
- 15 黒褐 (10Y R^{2/2}) 地山漸移層

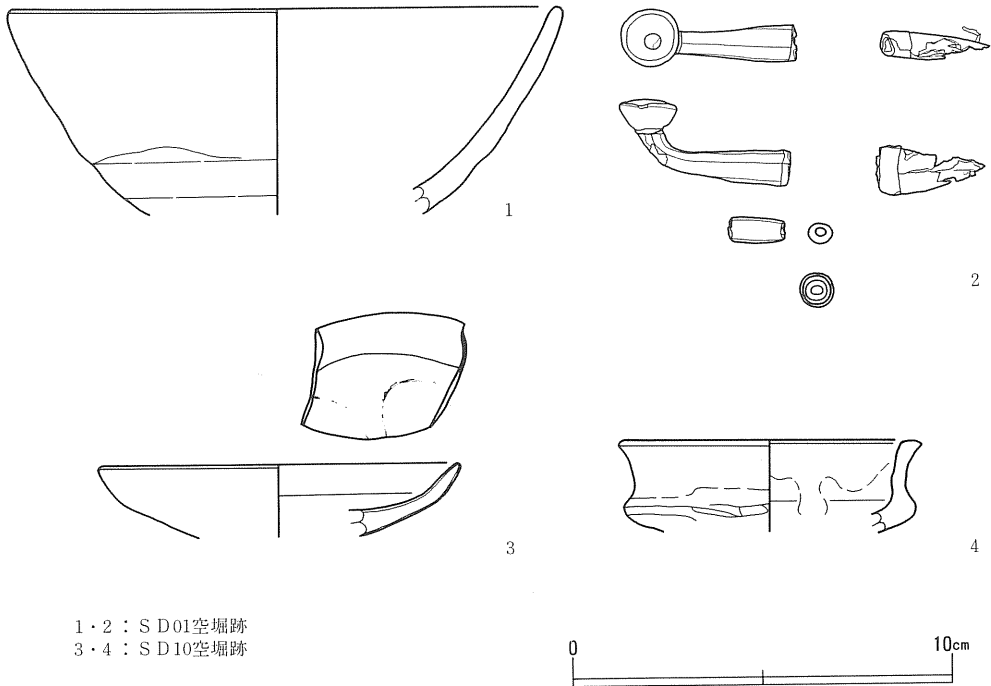
SD 10M - N土層断面註記

- 1 黒褐 (5Y R^{2/2}) 現表土
- 2 黒褐 (5Y R^{3/1}) 炭化物若干混入
- 3 黒褐 (10Y R^{3/1})
- 4 黒褐 (10Y R^{2/3}) 砂礫混入
- 5 4よりも黄褐 (10Y R^{5/6}) が多い
- 6 黒褐 (5Y R^{2/2})
- 7 黒褐 (5Y R^{3/1}) 畑の耕作土
- 8 赤黒 (2.5Y R^{3/1}) ~ 極暗赤褐 (2.5Y R^{2/2})
- 8' 8よりも浮石が少ない
- 9 黒 (5Y R^{3/1})
- 10 黒褐 (5Y R^{3/1}) 地山漸移層
- 11 1に同じ
- 12 極暗褐 (7.5Y R^{3/1})
- 13 8に同じ
- 14 明黄褐 (10Y R^{5/6}) 大湯浮石層
- 15 暗褐 (7.5Y R^{2/3})



第67図 SD10空堀跡

た、西側部分は南東側からの開析谷に続くと推定され、この開析谷もその一部として利用したものと思われる。精査した空堀跡の総延長は118.7m、上幅6.5~7.2m、基底幅5.5~6m、深さ0.5~0.8mで断面形は幅広な箱薬研形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、地形に沿うような形で西側に緩やかに傾斜している。北側屈曲部の東側壁面は、掘削当時の測量ミスによるものか、掘り過ぎを復元している。掘削に際しては、旧表土から地山まで掘り込み、排土は空堀の両側に盛土し、土塁としたものと思われる。その際、南側の旧表土を幅約1m、深さ10~20



1・2 : S D 01空堀跡
3・4 : S D 10空堀跡

第68図 SD 01・SD 10空堀跡出土遺物

cmの「犬走り」状の小テラスを作出している。底面は平坦であるが、堀内が埋まり始めてから空堀に直交するように溝状遺構が掘り込まれている。北側屈曲部の底面には、筋違橋の橋脚を建てたと思われる柱穴群(S M 257橋跡)を検出した。また、南側屈曲部近くの底面には、炭化物が多量に堆積するくぼみも確認した。遺物は白磁皿の小破片1点と瀬戸系の香炉の口縁部破片1点が出土した。白磁皿(第68図3)は見込みに篋掘りの文様がみられる12~13世紀の中国産である。香炉には三つ足が付くと考えられ、室町時代か17世紀のものである。

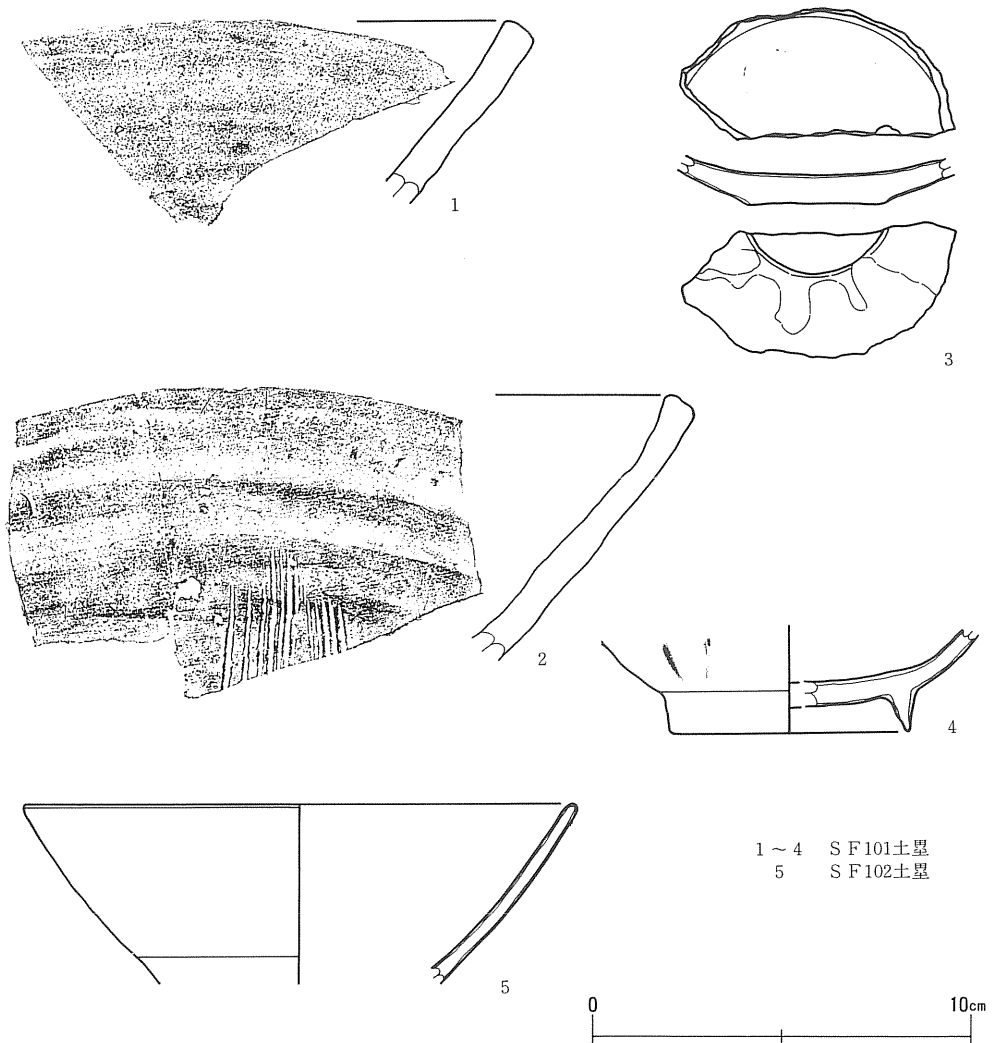
(2) 土塁

8カ所に土塁を確認したが、発掘調査の当初から土塁と認識して調査したのはS D 09空堀跡の両側に盛土されているS F 101とS F 102の2カ所である。S F 251~S F 256は精査の過程で認識できたものである。特にS F 252とS F 253は調査前に黒土の不法採取に遭い土塁

もほとんど削平されており識別できなかったが、調査区外(東側)の杉林部分が原状をとどめており、S D 10空堀跡の両側に盛土された土塁があったことがわかった。S F 254は精査の過程で認識できたものでS D 01空堀跡の南側に存在する。S F 255は農道として使用されていたため第一次調査では確認できなかったが、第二次調査時にS D01空堀跡の北側に盛土の堆積が土層断面に確認できた。S F 256は現況地形ではほとんど確認できなかったが、調査区の壁面の土層断面にかなり崩壊していたのを確認できた(第64図)。

S F 101土塁 (第64・66・69図、図版24・25)

調査区の中央北側を東-西に、S D 09空堀跡の北側に盛土されていた。長さ80.32m、敷(基底幅)4.48~6.08m、高さ0.75~1 m、褶(上幅)1.92~2.24mである。盛土の積み方は「版築」で



第69図 SF101・SF102土塁出土遺物

ある。S D 09空堀跡の底面からS F 101の上面までの高低差は1.56～1.95mである。遺物は、盛土17層から珠洲系陶器の播鉢口縁部破片1点(第69図1)とMT64・MO65グリッドから珠洲系陶器の播鉢口縁部破片各1点(接合し第69図2)、MP63・MR63グリッドの基底面から中国白磁皿底部破片1点と中国白磁碗胴部破片1点、中国青磁碗底部破片1点および銅銭2点〔大観〇寶(順読)と銭名判読不能〕がまとまって出土した。播鉢は轆轤の凹凸が顕著で口縁部の仕上げが鈍く、卸し目が粗雑である。珠洲焼編年Ⅱ期(13世紀前半)に編年される。白磁皿(第69図3)は見込みに線掘り文様がみられる12～13世紀の中国産である。白磁碗(図示せず)は、12～13世紀の中国産である。青磁碗(第69図4)は鎬蓮弁文がみられる13～14世紀前半の中国龍泉窯産。

S F 102土塁 (第64・66・69図、図版24～25)

S D 09空堀跡の南側に盛土されていた。長さ72m、敷(基底幅)4～6.4m、高さ0.65～1.1m、褶(上幅)0.64～1.28mである。空堀側の旧表土が幅0.5～1mの「犬走り」状の小テラスに掘削されていた。盛土の積み方は「版築」である。S D 09空堀跡の底面からS F 102の上面までの高低差は2～2.15mである。遺物は中国白磁碗片1点が出土した。白磁碗(第69図5)は口縁から胴部の破片で、12～13世紀の中国産である。

S F 251土塁 (第64・66図、図版25)

調査区の中央東側、S D 09空堀跡の南側に盛土されていた。長さ約35m、敷(基底幅)3.6～4m、高さ0.65～1mで、断面が「かまぼこ」形を呈する。空堀側の旧表土を2.3～3.3mの幅をテラス状に1mの深さで掘削していた。「山王台遺跡」の発掘調査でも一部調査が行われ、空堀跡の底部から土塁の上面までの高低差は約2mと報告されている。

S F 252・S F 253土塁 (第中64・67図、図版28)

S D 10空堀跡の両側に盛土されたS F 252・S F 253土塁は、調査前の黒土の不法採取のため、全容を確認できなかったが、土層断面図と調査区外に残る盛土からおよその規模を推定できた。長さ約15m、敷(基底幅)2～3m、高さ0.35～0.65mで、断面が「かまぼこ」形を呈する。空堀跡の底部から土塁の上面までの高低差は1.2～1.4mである。

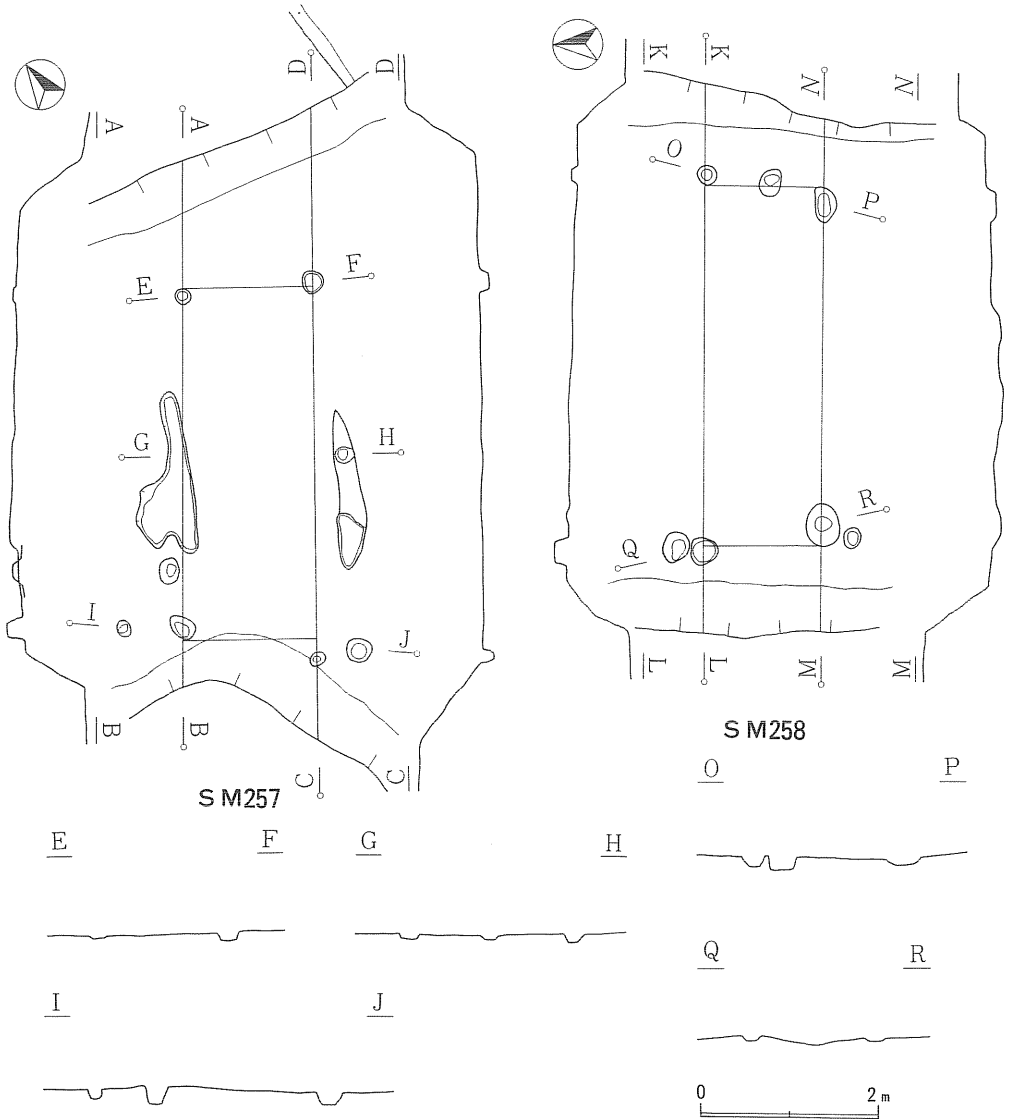
S F 254土塁 (第64・65図、図版22)

調査区の南東側、S D 01空堀跡の南側に盛土されていたが、土層断面図に残るだけである。それによると空堀跡の南側の旧表土を2.2m幅で0.6m掘り下げ、「犬走り」状の小テラスを作出している。その南側に敷(基底幅)2.4mの盛土をしているが、0.4mの高さしか残っていなかった。

S F 255土塁 (第64・65図)

S D01空堀跡の北側に空堀掘削時の排土が堆積していたのを土層断面に確認できたのみであるが、農道の高まりが土塁であったと考えられる。

S F 256土塁 (第64・65図)



第70図 SM257・258橋跡

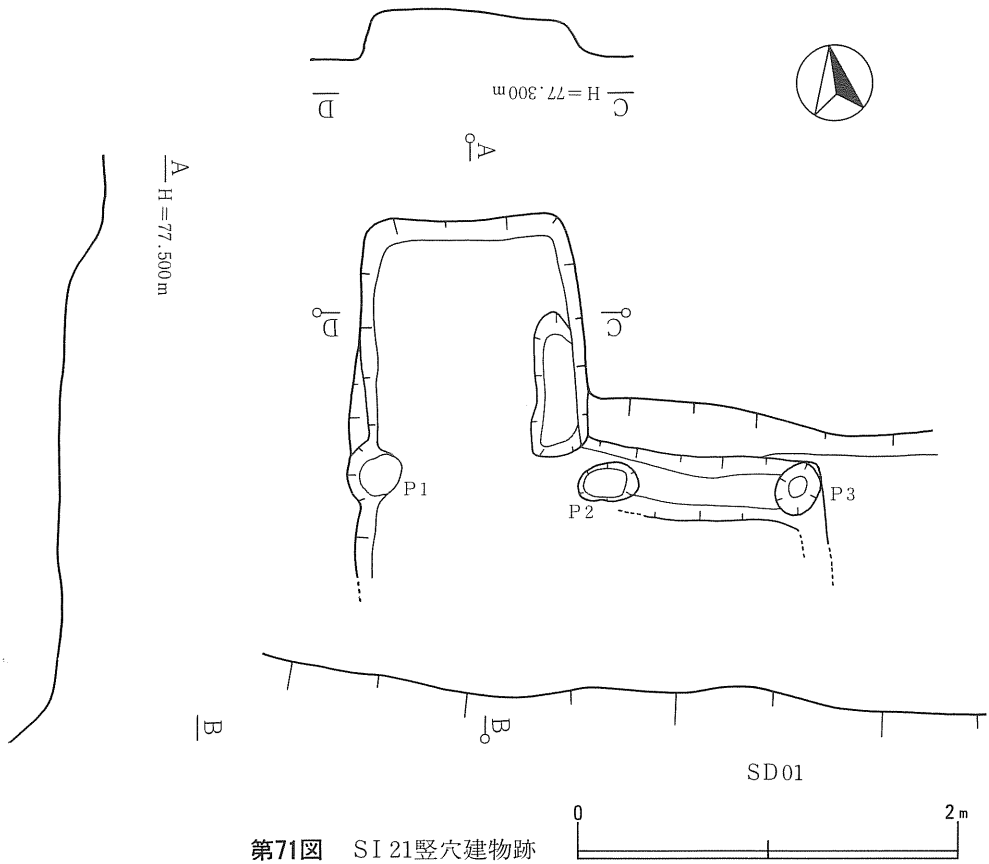
ほとんど崩壊しているため、当初は土塁であると認識できなかった。SD 01空堀跡の北側に盛土されていたのが調査区域外の土層断面に僅かにその痕跡が残るだけである。

(3) 橋跡

橋跡は2カ所検出したが、いずれもSD10空堀跡の北側屈曲部に架かる木橋と想定される。新旧関係はつかめなかった。また、柱穴はあまり深くなかった。

SM257橋跡 (第70図、図版27)

MH64・65グリッドの、SD10空堀跡の北側屈曲部の底面に橋脚のものと考えられる柱穴群



第71図 SI 21 竖穴建物跡

を検出した。3 対の橋脚で支える木橋と思われる。屈曲部に架かることから所謂「筋違橋」と分類されるものである。

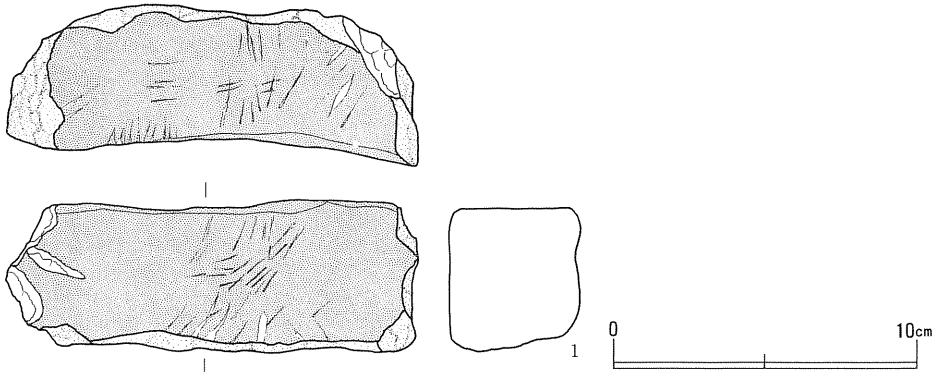
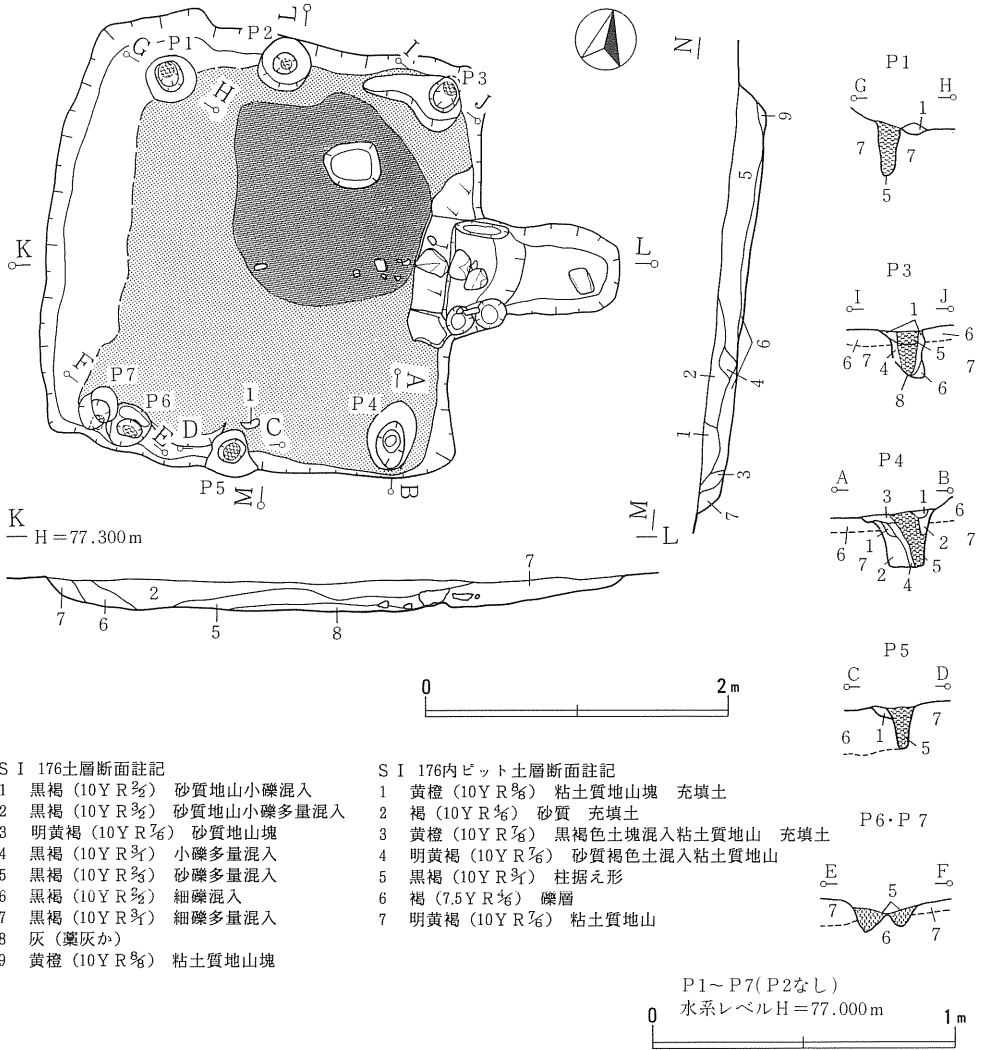
SM258 橋跡 (第70図、図版27)

MH64・65 グリッドの、SD10 空堀跡の北側屈曲部から僅かに南よりの底面に橋脚のものと考えられる 4 本の柱穴を検出した。2 対の橋脚で支える木橋と思われる。

(4) 竖穴建物跡

SI 21 竖穴建物跡 (第71図、図版20)

LO39・40 グリッドで検出したが、SD 01 空堀跡により南側の大部分を掘り込まれており全容は不明である。しかし、残っている北側壁の北西隅部に付属する幅、長さとも 120cm の方形張り出し部を出入り口と見れば、中世に属する竖穴建物跡と見ることができる。柱穴を 3 本確認しているが、P2 が約 20cm の深さをもつが他の 2 本は数 cm の浅いものである。床面には、地山の礫が露出してやや凹凸があり、かたくしまっている部分はない。北側壁の東側下方と、張り出し部の東側壁下方の床面には幅 20~24cm の壁溝が存在する。遺物は出土しなかった。



第72図 SI 76竖穴建物跡・出土遺物

S I 176 竪穴建物跡(第72図、図版20)

MJ65・MK65グリッドに位置し、SF 101土塁の盛土下位のVI層(地山漸移層)上面で検出した。北側壁250cm、東側壁258cm、南側壁256cm、西側壁270cmの方形プランを呈し、東側壁の中央部に幅58cm、長さ104cmのU字形張り出し部をもっている。各壁面とも外傾して立ち上がっており、壁高は北側壁19～22cm、東側壁11～20cm、南側壁16～18cm、西側壁14～19cmを測る。地山の砂礫層(VIB)まで掘り込んでいるため、床面は西側壁下方の幅40cmを除き黄褐色粘質土で貼り床している。床面積は8.2㎡である。また、東側壁の張り出し部分との接続部分の手前には、幅120cm、奥行き24cmで15°の上り傾斜をもつスロープが作られており、張り出し部分の床面も接続部から48cmの範囲が平坦でその先(東側)が8°の上り傾斜となっている。柱穴は、北側壁下方に3本(P1～P3)、南側壁下方に4本(P4～P7)、北東側床面に1本(P8)、張り出し部分では北側に1本(P9)、南側に2本(P10・P11)検出した。P1～P6+P7、P2～P5、P3～P4、P9～P10+P11と対になるよう配置されている。P1～P7の柱痕周囲には黄褐色粘質土が厚く盛られ、柱が倒れないよう頑強に踏み固められていた。床面の北東側、東西130cm、南北140cmの不整円範囲に禾本科植物の灰が最厚4.2cmで堆積しP8を覆っていた。遺物は南側壁下方床面上に砥石1点(第72図1、砥面2)と、張り出し部内とその近辺の埋土中から礫が14点出土したにとどまる。

(5) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、43棟を検出した(第73図～81図、第2・3表)。

この掘立柱建物跡については、五十嵐典彦氏に分析とコメントをお願いした。

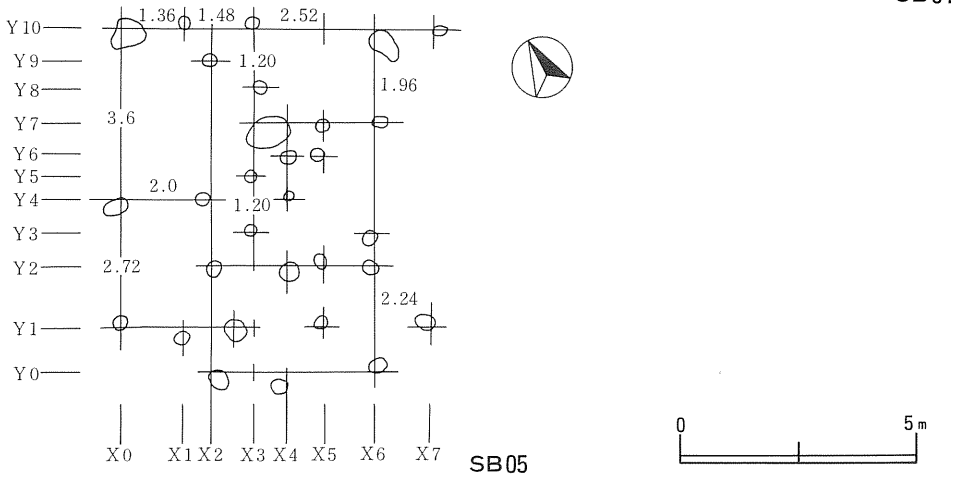
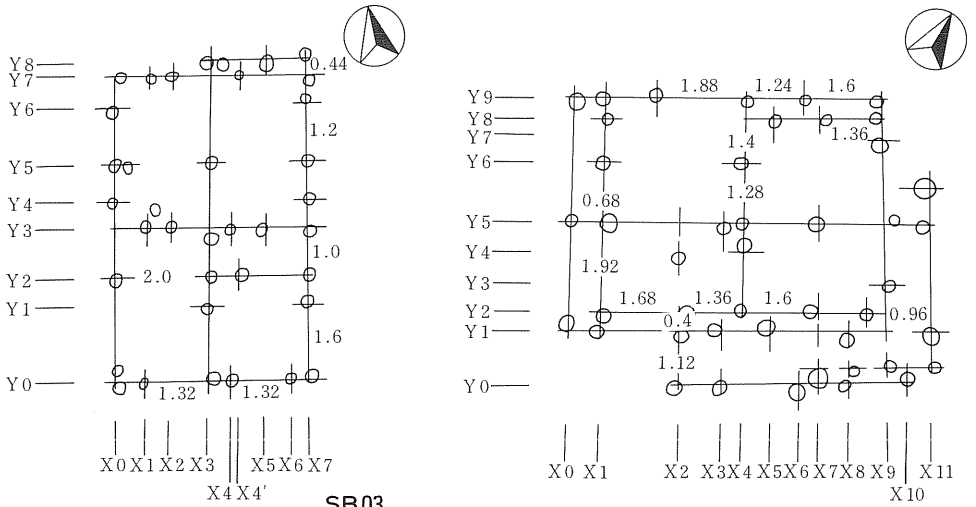
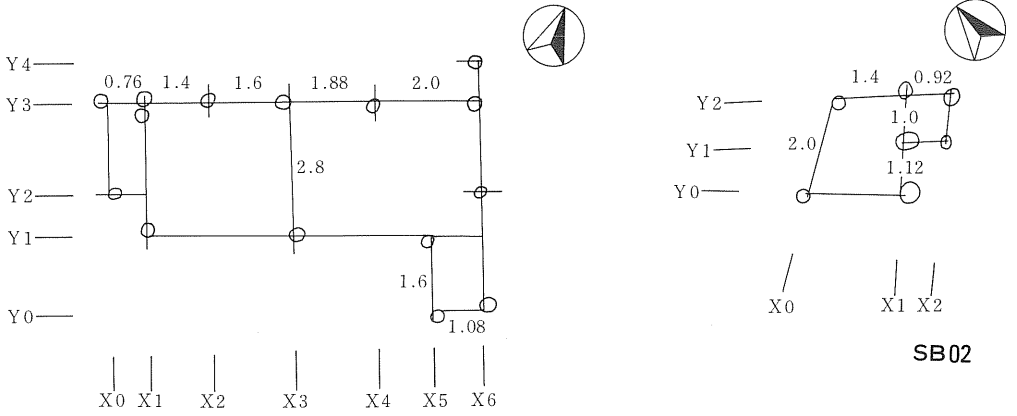
山王岱遺跡の掘立柱建物跡について

県立由利工業高等学校 五十嵐典彦

はじめに

山王岱遺跡は『秋田県の中世城館』(秋田県教育委員会)で「餌釣館」とされた日吉神社境内地と空堀を境にして、その北東側台地に広がっている。

当遺跡を平成3年8月に訪問し、秋田県埋蔵文化財センターの桜田隆文化財主査から現地を案内して頂き、丁寧な説明を受けたが、そのときSD 09・10の空堀跡と土塁、遺跡中央を横断する溝、竪穴住居跡、土坑そして掘立柱建物跡とみられる柱穴が多数検出されていた。桜田文化財主査の説明と地形を見た印象から、山王岱遺跡は「餌釣館」に対して、Ⅲ郭ないしはⅣ郭に当たるのではないかという感想をもった。



第73図 掘立柱建物跡(1)

桜田文化財主査から提供を受けた実測図を見ると、掘立柱建物跡と思われる柱穴群はSD 09空堀跡の東南、SD 09・10空堀跡の間の枡形に屈折する東端部、SD 10空堀跡の北側中央部の3箇所にはほぼ集中している。なお掘立柱建物跡の建築年代は出土遺物等の年代鑑定から、14世紀前後と考えてよさそうである。

以上のことを考え合わせて、当遺跡の掘立柱建物跡は「餌釣館」に関連する殿舎と付属舎ないしは家臣団の住宅と付属舎であろうという前提で検出を行った。

掘立柱建物跡の検出

掘立柱建物跡43棟、板塀などの柵列11条を検出したが、その中の建物だけについて概略を記す。

SB 01掘立柱建物跡はSD 09空堀跡が鍵形に折れ曲がる南東隅で検出された。Y₃通りの柱筋がよく通り、柱間隔にも不都合がない。それに対応するY₁通りの柱間隔は10尺と広いが、柱筋は通っている。梁行1.5間、桁行4間の主屋に小さい張り出しを付設している。2部屋に分割される小住宅と思われる。

SB 02掘立柱建物跡はSB 01掘立柱建物跡のすぐ北側で検出された。1間×1間の主屋に半間の張り出しが付いている。建物の種類としては湯屋などが考えられる。

SB 03掘立柱建物跡はSB 04掘立柱建物跡と重複しており、SD 09空堀跡が鍵形に折れ曲がるすぐ西側で検出された。X₆、X₃、X₇の各通りの柱筋がよく通り、梁行はX₃の中央柱列によって分割される。相対する柱配置もほぼそろっている。梁行2間、桁行4間前後の矩形平面である。間取りはいま一つ明確にできなかったが、住宅と思われる。

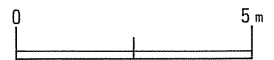
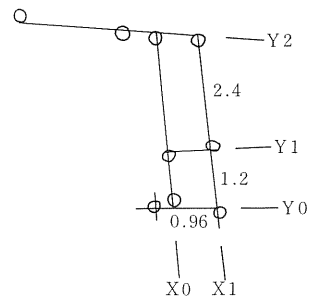
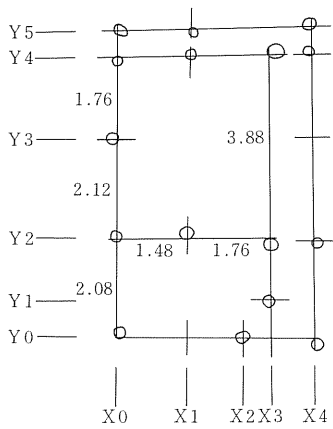
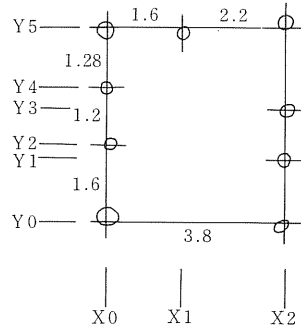
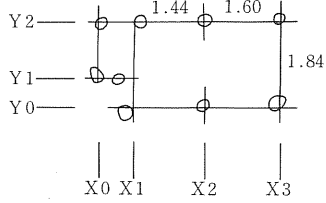
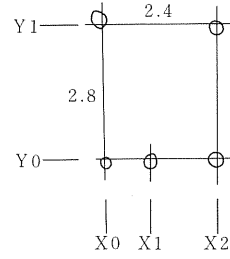
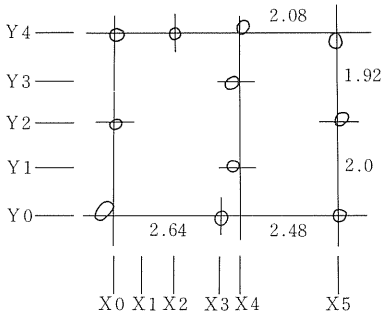
SB 04掘立柱建物跡は間取り形式から判断して建築年代がSB 03掘立柱建物跡の後と考えられる。梁行、桁行ともSB 03掘立柱建物跡より1間ずつ広がっている。主屋の三方に庇縁をまわす。Y₁通りとY₂通りの間隔が1.3尺と狭く、これをどう解釈するかが問題点であり、また隅柱になる(X₃, Y₁), (X₃, Y₂)のどちらにも柱穴が欠けていることが検出を困難にした。ほぼ正方形に近い間取りの中規模住宅である。

SB 05掘立柱建物跡はSB 06掘立柱建物跡と重複して、SD 09空堀跡の南側で検出された。X方向の柱筋は比較的良好に通っているが、柱間隔がやや飛びすぎており、そのためにY方向の柱が対応しない箇所がみられる。間取りは中廊下を境に五間取りの住宅である。

SB 06掘立柱建物跡は2間×2間前後のきちんとした矩形平面として検出された。Y軸の柱間寸法が6.5尺前後で四隅にきちんと柱が立っている。二間取り程度の住宅と思われる。

SB 07掘立柱建物跡はSB 06掘立柱建物跡の北東、SD 09空堀跡の南縁で検出された。1間×1間で、これも柱が四隅にきちんと納まる。納屋などが考えられる。

SB 08掘立柱建物跡はSD 09空堀跡とSD 10空堀跡がちょうど枡形をなすところで検出



第74図 掘立柱建物跡(2)

された。SB 09・10掘立柱建物跡と合わせて3棟が重複している。SB 08掘立柱建物跡は1間×2間の小規模な建物であるが、柱の配列は整然としている。小さな張り出しをもつ。納屋などの付属舎であろう。

SB 09掘立柱建物跡は2間×3間の規模で、柱筋の通りはよいが X_0 と X_2 の柱が対応せず、また X_0 ～ X_2 の柱間隔が飛びすぎている。そのため間取りの推定が難しく、建物の種別が判然としない。

SB 10掘立柱建物跡は2.5間×3.5間のきちんとした矩形平面で、二方向に底縁をまわしている。 (X_3, Y_0) の隅柱が欠けている。また、 X_3 通りの Y_2 ～ Y_4 の柱間隔が飛び過ぎている。二間取りに縁をまわした住宅と思われる。

SB 11掘立柱建物跡はSB 09・10掘立柱建物跡と重複して検出された。梁行がきわめて狭いために、衝立のように細長い建物である。雑舎にしてもせいぜい小屋掛け程度のものであろう。

SB 12掘立柱建物跡はSB 09掘立柱建物跡の西側に隣接した所でSB 13掘立柱建物跡と重複して検出された。柱の配列に問題を残す。1間四方の張り出しを付ける。蔵などが想定される。

SB 13掘立柱建物跡は梁行が狭く細長い建物であるが、柱配置はきれいである。厩などが考えられる。

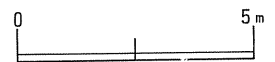
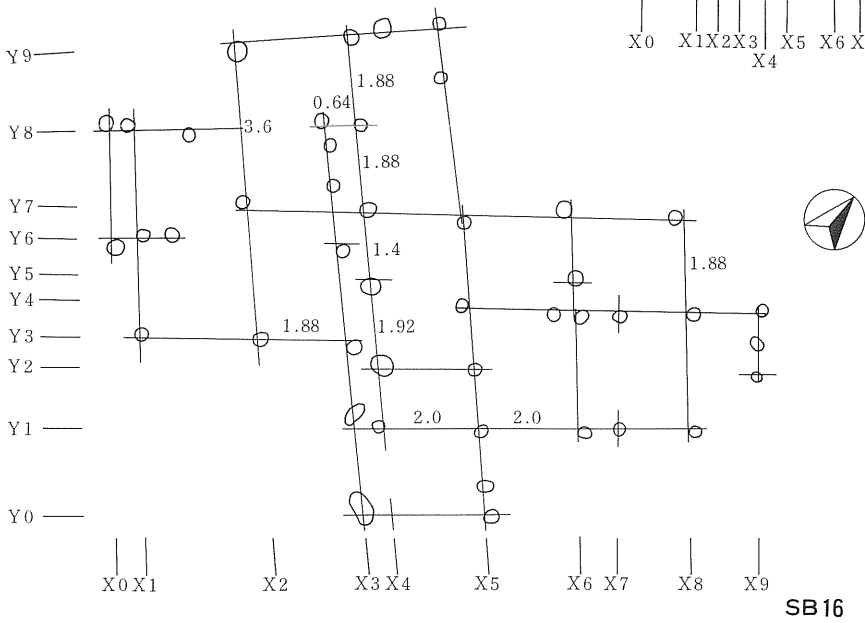
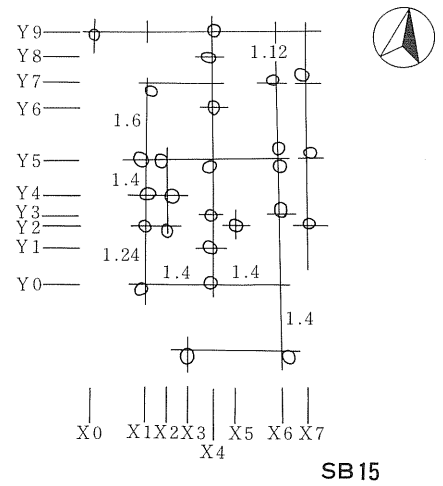
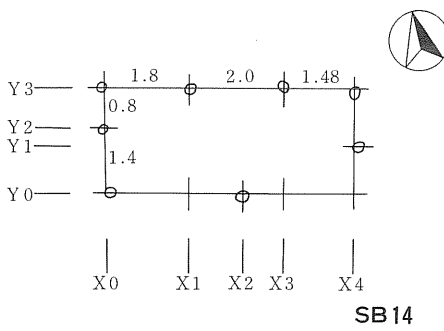
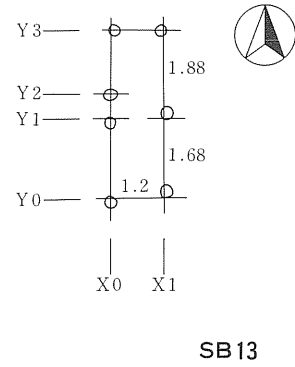
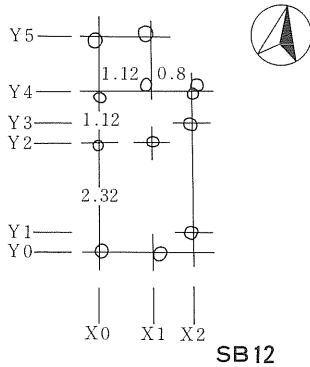
SB 14掘立柱建物跡はSB 12掘立柱建物跡の北側で検出された。2間×3間の矩形平面であり、 Y_3 通りの柱筋がよく通っている。 Y_0 通りの柱が Y_3 通りの柱と対応せず、 (X_4, Y_0) に隅柱が欠けている。蔵などが考えられる。

SB 15掘立柱建物跡はSB 08掘立柱建物跡の北に隣接して検出された。 X_1, X_4, X_6, X_7 の各通りの柱筋はよく通っているが、配置が不正確でお互いの対応が必ずしも一致しない。また Y 通りの各柱位置も判然とせず、間取りの検出に曖昧さが残った。釜屋などが想定される建物である。

SB 16掘立柱建物跡はSD 09空堀跡とSD 10空堀跡の間で検出された。当遺跡の中では比較的大きい建物である。SB 17・18掘立柱建物跡と重複して検出された。 X_5 通りの Y_7 ～ Y_9 が Y_7 通りに対してゆがみがあるため、別の建物かと検討したが、 X_2, X_3, X_4 の各通りが Y_7 通りをつないでよく通るため同一の建物とした。凹凸の多い間取りであるが、 $(X_3$ ～ $X_8) \cdot (Y_7$ ～ $Y_9)$ で形づくられる主屋に対して、他の部屋が鍵形に接続している。住宅ないしは役所なども想定される建物である。

SB 17掘立柱建物跡はSB 16・18掘立柱建物跡と重複して検出された。8尺近い1間四方の主屋の二方向に底をめぐらした建物で、湯殿ないしは蔵などが考えられる。

SB 18掘立柱建物跡はSB 16・17掘立柱建物跡と重複して検出された。梁行1間、桁行3



第75図 掘立柱建物跡(3)

間の細長い建物で、廡などが考えられる。

S B 19掘立柱建物跡はS B 16掘立柱建物跡の西側で検出された。 Y_2 通りの柱の並びがよいが、 $(X_1 \sim X_5) \cdot (Y_0 \sim Y_1)$ で形づくられる部屋が、 (X_1, Y_0) の柱が欠けていることも含めて曖昧であり、全体の間取りがいま一つ明瞭さを欠く。中央の廊下の両側に2部屋を配置する間取りは釜屋などが想定されようか。

S B 20掘立柱建物跡はS D 10空堀跡北側で検出された。1間×2間の小規模な建物であるが、柱配置は明瞭である。なおこの建物に接続するかと思われる柱穴が周囲に点在しているので、いろいろ検討を加えたが、いま一つ接続に判然としないところがあったので、この建物だけで検出した。蔵などが考えられる。

S B 21掘立柱建物跡はS B 20掘立柱建物跡の北側で検出された。規模は当遺跡の中では比較的大きく、間取りも明瞭である。 $(X_7 \sim X_{10}) \cdot (Y_6 \sim Y_9)$ で形づくられる部屋が X_7 通りで接続がやや曖昧であったため検討を加えたが、 Y_6 通りの柱筋がよく通るため1棟とみなした。主殿と考えてもよい建物である。

S B 22掘立柱建物跡はS B 21掘立柱建物跡の東側に隣接して検出された。 (X_1, Y_1) の柱が欠けているなど柱配置が不揃いであるが、 $(X_0 \sim X_1) \cdot (Y_0 \sim Y_5)$ で形づくられる庇縁をもつ整然とした間取りである。短い中門廊が突き出した形式で、主殿に準ずる建物か家臣の住宅などが考えられる。

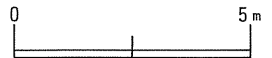
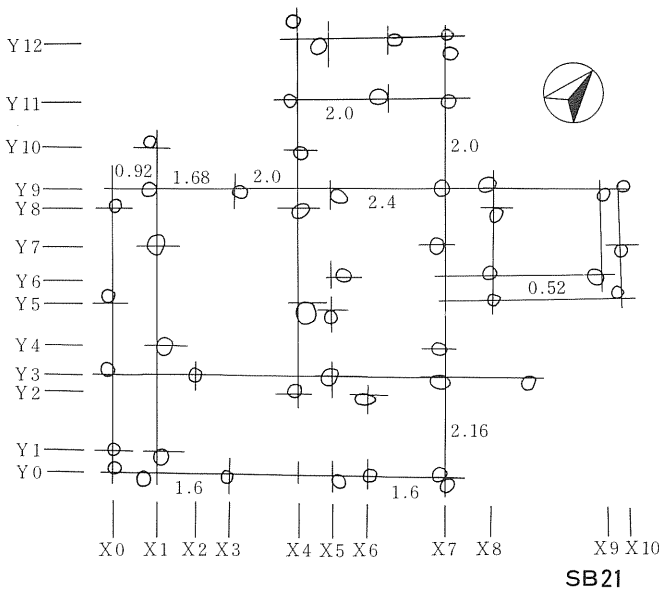
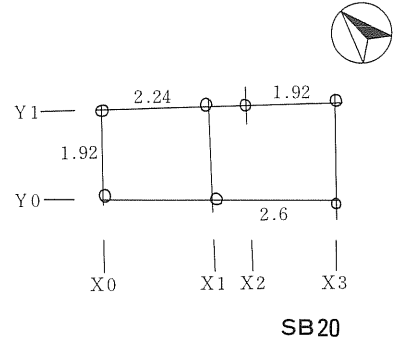
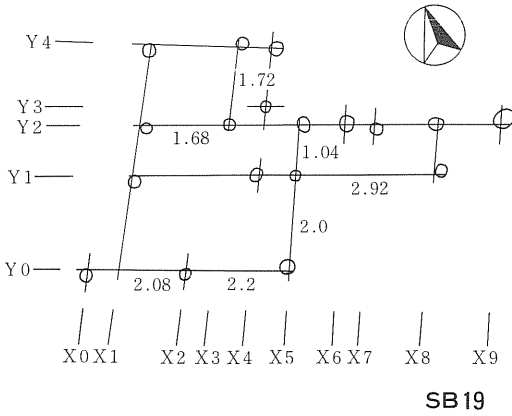
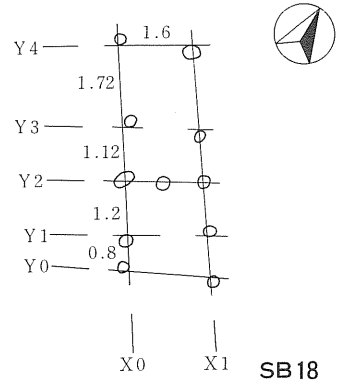
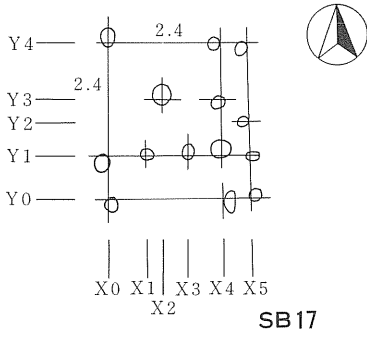
S B 23掘立柱建物跡は隅柱がS B 21・22掘立柱建物跡と重複して検出された。 $(X_3 \sim X_{11}) \cdot (Y_2 \sim Y_5)$ で形づくられる主屋に、張り出しを付設した建物である。3間×5.5間であるが、柱間隔が大きいので比較的規模の大きい建物である。間取り形式の曖昧さから推して、S B 21・22掘立柱建物跡の前身建物と考えられる。

S B 24掘立柱建物跡はS B 23掘立柱建物跡の北西に隣接して検出された。1間×2間の細長く小規模な建物である。廡、納屋などの雑舎であろう。

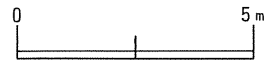
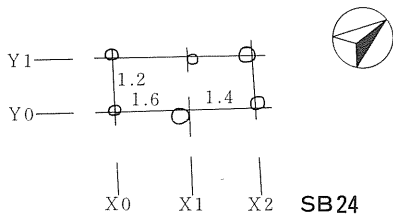
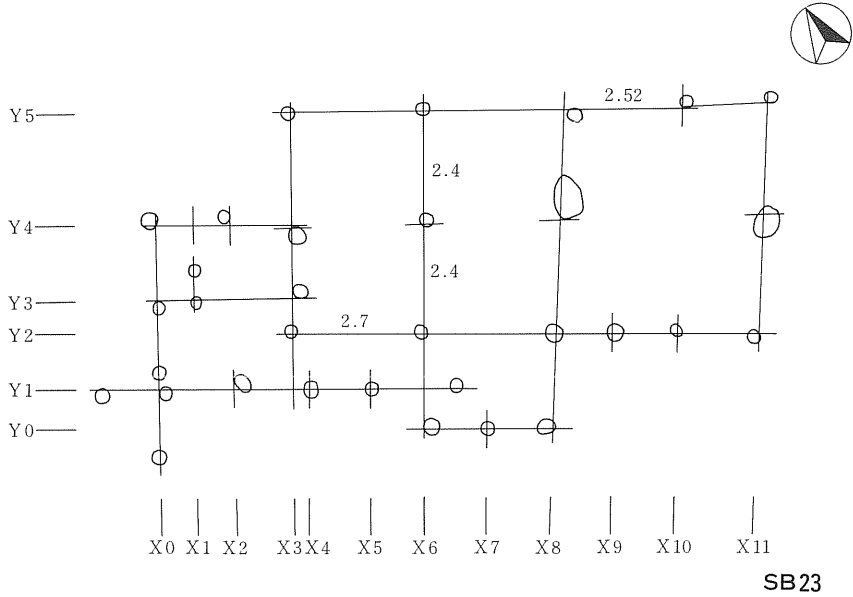
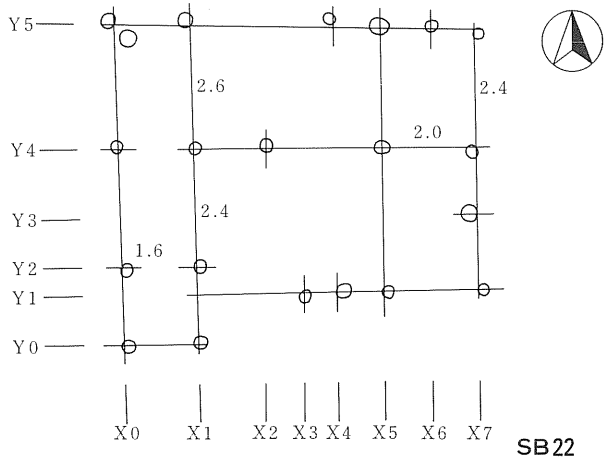
S B 25掘立柱建物跡は遺跡中央部東端で検出された。各通りの柱筋がよく通り、位置もほぼ等間隔である。このように、当遺跡の中では最も明瞭な建物であり、間取りもすっきりしている。ただ、 (X_1, Y_4) の柱が欠けている。間取り形式からして、主殿に準じる建物か家臣の住宅などが想定される。

S B 26掘立柱建物跡はS B 23掘立柱建物跡とS B 25掘立柱建物跡の間に挟まれ、S B 27掘立柱建物跡と柱一本が重複している。1間×2間の小規模な建物で、廡、納屋などの雑舎であろう。

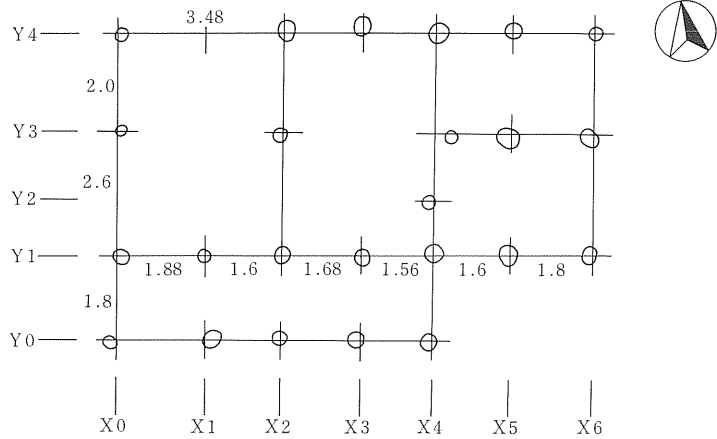
S B 27掘立柱建物跡はS B 25掘立柱建物跡とS B 26掘立柱建物跡に挟まれ、それぞれと部分的に重複している。この建物もまた1.5間×2間の小規模なもので、納屋などであろう。



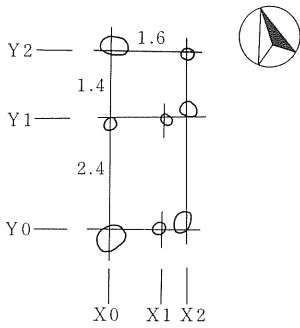
第76図 掘立柱建物跡(4)



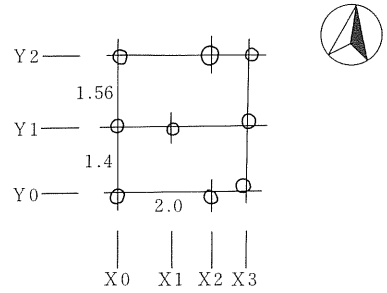
第77図 掘立柱建物跡(5)



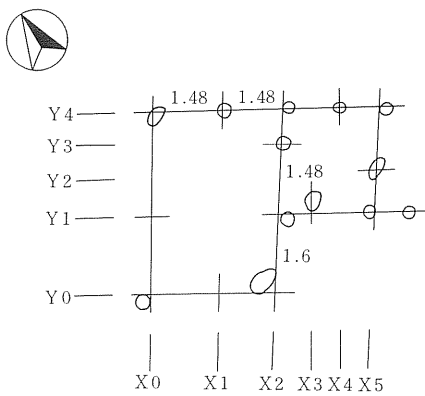
SB25



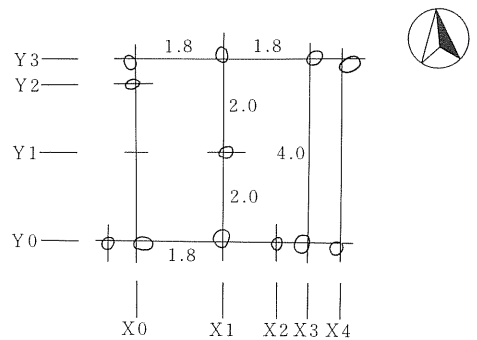
SB26



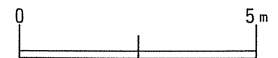
SB27



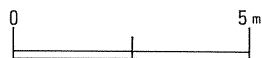
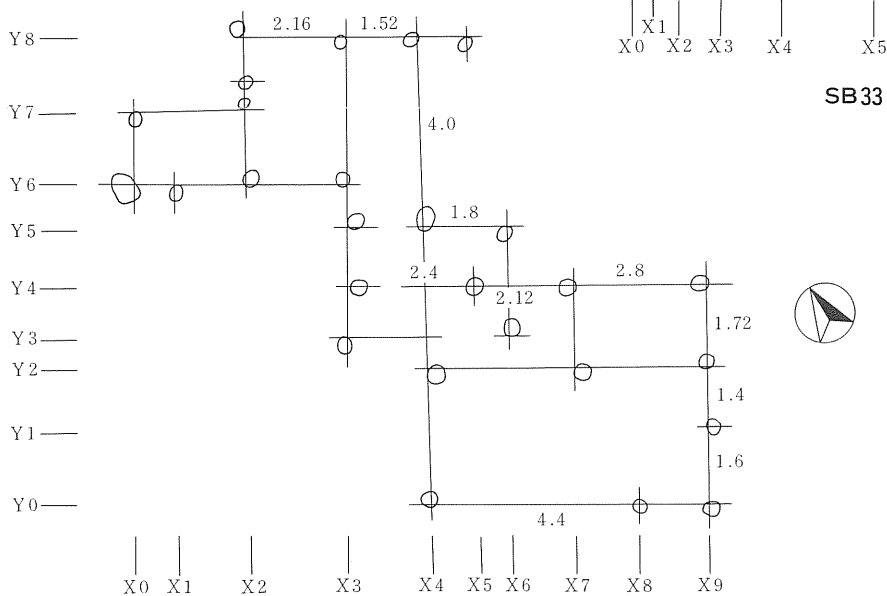
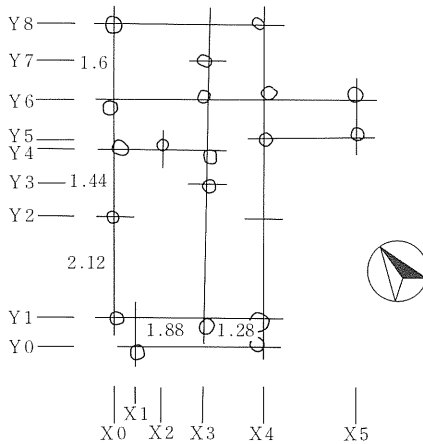
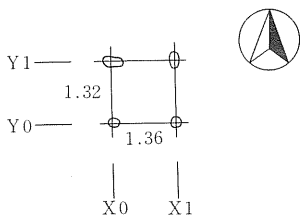
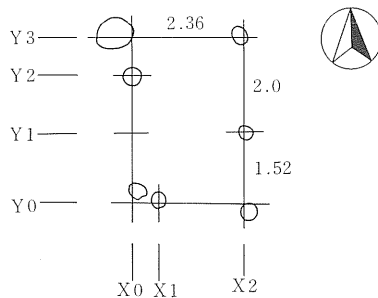
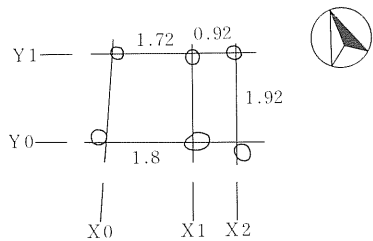
SB28



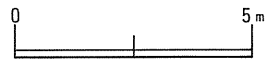
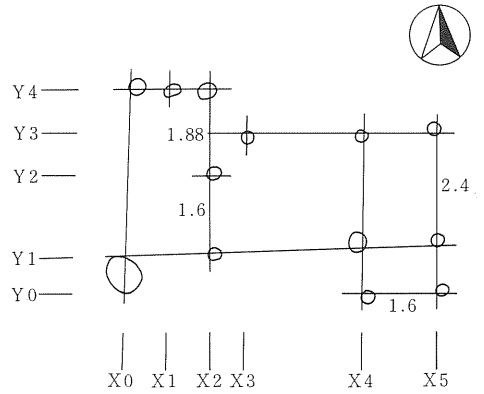
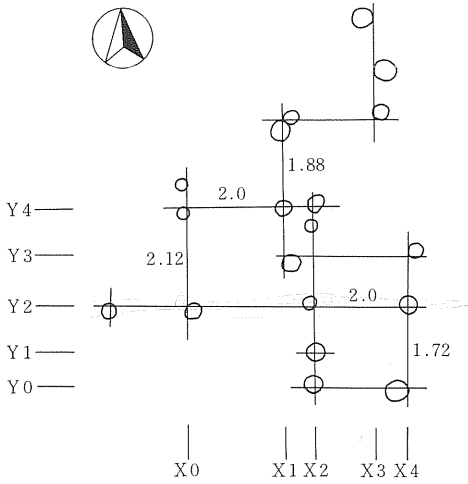
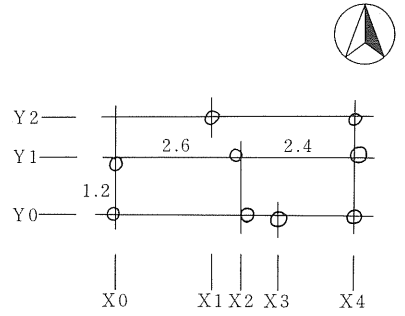
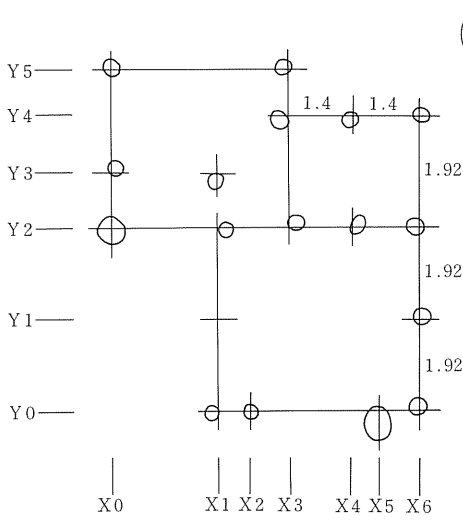
SB29



第78図 掘立柱建物跡(6)



第79図 掘立柱建物跡(7)



第80図 掘立柱建物跡(8)

S B 28掘立柱建物跡はS B 26掘立柱建物跡の北側に隣接して検出された。 (X_0, Y_1) の柱が欠けているため間取りが明瞭でないが、 $(X_0 \sim X_2) \cdot (Y_0 \sim Y_4)$ で形づくられる主屋から鍵形に1部屋を付設した建物と考えてよさそうである。小住宅などが想定される。

S B 29掘立柱建物跡はS B 25掘立柱建物跡のやや北西部で検出された。2間×2.5間の単純な矩形である。 Y_0 、 Y_3 の各通りの柱筋はよく通っているが、 Y_1 通りに柱がなく1間が13尺を越える。このため間取りの想定は曖昧である。

S B 31掘立柱建物跡はS B 30掘立柱建物跡の北側で検出された。1間ないし1.5間に2間の建物で、蔵などが想定される。

S B 32掘立柱建物跡はS D 10空堀跡のほぼ中央部の北側で検出された。1間×1間のほぼ正方形であり、矢倉などが想定される建物である。

S B 33掘立柱建物跡はS D 10空堀跡の北側で検出された。部分的に角柱が混在する。 X_0 通りと Y_0 通りの柱列はよく揃っているが、 X_3 通りと X_4 通りの柱間隔にばらつきがあり、 (X_0, Y_2) の柱に対応する X_3 通りと X_4 通りに柱が欠けている。家臣の住宅などが考えられる建物である。

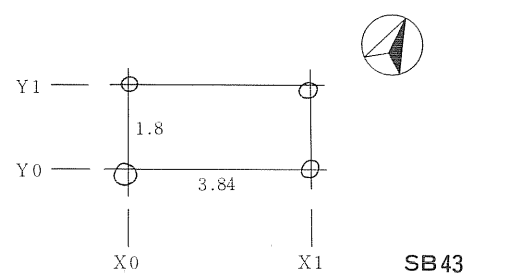
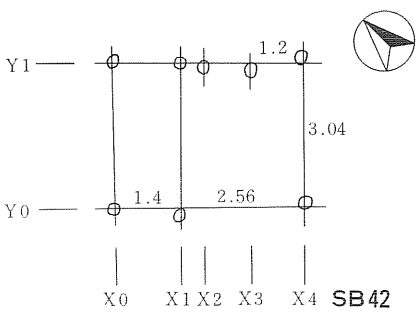
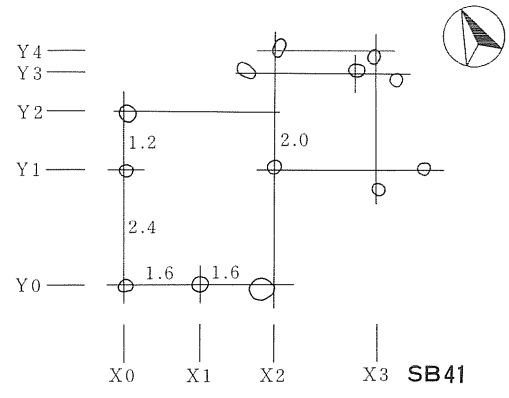
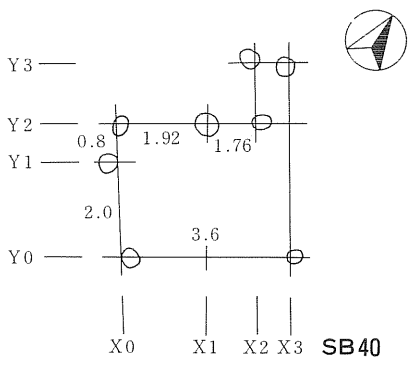
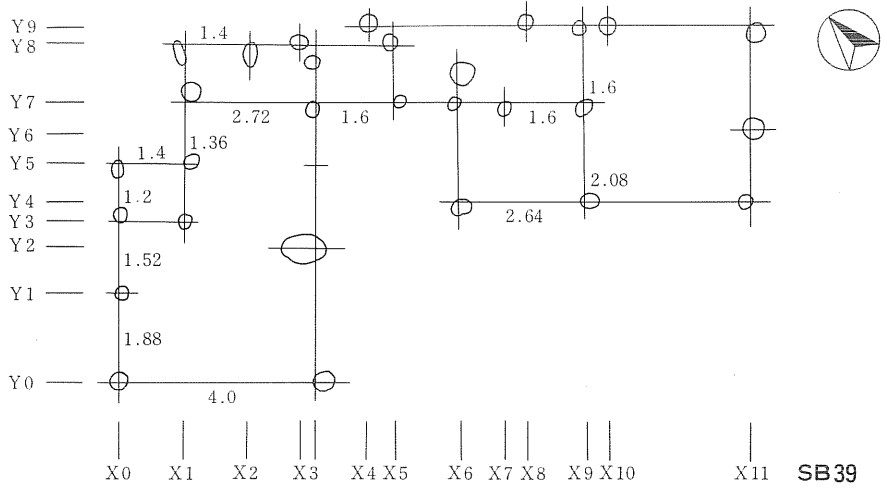
S B 34掘立柱建物跡はS B 33掘立柱建物跡の東側に隣接して検出された。棟と棟が雁行形に接続する。 Y_0 通りでS B 35掘立柱建物跡と接続して、さらに規模の大きい建物になる可能性を秘めていたが、接続部をよく検討した結果、柱筋の一致が不明瞭なので2棟として扱うことにした。興味深い間取り形式であり、会所や家臣屋敷などが想定される。一部の柱が飛び過ぎているのが気になる。

S B 35掘立柱建物跡はS B 34掘立柱建物跡と隅の一部が重複する。 X_0 通りと Y_2 通りは柱筋がよく通り、柱間隔もほぼ等間に配置されている。 (X_1, Y_1) の柱が欠けており、 Y_0 通りの柱間隔も広すぎる。S B 34掘立柱建物跡と同時期の建物とすれば建物種別も関連させて考えなければならないが、現段階でははっきりした解答は出せない。

S B 36掘立柱建物跡はS B 33掘立柱建物跡の北に隣接して検出された。当初、すぐ北側にあるS B 37掘立柱建物跡と一体の建物として検討し、雁行形に連なる殿舎のように思えたが、再度検討した結果、S B 37掘立柱建物跡の Y_0 通りとの接続が不自然であり、2棟に分割して検出したものである。細長い建物で、廐などが想定される。

S B 37掘立柱建物跡はS B 36掘立柱建物跡の北に隣接して検出された。柱筋の通りが明瞭でないため、 $(X_2 \sim X_3) \cdot (Y_0 \sim Y_3)$ と $(X_0 \sim X_2) \cdot (Y_2 \sim Y_4)$ で形づくられる2部屋が鍵形に連続する以外に、間取りとして把握することが出来ず、中途半端な印象は否めない。そのため建物の種別も判然としない。

S B 38掘立柱建物跡は遺跡西端部でS B 39掘立柱建物跡と重複して検出された。平面は一



第81図 掘立柱建物跡(9)

部張り出しを付けているが、単純な形である。柱間隔に難点があり、とくにX₀通りは飛び過ぎてている。小規模住宅のようである。

第2表 掘立柱建物跡基準柱間一覧表

遺構名	X 軸		Y 軸		規 模 間×間	遺構名	X 軸		Y 軸		規 模 間×間
	m	尺	m	尺			m	尺	m	尺	
S B 01	1.720	5.68	1.920	6.33	1.5×4	S B 23	2.680	8.84	2.400	7.92	3×5.5
02	1.700	5.61	2.060	6.80	1×1	24	1.500	4.95	1.200	3.96	1×2
03	2.000	6.60	1.600	5.28	2×4	25	1.667	5.50	2.133	7.04	3×6
04	1.600	5.28	1.920	6.34	3×5	26	1.600	5.28	1.400	4.62	
05	2.000	6.60	1.960	6.47	3×3.5	27	2.000	6.60	1.480	4.88	1.5×2
06	2.560	8.45	1.960	6.47	2×2	28	1.480	4.88	1.540	5.08	2.5×2.5
07	2.400	7.92	2.800	9.24	1×1	29	1.800	5.94	2.000	6.60	2×2.5
08	1.520	5.02	1.840	6.07	1×2	30	1.760	5.81	1.920	6.34	1×1.5
09	1.900	6.27	1.360	4.49	2×3	31	2.360	7.79	1.760	5.81	1×2
10	1.620	5.35	1.987	6.56	2.5×3.5	32	1.360	4.49	1.320	4.36	1×1
11	0.960	3.17	1.200	3.96	1×2	33	1.880	6.20	1.720	5.68	2×4
12	1.120	3.70	1.120	3.70	2×3	34	2.440	8.05	1.573	5.19	5.5×6.5
13	1.200	3.96	1.780	5.87	1×2	35	1.400	4.62	1.920	6.34	3.5×4
14	1.760	5.81	1.100	3.63	2×3	36	2.500	8.25	1.200	3.96	1.5×2
15	1.400	4.62	1.400	4.62	2.5×5	37	2.000	6.60	1.920	6.34	2×2.5
16	2.000	6.60	1.880	6.20	5.5×5.5	38	1.600	5.28	1.740	5.74	2×4
17	2.400	7.92	2.400	7.92	1.5×1.5	39	1.600	5.28	1.700	5.61	4.5×7
18	1.600	5.28	1.613	5.32	1×3	40	1.840	6.07	2.000	6.60	1.5×2
19	1.680	5.54	1.720	5.68	3×3.5	41	1.600	5.28	1.800	5.94	2×3
20	2.420	7.99	1.920	6.34	1×2	42	1.320	4.36	3.040	10.03	1×2
21	2.027	6.69	2.160	7.13	4.5×5.5	43	1.920	6.34	1.800	5.94	1×2
22	2.000	6.60	2.400	7.92	3×4						

第3表 掘立柱建物跡 柱穴深さ一覧表（深さはcm表示）

S B01掘立柱建物跡

柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₂)	17	90	(X ₀ , Y ₃)	13	80	(X ₁ , Y ₁)	29	102	(X ₁ , Y ₃)	9	79
(X ₁ , Y ₃)	13	82	(X ₂ , Y ₃)	12	73	(X ₃ , Y ₁)	12	76	(X ₃ , Y ₃)	9	68
(X ₄ , Y ₃)	29	102	(X ₅ , Y ₀)	12	82	(X ₅ , Y ₁)	14	68	(X ₅ , Y ₀)	20	72
(X ₆ , Y ₂)	13	65	(X ₆ , Y ₃)	15	68	(X ₆ , Y ₄)	12	66			

S B02掘立柱建物跡

柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	21	92	(X ₀ , Y ₂)	18	84	(X ₁ , Y ₀)	12	72	(X ₁ , Y ₁)	7	67
(X ₁ , Y ₂)	26	89	(X ₂ , Y ₁)	27	87	(X ₂ , Y ₂)	16	78			

S B03掘立柱建物跡

柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	26	104	(X ₀ , Y ₀)	17	162	(X ₀ , Y ₂)	25	150	(X ₀ , Y ₄)		
(X ₀ , Y ₃)	35	111	(X ₀ , Y ₃)	10	154	(X ₀ , Y ₃)	18	164	(X ₀ , Y ₇)	19	164
(X ₁ , Y ₀)	14	157	(X ₁ , Y ₃)	11	154	(X ₁ , Y ₇)	10	152	(X ₂ , Y ₃)	6	147
(X ₂ , Y ₁)	12	153	(X ₂ , Y ₀)	31	97	(X ₂ , Y ₁)	21	159	(X ₂ , Y ₂)	26	104
(X ₂ , Y ₃)	11	151	(X ₂ , Y ₃)	32	101	(X ₂ , Y ₃)	25	98	(X ₄ , Y ₀)	10	97
(X ₄ , Y ₃)	12	151	(X ₄ , Y ₃)	21	160	(X ₄ , Y ₂)	7	147	(X ₄ , Y ₇)	7	146
(X ₅ , Y ₃)	11	147	(X ₅ , Y ₃)	7	141	(X ₆ , Y ₀)	14	98	(X ₇ , Y ₀)	35	95
(X ₇ , Y ₁)	16	147	(X ₇ , Y ₂)	41	101	(X ₇ , Y ₃)	19	153	(X ₇ , Y ₄)	8	143
(X ₇ , Y ₃)	15	76	(X ₇ , Y ₃)	14	148	(X ₇ , Y ₇)	22		(X ₇ , Y ₀)	20	82

S B04掘立柱建物跡

柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₁ , Y ₀)	8	160	(X ₀ , Y ₃)	14	171	(X ₀ , Y ₃)	57	131	(X ₁ , Y ₁)	26	104
(X ₁ , Y ₂)	17	162	(X ₁ , Y ₃)	19	172	(X ₁ , Y ₃)	19	173	(X ₁ , Y ₃)	13	165
(X ₁ , Y ₃)	14	165	(X ₁ , Y ₃)	10	161	(X ₂ , Y ₀)	31	97	(X ₂ , Y ₁)	16	155

第4章 調査の記録

(X ₂ , Y ₂)	13	152	(X ₃ , Y ₄)	18	164	(X ₃ , Y ₀)	9	145	(X ₃ , Y ₁)	8	145
(X ₃ , Y ₅)	11	154	(X ₄ , Y ₂)	34	100	(X ₄ , Y ₁)	6	147	(X ₄ , Y ₃)	14	156
(X ₄ , Y ₆)	35	111	(X ₄ , Y ₀)	14	162	(X ₅ , Y ₁)	7	143	(X ₅ , Y ₀)	18	164
(X ₆ , Y ₀)	16	147	(X ₆ , Y ₂)	19	164	(X ₇ , Y ₀)	41	101	(X ₇ , Y ₂)	11	147
(X ₇ , Y ₆)	32	101	(X ₇ , Y ₀)	10	152	(X ₈ , Y ₀)	11	143	(X ₈ , Y ₀)	14	146
(X ₈ , Y ₁)	19	153	(X ₈ , Y ₂)	8	143	(X ₉ , Y ₀)	2	134	(X ₉ , Y ₂)	15	76
(X ₉ , Y ₅)	9	145	(X ₉ , Y ₆)	25	98	(X ₉ , Y ₈)	12	152	(X ₉ , Y ₀)	19	158
(X ₁₀ , Y ₀)	15	145	(X ₁₁ , Y ₀)	10	57	(X ₁₁ , Y ₁)	18	148	(X ₁₁ , Y ₁)		
(X ₁₁ , Y ₅)	7	14									

S B05掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₁)	25	121	(X ₀ , Y ₁)	23	116	(X ₀ , Y ₁₀)	23	146	(X ₁ , Y ₁)	21	115
(X ₁ , Y ₁₀)	29	125	(X ₂ , Y ₀)	15	137	(X ₂ , Y ₁)	22	117	(X ₂ , Y ₂)	16	130
(X ₂ , Y ₄)	14	112	(X ₂ , Y ₉)	23	117	(X ₃ , Y ₃)	11	123	(X ₃ , Y ₅)	13	106
(X ₃ , Y ₇)	77	193	(X ₃ , Y ₈)	21	115	(X ₃ , Y ₁₀)	23	117	(X ₄ , Y ₀)	18	118
(X ₄ , Y ₂)	24	118	(X ₄ , Y ₁)	12	106	(X ₄ , Y ₆)	22	118	(X ₅ , Y ₁)	18	118
(X ₅ , Y ₂)	20	132	(X ₅ , Y ₆)	33	127	(X ₅ , Y ₇)	23	127	(X ₆ , Y ₀)	21	120
(X ₆ , Y ₂)	12	125	(X ₆ , Y ₃)	18	111	(X ₆ , Y ₇)	26	140	(X ₆ , Y ₁₀)	27	135
(X ₇ , Y ₁)	19	132	(X ₇ , Y ₁₀)	19	107						

S B06掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	23	116	(X ₀ , Y ₂)	26	120	(X ₀ , Y ₄)	23	117	(X ₂ , Y ₄)	21	115
(X ₃ , Y ₀)	16	130	(X ₄ , Y ₁)	11	123	(X ₄ , Y ₃)	22	118	(X ₄ , Y ₄)	23	127
(X ₅ , Y ₀)	18	118	(X ₅ , Y ₂)	18	111	(X ₅ , Y ₄)	21	135			

S B07掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	18	106	(X ₀ , Y ₁)	12	98	(X ₁ , Y ₀)	25	112	(X ₃ , Y ₀)	15	98

第1節 検出遺構と出土遺物

(X ₃ , Y ₁)	20	94									
------------------------------------	----	----	--	--	--	--	--	--	--	--	--

S B08掘立柱建物跡

柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₁)	7	32	(X ₀ , Y ₁)	10	35	(X ₀ , Y ₂)	14	38	(X ₁ , Y ₀)	28	54
(X ₁ , Y ₂)	16	40	(X ₃ , Y ₀)	19	45	(X ₃ , Y ₂)	23	44	(X ₃ , Y ₀)	21	40
(X ₃ , Y ₂)	8	46									

S B09掘立柱建物跡

柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	15	44	(X ₀ , Y ₂)	16	46	(X ₀ , Y ₁)	12	42	(X ₀ , Y ₃)	28	54
(X ₁ , Y ₃)	19	45	(X ₃ , Y ₀)	12	32	(X ₃ , Y ₁)	16	38	(X ₃ , Y ₃)	13	34
(X ₃ , Y ₃)	12	49									

S B10掘立柱建物跡

柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	13	34	(X ₀ , Y ₂)	9	29	(X ₀ , Y ₃)	19	42	(X ₀ , Y ₁)	22	42
(X ₀ , Y ₃)	23	44	(X ₁ , Y ₂)	20	41	(X ₁ , Y ₁)	8	46	(X ₁ , Y ₃)	10	49
(X ₂ , Y ₀)	37	55	(X ₃ , Y ₁)	20	49	(X ₃ , Y ₂)	20	52	(X ₃ , Y ₁)	9	49
(X ₄ , Y ₀)	10	46	(X ₄ , Y ₂)	4	38	(X ₄ , Y ₁)	12	47	(X ₄ , Y ₃)	25	57

S B11掘立柱建物跡

柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	6	37	(X ₀ , Y ₀)	20	39	(X ₀ , Y ₁)	37	55	(X ₀ , Y ₂)	16	38
(X ₀ , Y ₂)	18	37	(X ₀ , Y ₂)	18	45	(X ₁ , Y ₀)	10	46	(X ₁ , Y ₁)	20	49
(X ₁ , Y ₂)	20	41									

S B12掘立柱建物跡

柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	8	44	(X ₀ , Y ₂)	19	65	(X ₀ , Y ₁)	9	57	(X ₀ , Y ₃)	23	57
(X ₁ , Y ₀)	23	56	(X ₁ , Y ₂)	17	49	(X ₁ , Y ₁)	7	40	(X ₁ , Y ₃)	25	57
(X ₃ , Y ₁)	14	46	(X ₃ , Y ₃)	10	42	(X ₃ , Y ₁)	19	51	(X ₃ , Y ₁)	6	38

第4章 調査の記録

S B13掘立柱建物跡

柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	8	44	(X ₀ , Y ₁)	7	40	(X ₀ , Y ₂)	13	35	(X ₀ , Y ₃)	7	40
(X ₁ , Y ₀)	23	56	(X ₁ , Y ₁)	13	51	(X ₁ , Y ₃)	19	51			

S B14掘立柱建物跡

柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	14	52	(X ₀ , Y ₂)			(X ₀ , Y ₃)	15	47	(X ₁ , Y ₃)	28	58
(X ₂ , Y ₀)	22	54	(X ₃ , Y ₃)	22	52	(X ₄ , Y ₁)	24	54	(X ₄ , Y ₃)	24	52

S B15掘立柱建物跡

柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₉)	21	54	(X ₁ , Y ₀)	18	46	(X ₁ , Y ₂)	19	50	(X ₁ , Y ₄)	24	55
(X ₁ , Y ₅)	30	62	(X ₁ , Y ₇)	13	49	(X ₂ , Y ₂)	17	48	(X ₂ , Y ₄)	26	57
(X ₂ , Y ₅)	18	51	(X ₃ , Y ₀)	16	42	(X ₄ , Y ₀)	24	52	(X ₄ , Y ₁)	15	46
(X ₃ , Y ₃)	8	38	(X ₄ , Y ₅)	17	47	(X ₄ , Y ₆)	16	40	(X ₄ , Y ₈)	16	46
(X ₄ , Y ₉)	24	57	(X ₅ , Y ₂)	19	48	(X ₆ , Y ₀)	18	44	(X ₆ , Y ₃)	13	45
(X ₆ , Y ₅)	13	45	(X ₆ , Y ₅)	19	53	(X ₆ , Y ₇)	19	54	(X ₇ , Y ₂)	7	154
(X ₇ , Y ₅)	18	48	(X ₇ , Y ₇)	11	43						

S B16掘立柱建物跡

柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ	柱穴名	礎設面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₆)	14	135	(X ₀ , Y ₈)	14	119	(X ₁ , Y ₃)	19	125	(X ₁ , Y ₆)	13	117
(X ₁ , Y ₈)	13	116	(X ₁ , Y ₈)	15	117	(X ₁ , Y ₈)	17	91	(X ₃ , Y ₃)	34	110
(X ₂ , Y ₇)	67	137	(X ₃ , Y ₉)	27	93	(X ₃ , Y ₀)	22	108	(X ₃ , Y ₁)	32	123
(X ₃ , Y ₃)	26	117	(X ₃ , Y ₆)	31	96	(X ₃ , Y ₇)	16	85	(X ₃ , Y ₈)	24	92
(X ₃ , Y ₈)	19	113	(X ₄ , Y ₁)	5	91	(X ₄ , Y ₂)	22	117	(X ₄ , Y ₅)	24	87
(X ₄ , Y ₇)	34	102	(X ₄ , Y ₈)	62	128	(X ₄ , Y ₉)	25	88	(X ₄ , Y ₉)	21	108
(X ₅ , Y ₀)	34	90	(X ₅ , Y ₀)	9	90	(X ₅ , Y ₁)	7	90	(X ₅ , Y ₂)	18	73
(X ₅ , Y ₄)	25	84	(X ₅ , Y ₇)	29	88	(X ₅ , Y ₈)	37	100	(X ₅ , Y ₉)	22	78

第1節 検出遺構と出土遺物

(X ₆ , Y ₁)	9	93	(X ₆ , Y ₄)	20	104	(X ₆ , Y ₂)	25	80	(X ₆ , Y ₃)	10	94
(X ₆ , Y ₇)	12	94	(X ₇ , Y ₁)	15	100	(X ₇ , Y ₄)	11	95	(X ₈ , Y ₁)	3	84
(X ₈ , Y ₄)	6	92	(X ₈ , Y ₇)	9	90	(X ₈ , Y ₂)	12	89	(X ₈ , Y ₃)	19	97
(X ₈ , Y ₄)	17	95									

S B17掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₆ , Y ₆)	34	110	(X ₆ , Y ₁)	21	118	(X ₆ , Y ₄)	34	102	(X ₁ , Y ₁)	21	107
(X ₇ , Y ₃)	24	87	(X ₃ , Y ₁)	26	117	(X ₄ , Y ₆)	32	123	(X ₄ , Y ₁)	22	117
(X ₄ , Y ₃)	8	98	(X ₄ , Y ₄)	31	91	(X ₅ , Y ₆)	5	91	(X ₅ , Y ₁)	22	80
(X ₅ , Y ₂)	19	78	(X ₅ , Y ₄)	25	84						

S B18掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₆ , Y ₆)	8	89	(X ₆ , Y ₁)	11	94	(X ₆ , Y ₂)	20	73	(X ₆ , Y ₂)	21	105
(X ₆ , Y ₃)	25	84	(X ₆ , Y ₄)	29	88	(X ₁ , Y ₆)	8	91	(X ₁ , Y ₁)	13	98
(X ₁ , Y ₂)	12	96	(X ₁ , Y ₃)	11	97	(X ₁ , Y ₄)	33	85			

S B19掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₆ , Y ₆)			(X ₁ , Y ₁)	17	186	(X ₁ , Y ₂)	12	105	(X ₁ , Y ₄)	25	115
(X ₃ , Y ₆)	17	112	(X ₃ , Y ₂)	21	87	(X ₃ , Y ₄)	15	109	(X ₄ , Y ₁)	34	103
(X ₄ , Y ₃)			(X ₄ , Y ₄)	35	97	(X ₅ , Y ₆)	32	126	(X ₅ , Y ₁)	14	106
(X ₅ , Y ₂)	31	92	(X ₆ , Y ₂)	22	91	(X ₇ , Y ₂)	27	92	(X ₈ , Y ₁)	28	100
(X ₈ , Y ₂)	33	97	(X ₈ , Y ₃)								

S B20掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₆ , Y ₆)	22	112	(X ₆ , Y ₁)	20	91	(X ₁ , Y ₆)	17	84	(X ₁ , Y ₁)	19	86
(X ₃ , Y ₁)	23	100	(X ₃ , Y ₆)	59	82	(X ₃ , Y ₁)	16	94			

第4章 調査の記録

S B21掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	9	105	(X ₀ , Y ₁)	18	110	(X ₀ , Y ₂)	12	116	(X ₀ , Y ₃)	12	119
(X ₀ , Y ₄)			(X ₁ , Y ₀)	15	109	(X ₁ , Y ₁)	24	119	(X ₁ , Y ₂)	13	112
(X ₁ , Y ₃)	20	123	(X ₁ , Y ₄)	9	118	(X ₁ , Y ₁₀)	21	134	(X ₂ , Y ₃)	13	111
(X ₃ , Y ₀)	8	100	(X ₃ , Y ₁)	30	138	(X ₄ , Y ₂)	23	117	(X ₄ , Y ₃)	15	107
(X ₄ , Y ₄)	10	110	(X ₄ , Y ₁₀)	22	123	(X ₄ , Y ₁₀)	12	112	(X ₄ , Y ₁₂)	19	121
(X ₅ , Y ₀)	12	105	(X ₅ , Y ₁)	38	130	(X ₅ , Y ₂)	14	104	(X ₅ , Y ₃)	13	104
(X ₅ , Y ₄)	12	106	(X ₅ , Y ₁₂)	6	102	(X ₆ , Y ₀)	14	102	(X ₆ , Y ₂)		
(X ₆ , Y ₁₁)	22	113	(X ₆ , Y ₁₂)	9	104	(X ₇ , Y ₀)	20	79	(X ₇ , Y ₁)	25	113
(X ₇ , Y ₁)	15	101	(X ₇ , Y ₁)	13	97	(X ₇ , Y ₁)	10	98	(X ₇ , Y ₉)	20	110
(X ₇ , Y ₁₁)	8	103	(X ₇ , Y ₁₂)	18	111	(X ₇ , Y ₁₂)	24	119	(X ₈ , Y ₃)	13	103
(X ₈ , Y ₁)	21	107	(X ₈ , Y ₁)	12	98	(X ₈ , Y ₁)	10	99	(X ₈ , Y ₉)	28	119
(X ₉ , Y ₁)	35	109	(X ₉ , Y ₁)	10	94	(X ₁₀ , Y ₁)	63	154	(X ₁₀ , Y ₁)	23	106
(X ₁₀ , Y ₉)	12	92									

S B22掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	10	92	(X ₀ , Y ₂)	28	107	(X ₀ , Y ₄)	38	112	(X ₀ , Y ₅)	35	109
(X ₀ , Y ₁)	10	85	(X ₁ , Y ₀)	34	93	(X ₁ , Y ₂)	9	100	(X ₁ , Y ₄)	31	84
(X ₁ , Y ₃)	13	81	(X ₂ , Y ₁)	20	82	(X ₃ , Y ₁)	11	86	(X ₄ , Y ₁)	19	71
(X ₄ , Y ₁)	14	75	(X ₅ , Y ₁)	10	85	(X ₅ , Y ₁)	11	83	(X ₅ , Y ₂)	8	61
(X ₆ , Y ₁)	7	66	(X ₇ , Y ₁)	17	86	(X ₇ , Y ₃)	26	76	(X ₇ , Y ₄)	19	93
(X ₇ , Y ₁)	14	77									

S B23掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	16	106	(X ₀ , Y ₁)	9	99	(X ₀ , Y ₁)	9	98	(X ₀ , Y ₁)	26	114
(X ₀ , Y ₃)	11	100	(X ₀ , Y ₃)	19	104	(X ₁ , Y ₃)	10	97	(X ₁ , Y ₃)	20	105

第1節 検出遺構と出土遺物

(X ₂ , Y ₁)	12	101	(X ₂ , Y ₁)	12	96	(X ₂ , Y ₂)	13	102	(X ₂ , Y ₃)	35	121
(X ₂ , Y ₁)	21	106	(X ₂ , Y ₂)	7	83	(X ₂ , Y ₁)	35	126	(X ₂ , Y ₁)	2	94
(X ₆ , Y ₀)	15	99	(X ₆ , Y ₁)	10	93	(X ₆ , Y ₂)	14	103	(X ₆ , Y ₄)	16	96
(X ₆ , Y ₂)	15	92	(X ₆ , Y ₀)	10	94	(X ₆ , Y ₀)	23	106	(X ₆ , Y ₂)	22	76
(X ₆ , Y ₁)	27	99	(X ₆ , Y ₂)	11	68	(X ₆ , Y ₂)	7	83	(X ₆ , Y ₂)	10	83
(X ₁₀ , Y ₂)	7	61	(X ₁₁ , Y ₂)	13	81	(X ₁₁ , Y ₄)	20	75	(X ₁₁ , Y ₂)	13	55

S B24掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₆ , Y ₀)	1	99	(X ₆ , Y ₁)	9	102	(X ₁₁ , Y ₀)	19	106	(X ₁₁ , Y ₁)	16	110
(X ₂ , Y ₀)	21	106	(X ₂ , Y ₁)	14	104						

S B25掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₆ , Y ₀)	17	70	(X ₆ , Y ₁)	15	59	(X ₆ , Y ₃)	9	51	(X ₆ , Y ₄)	20	65
(X ₁₁ , Y ₀)	20	70	(X ₁₁ , Y ₁)	10	49	(X ₂ , Y ₀)	25	58	(X ₂ , Y ₁)	23	117
(X ₂ , Y ₂)	11	55	(X ₂ , Y ₁)	20	59	(X ₂ , Y ₀)	17	56	(X ₂ , Y ₁)	27	64
(X ₂ , Y ₁)	11	50	(X ₂ , Y ₀)	22	58	(X ₂ , Y ₁)	22	62	(X ₂ , Y ₂)	10	46
(X ₄ , Y ₂)	16	54	(X ₄ , Y ₁)	9	43	(X ₂ , Y ₁)	33	62	(X ₂ , Y ₂)	11	50
(X ₂ , Y ₁)	20	64	(X ₆ , Y ₁)	16	45	(X ₆ , Y ₂)	14	45	(X ₆ , Y ₄)	9	52

S B26掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₆ , Y ₀)	18	68	(X ₆ , Y ₁)	9	56	(X ₆ , Y ₂)	26	73	(X ₁₁ , Y ₀)	22	70
(X ₁₁ , Y ₁)	17	72	(X ₂ , Y ₀)	13	60	(X ₂ , Y ₁)	14	59	(X ₂ , Y ₂)	17	61

S B27掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₆ , Y ₀)	22	76	(X ₆ , Y ₁)	13	61	(X ₆ , Y ₂)	14	59	(X ₁₁ , Y ₁)	6	53
(X ₂ , Y ₀)	17	70	(X ₂ , Y ₂)	6	49	(X ₂ , Y ₀)	19	70	(X ₂ , Y ₁)	15	59
(X ₂ , Y ₂)	7	49									

第4章 調査の記録

S B 28掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	21	75	(X ₀ , Y ₄)	14	86	(X ₁ , Y ₄)	11	7	(X ₂ , Y ₀)	12	53
(X ₂ , Y ₁)	24	74	(X ₂ , Y ₃)	11	108	(X ₃ , Y ₄)	14	72	(X ₃ , Y ₁)	11	61
(X ₄ , Y ₄)	10	70	(X ₅ , Y ₁)	12	62	(X ₅ , Y ₁)	9	56	(X ₅ , Y ₂)	17	69
(X ₅ , Y ₄)	7	62									

S B 29掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	14	89	(X ₀ , Y ₀)	20	92	(X ₀ , Y ₂)	15	95	(X ₀ , Y ₃)	29	110
(X ₁ , Y ₀)	29	92	(X ₁ , Y ₁)	32	98	(X ₁ , Y ₃)	14	53	(X ₂ , Y ₀)	39	103
(X ₃ , Y ₀)	41	103	(X ₃ , Y ₃)	27	94	(X ₄ , Y ₀)	38	95	(X ₄ , Y ₃)	45	107

S B 30掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	15	103	(X ₀ , Y ₁)	41	103	(X ₁ , Y ₀)	13	96	(X ₁ , Y ₁)	7	100
(X ₃ , Y ₀)	26	104	(X ₃ , Y ₁)	17	91						

S B 31掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	22	88	(X ₀ , Y ₂)	36	102	(X ₀ , Y ₃)	15	49	(X ₁ , Y ₀)	25	88
(X ₃ , Y ₀)	43	106	(X ₃ , Y ₁)	64	130	(X ₃ , Y ₃)	54	123			

S B 32掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	19	88	(X ₀ , Y ₁)	27	99	(X ₁ , Y ₀)	20	65	(X ₁ , Y ₁)	9	83

S B 33掘立柱建物跡

柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	確認面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₁)	13	119	(X ₀ , Y ₂)	49	201	(X ₀ , Y ₄)	57	208	(X ₀ , Y ₆)	22	172
(X ₀ , Y ₈)	32	174	(X ₁ , Y ₀)	43	149	(X ₃ , Y ₄)	43	194	(X ₃ , Y ₁)	10	124
(X ₃ , Y ₃)	13	15	(X ₃ , Y ₄)	78	179	(X ₃ , Y ₆)	33	183	(X ₃ , Y ₇)	29	177

(X ₄ , Y ₀)	7	123	(X ₄ , Y ₁)	11	124	(X ₄ , Y ₂)	12	108	(X ₄ , Y ₃)	13	152
(X ₄ , Y ₄)	14	151	(X ₅ , Y ₂)	49	145	(X ₅ , Y ₃)	56	105			

SB34掘立柱建物跡

柱 穴 名	礎石面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎石面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎石面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎石面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₀)	23	153	(X ₀ , Y ₁)	10	141	(X ₁ , Y ₀)	5	132	(X ₂ , Y ₀)	22	147
(X ₂ , Y ₁)	10	133	(X ₂ , Y ₁)	7	125	(X ₂ , Y ₂)	14	129	(X ₃ , Y ₁)	15	141
(X ₃ , Y ₁)	23	147	(X ₃ , Y ₂)	18	141	(X ₃ , Y ₃)	13	135	(X ₃ , Y ₄)	18	128
(X ₄ , Y ₀)	14	162	(X ₄ , Y ₁)	3	143	(X ₄ , Y ₂)	9	129	(X ₄ , Y ₃)	17	130
(X ₅ , Y ₁)	23	149	(X ₅ , Y ₂)	19	129	(X ₆ , Y ₁)	13	136	(X ₆ , Y ₂)	14	135
(X ₇ , Y ₂)	25	149	(X ₇ , Y ₃)	13	134	(X ₈ , Y ₀)	19	150	(X ₈ , Y ₁)	19	146
(X ₈ , Y ₁)	21	146	(X ₈ , Y ₂)	9	133	(X ₈ , Y ₃)					

SB35掘立柱建物跡

柱 穴 名	礎石面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎石面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎石面からの深さ	基準高からの深さ	柱 穴 名	礎石面からの深さ	基準高からの深さ
(X ₀ , Y ₂)	70	135	(X ₀ , Y ₃)	25	156	(X ₀ , Y ₄)	9	137	(X ₁ , Y ₀)	22	143
(X ₁ , Y ₂)	17	136	(X ₁ , Y ₃)	15	136	(X ₂ , Y ₀)	7	125	(X ₃ , Y ₂)	8	112
(X ₃ , Y ₁)	18	134	(X ₃ , Y ₂)	28	134	(X ₄ , Y ₂)	11	118	(X ₄ , Y ₃)	9	120
(X ₅ , Y ₀)	12	101	(X ₆ , Y ₀)	17	130	(X ₆ , Y ₁)	11	119	(X ₆ , Y ₂)	19	123
(X ₆ , Y ₁)	11	114									

SB 39掘立柱建物跡はY₀通りとY₉通りが1尺ほどずれていたため、X₅通りを境にして東西2棟の建物とも考えられたが、Y₇通りの柱筋がよく通っているため1棟として検出した。この建物は柱間隔に難点があり、とくにY₀通りの柱は飛び過ぎている。しかし間取りとしては比較的是っきり現れて、しかも興味深い形である。住宅と付属舎が接続した間取りを示している可能性もある。

SB 40掘立柱建物跡は当遺跡西端部で検出された。1.5間×2間の主屋に小さな張り出しを付けた建物で、(X₃, Y₂)の柱を欠く。蔵の類であろう。

SB 41掘立柱建物跡はSD 09・10空堀跡が西端部で途切れる、その中間で検出された。2部屋が鍵形に接続する間取りが明瞭に示されている。しかし柱配置に難があり、(X₂, Y₂)と(X₃, Y₁)の柱を欠いている。小住宅ないしは蔵などに想定されよう。

SB 42掘立柱建物跡はSD 09・10空堀跡が東部で折れ曲がる中央部で検出された。Y₀～Y₁の柱間隔が10尺と大きすぎるが、四隅の柱は正確に合致する。納屋などであろうか。

S B 43掘立柱建物跡は当遺跡最南端部で検出された。1間×2間程度の規模であり、四隅にきちんと柱が立つ。しかし桁行の中間に柱を欠くため、柱間隔が12尺余と飛んでいる。やはり納屋などの建物であろう。

平面形式の分類

主殿ないしはそれに準ずる建物としてはS B 16・21・34掘立柱建物跡の3棟が存在する。この3棟の間取りを見ると、寝殿造ないしは書院造の系統といった分類の仕方は無理であろうが、強いてそうした観点から検討すれば、3棟とも書院造に近い間取りを示していると言えようか。

中規模以上の住宅と思われるものにS B 04・05・10・22・23・25・35・38掘立柱建物跡の8棟が上げられる。その中で、S B 04掘立柱建物跡は書院座敷に類似した間取りを示していて興味深い。S B 22掘立柱建物跡は庇縁が主屋の横に張り出して中門のような形になり、中世地侍級の住宅をはっきり示している。やはり地侍級の住宅を示していると思われる建物にS B 25掘立柱建物跡がある。規模は小さいがS B 38掘立柱建物跡もS B 22掘立柱建物跡ときわめて類似した間取りである。

小住宅に見なし得るものにS B 01・03・06・28・29・33・41掘立柱建物跡と上げたが、検出の際に付属舎と見なした建物の中にも住宅が含まれている可能性がある。小住宅の中でS B 01掘立柱建物跡は近世農家の間取りの原型を示していて、中世から近世初頭にかけての小規模住宅の形式が察知出来て興味深い。

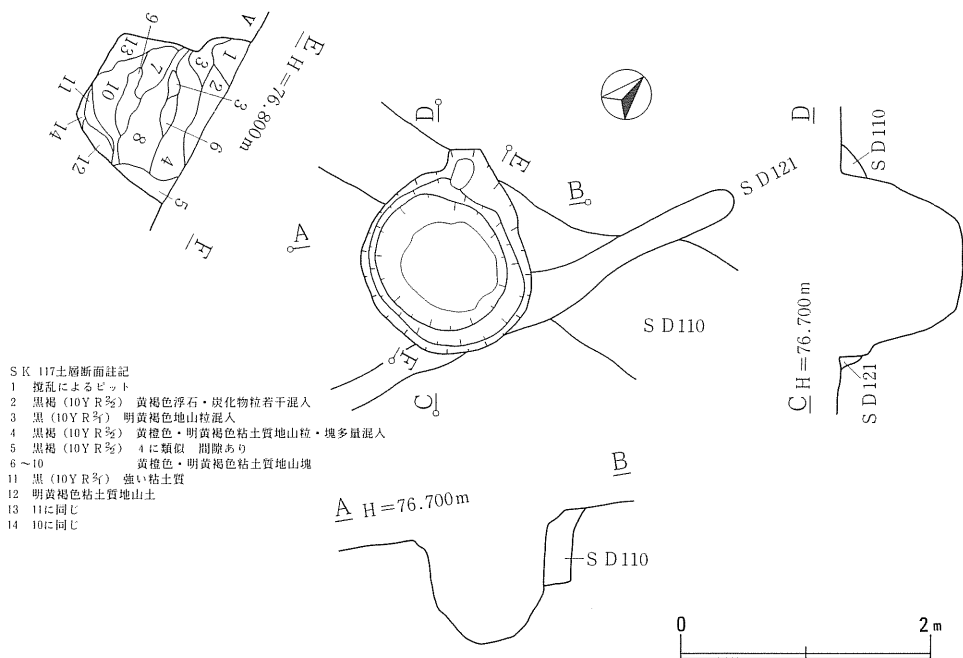
S B 01掘立柱建物跡に関連して言えば、主屋から小さな張り出しを付けている建物が、この他にS B 02・08・12・33・38・40掘立柱建物跡があり、このうち少なくともS B 01・02・12・40掘立柱建物跡の4棟は出入口の庇と思われるもので、それも雪除け庇のような簡便な造りを想像させる。こうした観点をさらに発展させると、秋田県民家の特色である中門造をも想起させて、地方色の表れた住宅の基本形式を見る思いがして興味深い。

むすび

当遺跡の掘立柱建物跡が、主殿級の住宅、地侍級（館主に従属する家臣か）の中規模住宅、階層不明の小規模住宅、そして各種雑舎などが混在していたことは明らかである。しかしこれらの建築年代と変遷を明かにすることは、私の能力と知識では到底できる技ではなく、せいぜい出来ることと言えば、重複した建物が柱穴の切り合いが明瞭でないとき、間取りの分析からどちらが先か後かの推定をする程度である。

当遺跡の性格については冒頭でも私見を述べたが、これに関連して各建物の用途についても、いわば本丸に当たるとされる「餌釣館」の遺構が明かにされない限り推測の域を出ない。そのため掘立柱建物跡の検出に当たっては、それぞれの遺構の概略を簡単に述べるだけにとどめた。

遺構の検出の際に問題になったことは、整然とした柱配置の建物が皆無と言ってよく、構造



第82図 SK 117土坑

上無理のあるものが少なかったことである。構造が発達する近世末期の技術をもってしてもあまりやらないような、かなり飛躍したのもあったりして、それをどう解釈して検出に結び付けるかに時間が費やされた。ただ中世の地方住宅に関しては、間取りや構造などの基本的な事柄もいまだ不明な点が多く、今後の研究課題であることは論を待たない。当遺跡の掘立柱建物跡の検出が、今後の研究のためのささやかな資料提供にでも利用されることがあれば、望外の喜びである。

最後に、掘立柱建物跡の検出と研鑽の機会を与えて下さった県埋蔵文化財センター桜田隆文化財主査に厚く感謝の意を表する。

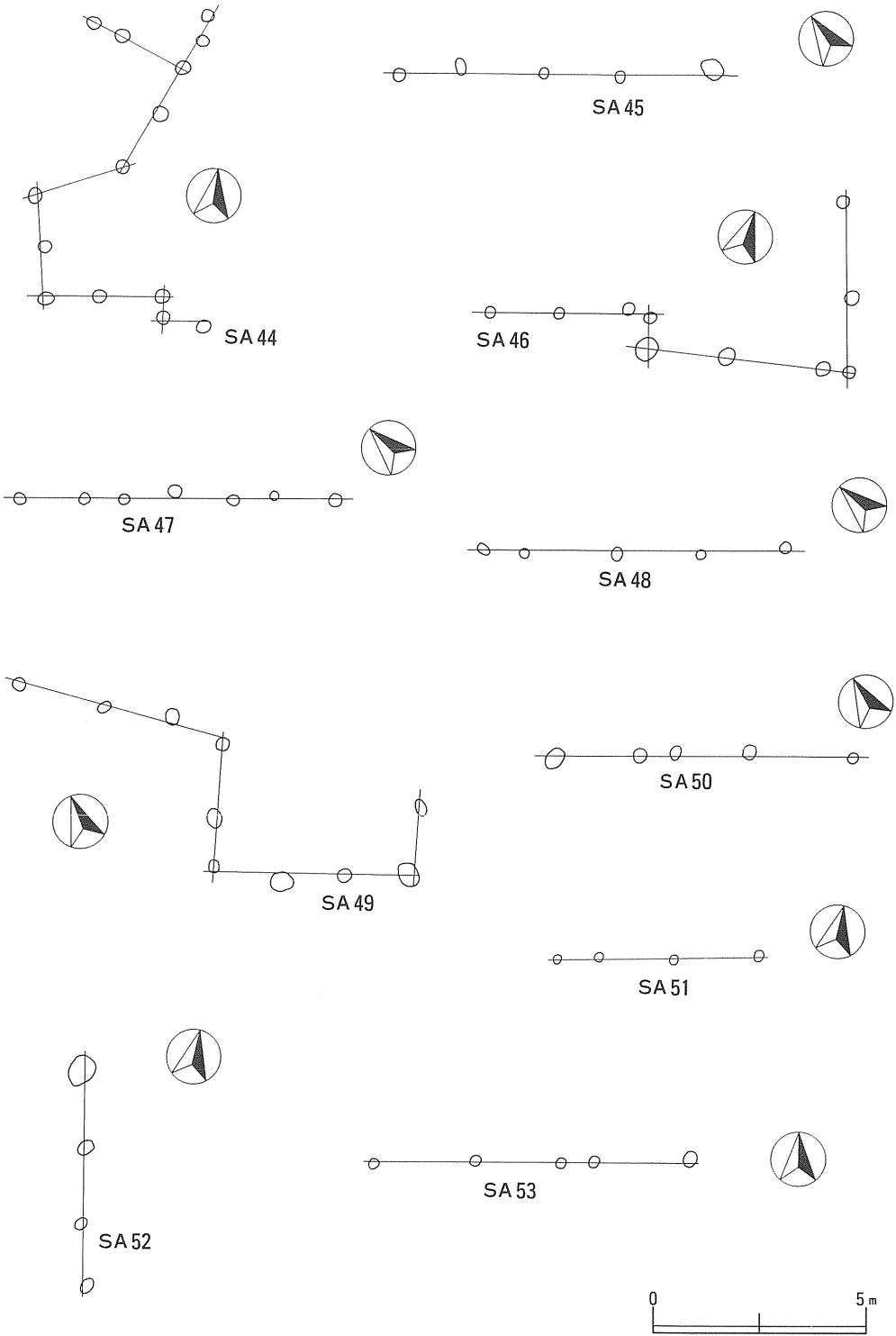
(6) 土坑

SK 117土坑(第82図)

MP53・MQ53グリッドに位置し、第V層上面で検出した。SD 110・SD 121溝状遺構と重複するが、その新旧関係は(古)SD 110→SD 121→SK 117(新)である。平面形は、長軸142cm、短軸130cmの楕円形を呈し、長軸方向はN-85°-Wである。土坑は地山(VIIA層)まで逆台形に94~98cm掘り込まれており、坑底はわずかに鍋底形を呈する。埋土は締まりが弱い。遺物は出土しなかった。

(7) 柱列

柱列は11条検出した(第83図)。これらの柱列は塀と考えられる。



第83図 柱列

5 中世～近世の遺構と遺物

(1) 火葬墓

何らかの形で、人骨と思われる骨を出土した遺構が7基ある。いずれも火熱を受けた骨で木炭も一緒に出土しているが、遺構の形態・骨の出土状況に違いがみられる。このためここでは、その遺構の中で確実に焼かれ、そのまま埋葬されたと考えられる3基を火葬墓、その他の4基を被火骨出土遺構として記述する。なお、遺存していた骨の鑑定については、第5章第4節を参照されたい。

SX 04火葬墓(第84図、図版29)

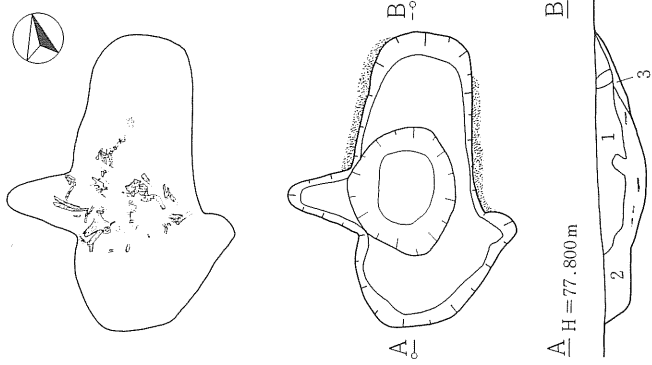
LQ55グリッドで検出した。SX05火葬墓の南西約7m、SX13火葬墓の北側に隣接して存在する。墳の平面形は、長軸約120cm、短軸50cmの隅丸長方形あるいは小判形を呈し、深さは20cmである。墳の長軸方向はN-15°-Eである。底面は中央部ほど深い。壁はやや急傾斜であるが、北壁は緩やかである。骨片は埋土中からほぼまんべんなく出土した。底部中央ほど大きめの骨が残っていたが、全体として遺存状態が悪いため、どのような埋葬姿勢だったのか不明である。墳の長軸と若干角度を持って溝が取りついているが、その状況はSX05火葬墓と似ているものの、全長が95cmと短かく、東側では明確に捉えることができなかった。墳の壁と溝部分は良く焼け、木炭や禾本科植物灰も残っていたが、底面はあまり焼けていなかった。

SX 05火葬墓(第84図、図版30・31)

調査区東側で検出された3基の火葬墓のうち、最も遺存状態の良かったもので、LR57・LS57グリッドで検出した。平面形は隅丸長方形(長軸125cm×短軸75cm)を呈する。確認面からの深さは17cmで、底面から壁面にかけて非常によく焼けている。長軸方向はN-9°-Wである。また、長軸にほぼ直交して、幅15cm、深さ1～22cm(中央部ほど深い)、長さ200cmの溝が取り付いている。墳と溝の交わる部分においては溝の方が深く、その壁も良く焼けている。人骨は頭部を北に、脚部を南にした横臥屈葬の形を取っている。遺存する骨の大きさから成人と思われるが、男女の区別はつかない。人骨の下及び周囲に炭化した木の枝や大型の炭化物が多く見られ、壁面にも禾本科植物灰の堆積があったことと、横臥屈葬の形を取っていることから、この人骨は、この墳の中で火葬され、そのまま埋められたものと考えられる。

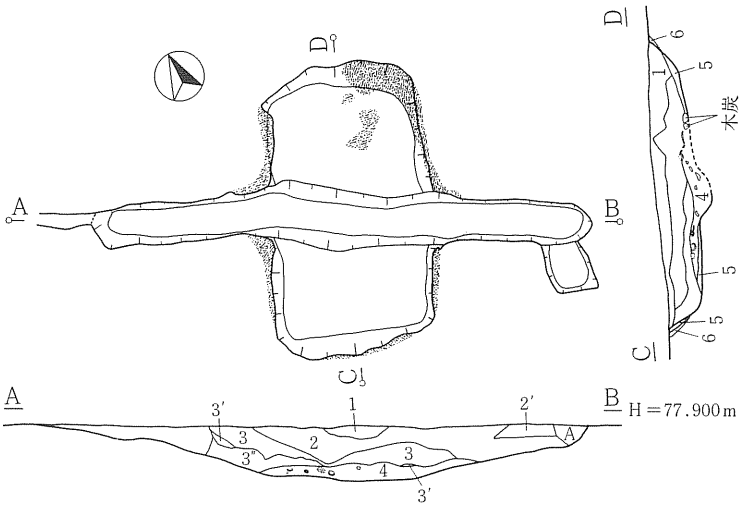
SX 13火葬墓(第85図、図版29)

LQ55・LR55グリッドで検出した。SX04火葬墓の南西側に接するようして存在する火葬墓である。墳の平面形は、長軸125cm、短軸70cmの小判形で、深さは15cmである。底面はほぼ平坦であるが軟らかく、また黒色土中にあるため判然としないところがある。墳長軸線に直交するように幅15～20cm、長さ約120cmの溝が取りついているが、その深さは墳底面とほぼ同じである。壁内面を中心に焼けているが、SX04・05火葬墓に比べて焼け方は弱い。このことを



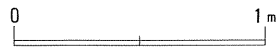
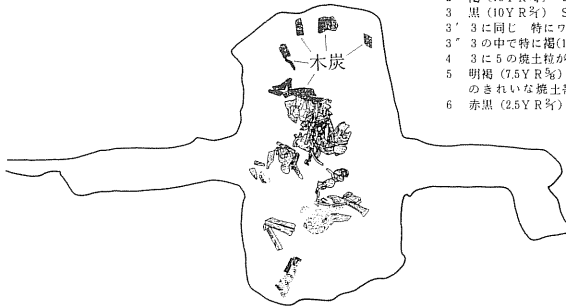
SX 04土層断面註記

- 1 黒(5Y R₃) 大浴浮石粒を若干混入するが焼土粒・木炭はほとんどなし 骨片は含まない 人為的な埋土と考えられる
- 2 黒褐(10Y R₃) 長さ2~3cm大の骨片及び霜降り状となつてしまつた骨片を含む層
- 3 暗褐(7.5Y R₃) 焼土粒・木炭を若干混入



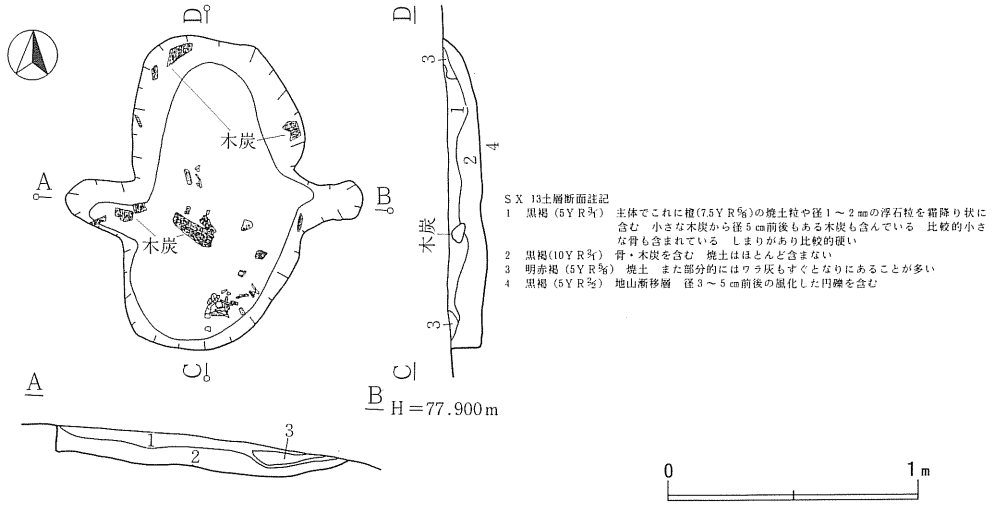
SX 05土層断面註記

- 1 黒褐(5Y R₃) 耕作土
- 2 暗褐(10Y R₃) 地山新移層
- 2' 褐(10Y R₃) 2と同じ 褐(10Y R₃)が多く若干異なつた層にも見える
- 3 黒(10Y R₃) SX 05の埋土の主体を占める
- 3' 3と同じ 特にワラ灰が多い
- 3'' 3の中で特に褐(10Y R₃)・赤褐(5Y R₃)・焼土粒の混じりがない
- 4 3に5の焼土粒が混入
- 5 明褐(7.5Y R₃) 焼土 若干しまっているがサラサラしている 2~3cm幅のきれいな焼土帯になっている
- 6 赤黒(2.5Y R₃) 5の焼土帯の外側にある焼土である 帯状になっている



第84図 SX04・SX05火葬墓

裏付けるように、随所に生焼けの木炭が残り、逆に骨の残りは少ない。埋土中から縄文土器の細片とフレイクが出土しているが、本遺構の掘り込まれているV層中には、縄文土器の破片やフレイクが少し含まれており、埋めもどしの際の土に混在したままになったものと考えられる。

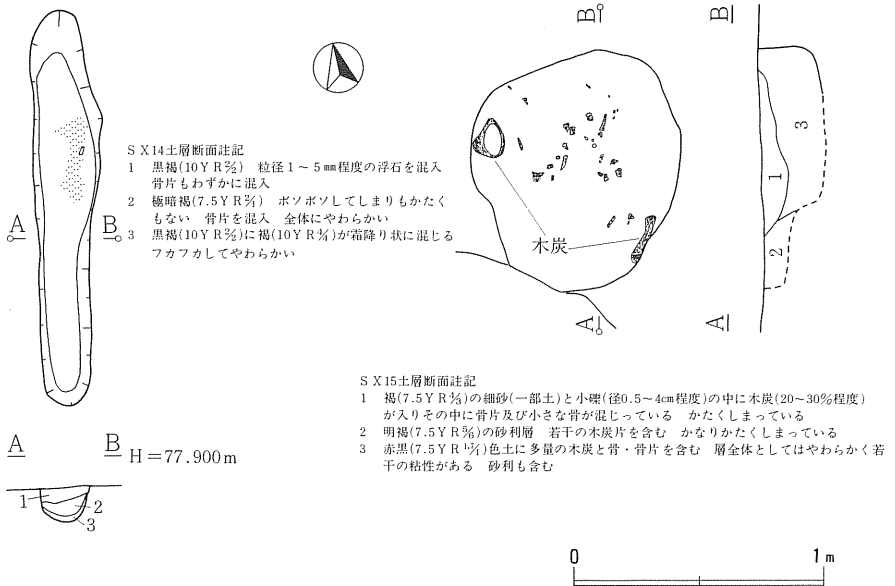


第85図 SX13火葬葬

(2) 被火骨出土遺構

S X 14被火骨出土遺構(第86図、図版32)

LT54グリッドで検出した。溝状遺構の中に火熱を受けたと思われる骨が、一塊りとなって出土した。溝状遺構は、長さ160cm、幅35cm、深さ20cmであるが底面及び壁面は焼けておらず、



第86図 SX14・SX15被火骨出土遺構

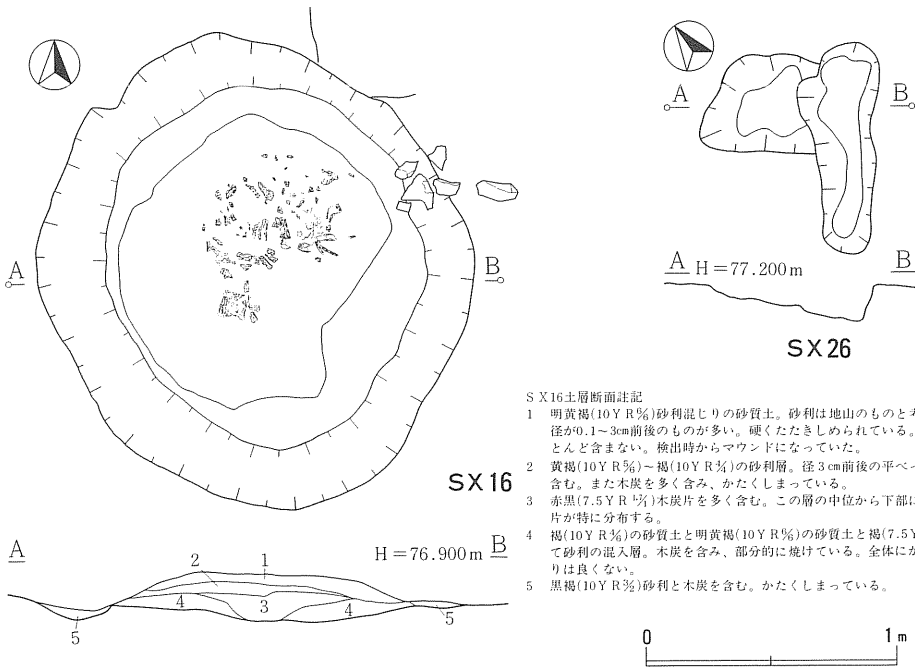
火を焚いた痕跡はない。いずれかの場所で焼かれた骨のある部分が、この溝状の掘り込みの中に置かれたものであろう。

SX 15被火骨出土遺構(第86図、図版33)

MD53グリッドのSD 10空堀跡底面で、SX16被火骨出土遺構の北側に接して検出したが、SX 16被火骨出土遺構との新旧関係については不明である。長軸100cm、短軸85cmで円形に近い平面プランを呈し、深さは25cmである。木炭と混じり合う形でかなりの量の骨片が出土したが、大型のものはなく、また規則的なまとまり方もしていない。土層は3層に分けられた。1・2層は褐～明褐色の砂・小砂礫層に、木炭と骨片を若干混じり、3層は木炭が土壌化したものか真黒で、骨片と木炭の出土が多い。壁面、底面とも視認できるほど焼けていない。

SX 16被火骨出土遺構(第87図、図版34)

MD52・53グリッドのSD 10空堀跡底面で検出した。平面形は直径約180cmの円形を呈し、このうち、中央部の直径100cmほどの範囲が高さ10cm前後のマウンドとなっていた。この円内から骨が炭化物(大部分は木炭)と一緒に出土するが、この部分は浅くくぼんでおり、底面ほど炭化物が多い。この底面は若干火熱を受けた痕跡もあるが、出土した骨がここで焼かれたのか、他所で焼かれたものが炭化物と一緒にここに移されて埋められたものか判断できない。出土した骨には細片が多く、しかもその出土位置に規則性はみられない。骨と炭化物が出土する範囲の外周は幅20~25cmの浅い溝状になっている。堆積している土層は5層に分けられた。



第87図 SX 16・SX 26被火骨出土遺構

SX 26被火骨出土遺構(第87図)

LI38・39グリッドで検出したが遺存状態が悪く、プランは判然としない。長軸150cm、幅約50cmの土坑と、80cm四方の不整形を呈する土坑が合体したような形態である。深さは20~30cmである。壁面と底面の一部が焼け、木炭と骨片が出土している。このような状況からSX05などと同様の火葬墓の可能性もある。

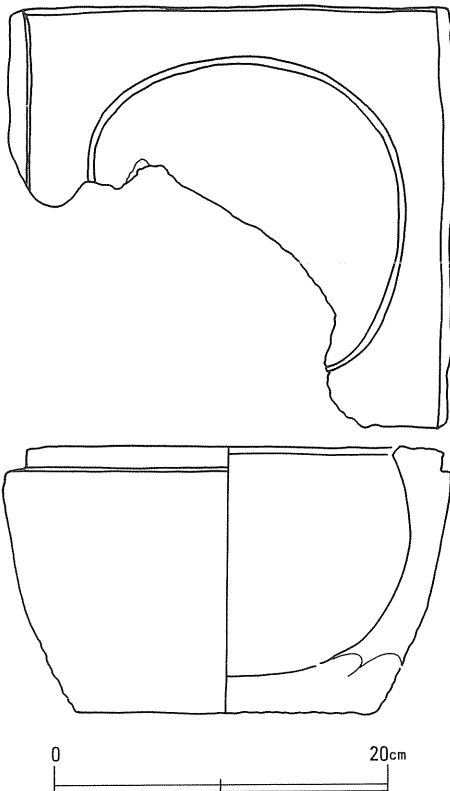
(3) 溝状遺構 (付図2)

SD 113溝状遺構

SD 10空堀跡埋没後のMG53、MH52グリッドにSD159溝状遺構に平行してその西側に検出した。V層上面で確認され、長さ6.4m、幅0.3~0.5m、深さ0.05~0.14mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 136溝状遺構

SD137溝状遺構に連結するように、またSD158に平行するようにME61・62グリッドに検出した。VII(B砂礫)層上面で確認され、長さ2.4m、幅0.5~0.6m、深さ0.13~0.17mである。横断面は鍋底形~U字形を呈する。遺物は出土しなかった。



第88図 SD140溝状遺構出土遺物

SD 137溝状遺構

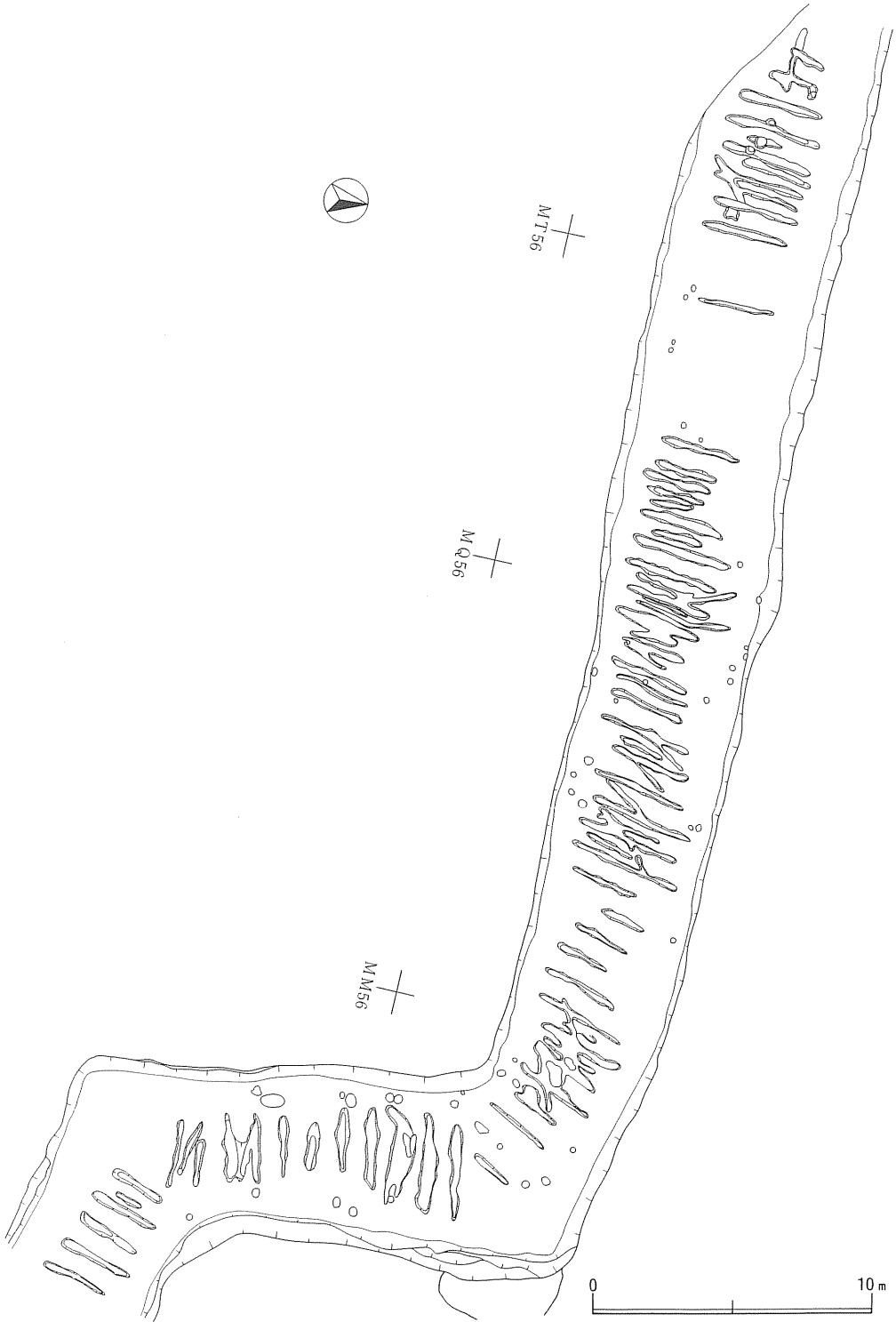
MB74、MC73~66、MD63~65グリッドに検出した。SD140溝状遺構と重複するが本溝状遺構が新しい。VI(漸移)層上面で確認され、長さ48m、幅0.5~1.4m、深さ0.3~0.7mである。横断面は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 138溝状遺構

SD 09空堀跡埋没後のMF60グリッドに検出した。VI(漸移)層上面で確認され、長さ1.6m、幅0.5~0.6m、深さ0.09~0.14mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 140溝状遺構

MD67・66、ME63~65グリッドに検出した。V層上面で確認され、長さ16.8m、幅0.3~1m、深さ0.6mである。横断面は鍋底形~U字形を呈する。遺物は埋土の上半から石臼1点が破碎され



第89図 SD10空堀跡内溝状遺構

た状態で出土した。石臼(第88図、図版)は、縦50cm、横53cm、高さ32cmの立方体に切断された凝灰岩を原材とし、上部縁辺を幅1.3~2.5cm、深さ3~3.5cmで削り取りテラス状に面取りしている。中央部を直径40~42cm、深さ27cm(推定)で、中間部に最大直径(推定43~45cm)をもつボウル状に掘削している。

SD 149溝状遺構

MF57~59グリッドにSK148土坑と重複して検出した。本溝状遺構が新しい。V層上面で確認され、長さ5.6m、幅0.5~0.6m、深さ0.06~0.15mである。底面の凹凸が激しくあたかも鍋底状のくぼみが連結しているかのようであった。底面は堅かった。遺物は出土しなかった。

SD 158溝状遺構

SD140溝状遺構に連結するようにME61・62グリッドに検出した。VI(漸移)層上面で確認され、長さ4.2m、幅0.4~1m、深さ0.3~0.42mである。横断面は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 159溝状遺構

SD 10空堀跡埋没後のMF59~56、MG55~53、MM52・51、MI50・49、MJ48~46グリッドに検出した。北側がSD 09空堀跡に接しているが、空堀跡内に水道管理設時の掘削痕があり、新旧関係等を確認できなかった。VI(漸移)層上面で確認され、長さ54.4m、幅0.8~1.3m、深さ0.13~0.23mである。横断面は鍋底形~U字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 10空堀跡内溝状遺構

SD 10空堀跡の掘り下げ中に、底面に幅20~30cm、長さ250~420cm、深さ10~15cmの溝状遺構が60~70cm間隔で空堀に直交するように、また鍵形に屈曲する部分ではその屈曲に合わせるように並んでいるのを検出した。当初、空堀掘削時の仕事痕跡と考えたが土層観察用ベルトで検討した結果、空堀に「土砂」が20cm程度堆積してから掘り込まれた溝状遺構であることがわかった。77条の精査であったが、底面に痕跡として残っていたものや、VII B(砂礫)層に掘り込まれていたため明確でなかったものもあったので、実数はもっと多い。

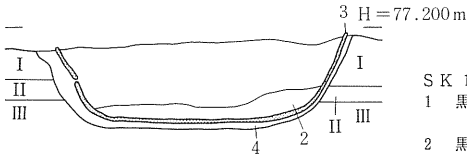
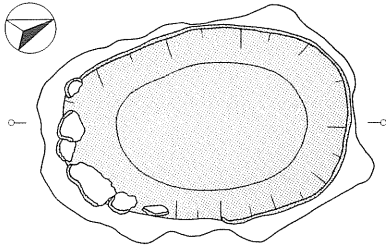
6 近代・現代および時期不明の遺構と遺物

(1) 土坑

SK 103土坑 (第90図、図版35)

ML53・54グリッドのV層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。長軸方向はS-14°-Wである。長軸240cm、短軸152cm、プラン確認面からの深さは58~70cmである。長軸254cm、短軸178cmの不整楕円形を平面形にもつ掘り方に4層土を充填し整形した後、3層土を貼り付けているが崩壊が著しい。埋土は2層に分層でき、1層上面~2層上面にかけ

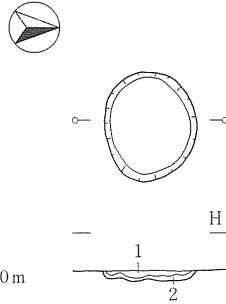
第4章 調査の記録



S K 103

S K 103土層断面註記

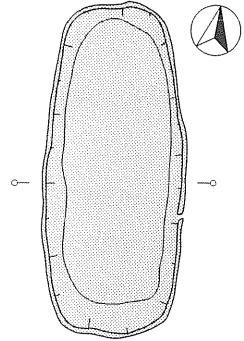
- 1 黒褐 (10Y R²₅)
- 2 黒褐 (10Y R²₅) 1よりややしまりあり
- 3 明黄褐 (10Y R⁶₅) かたくしまる 砂質粘土
- 4 明黄褐 (10Y R⁶₅)~黄褐(10Y R⁵₅)砂質土 人為的な堆積
- I 黒 (10Y R²₁) 地山粒を少量含む
- II 暗褐 (10Y R³₄) 比較のかたくしまる
細砂・地山粒を多く含む
- III 明黄褐 (10Y R⁶₅) かたくしまる 砂質粘土



S K 111

S K 111土層断面註記

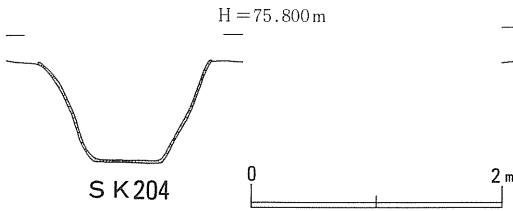
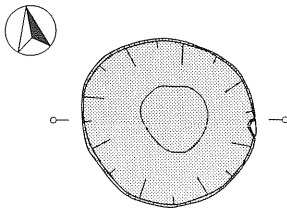
- 1 黒 (10Y R²₁) しまり・粘性ともに弱
炭化物混入
- 2 黒 (10Y R²₁) しまり・粘性ともにあり
地山粒を少量含む



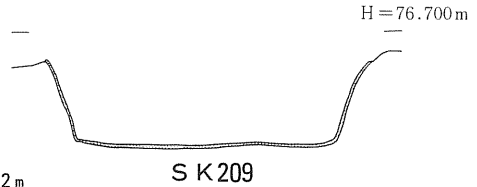
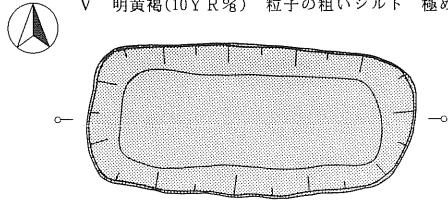
S K 173

S K 173土層断面註記

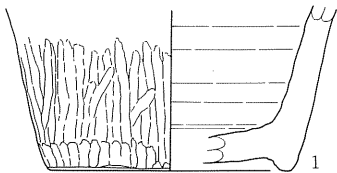
- 1 黒褐 (10Y R²₅) 小礫・地山粒若干混入
- 2 黒 (10Y R²₁) 孔隙多い 崩落した壁材が多量に混入
- 3 黒褐 (10Y R²₅) 小礫若干混入 非常にかたくしまっている
一度掘り込んだうえでこの土で均したと思われる
- I 黒褐 (10Y R²₅) 1~3cm大の小礫少量混入
- II 褐 (10Y R⁵₅) 0.5~5cm大の小礫多量混入
- III 黄褐 (10Y R⁶₅) シルト~粘土
- IV 灰白 (10Y R⁸₅) 粘土
- V 明黄褐(10Y R⁶₅) 粒子の粗いシルト 極めて硬い



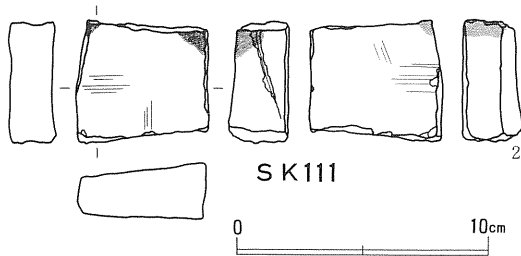
S K 204



S K 209



S K 103



S K 111

第90図 SK103・SK111 SK173・SK204・SK209土坑, SK103・SK111土坑出土遺物

て、拳大～人頭大の礫、2層で魚骨数点、鉄製品、風呂破片、酒壺の蓋、ガラス片が出土した。風呂（第90図1）は、底部の破片で推定底径9.5cm、現高6.3cmで上げ底である。外面を縦方向に細かい篋磨きの後、黒色処理している。

SK 111土坑（第90図）

MO55グリッドのV層上面で検出した。長軸方向はN-87°-Eにもち長軸86cm、短軸74cmのほぼ円形を呈する土坑である。プラン確認面からの深さは6～8cmである。埋土中には炭化物が多量に混入していた。遺物は埋土中から砥石1点、拳大の礫2点、試験管様の直径1.2cm、長さ5.5cmのガラス管が1点出土した。砥石（第90図2）は、両端が欠損している。凝灰岩製で4面の砥面をもつ。長さ4.9cm、幅5.3cm、厚さ2.4cm、重さ82gである。

SK 173土坑（第90図、図版35）

MM60グリッドで検出した。平面形は不整長楕円形、断面形は鍋底形である。長軸方向はN-9°-W、長軸264cm、短軸114cmで、プラン確認面からの深さは58～60cmである。深さ62～64cmの掘り方を整形後、SK 103と同様に厚さ2cm程の白色粘土が貼り付けされていて、作成方法や貼り付けの材料が類似する。1層と2層の間に崩落した壁材が挟まれていた。遺物は1層から錆びた釘・鎌刃、道具の柄様の木片、革製のガマグチ、2層から旧字体の『味の素』ガラス壺、魚骨などが出土した。

SK 204土坑（第90図、図版35）

NI63グリッドのVI層で検出した。平面形は略円形、断面形は逆台形である。長軸方向はN-42°-Wで、長軸144cm、短軸134cm、底径56cmを測る。プラン確認面からの深さは約86cmで坑底面は平坦である。SK 103・173と形態は異なるものの、構築方法は同じで、坑内面に厚さ2cm程の白色粘土が貼り付けられている。

SK 209土坑（第90図、図版35）

NA72グリッドで検出した。平面形は略長楕円形、断面形は逆台形である。長軸方向はN-89°-Eで長軸260cm、短軸124cm、プラン確認面からの深さは72～76cmである。上記SK 204と同様に、坑底面に厚さ2～5cm白色粘土の貼り付けがなされており、形態はSK 103・173に酷似する。遺物は出土しなかった。

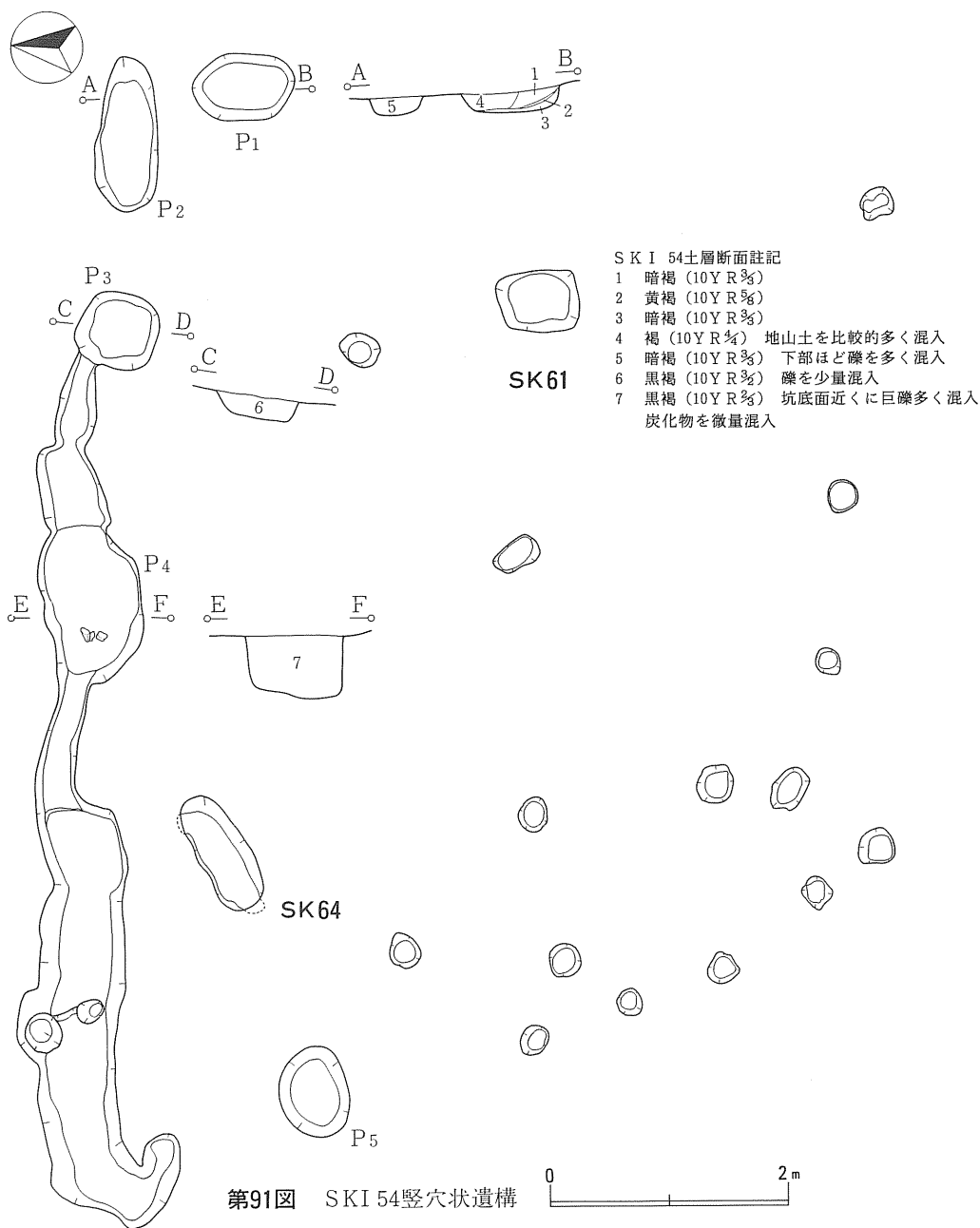
7 時期不明の遺構と遺物

(1) 竪穴状遺構

SK I 54竪穴状遺構（第91図）

LL27～29・LO27～29グリッドで検出した。小さな土坑(P1～5)とこれを結ぶ溝の集合体に一応竪穴状遺構の名称を冠しているが、個々に独立した遺構であった可能性もある。ただ確認面

での埋土の土色・土質の差異から、本遺構に隣接するSK61・64土坑は切り離して取り扱っている。遺構を構成する各土坑は、P1で長径85cm、短径55cm、深さ20cmの楕円形、P2で長径130cm、短径55cm、深さ15cmの長楕円形、P3で長さ65cm、深さ20cmの隅丸方形、P4で長径130cm、短径80cm、深さ55cmの楕円形、P5で長径75cm、短径60cm、深さ25cmの楕円形を呈している。P3、4を連絡する溝はほぼ東西方向に延び、幅約30~75cm、深さ15~25cmである。この溝の南側に点在する柱穴群が本遺構に伴うのか否かは不明である。



(2) 溝状遺構

SD 06溝状遺構 (第92図)

LS54~56、LT54・55グリッドで検出され、西側のSD07溝状遺構と約6m隔ててほぼ平行して存在する溝状遺構である。V層を掘り込んでいるが、底面は地山まで達していない。長さ9.5m、幅0.95~1.7m、深さ0.15~0.22mである。横断面は鍋底状を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 07溝状遺構 (第92図)

MA55・56グリッドで検出した。V層を掘り込んでいるが、底面は地山まで達していない。長さ4.4m、幅0.5~0.95m、深さ0.08~0.15mである。横断面は鍋底状を呈する。遺物は出土しなかった。

SD 52溝状遺構 (第92図)

ME38~41・MF38~41グリッドのVII層上面で検出した。幅1.8m前後、深さ0.15~0.2mの溝がほぼ南北方向に延びるが、北端は東に折れ、南端は調査区外となる。確認できる長さは約12mである。遺構北端部はSD01空堀跡の屈曲部に近接している。横断面は鍋底状を呈する。遺物は出土しなかった。

(3) 土坑

SK 51土坑 (第93図)

LK31・LL31グリッドで検出した。径約2mの円形を呈すると考えられるが、東辺部を欠く。確認面からの深さは最深で45cmである。坑底面には径35cm、深さ22cmの柱穴が穿たれている。埋土は、一見すると攪乱土のように暗褐色土と地山土がモザイク状に入り込んでいる。

SK 55土坑 (第93図)

LP32・33グリッドで検出した。長軸1.7m、短軸1.3mの東西方向に長い隅丸長方形を呈し、深さは25cmである。埋土は黒褐色土単層である。

SK 59土坑 (第93図)

LK29・LL29グリッドで検出した。長径50cm、短径37cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは35cm、埋土上位で拳大の礫を確認している。

SK 60土坑 (第93図)

SI 50堅穴住居跡の南側LS37グリッドで検出した。径あるいは一辺が約1.3mの不整形円形ないしは方形を呈する。深さは35cmである。

SK 61土坑 (第93図)

LM28グリッドで確認した。SKI 54とした堅穴状遺構の範囲内に含まれる可能性もあるが、確認面での埋土の相違から両者を分離して扱っている。これはSK 64土坑にも当てはま

第4章 調査の記録

ることである。規模は長軸70cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈する。深さは20cm余りである。埋土中位に拳大の礫を数個含む。

SK 62土坑 (第94図)

LN33グリッドで検出した。長径95cm、短径45cmの南北方向に長い楕円形を呈し、深さは20cmである。

SK 64土坑 (第94図)

LN29グリッドで検出した。長径105cm、短径45cmの北東-南西方向に長い楕円形を呈する。平面形状はSK 62土坑に類似する。確認面からの深さは65cmであり、一部オーバーハングしている。暗褐色土単層で、人為的に埋められたものと考えられる。

SK 66土坑 (第94図)

LQ38・LR38グリッドで検出した。長径125cm、短径70cmの東西方向に長い楕円形を呈し、深さは30cmであり、断面形で見て緩いU字状に掘り込まれている。

SK 210土坑 (第94図)

NJ73グリッドで検出した。平面形は不整楕円形、断面形は鍋底形である。長軸方向はS-72°-Eで、長軸116cm、短軸102cmを測る。プラン確認面からの深さは14~16cmで坑底面は比較的平坦である。遺物は出土しなかった。

SK 211土坑 (第95図)

NJ68グリッドで検出した。平面形は略楕円形、断面形は鍋底形である。長軸方向はN-62°-Eで、長軸94cm、短軸62cm、プラン確認面からの深さは14~18cmである。遺物は出土しなかった。

SK 218土坑 (第94図)

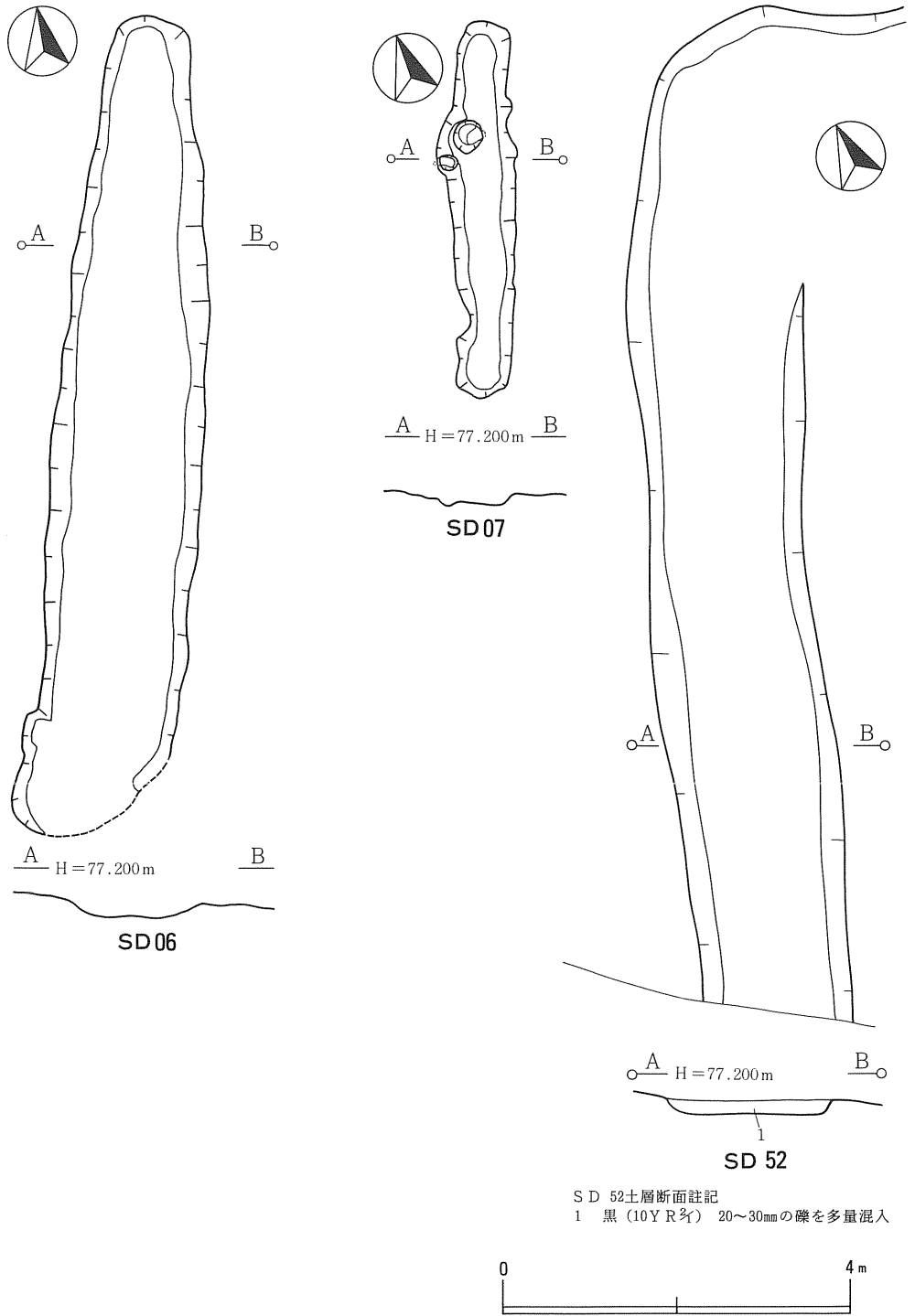
NL68グリッドで検出した。平面形は略円形、断面形は不整の鍋底形である。底面は凹凸があり、北西側にさらに柱穴状の掘り込みをもつ。長軸方向はN-29°-Eで、長軸96cm、短軸92cm、プラン確認面からの深さは8~10cmで、掘り込み部の最深部は18cmを測る。遺物は出土しなかった。

SK 219土坑 (第95図)

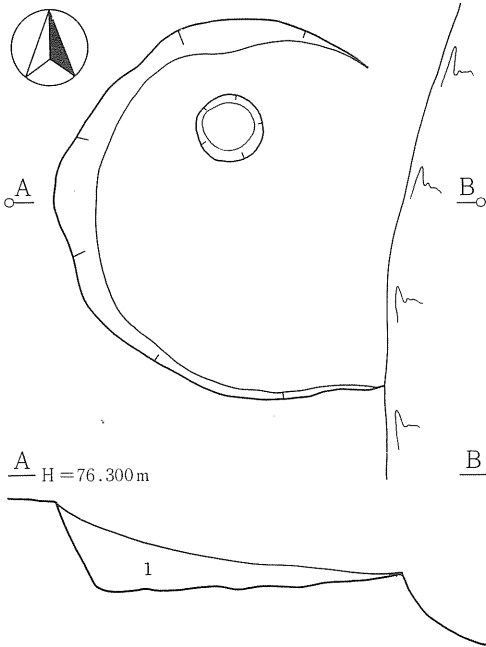
NM68グリッドで検出した。確認面での平面形は一辺80cm前後の不整形をなす。北西~南西端は深さ10cm前後で平坦になり、中央から左側はさらに径約64cm、深さ34cm前後の円筒状に掘り込まれている。

SK 220土坑 (第95図)

NN69グリッドで検出した。平面形は略円形、断面形は鍋底形である。長軸方向はN-25°-Wで、長軸118cm、短軸104cm、プラン確認面からの深さは16~18cmである。遺物は出土しなかった。

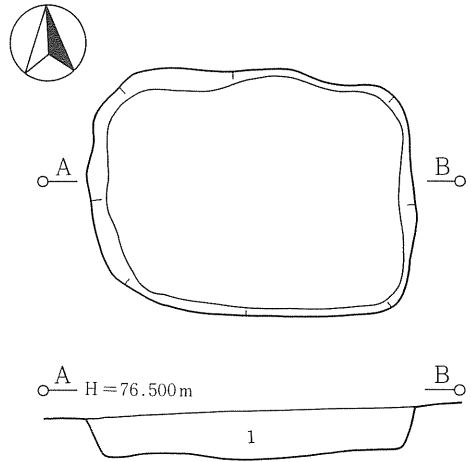


第92図 SD06・07・52溝状遺構



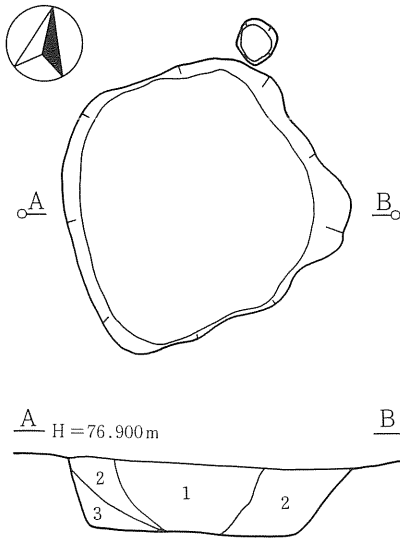
SK51

SK 51土層断面註記
1 暗褐 (10Y R $\frac{2}{5}$)と明黄褐(10Y R $\frac{7}{6}$)の混合土



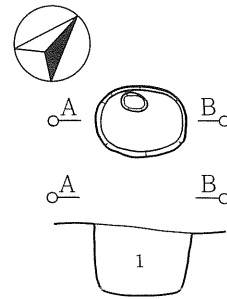
SK55

SK 55土層断面註記
1 黒褐 (10Y R $\frac{2}{5}$) 小礫少量混入



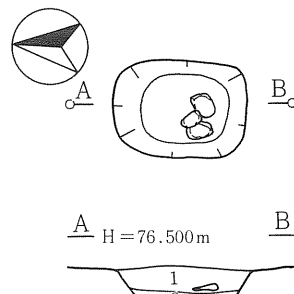
SK60

SK 60土層断面註記
1 黒褐 (10Y R $\frac{2}{5}$) 礫多量・炭化物少量混入
2 黒褐 (10Y R $\frac{2}{5}$) 礫少量混入
3 におい黄褐 (10Y R $\frac{7}{6}$) 礫多量混入



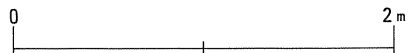
SK59

SK 59土層断面註記
1 黒褐 (10Y R $\frac{2}{5}$)



SK61

SK 61土層断面註記
1 暗褐 (10Y R $\frac{2}{5}$) 礫少量混入
2 暗褐 (10Y R $\frac{2}{5}$) 小礫少量混入



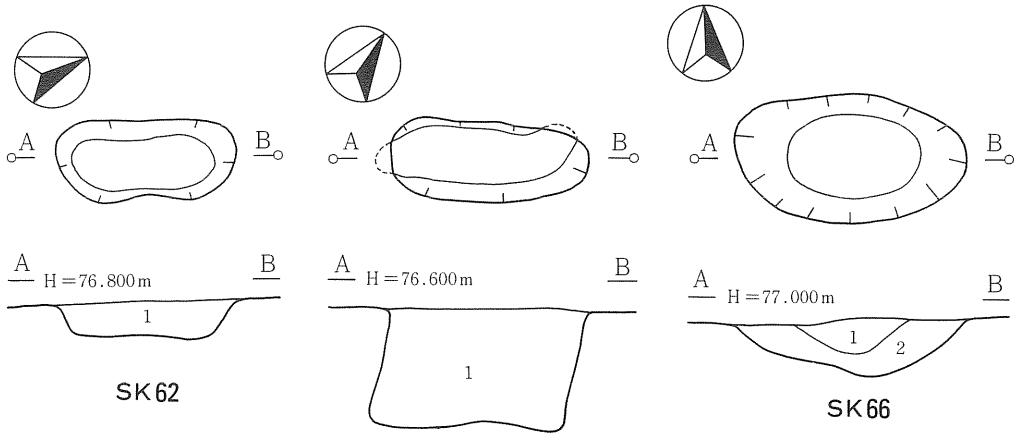
第93図 SK51・SK55・SK59・SK60・SK61土坑

SK 221土坑 (第95図)

NN74グリッドで検出した。平面形は略楕円形、断面形は鍋底形である。長軸方向をN-62° - Eにもち、長軸94cm、短軸62cmで、プラン確認面からの深さは14~18cmである。遺物は出土しなかった。

SK 230土坑 (第95図)

NN74グリッドで検出した。平面形は略楕円形、断面形は鍋底形である。長軸方向はN-61° -



SK 62土層断面註記

1 暗褐 (10Y R^{3/5}) 地山礫を多く混入

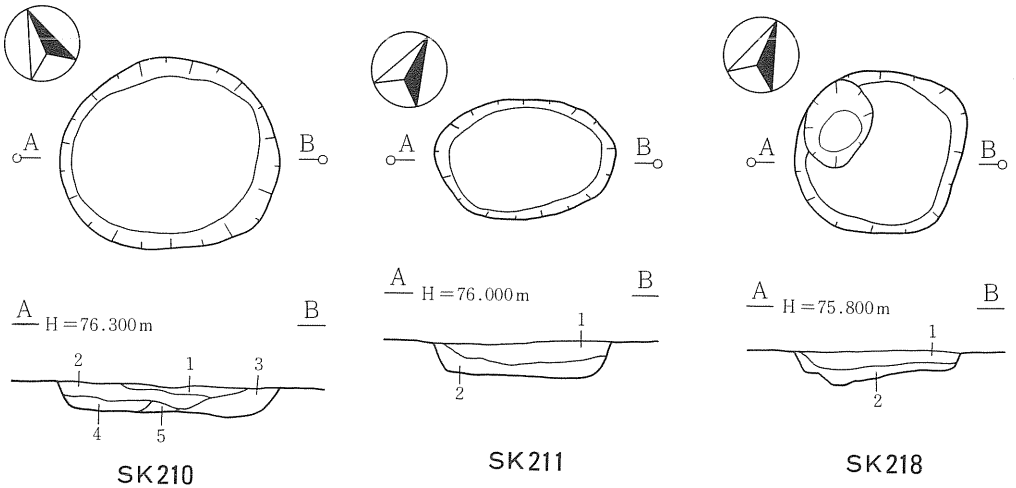
SK64

SK 64土層断面註記

1 暗褐 (10Y R^{3/5}) 土質はSK 62に類似する

SK 66土層断面註記

1 暗褐 (10Y R^{3/5}) 拳大の礫多く含む
2 黒褐 (10Y R^{2/5}) 礫多く混入



SK 210土層断面註記

1 黒褐 (10Y R^{3/5})
2 黒褐 (10Y R^{2/5}) 砂礫混入
3 黒褐 (10Y R^{2/5}) 礫混入
4 褐 (7.5Y R^{3/5}) 砂礫多量混入
5 黄橙 (10Y R^{5/5}) 砂礫塊

SK 211土層断面註記

1 黒褐 (10Y R^{3/5})
2 黒褐 (10Y R^{2/5})

SK 218土層断面註記

1 暗褐 (10Y R^{3/5})
2 褐 (10Y R^{4/5})



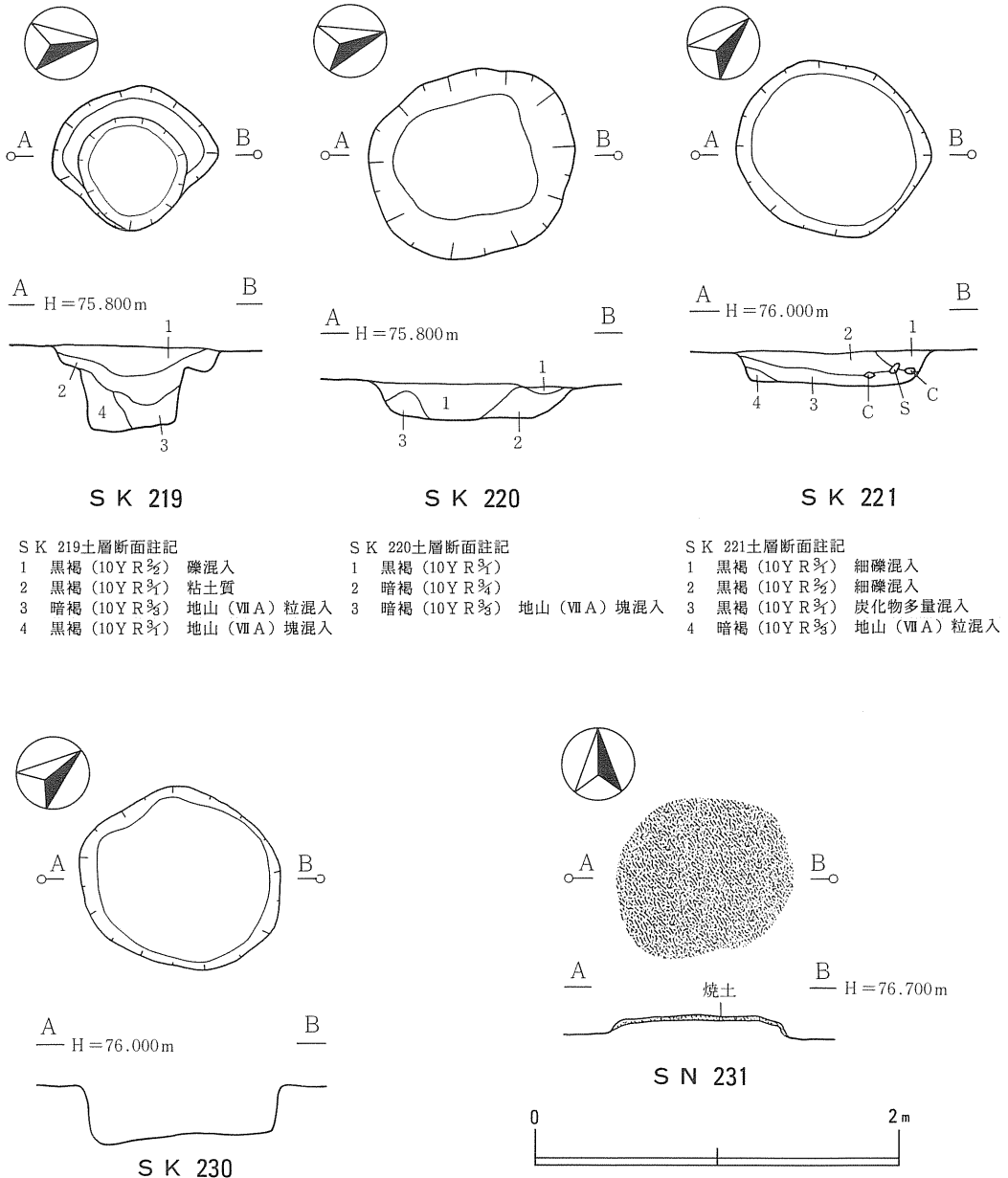
第94図 SK62・SK64・SK66・SK210・SK211・SK218土坑

E、長軸116cm、短軸96cm、プラン確認面からの深さは25~32cmである。遺物は出土しなかった。

(4) 焼土遺構

SN 231焼土遺構 (第95図)

NE66・NF66グリッドで検出した。平面形は略円形で、長軸方向をN-70° -Eにもち、長軸98cm、短軸86cmである。約2~3cmの厚さの焼土である。遺物は出土しなかった。



SK 219土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R²/4) 礫混入
- 2 黒褐 (10Y R²/4) 粘土質
- 3 暗褐 (10Y R²/4) 地山 (VII A) 粒混入
- 4 黒褐 (10Y R²/4) 地山 (VII A) 塊混入

SK 220土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R²/4)
- 2 暗褐 (10Y R²/4)
- 3 暗褐 (10Y R²/4) 地山 (VII A) 塊混入

SK 221土層断面註記

- 1 黒褐 (10Y R²/4) 細礫混入
- 2 黒褐 (10Y R²/4) 細礫混入
- 3 黒褐 (10Y R²/4) 炭化物多量混入
- 4 暗褐 (10Y R²/4) 地山 (VII A) 粒混入

第95図 SK219・SK220・SK221・SK230土坑、SN231焼土遺構

(5) 柱穴(付図1)

調査区のほぼ全域で柱穴様ピットを検出した。そのほとんどが掘立柱建物跡の柱穴と思われるが、建物跡を想定できなかつたため柱穴群とした。

第2節 遺構外出土遺物

1 縄文時代の遺物

土器 (第96～98図、図版12)

山王岱遺跡の3次にわたる発掘調査において出土した縄文土器は、ほとんどが破片資料であり、遺構外出土のものは、古代から現代までの掘削・整地・開墾・土取り等によって遺物包含層(V層以下の層)の多くが消失しており、約200点が出土したに止まる。そのうち粗製土器が半数以上を占め、Ⅱ群土器がそれに次いで多い。そのほとんどが深鉢の体部破片である。

1の1点のみが前期の土器で、綾絡文が施されている(Ⅰ群)。2は口縁部が外側に折り返し(Ⅱ群c類)、10～12は3条1組の沈線で真中の沈線上に刺突が施される(Ⅱ群c類)。13・14の2点は同一個体と思われ、RL原体の斜位回転地文に横位の沈線が施される(Ⅲ群a類)。15は沈線文で区画をし、無文部は磨消しがなされ、口縁部小波状の頂部2カ所に刻みが入る(Ⅲ群b類)。16は口縁部に羊歯状文が施文される(Ⅳ群a類)。17は沈線文が施され(Ⅳ群b類)、18は沈線区画の磨消し縄文である(Ⅳ群c類)。32・33はLLrの捺糸文が施される(V群)。

石器 (第99～103図、図版13～15)

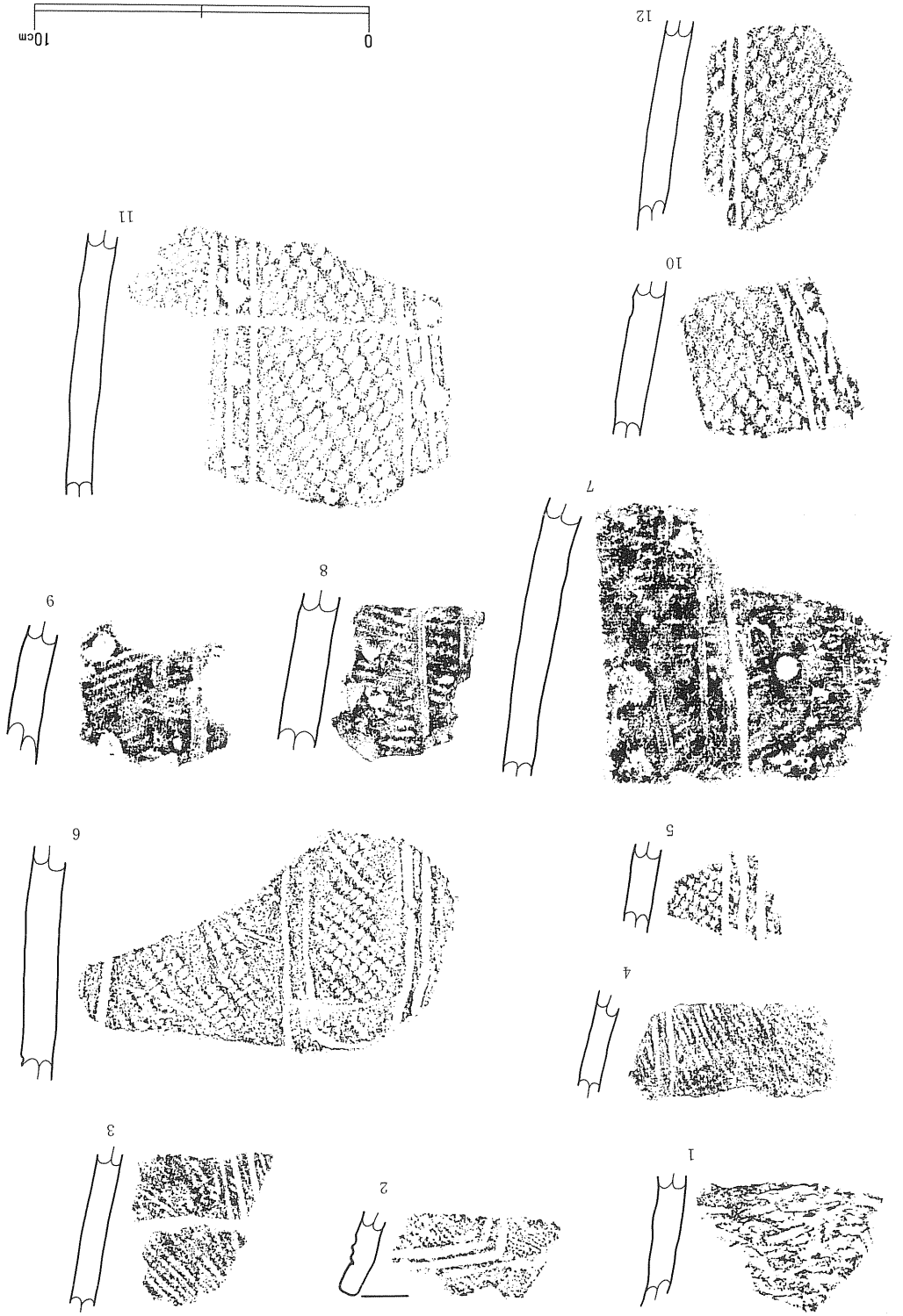
遺構外出土の石器・剥片の総数は55点であるが、山王岱遺跡から出土した石器・剥片のおよそ64%にあたる。これら石器・剥片の出土は、S I 225堅穴住居跡→S I 223堅穴住居跡→S I 206堅穴住居跡を結ぶラインより西側にまとまっている(第99図)。

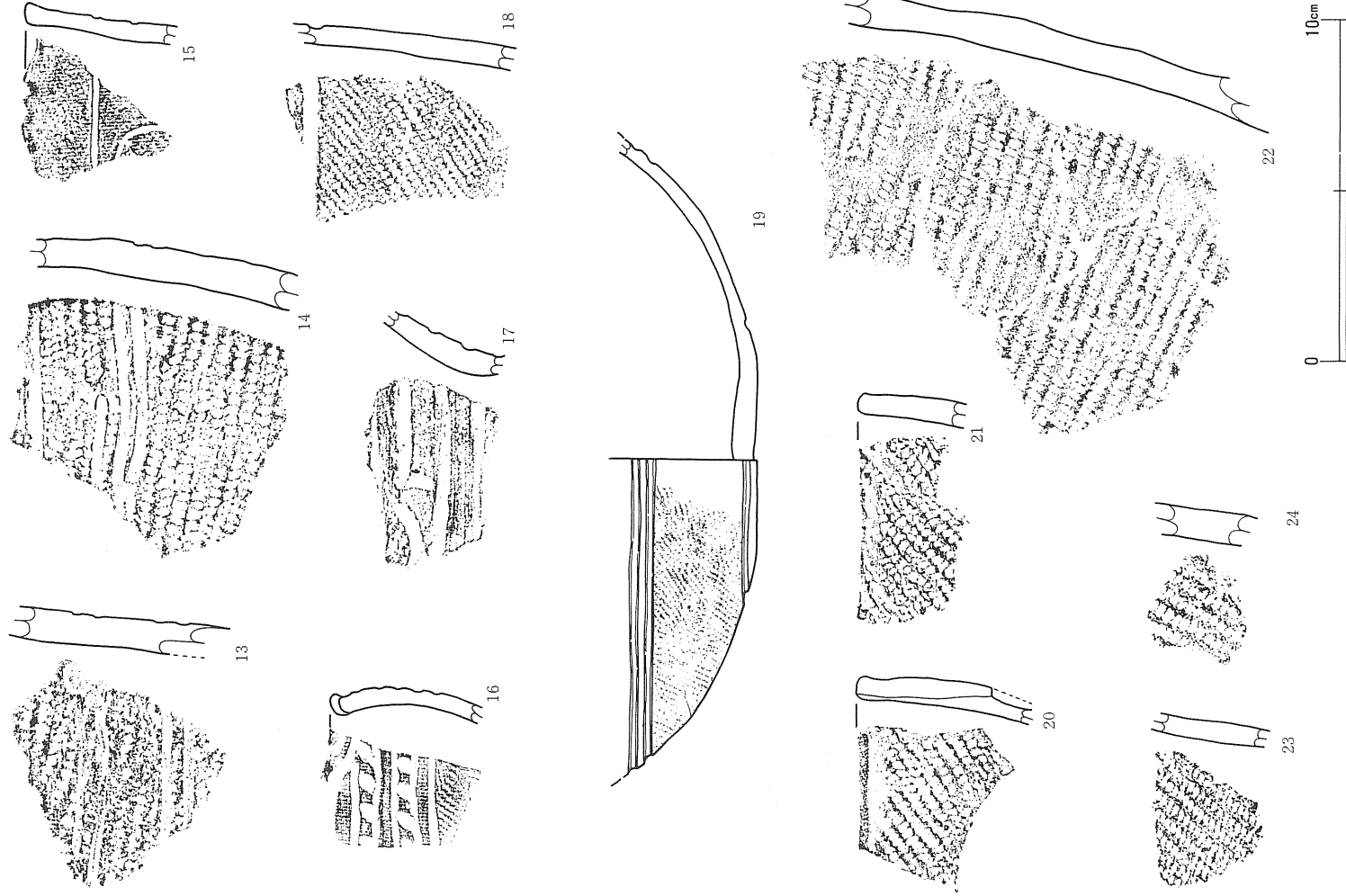
石鏃は2点出土した。34は凸基有茎鏃である。茎部端及び先端が折損しており、表面左右側縁に小さく数ヶ所、裏面基部の中心に大きく一ヶ所、各々被熱によると思われる弾けた剝離痕がある。35は平基無茎鏃で、基部には加工があまり施されず、両面に素材の剝離面を残している。基部の表面右側は一部欠損している。

石匙は2点出土した。36は完形の縦型石匙である。表面はつまみ部の一部を除き、ほぼ全面に二次加工を施しているが、裏面にはつまみ部の抉りを除き、二次加工を施していない。裏面にはつまみ部及び剝離を除く全面に光沢が観察される。37は上半を折損する縦型石匙片である。表面左側は長い二次加工が施され、右側は比較的急角度の短い二次加工が見られる。また、さらに表面左側縁には両面には細かい二次加工を施している。

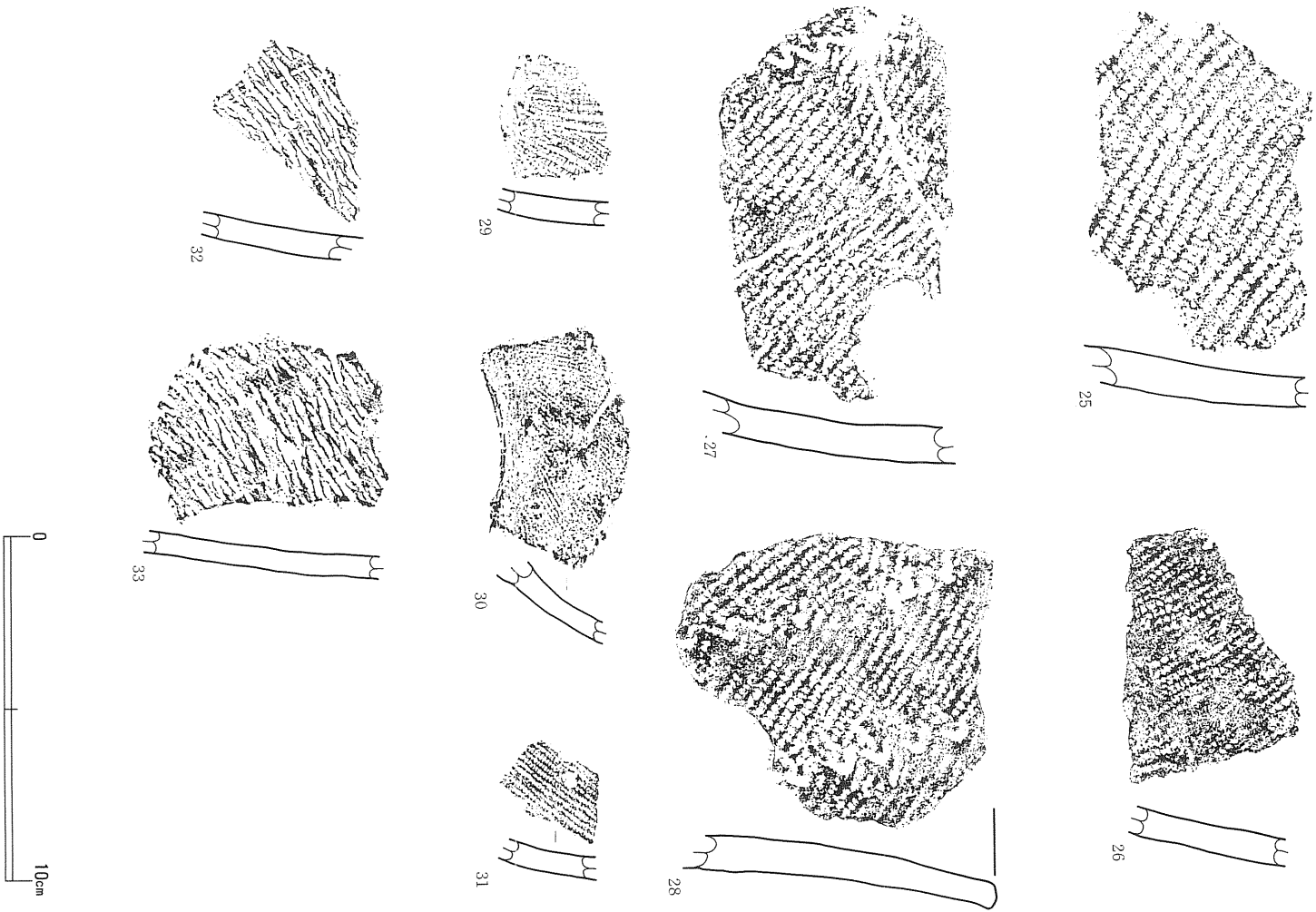
石篋は1点の出土である。38は厚みのある横長剥片を素材とする石篋である。表面は全面に

第96図 遺構外出土遺物〔縄文時代(1)〕

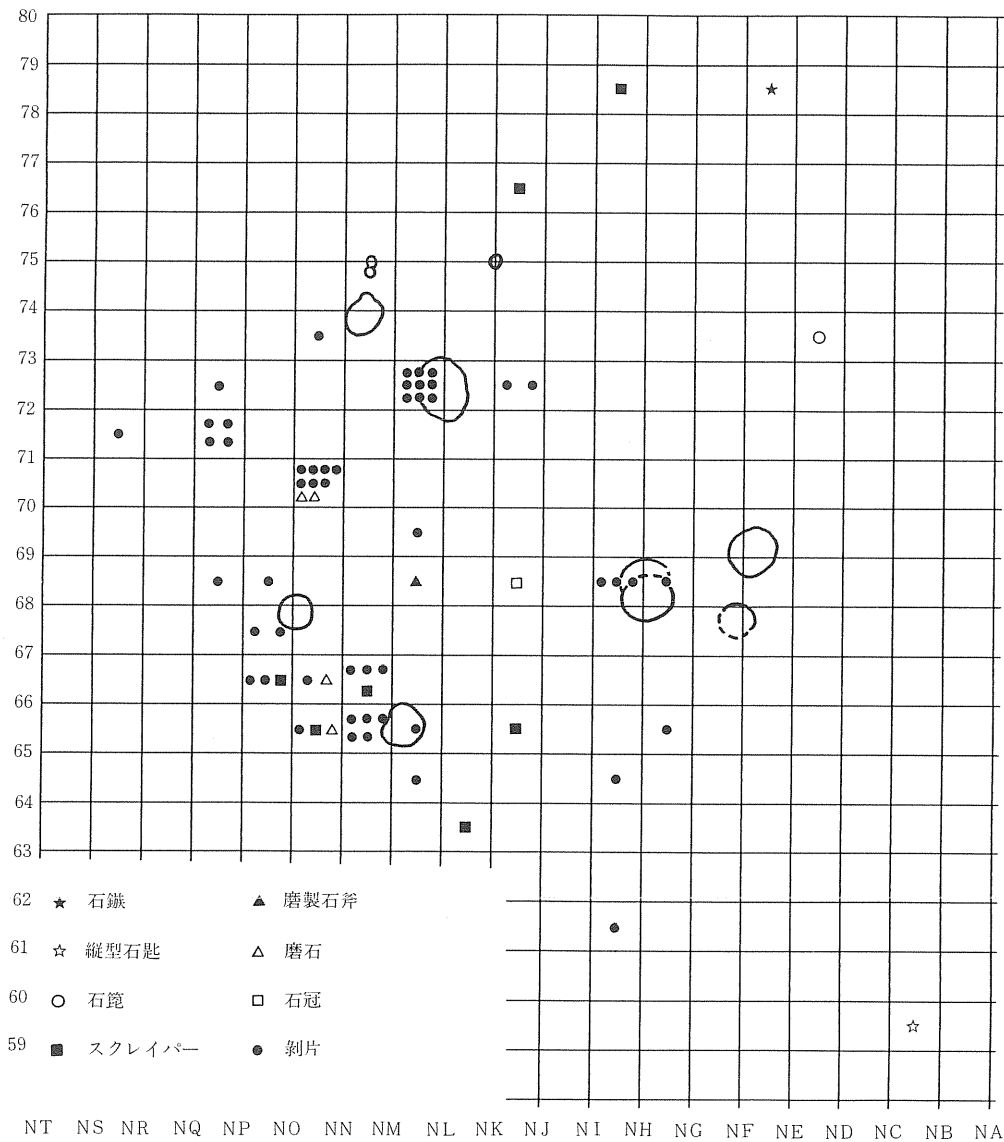




第97圖 遺構外出土遺物(縄文時代(2))



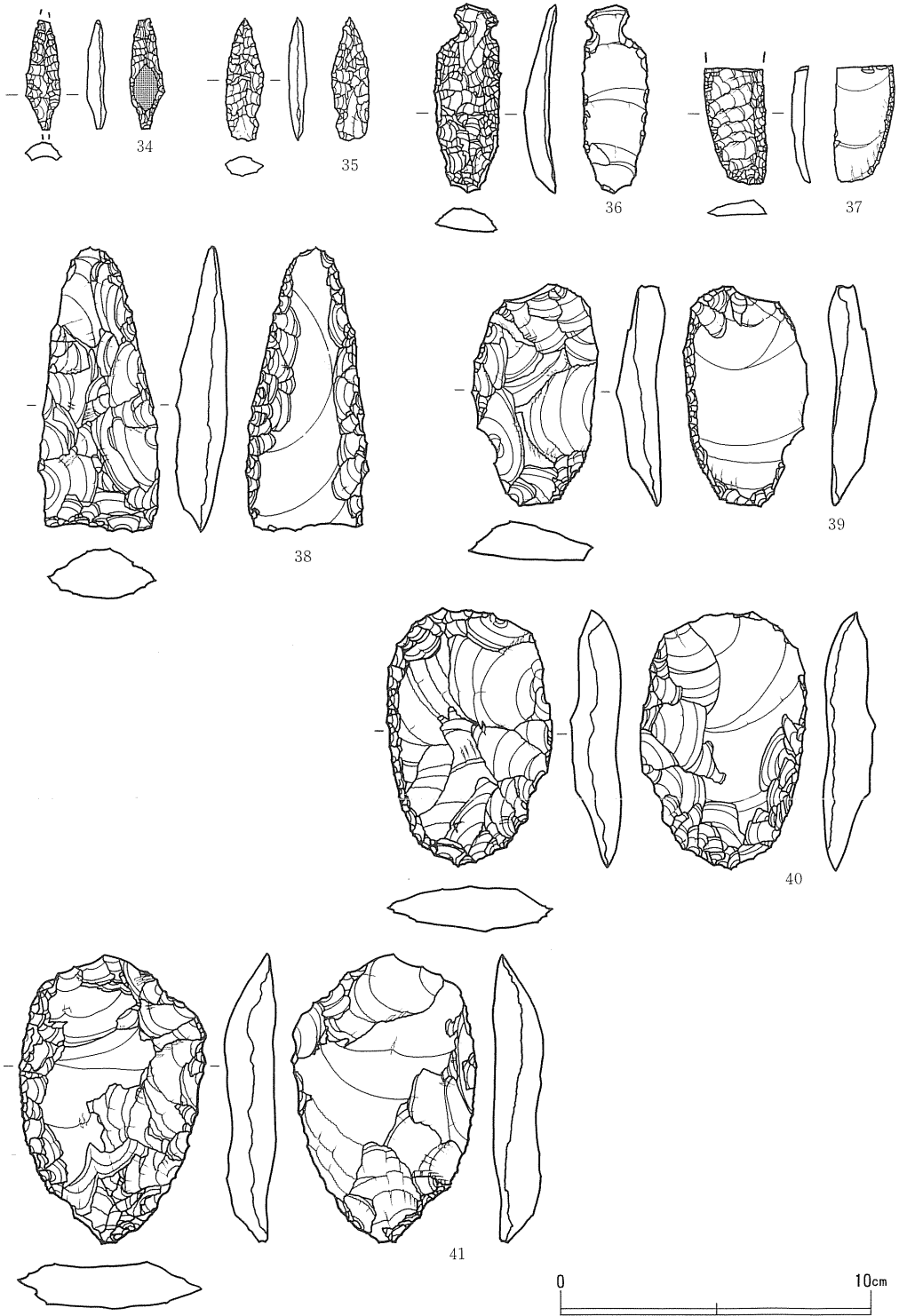
第98図 遺構外出土遺物〔縄文時代(3)〕



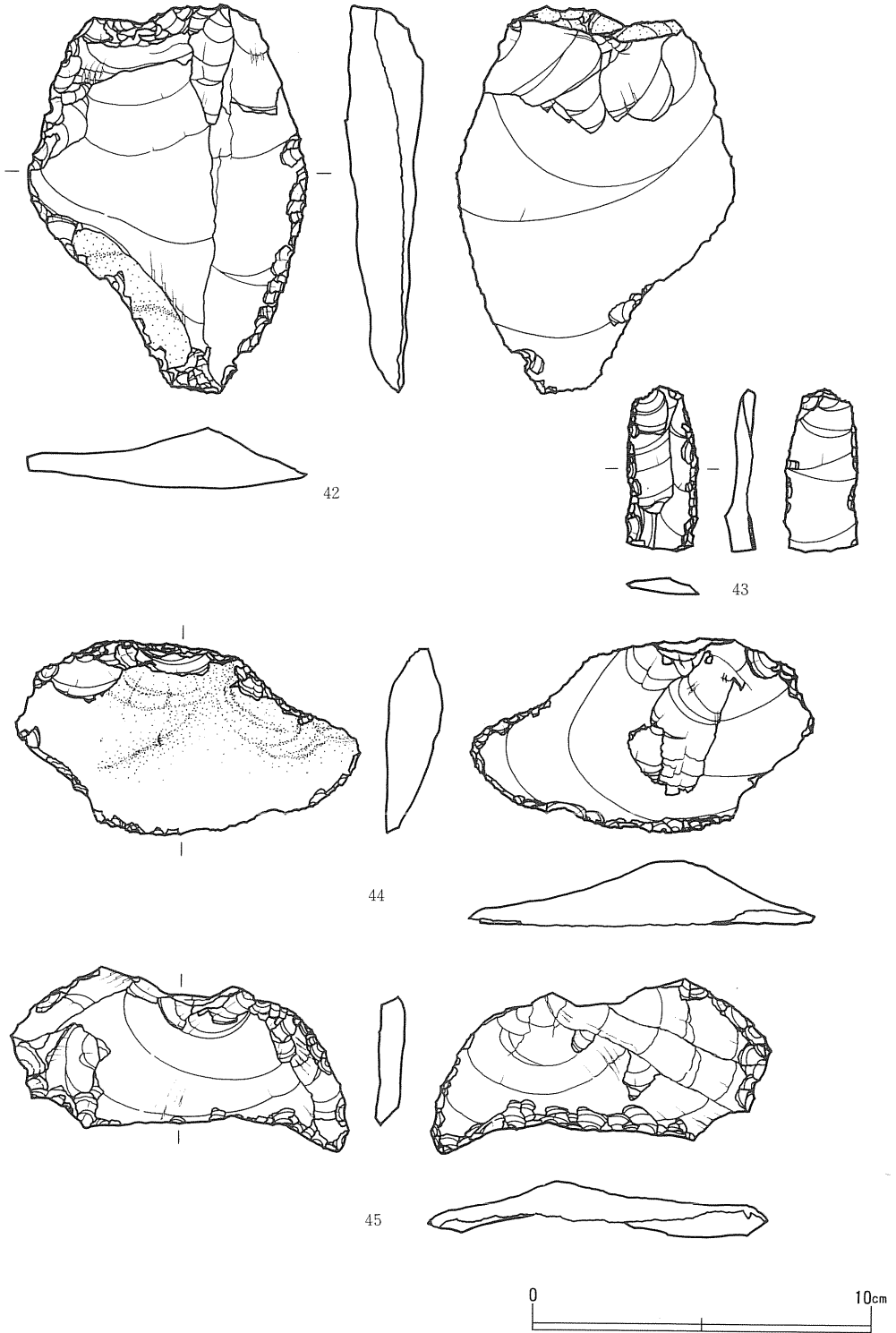
第99図 遺構外出土石器・剥片分布図

二次加工を施し、裏面は両側縁に二次加工を施し、撥形に整形している。表面中央部から基部にかけての二次加工による剥離でできた稜線は摩滅している（スクリーントーン部分）。刃部表面左側には細かい階段状剥離痕があり、刃部表面には光沢が認められる。

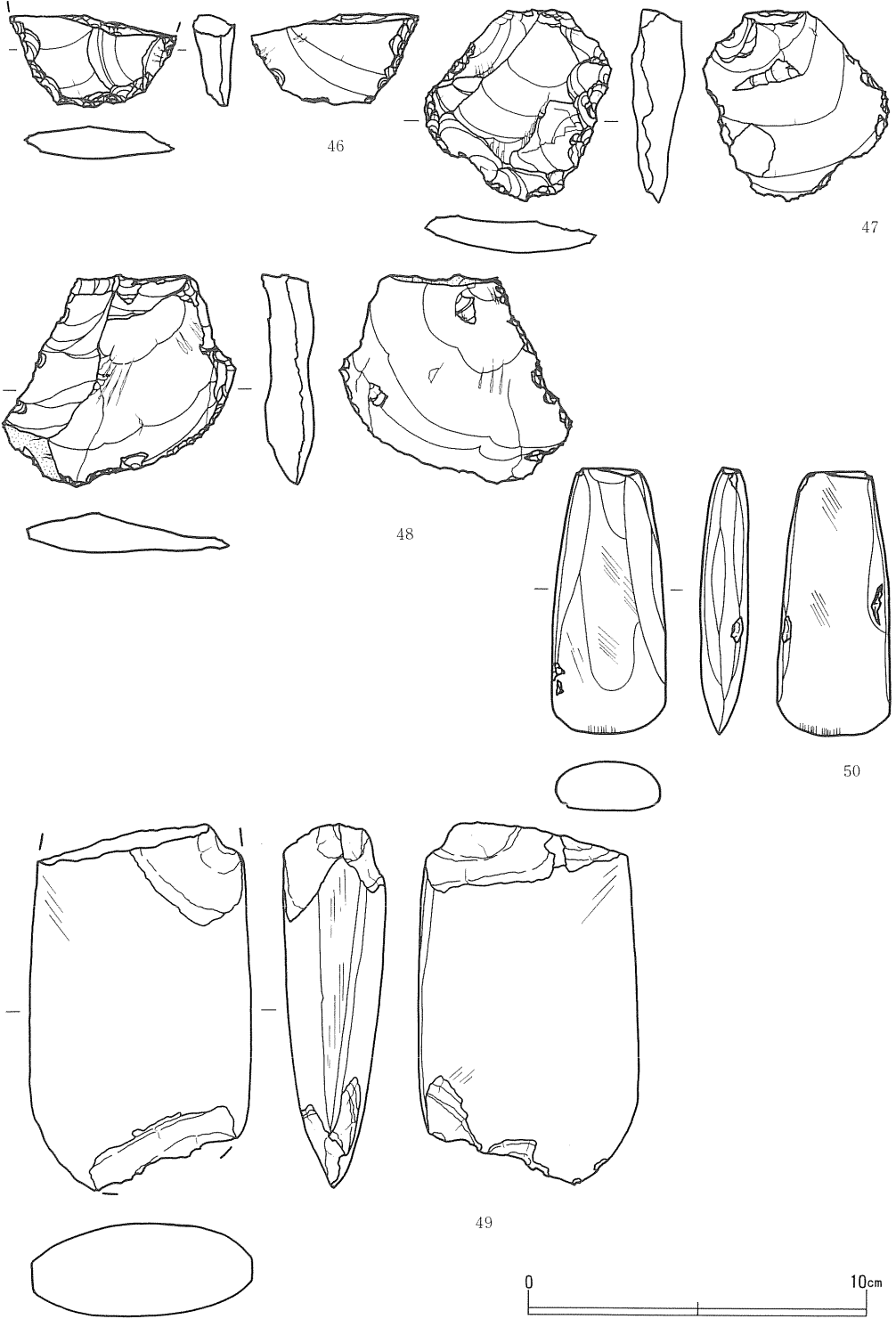
スクレイパーは10点出土した。39はやや厚みのある縦長剥片を用いたスクレイパーで、表面左側には大形の二次加工を施し、裏面左側縁には細かい二次加工を施して刃部を作出している。40は横長剥片を素材とし、末端側の一部を除き、ほぼ全周に比較的大形の二次加工を施し、卵



第100図 遺構外出土遺物〔縄文時代(4)〕

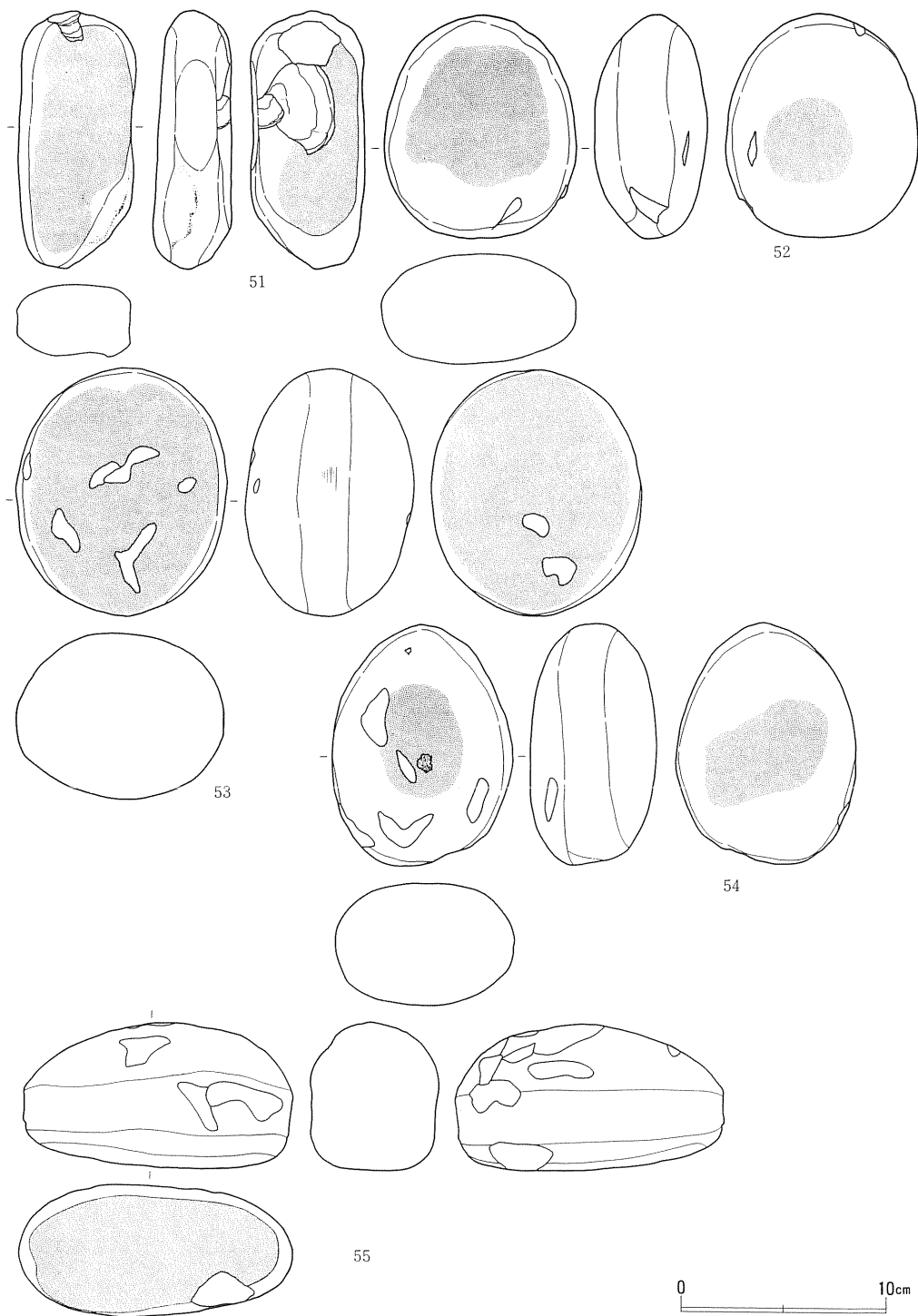


第101図 遺構外出土遺物〔縄文時代(5)〕



第102図 遺構外出土遺物〔縄文時代(6)〕

形に整形している。素材末端側の表面には細かい二次加工が施されて刃部となっている。41は



第103図 遺構外出土遺物〔縄文時代(7)〕

厚手の縦長剥片を素材とし、一部を除き比較的大形の二次加工を施し、全体を尖頭状に整形した後、表面右縁に細かい二次加工を加え刃部を作出している。42は大型の縦長剥片を素材とし、表面には打面側と左側縁の一部を除き、ほぼ全縁に二次加工が施され、裏面には先端近くに数ヶ所の微小剥離痕が認められる。43は薄手の縦長剥片を素材とし、両側縁の主として表面側に二次加工を施し刃部を作出している。下部は折損している。44は横長剥片を素材とし、末端縁は裏面に、表面の右側縁には両面に細かい二次加工を施している。末端側が外弯、表面右側が若干尖頭状を呈する刃部を作出している。45は薄手の横長剥片を素材とし、裏面末端側から左側縁及び表面右側縁に二次加工を施している。末端側が内弯し、表面左端が尖頭状を呈する刃部を作出している。46は弧を描く刃部のみが残り、他部分は折失している。刃部は素材剥片の末端側に表面に比較急角度の二次加工、裏面右側に比較的平坦な二次加工をそれぞれ施して作出している。47は比較的寸詰まりの剥片を素材とし、末端表面左側に比較急角度の二次加工が認められる。剥片の右側は後世の剥離痕が多数存在し、細部の形状等は不明瞭であるが、剥片表面の末端中央から左側縁にかけて、微小剥離痕が存在する。48は寸詰まりの剥片の表面の末端縁辺に細かい二次加工を施し、弧状の刃部を作出している。

第4表 遺構外出土石器一覧表

番号	出土地点	層位	器種	大きさ(単位は長・幅がmm、重量がg)					材質
				最大長	最大幅	最大厚	重量	最大刃長	
34	NE78	VI	石 鏃	35	35	6	1	25	頁岩
35	MG55	V	石 鏃	39	22	5	1	62	頁岩
36	不明	I	縦型石匙	60	21	8	10	51	頁岩
37	NB59	I	縦型石匙	37	20	4	4	42	頁岩
38	ND73	I	石 篋	92	40	16	51	34	頁岩
39	MP53	V	スクレイパー	72	41	13	36	46	頁岩
40	NN65	V	スクレイパー	91	54	16	69	83	頁岩
41	NS70	V	スクレイパー	93	60	16	89	64	頁岩
42	表採	-	スクレイパー	114	82	21	148	91	頁岩
43	MM58	VI	スクレイパー	47	22	7	6	43	頁岩
44	NO66	V	スクレイパー	57	110	16	81	77	頁岩
45	NH78	VI	スクレイパー	54	99	10	45	75	頁岩
46	NJ65	I	スクレイパー	32	50	12	13	45	頁岩
47	NK63	VI	スクレイパー	57	56	16	40	42	頁岩
48	NM66	V	スクレイパー	62	69	14	50	59	頁岩
49	一次表採	-	磨製石斧	109	65	30	351	計測不能	安山岩
50	NL68	I	磨製石斧	79	33	44	67	33	緑色凝灰岩
51	NN65	V	磨石	126	57	38	310	-	安山岩
52	NN66	V	磨石	102	94	56	784	-	安山岩
53	NN70	V	磨石	121	104	83	1,421	-	安山岩
54	NN70	V	磨石	118	89	62	931	-	安山岩
55	NJ68	I	石冠	133	65	71	1,001	-	花崗岩

磨製石斧は2点出土した。49は基部を折損するが、横断面形は所謂三味線胴形をなす比較的大型の定角式石斧である。刃部には大型の剥離痕が存在するが、刃部再生は認められない。50は基端面以外全面が研磨された完形の両凸円刃石斧である。横断面形は低多角形を呈する。表面の刃部左上、裏面左側及び裏面中央に整形時の剥離痕が残っている。

磨石は10点出土した。51は棒状礫を素材とする。両面及び表面右側辺に磨面が形成されており、特に表面の磨痕が顕著である。52はやや扁平な円礫を素材とし、両面に磨面が見られる。53は比較的大型の円礫を素材とする。ほぼ全面を磨っている。54は円礫を素材とする。両面の中央部分に磨面が認められる。55はいわゆる北海道式石冠である。全面敲打整形され、上面観は一端がやや狭まった長楕円形、側面観は半円形に近い。側面には幅2cm前後の浅い溝状の凹みがめぐる。底面はほぼ平坦で、若干磨痕が認められる。

2 古代(平安時代)の遺物

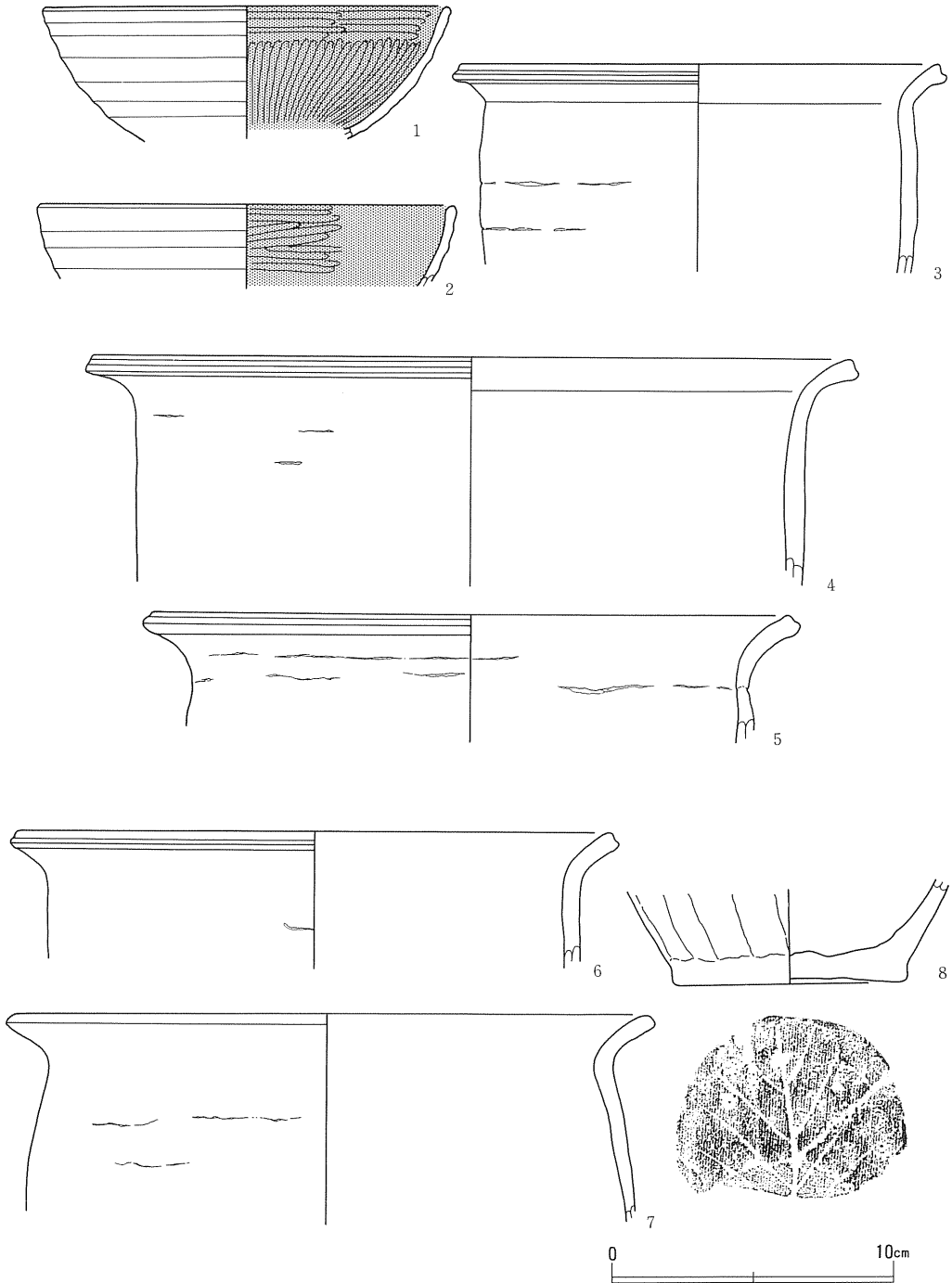
調査区南東部で調査前に、旧耕作者により黒土が不法採取された際の盛土中に発見した遺物である。原位置は不明であるが、調査区内の出土である(第104図)。1は、推定口径14.5cm、現高4.7cmの、轆轤成形したあと内面に篋磨きと黒色処理をした土師器坏形土器である。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。外面の色調は浅黄橙色を呈する。2は、推定口径15cm、現高3cmの、轆轤成形したあと内面に篋磨きと黒色処理をした土師器坏形土器である。胎土は精選されており焼成良好で堅緻である。外面の色調は浅黄橙色を呈する。3～7は、粘土紐巻き上げで成形した土師器甕形土器の口縁部破片である。3～6は口縁部が大きく外反し、口唇の内側が垂直に立ち上がる形態である。胎土に砂礫を多量に混入し、焼成は良好で堅緻である。7は口縁部が大きく外反している。8は、土師器甕形土器の底部破片である。現高3.6cm、底径8.2cmで胎土に砂礫を多量に混入し、外面が篋削り調整されている。底面には木葉痕がみられる。焼成は良好で堅緻である。色調は外面がにぶい橙色、内面が黄橙色を呈する。

3 中世の遺物

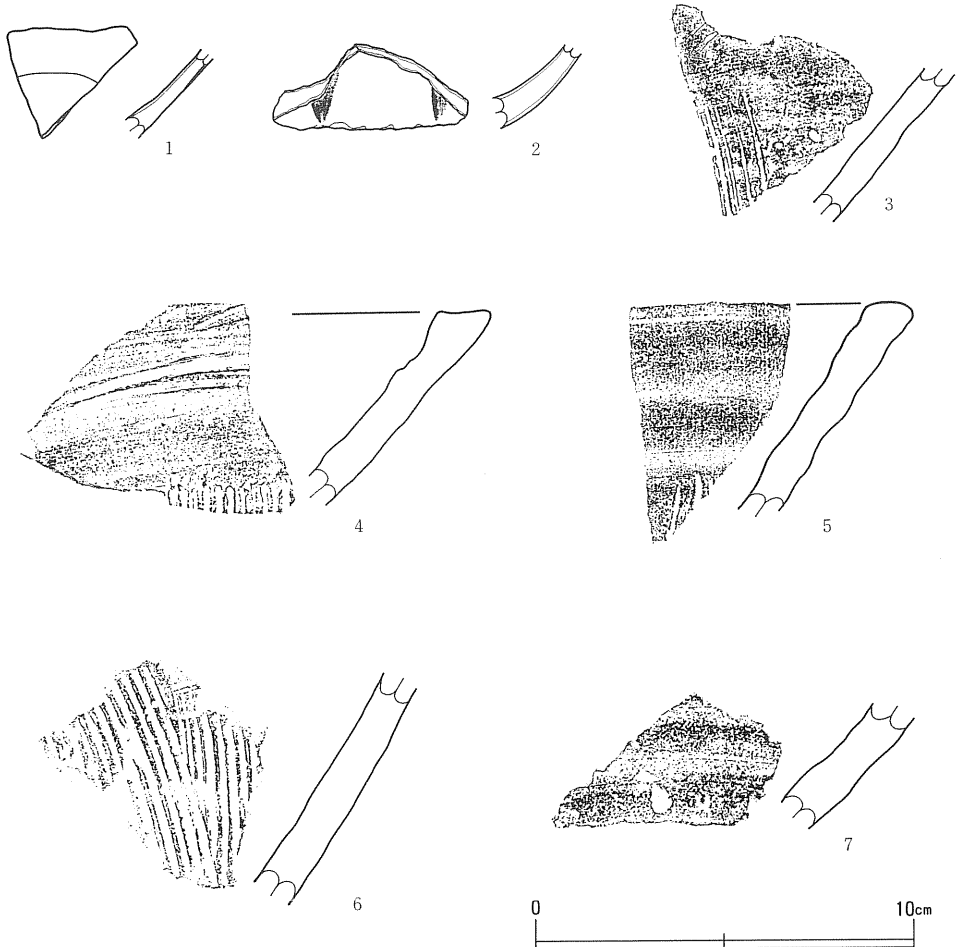
遺構外出土の中世遺物として、白磁碗と珠洲系・珠洲焼播鉢がある(第105図、図版36・37)。

1は、MO59グリッドのI層中から出土した12～13世紀の中国製白磁碗の腰部破片である。2は、LK27グリッドから出土した14世紀後半～15世紀中葉の中国龍泉窯系の青磁碗腰部破片である。外面に篋描きの蓮弁文がみられる。3は、MR71グリッドのI層から出土した13世紀前半(Ⅱ期)の珠洲系播鉢の口縁部近くの破片である。卸目が粗雑で、轆轤撫での凹凸が顕著である。4は出土地点不明、5はNC65グリッドのI層から出土した14世紀後半(Ⅳ期新)の珠洲系播鉢の口縁部破片である。口縁部のつくりは珠洲焼では見られず、内面の調整も特異で胎土

も同期のものに比べ一般的ではない。6は、MO56グリッドから出土した14世紀後半(IV期新)



第104図 遺構外出土遺物(古代)



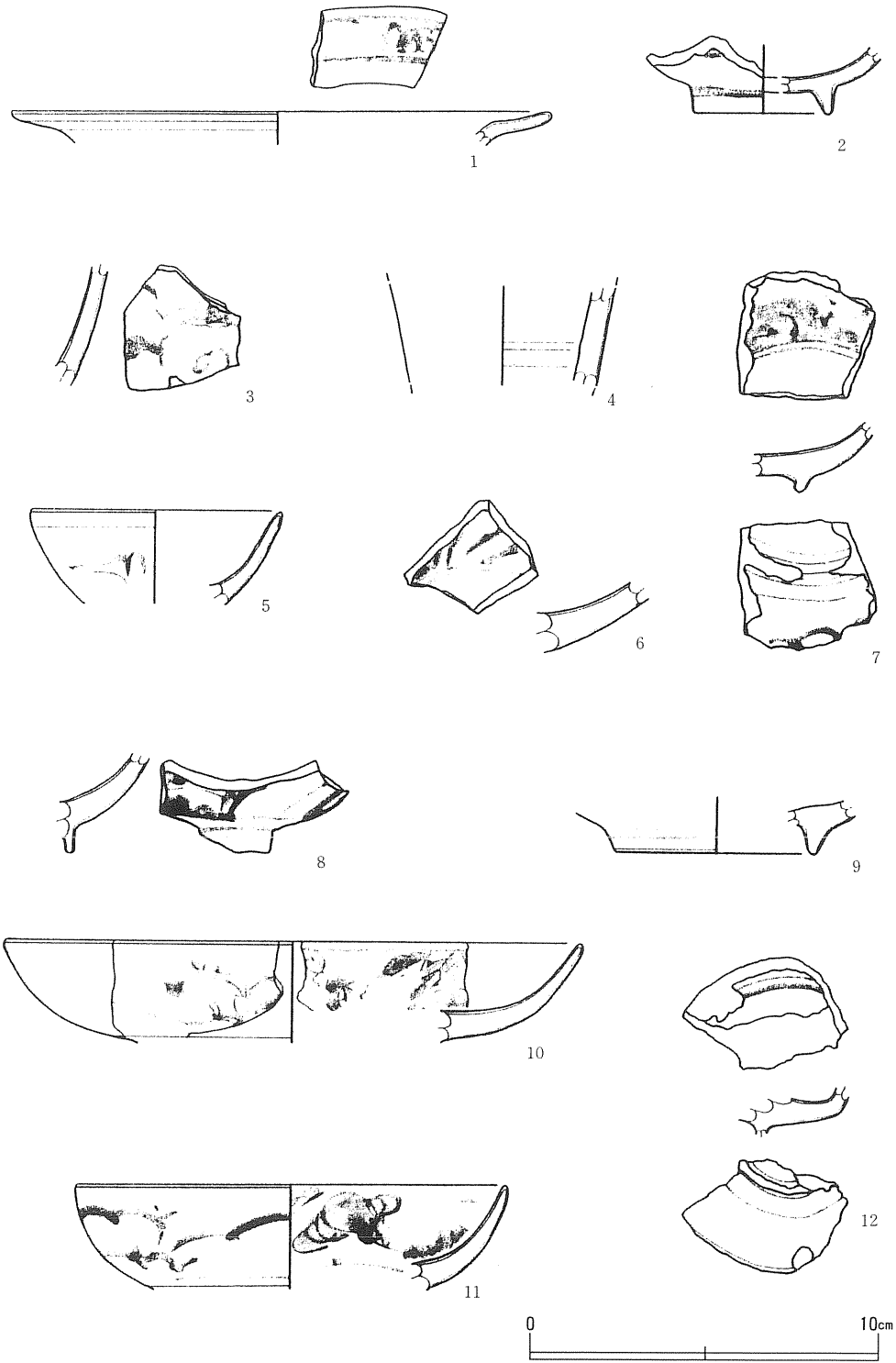
第105図 遺構外出土遺物(中世)

の珠洲系播鉢の体部破片である。7は、LL30グリッドから出土した14世紀後半(IV期新頃)の珠洲系播鉢の体部破片である。

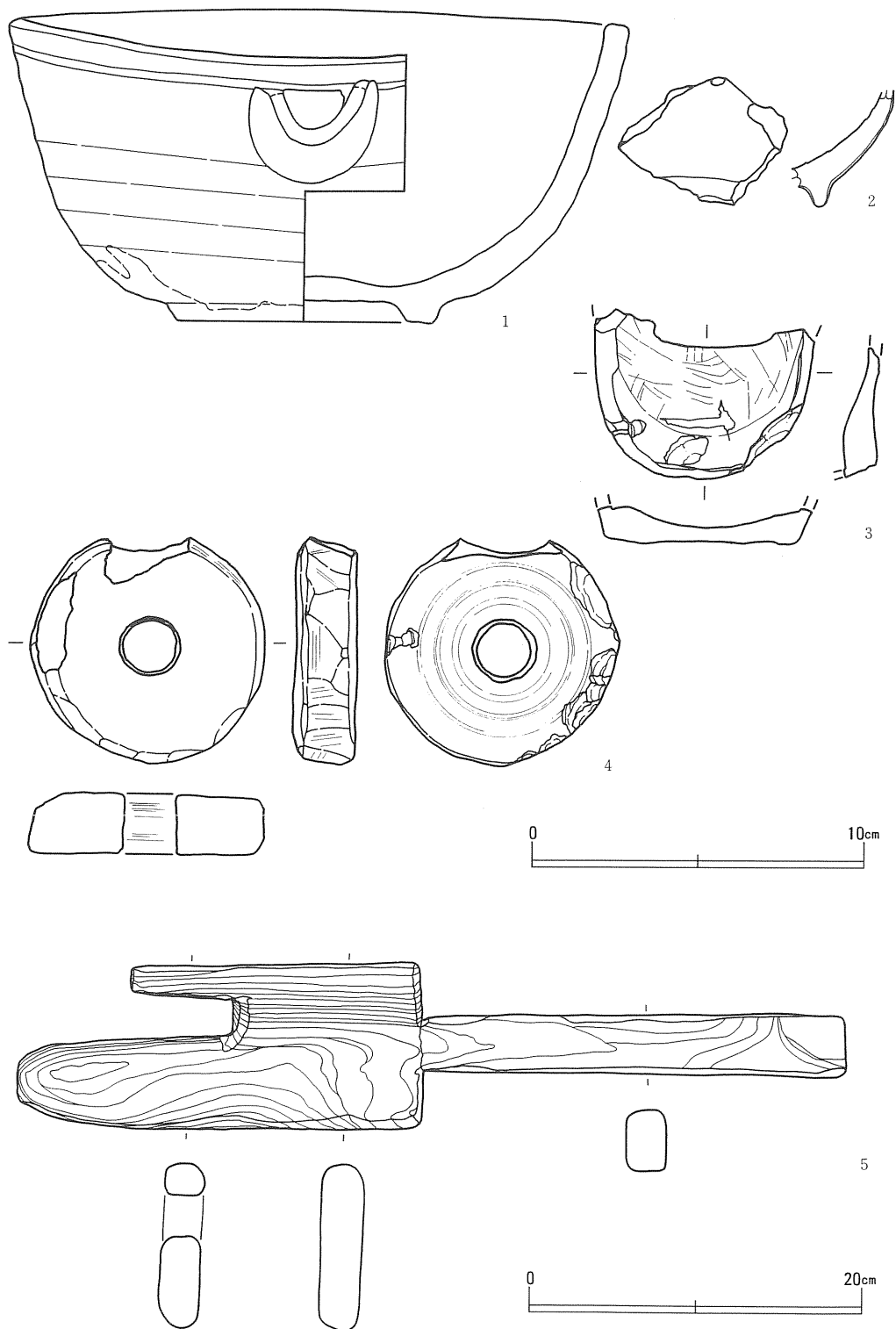
4 近・現代の遺物

遺構外出土の近・現代の遺物として、陶磁器・硯・円盤状石製品・木製品・金属器がある(第106～108図、図版38～42)。

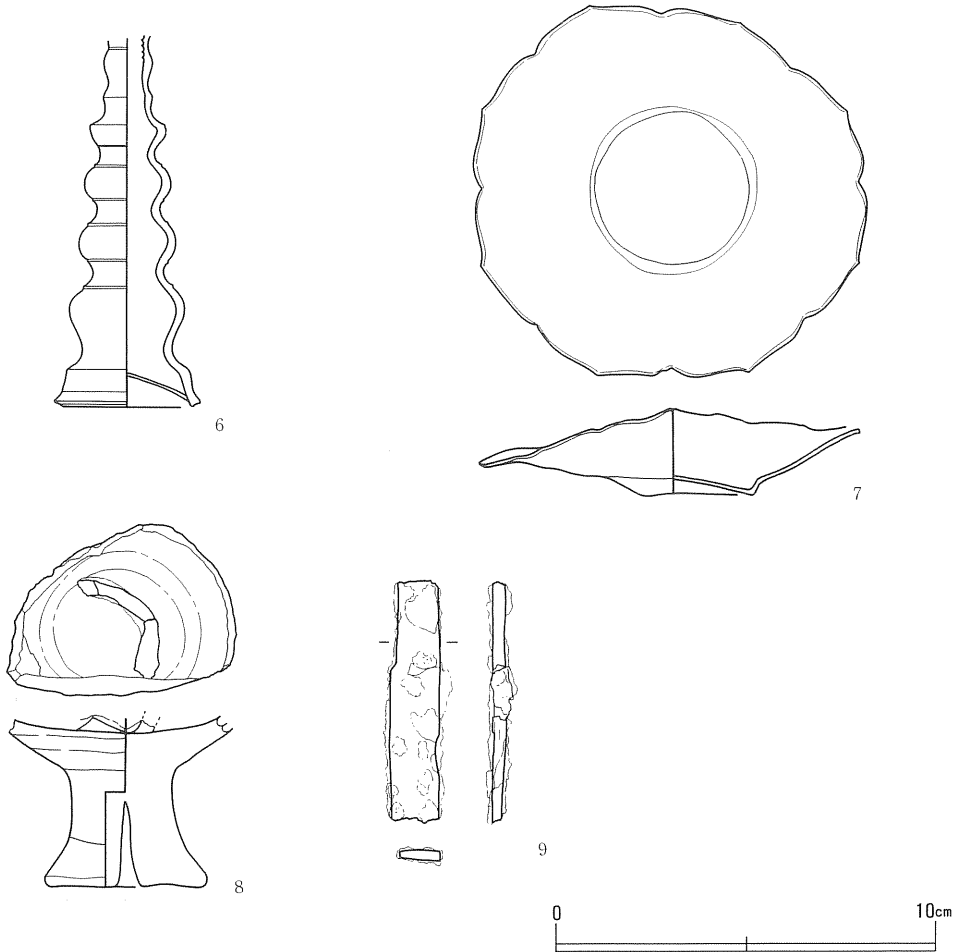
近世の陶磁器としては、17世紀後半から18世紀末葉までの肥前産の陶磁器があげられる(第106図)。1は17世紀後半～18世紀代の口縁部に草花文が描かれ、蛇の目高台をもつ染付の皿である。2・3は17世紀後半～18世紀代の染付の碗である。4は17世紀後半～18世紀代の青磁瓶である。5は18世紀の染付の小杯あるいは仏飯器で笹文が外面に描かれている。。6は18世紀の染付の皿か碗で、7は18世紀の染付の皿である。8は18世紀代の梅樹と組み合わせた八橋文の染付の碗



第106図 近世の遺物



第107図 遺構外出土遺物(近代・現代)



第108図 遺構外出土遺物(近代・現代)

である。9は18世紀の染付の碗か蓋物である。10は18世紀前半から中葉の比較的上質な、内面に桜?を外面に唐草文を描いた染付の皿である。11は18世紀中葉から末葉の、内面に草花文、外面に唐草文の描かれた染付の皿である。12は18世紀後半から19世紀初めの染付の筒形碗である。近代から現代の遺物は第107・108図に図示したが、近代陶磁器は図版40と41である。図版40の13～18は明治時代のものである。13は瓶、14は科学コバルトをもちいた碗、15は釉下彩・銅版転写の碗、16も銅版転写の皿である。17は型押し塗り潰しの瀬戸・美濃の皿、18も型押し塗り潰しの皿である。41の19～22は明治時代初頭から大正時代にかけてのものである。19・22は型紙刷りの碗、20・21は型紙刷りの皿である。41の23～30は明治時代後半から大正時代にかけての銅版転写したものである。重箱式の蓋である27以外は皿である。

近代から現代の遺物(第107・108図)であるが、1はMN57・NN69・NK60グリッドに出土し接合した口径18.7cm、高さ9.4cm、底径7.7cmの阿仁焼と思われる黒褐釉の片口鉢である。2は、M

G51グリッドから出土した18世紀の肥前系の粗製の白磁瓶の底部破片である。3は硯である。4は円盤状石製品である。5は所謂ミトン型の藁手袋を製作する際に使用する型木である。全長49.7cm、厚さ2.2cmであるが、手袋型部分は長さ24.2cm、幅9.7cm。拇指部分の長さ7.3cm、幅2cm。その他の指部分の長さ13cm、幅5.4cmである。板目の杉板製。6は上部を欠損する蝸燭立てである。7は八花状の口縁部をもつ金属製皿である。8は陶器製の蝸燭立てと思われる。底面に盲孔が穿たれている。9は板状の鉄製品である。

第5章 分析と考察

第1節 縄文時代の遺構と遺物

3次にわたる発掘調査で縄文時代の遺構は、竪穴住居跡14軒・フラスコ状土坑1基・土坑5基・土器埋設遺構1基・配石遺構1基の22遺構が出土した。検出した位置を概観すると、台地の東側縁辺部に竪穴住居跡2軒とフラスコ状土坑1基、中央部に配石遺構1基、西側縁辺部に竪穴住居跡12軒と土坑5基および土器埋設遺構1基となり、台地の西側に集中している。

検出した遺構の時期は、東側縁辺部に位置するS I 30竪穴住居跡が中期後葉、S I 27竪穴住居跡が後期後葉、S K F 29フラスコ状土坑が晩期前葉であり、西側縁辺部のS I 185竪穴住居跡が中期前葉、S K 228土坑が中期、S I 225竪穴住居跡とS K 229土坑が晩期前葉である。S R 226土器埋設遺構とS K 182土坑・S K 188土坑は、粗製土器であるため時期が特定できない。他の竪穴住居跡10軒は、出土量が少ないものの中期中葉～後葉の土器片が出土したり、炉跡の形態が石囲部と掘り込み部からなる所謂「石囲複式炉」の範疇であることから、中期中葉～後葉と考えられる。

ここでは、西側縁辺部に位置する12軒の竪穴住居跡うち、中期の11軒(拡張・建て替えを入れて12軒として以後進める)を対象として、竪穴住居跡の平面形と規模および炉の形態を分析しながら竪穴住居跡群の変遷を見てみたい。

竪穴住居跡の平面形は、円形・楕円形・方形の3つに大別できる。円形はS I 189・202・206・223・224竪穴住居跡の5軒、楕円形はS I 185・187・200・201A・201B・203竪穴住居跡の6軒、方形はS I 222竪穴住居跡の1軒である。

竪穴住居跡の規模を床面積から分類すると、

A群：3～7㎡…8軒

B群：11㎡前後…2軒

C群：14㎡前後…2軒 となる。

A群は、円形のS I 189・202・206・223・224竪穴住居跡の5軒、楕円形のS I 185・187竪穴住居跡の2軒、方形のS I 222竪穴住居跡の1軒である。B群は楕円形のS I 200・201B竪穴住居跡の2軒、C群は楕円形のS I 201A・203竪穴住居跡の2軒である。

西側縁辺部に位置する12軒の竪穴住居跡の平面形と規模(床面積)からは、大型の竪穴住居跡は楕円形プランに限られ、小型の竪穴住居跡はすべて円形プランを呈することがわかる。なお、S I 201Aと201B竪穴住居跡の新旧関係は、A竪穴住居跡が新しいものであるが、拡張・建て替えが行われたものであり、時間的には連続しているものと思われる。

12軒の竪穴住居跡のうち、炉の遺存状態が良かったものは、S I 185・189・200・201A・202・203・224竪穴住居跡の7軒である。S I 201B・223竪穴住居跡の2軒も形態が推定可能であったので、9軒の炉について分析する。

炉の形態は以下の2類3種に分類できる。

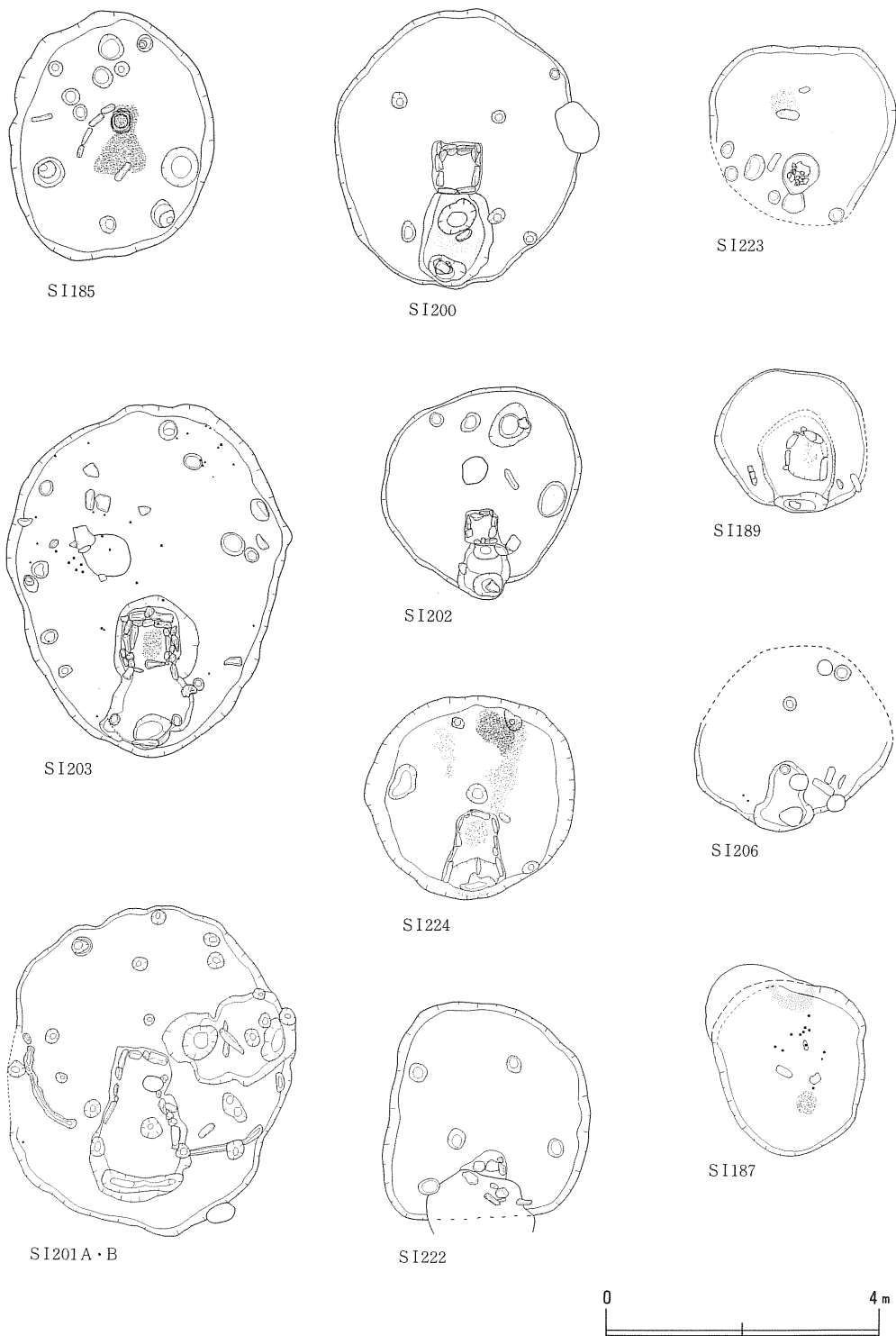
- 炉1類 土器埋設石囲炉 S I 185竪穴住居跡
- 炉2類 所謂「石囲複式炉」であるが、石囲部の形態から2種に細分する。
- 2類a 方形石囲部 + 掘り込み部 S I 200・201B・202・203・223竪穴住居跡
- 2類b 馬蹄形石囲部 + 掘り込み部 S I 189・201A・224竪穴住居跡

この炉2類には、掘り込み部内の住居跡壁寄りに楕円形の掘り込みが存在する。

炉1類は床面中央に、炉2類は壁寄りに位置する。炉2類aは住居の西側に、炉2類bは東側に位置するという傾向がみられ、また、楕円形プランのS I 185・200・201A・201B・203竪穴住居跡の5軒は、炉の主軸が竪穴住居跡の長軸方向に一致している。

土器の出土した竪穴住居跡は、S I 185・187・200・201A・203・222・223・224竪穴住居跡の8軒である。S I 185竪穴住居跡で炉に埋設していた土器は、中期前葉の円筒上層a式土器(Ⅱ群a類)であるが、埋土中位から出土した土器は中期中葉～後葉(Ⅱ群)である。S I 203・222・224竪穴住居跡では中期中葉～後葉の土器(Ⅱ群)が埋土下位から出土している。S I 187・200・201A竪穴住居跡からは粗製の土器(V群)のみ出土した。S I 200竪穴住居跡では、炉掘り込み部内のピット状掘り込みの底面に大形の土器片が、他の2軒では炉掘り込み部内のピット状掘り込みの埋土中からであった。S I 223竪穴住居跡では中・後期と粗製土器(Ⅱ・Ⅲ・V群)が出土した。粗製土器の出土状況はS I 200住居跡と同じであったが、中・後期の土器は木根による攪乱土からのものである。以上をまとめたものが第5表である。

また、S I 189・200・202・203竪穴住居跡の4軒では、炉掘り込み部内のピット状掘り込みで、人為的に埋めたとされる埋土中から、炉石と同程度の大きさの自然石が各1個出土している。S I 201Aと206竪穴住居跡の床面から出土した礫剥片(フレイク)が接合した。竪穴住居跡は、



第109図 調査区西側縄文時代竪穴住居跡集成

出土土器から第Ⅰ期：中期前葉、第Ⅱ期：中期中葉～後葉の2期に大別でき、S I 185竪穴住居跡が第Ⅰ期、S I 203・222・224竪穴住居跡の3軒が第Ⅱ期である。

また、炉形態の類似性から、炉2類に属するS I 189・200・201A・201B・202・223竪穴住居跡の6軒、S I 201A竪穴住居跡出土の遺物との接合関係から、S I 206竪穴住居跡をも合わせた10軒が、第Ⅱ期の一群として把えられよう。

第5表 西側縁辺部縄文時代中期竪穴住居跡構成要素一覧

遺構番号	185	187	189	200	201A	201B	202	203	206	222	223	224
平面形	楕円	楕円	円形	楕円	楕円	楕円	円形	楕円	円形	方形	円形	円形
規模	A	A	A	B	C	B	A	C	A	A	A	A
炉	1	不明	2 b	2 a	2 b	2 a	2 a	2 a	不明	不明	2 a	2 b
出土土器	Ⅱ群	V群	—	V群	V群	—	—	Ⅱ群	—	Ⅱ群	V群	Ⅱ群

この一群は、S I 201Aと201B竪穴住居跡の新旧関係から、炉2類aが炉2類bに先行するので、第Ⅱ期の中でもS I 200・201B・202・203・223竪穴住居跡のグループ→S I 189・201A・206・224竪穴住居跡のグループという推移が想定できる。

ところで、S I 189・200・202・203・223竪穴住居跡に見られる炉掘り込み部内の楕円形ピット状掘り込みには、石あるいは深鉢土器の大破片が出土している。これは竪穴住居跡の廃棄時に意識的に石あるいは土器を埋置したのではないかと推測される。また、炉2類aから炉2類b炉への構造の変化の過程で石囲部と掘り込み部の区画が不明瞭となり、S I 222竪穴住居跡では掘り込み部の縮小、あるいは消失という推移が想定される。

このことから西側縁辺部に位置する12軒の竪穴住居跡は、(中期前葉)S I 185竪穴住居跡→(中期中葉～後葉)S I 200・201B・202・203・223竪穴住居跡…→S I 189・201A・206・224竪穴住居跡→(晩期)S I 222竪穴住居跡という変遷をみる。

注

- 1 梅宮 茂 「複式炉文化論」『福島考古』第15号 福島県考古学会 1974(昭和49)年
中村良幸 「複式炉について」『考古風土記』第7号 1982(昭和57)年

参考文献

- 秋田県教育委員会 『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第62集
1979(昭和54)年

- 日本鋳業株式会社船川製油所 『大畑台遺跡発掘調査報告書』 1979(昭和54)年
- 鹿角市教育委員会 『御休堂遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料19
1981 (昭和56)年
- 秋田県教育委員会 「北の林Ⅱ遺跡・上葛岡Ⅰ遺跡・上葛岡Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ－北の林Ⅱ遺跡・上葛岡Ⅰ遺跡・上葛岡Ⅱ遺跡・小豆沢館遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第90集 1982(昭和57)年
- 鹿角市教育委員会 『天戸森遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料26 1984(昭和59)年
- 比内町教育委員会 『本道端遺跡』比内町埋蔵文化財調査報告書 1986(昭和61)年
- 秋元 信夫 「特集縄文時代前・中期のムラ 米代川流域の縄文時代中期の集落－住居形態の変遷について－」『よねしろ考古』第7号 1991(平成3)年
- 秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－上野遺跡－』秋田県文化財調査報告書第222集 1992(平成4)年

第2節 古代(平安時代)の遺構と遺物について

古代(平安時代)の遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑9基、竪穴状遺構1基、焼土遺構1基の16遺構である。しかし、この台地上には、山王台遺跡として大館市教育委員会が発掘調査した竪穴住居跡9軒(うち1軒は山王岱遺跡調査で部分精査)、焼土遺構2基があることから、これらと連関させて検討しなければならない。

遺構の分布状況からは、山王台遺跡調査区北部で遺構が検出されないことから古代の遺構群の北限が確認でき、また西側もほぼ本調査区で確認できたと考えられるので、古代の居住空間として台地の東半分が使用されたと推定できる。

『山王台遺跡発掘調査報告書』で竪穴住居跡群を、火山灰の堆積状況・竪穴住居跡の主軸方向・かまど位置・柱穴位置等の属性から分析した板橋範芳氏によれば、竪穴住居跡は四隅に支柱穴をもち、かまどに芯材として石を使用する共通性があり、かまどが南壁東寄り(古い時期で、かまどが南壁西寄り(新しい時期が主になるという。また、竪穴住居跡の廃棄の先後関係は①火山灰降下前廃棄・主軸方向S-26° ~27° 10' -E・かまど南壁東寄り ②火山灰埋土上位・主軸方向S-20° ~20° 30' -E、S-22° ~24° -E・かまど南壁西寄り ③火山灰埋土中位・主軸方向S-14° -E・かまど南壁西寄り ④火山灰埋土下位・主軸方向S-7° 30' -E・かまど南壁西寄り)となることから竪穴住居の建築・日常生活におけるかまど使用という建築および存立期の先後関係までたどれる可能性があるとしている。本調査で検出した竪穴住居跡をこの分析結果にあてはめてみると、S I 108竪穴住居跡は②に入るが、他は火山灰との関係が明確ではない

ことと主軸方向に差異があるものの、かまどの位置からS I 50竪穴住居跡は①に、S I 144-A竪穴住居跡は規模とかまど位置から③に相当すると思われる。S I 144-A竪穴住居跡は、山王台第4号竪穴住居跡と規模が類似していることから、張り出し部をもつ竪穴住居跡と考えられる。板橋氏は山王台第4号竪穴住居跡を「おそらくカマドを西寄りに構築する時期になって建築された集落の中心的建物」ととらえている。もしS I 144-A竪穴住居跡がほぼ同時期であるとすれば、大型の竪穴住居跡1軒と普通サイズの竪穴住居跡数軒が1つの基本単位で、それがいくつか集まって「集落」となっているのかも知れない。

3基の焼土遺構は、「土師器の焼成窯」あるいは「黒色処理のための遺構」と考えられるものの、掘り込みが浅く上部構造が不明なことから積極的に性格を追及できない。

遺物は、土師器と須恵器に2大別されるが、土師器の器種構成は坏・高台付坏(山王台)・甕・壺・鍋の5種、須恵器の器種構成は坏・壺(山王台)・甕(山王台)の3種で、それぞれ供膳・煮沸・貯蔵の用をなしているが、須恵器は量的に少ないことから副次的であったかもしれない。

土師器の坏には轆轤成形・回転糸切り技法で切り離されたままのものと、切り離し後に内面を筥磨き・黒色処理したものの2種が見られる。

土師器の甕は、粘土紐巻上げ成形し外面下半を粗い筥削り調整し、大小2種の器形がある。口縁部はいずれも短く外反している。口唇部のつくりにはいくつかのパターンが見られるが、板橋氏のいう「口唇内湾(仮称)」パターンが多数を占める。また、底部には木葉痕が若干見られるが、砂粒を付着させた所謂「砂底」は全く見られない。

煮沸形態に甑がなく、鍋であるのは土製の甑から木製の替わったためとも見られるが、強飯から姫飯・粥・雑炊への変化を具現しているのかもしれない。

この台地上に竪穴住居跡群が営まれ、廃棄された年代を推定する際の日安となるものの一つに火山灰が上げられる。本遺跡の発掘調査では、大湯浮石層と白頭山・苦小牧火山灰の2枚の降下火山灰が確認されている。大湯浮石層は、凹部への自然堆積・遺構内へ自然あるいは人為の堆積がみられ、火山灰と遺構の関係が遺構間の時間差を知る日安となっている。しかし、大湯浮石層に下位の粗粒浮石層が連続するという十和田a降下火山灰の噴出・降下年代について、『扶桑略記』延喜15年7月13日の出羽国言上の降灰記事から915年を与えられつつあるが、火山灰分析による降下範囲拡大の問題等とあわせ、なお慎重に検討すべき問題である。

考古学的には、米代川流域の古代土器編年が確立していないので推定の域を出ないが、9世紀後半から10世紀前半という年代を想定できると思われる。

註

1 「ロクロ回転調整の際にやや口縁を外に開き、口唇に幅0.8cm内外の平坦面をつくり、そこに一条の

ゆるやかな「U」字状の浅い凹みを巡らす、それは断面で見ると口唇が内湾していて、蓋受けのような受け口状を呈する形状」と説明されている。本報告書で「短い口縁部は緩やかに外反し、口唇内側が垂直に立ち上がる」としている形状である。短い口縁部が外反し、上向きになっている口唇部の内側を、指でつまみ出してわずかに立ち上がらせたものである。

引用文献

大館市教育委員会 『大館市 山王台遺跡発掘調査報告書』1990(平成2)年

参考文献

大池昭二 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』第11巻第4号
1972(昭和47)年

町田 洋・新井房夫・森脇 広 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』Vol.51, No.9 1981
(昭和56)年

山田一郎・井上克弘 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ “十和田-大湯浮石” の同定」
『第四紀研究』第29巻第2号 1990(平成2)年

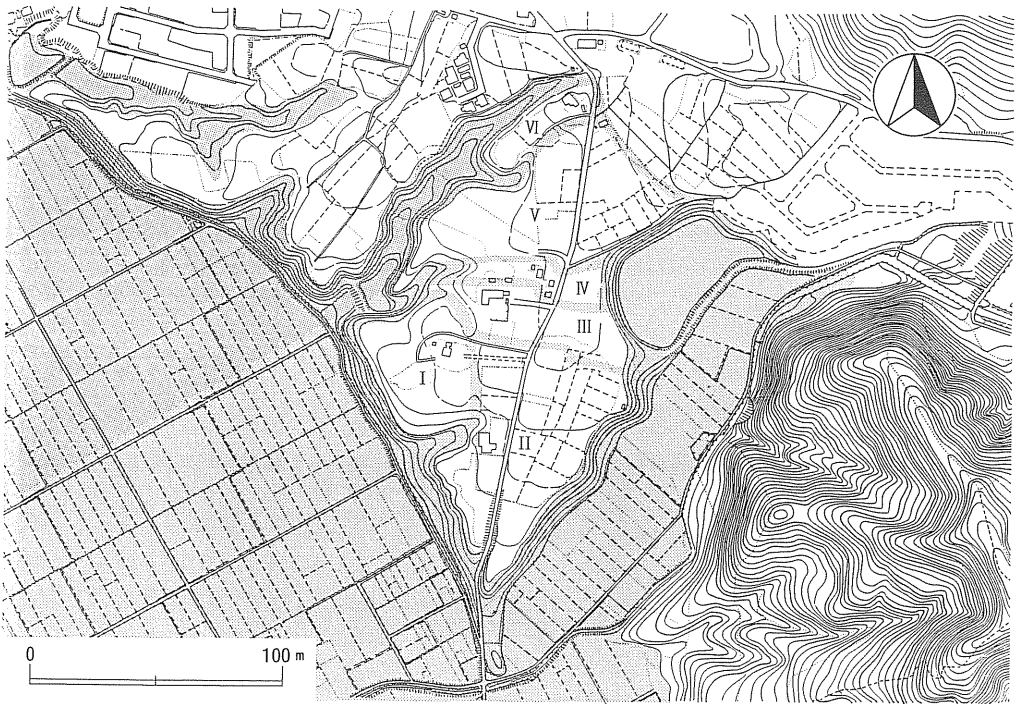
第3節 中世城館としての山王岱遺跡

中世城館を分析する際には、軍事的側面から敵の攻撃に対してどのような防御施設・機能を有しているのかを分析し、政治的側面から地域における各城館の配置に権力の伸長・衰退を分析し、社会経済的側面から城・館主がその地に城館を築くことによって農業・商工業・交通等の何を支配しようとしたかを分析する3つの視点が考えられる。しかし、米代川流域の中世城館の調査・研究が、未だ一館単位での分析に止まっており、政治的・社会経済的側面からの分析を行うまでに至っていないのが現状である。

本項では、三次にわたる発掘調査で得られたデータを基に「餌釣館」について若干の分析を試みたい。

[占地] 米代川右岸の沖積低地からの比高が17~20mの段丘(台地)南側の縁辺に位置しており、東・西に開析谷が入っているため半島状を呈する。東側には比高12~14m、下幅30mの餌釣沢を挟んで急峻な山塊が立ちはだかり、約500m南側には餌釣遺跡として発掘調査された中世城館(空堀内から12~13世紀の中国白磁碗片が出土している)が舌状台地上にあり、これをよく視認できる。さらに米代川は沖積低地より低いところに川道があるため、これを直接農業用水とすることが難しい。このため稲作経営に適した沖積低地に流れ出る餌釣沢を押えており、

餌釣沢からの水利を管理するに適した地点である(台地西端の中腹に炎天が続いても枯渇しない湧水があり、現在も使用されている)。また、南西側には米代川の沖積低地と盆地内の独立峰である達子森(標高207m)を望むことができ、米代川水運を遠くまで(最大4kmの範囲)監視できる。



第110図 「餌釣館」推定範囲

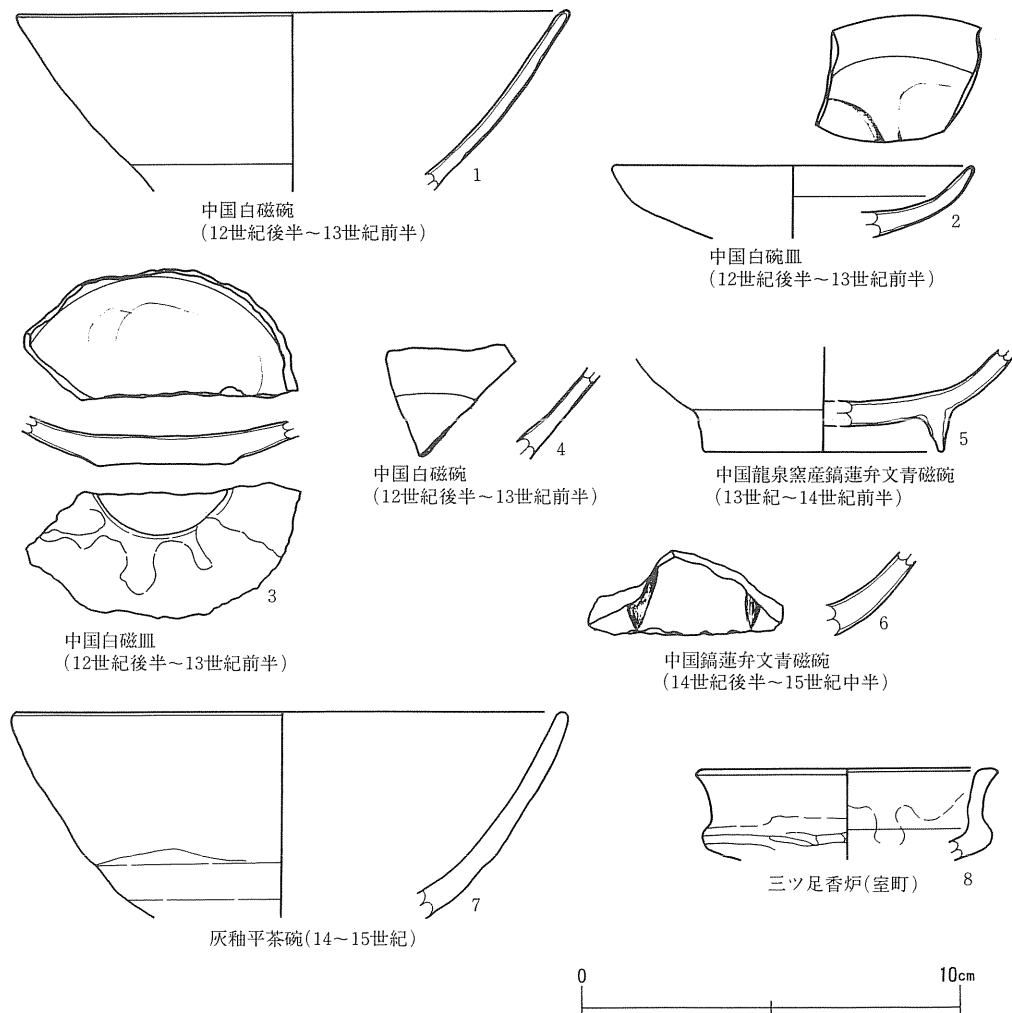
〔縄張・普請〕「餌釣館」は面積8万 m^2 (約24,500坪・8.1町歩)で、6郭からなる館跡と推定される。外郭ライン(外構)は、急峻な台地斜面と開析谷で区画されるが、一部が人工的掘削による空堀となっている。この外郭ライン(外構)を形成する空堀は、開析谷の谷奥から幅4～5mで延伸させたもので、その両側に土塁がかすかに痕跡を残している。外郭ライン(外構)で土塁が認められるのはここだけで、他の急峻な台地斜面と開析谷の上部には確認できなかった。開析谷は3～20mと深いことと幅が20～30mと広いことから、当初から土塁が構築されなかった可能性が強い。館跡内部を郭割りする空堀は、上幅4～7.2m、基底幅2.5～6m、深さ0.9～1.1mの幅広で浅い形状である。平面形は3条とも鍵形に屈曲する所謂「横矢掛り」の形態を呈する。この空堀を掘削して出た土砂を両側に台形状に積み上げて土塁とした所謂「掻き上げ堀」である。土塁は約1mの高さしかないが、空堀底からは約2～2.5mの高さとなる。土塁と空堀の間には、地山を削った幅0.5～1mの犬走り状の平場がみられる。

堀に伴う構造物としてSD 10空堀跡の屈曲部にある2基の橋があげられる。この橋の1基

は木材架構の筋違い橋構造のものである。他の2条の空堀では、橋が確認できなかった。SD10空堀跡内に掘り込まれた溝状遺構は、土層断面観察では空堀内に土砂が堆積してから掘り込まれた状況であるが、堀底に立てられる逆茂木と同じように障害物とする目的で、板材を溝状遺構に並べたのではないかと考えられるが推測の域を出ない。

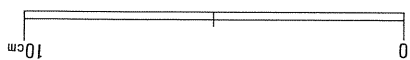
〔作事〕Ⅱ郭では柱穴群を検出したものの建物跡プランを検出する作業が行われていない。Ⅲ～Ⅴ郭で検出した柱穴群については、第4章第1節項に記述している。重複する建物跡の新旧関係・同時期存在等については今後さらに分析を加えなければならない。

〔出土陶磁器について〕発掘調査で出土した陶磁器類のうち、近世～現代陶磁器を除くと白磁碗・皿4点、青磁碗2点、瀬戸灰釉碗1点、瀬戸系香炉1点、無釉の珠洲・珠洲系擂鉢7点の15点である。このうち、12～13世紀前半の白磁碗・皿2点、青磁碗1点、無釉の珠洲系擂鉢

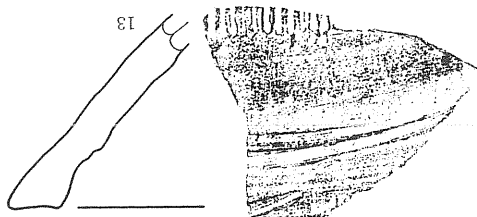


第111図 出土中世陶磁器集成(1)

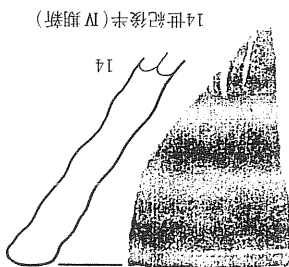
第112図 出土中世陶磁器集成(2)



14世紀後半(Ⅳ期新)



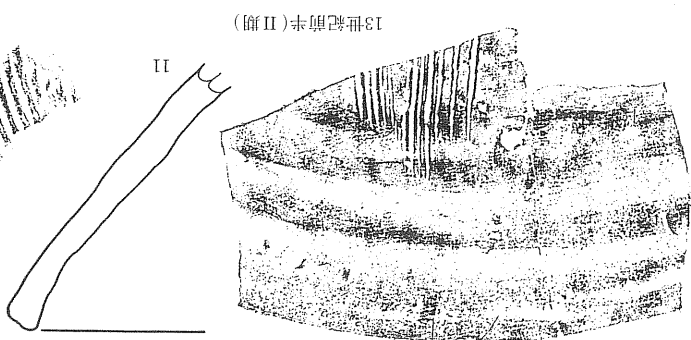
14世紀後半(Ⅳ期新)



14世紀後半(Ⅳ期新)



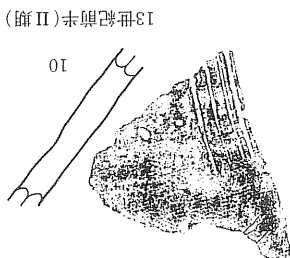
14世紀後半(Ⅳ期新)



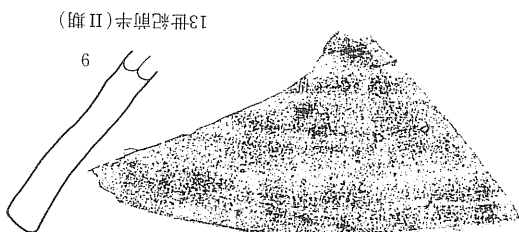
13世紀前半(Ⅱ期)



11



13世紀前半(Ⅱ期)



13世紀前半(Ⅱ期)

9

2点はSF101土塁の敷下の旧地表面に大観○竇(順読)と共伴出土したもので、これらはSF101土塁の盛土以前、言い換えるとSD09空堀跡の掘削以前に既に廃棄されていたものである。生産年代がほぼ同時で共伴出土しているこれらの陶磁器類の組み合わせが当時の日常生活での器種組み合わせを物語っていると思われ、供膳具の陶磁器が中国製品、調理具が国産品という使い分けになっている。

供膳具には木製品が多く使用されたと思われるが、「かわらけ」は1点も出土していない。

12～13世紀代の遺跡である「矢立廃寺跡」では、中国製白磁碗・皿とともに「かわらけ」が出土しているが、本遺跡では全く出土していないのは遺跡の性格の違いによるものなのか検討を要する。国産の無釉播鉢は、能登半島・珠洲から日本海交易で移入したものではなく、米代川下流域の二ツ井町エヒバチ長根窯跡で生産されたものと考えられる。

13世紀前半のエヒバチ長根窯跡では甕・片口鉢・(播)鉢・四耳壺・小皿・陶硯・浄瓶・経筒容器が生産されているが、本遺跡では播鉢(あるいは片口鉢)のみの出土で、他の器種は確認できなかった。

14～15世紀代の陶磁器として、14世紀後半～15世紀前半の中国製鎬蓮弁文碗1点、瀬戸系の灰釉平茶碗1点、同じく瀬戸系の三つ足香炉1点と国産の無釉播鉢4点が出土している。

15世紀後半から16世紀代の陶磁器類の出土は皆無である。

17世紀以降になると陶磁器の出土量が増加する。これらのことから、陶磁器特有の「伝世」を考えずに陶磁器から本遺跡「餌釣館」を観ると、12～13世紀代の中国製品と国産品(無釉陶器)の共用期、14～15世紀代の中国製品と国産品(施釉・無釉陶器)の共用期、17世紀以降の染付陶磁器多用期の3期に分けることができる。「餌釣館」の年代は、前2期と考えられるが、空堀を掘削した時期は14世紀～15世紀前半と推定される。

〔性格〕 推定される「餌釣館」8万㎡のうち15,950㎡と全体の20%を発掘調査したに過ぎず、「餌釣館」の創建から廃棄に至るまでの期間と機能を推測するのは困難である。しかし、軍事・戦闘機能をもつ戦略的な館跡であるし、一方水利権の確保、知行地支配を在地で言う所謂農業センター的役割も兼備していたものと考えられる。

第4節 墓と火葬場および火葬人骨

本遺跡では、人骨を出土した遺構が7基ある。いずれも火熱を受けた骨が木炭と一緒に出土しているが、遺構の形態・骨の出土状況に違いがみられた。遺構の中で確実に焼かれ、そのまま埋葬されたと考えられる火葬墓と被火骨出土遺構について記述する。

火葬墓としたのは、被熱痕があり焼土・炭化物・灰が伴うことから火葬場であるが、拾骨して

いないことから、そこをそのまま墓として使用したと判断した。主体部は、長軸約120～125cm、短軸50～75cm確認面からの深さが15～20cmの隅丸長方形あるいは小判形を呈し、長軸方向に若干角度を持って交差するように、幅15～20cm、長さ95～200cm、深さ15～22cmの溝が付属している形態である。主体部である壙の壁面と溝部分が良く焼け、底面はあまり焼けていない。遺存状態の良いSX05火葬墓では、人骨は頭部を北に、脚部を南にした横臥屈葬の形を取っている。人骨の下及び周囲に炭化した木の枝や大型の炭化物が多く見られ、壁面にも禾本科植物灰の堆積があったことから、この人骨は、この壙の中で火葬され、拾骨することなく、そのまま埋められたものと考えられる。つまり①隅丸長方形の土壙と、これに直交するような溝を掘る(溝が土壙と重なる部分では、溝を深くする)。②壙底に薪木を並べ、壁には藁などの禾本科植物を置く。③遺体を薪木の上に安置する。④薪木に火を放ち茶毘に付す。⑤燃えた後に周囲にある土で埋める。という作業工程が推定される。SX 03・04火葬墓も含めて副葬品等は全く出土していないが、火葬墓の上面は畑の耕作によって削平されているので、上部に何らかの副葬的な遺物があったとしても、移動してしまったと思われる。

被火骨出土遺構としたものは、円形・溝状のプランを呈し、内部に火熱を受けたと思われる骨が出土する。しかし、底面・壁面とも焼けておらず、火を焚いた痕跡もない。どこかで茶毘にふされたあと、拾骨されてこの遺構の中に置かれたものと考えられる。

SX16被火骨出土遺構は、直径180cmの円形を呈するが、中央部の直径100cmほどの範囲が高さ10cm前後のマウンドとなっていた。SX16被火骨出土遺構の中で骨を焼き、マウンドを形成したと考えると、その構築順序は、①地山(VII B 砂礫層)を直径1.2mの範囲で10cm前後の深さに掘り込み、木炭混じりの土と砂礫を約10cmの厚さに積み、その中央を南北に長い不整楕円形に掘り込む②この中で骨(遺存している骨の状況から、完全な形の遺体ではあり得なかったと推定される)を集めて焼く。③少し木炭の混じった土を5cm前後の厚さで、この上にかけて、しめる。④さらにその上に木炭を含まない砂質土をかけマウンド状にする。⑤このマウンドの周囲に、幅20～25cmの浅い溝を掘ったと考えられる。

中世～近世にかけて、遺跡の東側区域を火葬場および墓地として使用した集団の墓制は、本遺跡のみの特異なものではなく、関東地方でも多く検出されている。

出土人骨の鑑定結果は次の通りである。

出土人骨鑑定結果

札幌医科大学解剖学第2講座 鈴木隆雄

1 緒言

山王岱遺跡から出土した人骨はいずれも焼成を受け、一般に保存は悪く、色調は灰白色を呈し、焼かれた際にできる変形やひび割れが著しく、詳細な形質人類学的観察の困難な状態であった。

人骨の発掘部位と主たる骨破片の数はおおよそ以下の通りである。

SX-04 : 30点

SX-05 : 52点

SX-13 : 17点

SX-14 : 土塊と共に一括取り上げ

SX-15 : 15点

SX-16 : 15点

以下の記載は発掘とりあげの際に付けられた整理番号に従って各々の骨破片についての分析結果である。

2 結果

(1) SX-04

No.01 : 肋骨破片(6.7cm)、硬化

No.02 : 小骨破片(肋骨?)

No.03 : 同上

No.04 : 同上

No.05 : 同上

No.06 : 小骨破片(部位同定不能)

No.07 : 四肢長骨破片(前腕骨?)

No.08 : 同上(上腕骨?)

No.09 : 小骨破片(部位同定不能)

No.10 : 同上

No.11 : 同上

No.12 : 同上

- No.13 : 同上
No.14 : 四肢長骨破片(部位同定不能)
No.15 : 四肢長骨破片(部位同定不能)
No.16 : 同上
No.17 : 小骨破片(部位同定不能)
No.18 : 同上
No.19 : 同上
No.20 : 同上
No.21 : 同上
No.22 : 同上
No.23 : 同上
No.24 : 同上
No.25 : 同上
No.26 : 同上(肋骨?)
No.27 : 同上(部位同定不能)
No.28 : 同上(上顎骨体)および歯牙破片(上顎側切歯・犬歯?)
No.29 : 同上(顔面頭蓋?)および歯牙破片(歯種同定不能)
No.30 : 同上(部位同定不能)

(2) SX-05

- No.01および01' : 四肢長骨破片(上腕骨骨幹部)
No.02 : 骨破片(顔面頭蓋)
No.03 : 同上(脳頭蓋)
No.04 : 脳頭蓋破片(成人頭蓋)。厚さ5.9mm。外板、板間層、内板を識別する。
No.05 : 頭蓋破片
No.06 : 同上
No.07 : 同上
No.08 : 同上
No.09 : 脳頭蓋破片(6×5cmのほぼ方形)。よく焼成を受けており、硬化し、ひび割れ多数。叩くと金属的音。(部位同定困難)
No.10 : 脳頭蓋破片および歯牙1片。頭蓋片は焼成による変形。部位の同定不能。歯牙で歯根は頬および舌側に先端分離の2根性である。歯冠の摩耗著しく咬

頭は識別できない。成人の上顎第一小臼歯と推定される。

以上、整理番号No.3、4、7、8、9、10は取り上げ状態から見ても、同一個体に属すると考えられるもので、成人頭蓋の破片と考えられる。性別は不明である。

No.11 : 小骨破片(部位不明)

No.12 : 脳頭蓋小破片

No.13 : 同上

No.14 : 同上

No.15 : 四肢長骨破片(尺骨骨幹部?) 硬化、弯曲変形、長さ9.3cm

No.16 : 同上(部位不明)

No.17 : 頭蓋小破片

No.18 : 小骨破片

No.19 : 歯牙(下顎第2大臼歯?)、歯冠形態観察不能。

No.20 : 歯牙破片(部位不明)

No.12 : 小骨破片

No.22 : 歯牙破片(小臼歯?)、歯冠部破片(形態不明)

No.23 : 小骨破片

No.24 : 頭蓋の骨破片多数。同定可能なものとして、右側頭骨錐体部(右内耳孔部分)および右下顎骨下顎角部分破片。

No.25 : 右側頭骨頬骨突起起始部、一部に関節窩および外耳道を識別する。

No.26 : 小骨破片

No.27 : 四肢長骨(骨幹部)破片、長さ5.8cm

No.28 : 同上、長さ3.9cm

No.29 : 小骨破片

No.30 : 同上

No.31 : 骨破片(海綿質の多い塊状の骨破片である。寛骨、特に腸骨稜部分?)

No.32 : 左大腿骨骨幹部(近位)破片、長さ13.9cm、左大腿骨のうち、頸部下縁から骨幹部内側縁にかけて、また大転子(破損消失)下部から骨幹部外側縁にかけて骨体前面のみが残存している。変形著名。

No.33 : 小骨破片(部位同定不能)

No.34 : 同上

No.35 : 同上

No.36 : 同上

No.37 : 四肢長骨破片(部位同定不能)

No.38 : 同上

No.39 : 同上 No.40 : 小骨破片(部位同定不能)

No.41 : 同上

No.42 : 同上

No.43 : 同上

No.44 : 小骨破片(部位同定不能)

No.45 : 同上

No.46 : 大腿骨骨幹部破片、長さ6.7cm、骨は脆弱化、側別不明。

後面の粗線の形態がよく保たれている。ひび割れ多数。

No.47 : 大腿骨骨幹部(遠位膝 面?)、長さ4.7cm

No.48 : 四肢長骨破片(大腿骨骨幹部?)

No.49 : 同上(脛骨骨幹部?)

No.50 : 同上

No.51 : 同上(部位不明)

No.52 : 同上

(3) SX-13

No.01 : 四肢長骨破片(部位同定不能)

No.02 : 同上

No.03 : 小骨破片(部位同定不能)

No.04 : 同上

No.05 : 同上

No.06 : 同上

No.07 : 同上

No.08 : 同上

No.09 : 同上

No.10 : 同上

No.11 : 同上

No.12 : 同上

No.13 : 同上

No.14 : 四肢長骨破片(前腕骨?)、長さ3.8cm、焼成変形、ひび割れ多数。

No.15 : 小骨破片(部位同定不能)

No.16 : 同上

No.17 : 同上

(4) SX-14

多数の焼成骨片が一括され取り上げられている。それらの大部分は小骨片となり正確な数量および部位の同定は不可能であるが、一部に頭蓋の破片(矢状縫合部分を含む頭頂骨片で縫合は鋭く複雑で完全に解離している)および四肢長骨破片が混入している。いずれの骨もよく焼成を受け、硬化著名である。骨片を叩きあわせると特有の金属音がする。

(5) SX-15

全部で15点出土しているが、いずれも土塊内に小さな骨片として存在するにすぎない。

No.01 : 四肢長骨破片(大腿骨骨幹部?)

No.02 : 小骨破片(部位同定不能)

No.03 : 同上

No.04 : 同上

No.05 : 同上

No.06 : 同上

No.07 : 同上

No.08 : 同上

No.09 : 同上

No.10 : 同上

No.11 : 同上

No.12 : 同上

No.13 : 同上

No.14 : 同上

No.15 : 同上

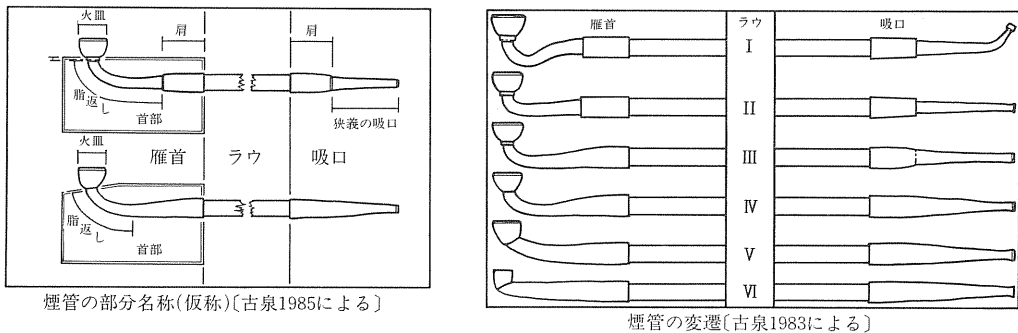
(6) SX-16

No.01 : 四肢長骨破片(部位同定不能)

- No.02 : 同上
- No.03 : 土塊中の小骨片
- No.04 : 同上
- No.05 : 頭蓋破片(矢状縫合部分を含む両側頭頂骨片、縫合一部癒合)
- No.06 : 四肢長骨破片(骨幹部、長さ5.2cm、部位不明)
- No.07 : 小骨片
- No.08 : 上腕骨骨幹部(遠位後面)破片、長さ4.3cm
- No.09 : 小骨片
- No.10 : 肋骨破片(肋骨角近傍?)
- No.11 : 小骨片(部位不明)
- No.12 : 同上
- No.13 : 同上
- No.14 : 同上
- No.15 : 膝蓋骨破片(1.8×2.3cm)、側別不明

第5節 近世の煙管(キセル)について

本遺跡のSD 01空堀跡から出土した煙管(第68図2)は、その各部の形態及び製作工程から17世紀後半～末葉を中心とする時期に製作・使用されたと想定している。この年代推定根拠は、東京都立一橋高校内遺跡の層位的調査と古泉 弘氏による編年観に基づいている。古泉 弘氏によると、煙管の変遷は下記の6段階に分けて考えることができるという。



第113図 煙管参考図

[第1段階] 煙管の初現形態を示す。火皿下の脂返しが一旦下方へ大きく湾曲し、ラウ(羅字)にとりつく部分が一段太く巻かれた「肩付」となる。火皿と首部の接合部には補強帯が巻かれる。16世紀末から17世紀初頭。

〔第2段階〕脂返しが大きく湾曲する「河骨形」という形態をとる。肩付。補強帯をもつ。
17世紀前半。

〔第3段階〕河骨形。補強帯が巡るが、首部は火皿の下からラウ接合部まで1枚の銅板を巻いて製作される。17世紀後半。

〔第4段階〕河骨形。補強帯は消失する。18世紀前半。

〔第5段階〕脂返しの湾曲が小さくなる。18世紀後半。

〔第6段階〕火皿は小型化し、逆台形を呈する。脂返しの湾曲はほとんどなくなり、火皿の下に直角にとりつくようになる。19世紀。

この6段階の変遷の中に本遺跡から出土した煙管を当てはめると、第3段階に相当し、一橋高校内遺跡の層序と照らし合わせて導き出した年代が前述の17世紀後半～末葉である。

秋田県内で、煙管の出土している遺跡は、本遺跡を含めても6遺跡9例しか報告されていない。

花輪館跡（鹿角市花輪字中花輪）2例（1例は吸口部のみで第3段階以降、もう1例は雁首部で第6段階と思われる）

妻の神Ⅲ遺跡（鹿角市花輪）1例（吸口部のみ、第4段階以降）

小平遺跡（鹿角市花輪字八幡平）1例（吸口部のみ）

蒲沼遺跡（八郎潟町蒲沼）2例（1例は雁首と吸口が揃っている、第4段階。もう1例は雁首部で火皿を欠く、第4段階か）

鵜沼城跡（雄勝町桑ヶ崎字平城）2例（2例とも雁首と吸口が揃っている、1例は第4段階もう1例は第5～6段階）

このように見てみると、本遺跡から出土した煙管は、県内では古手の部類に収まることわかる。

引用文献・参考文献

- 1 古泉 弘 『江戸を掘る』 柏書房 1983(昭和58)年
古泉 弘 「銅製品」 『江戸－都立一橋高校地点発掘調査報告』 都立一橋高校内遺跡調査団 1985(昭和60)年
古泉 弘 「江戸の街の出土遺物」 『季刊考古学』 第13号 1985(昭和60)年
- 2 鹿角市教育委員会 『花輪館跡試掘調査報告書 下沢田遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査報告書27 1984(昭和59)年
鹿角市教育委員会 『花輪館跡試掘調査報告書(2)』 鹿角市文化財調査報告書34 1988(昭和63)年
- 3 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ－妻の神Ⅲ遺跡－』 秋田県文化財調査報

告書第108集 1984(昭和59)年

4 鹿角市教育委員会 『小平遺跡発掘調査報告』鹿角市文化財調査資料第10号 1979(昭和54)年

5 秋田県教育委員会 『蒲沼遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第96集

1982(昭和57)年

6 秋田県教育委員会 『鶴沼城跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第73集 1980(昭和55)年

第6章 まとめ

本発掘調査は、中世城館「餌釣館」の範囲が、日吉神社境内を区画する空堀の範囲と認識されていたところに、その北隣に所在する遺跡ということで小字名の「山王岱」を冠して山王岱遺跡と称して三次にわたって実施してきた。

第一次調査の結果として、空堀と土塁が検出され、中世城館「餌釣館」の範囲が拡大すると判断しながら遺跡名をそのままにしていたため、遺跡の性格と内容を曖昧なものにしていた。三次にわたる発掘調査が終了し、中世城館「餌釣館」の範囲が当初の約7.5倍に拡大することが予想される。郭も神社境内の区画をⅠ郭とし、台地の東南側からⅡ郭・Ⅲ郭・Ⅳ郭・Ⅴ郭・Ⅵ郭と仮称すれば、山王岱遺跡と称して三次にわたって実施してきた範囲はⅡ郭～Ⅳ郭にまたがっている。

「山王岱遺跡」の調査範囲には、縄文時代中期の竪穴住居跡群が構築され、生活が営まれた後、縄文時代後期と晩期の竪穴住居跡等が構築され、生活が営まれている。このあとしばらくブランクがあり、古代(平安時代)になってから北東側に隣接する「山王台遺跡」の調査範囲とあわせた竪穴住居跡群が構築され、生活が営まれている。平安時代後期に地縁的な血族により、地域社会に根付いた武士は、国衙・郡衙に仕える官人や荘園の荘官になるが、自らが開発した土地を大社寺等に寄進して年貢を上納し、在地支配を強めていく事になる。律令制度の中に武士団が台頭する萌芽を見ることができる。この地域においては、「河田氏」が文献上知られているが、その居館跡等については不明である。また、平安時代の集落等が発掘調査されているが、文献との対比は試みられていない。

この古代の竪穴住居跡群の後に「コ」の字状を呈する溝状区画が作られている。この溝状区画は、掘立柱建物跡の周囲を区画する施設跡と考えられるが明確にすることができなかった。

この後、両側に土塁を築く空堀が3条掘削されている。土塁敷下の土中から12～13世紀前半の中国白磁・青磁が、土塁盛土中からも13世紀前半の国産無釉陶器が出土していることから、13世紀前半以降に掘削・盛土されたと考えられよう。この3条の空堀が同時に存在したか否かについては確証が得られなかったので明言できないが、これらの空堀が外構のためのものでなく各郭

を区画する空堀であることから同時存在の可能性が大きいと思われる。中世陶磁器については、12・13世紀と14・15世紀の陶磁器があるものの16世紀の陶磁器は皆無であり、そのあと17世紀以降の遺物が多くなることから、「餌釣館」の年代は「陶磁器の伝世」という問題を考えなければ16世紀ごろまで下ることはなく、14世紀前後(13世紀後半～15世紀)とすることが妥当と思われる。戦略的な館が構築されたのは、惣領制の矛盾から庶子家があぶれだし、余剰生産物の分配をめぐる戦闘がおこなわれる時代背景があったと推測される。

米代川流域の中世城館は、沖積低地に張り出す舌状台地を空堀(大堀切)で幾つかの郭に区画する多郭連続式ながら、相互に独立的な様相を呈しており、どの郭が中心をなすものか明確でないのが一つの特徴である。舌状台地を区画する空堀が深く幅広なため、「空堀に土塁が伴う」という認識はほとんどなく、逆に土塁を伴わないのが二つ目の特徴であるかのように思われていた。本調査では、大館市片山館・二ツ井町竜毛沢館に続き、空堀に土塁が伴うことを明らかにしたが、三館とも他の館とは構造的な違いがあることも明確にしなければならない。つまり、土塁をもつ三館の空堀は、他の舌状台地を区画する空堀が幅広で3m以上深く掘削され、郭自体が独立台地の様相を呈している館跡と異なり、段丘の縁辺部あるいは幅広な台地に立地していることと、郭を区画する空堀が深さ1～2m程度しか掘削されておらず、郭自体が独立台地の様相を呈していない。空堀の深さと広さは、軍事的な側面から決定されたとする見方もあるが(これが多数意見であろう)、この米代川流域では地質—シラス—が影響しているのではないかと考える。つまり、シラスで形成されている舌状台地では、空堀の掘削で土を盛土して土塁を構築しようとしても困難であるのに対し、土塁をもつ三館は段丘礫層の上部に所謂ロームが堆積しており、盛土に適している。占地と地質の条件が、館の構築に影響を与えていると思われる。

掘立柱建物跡は、土塁より古い時期のものや数ブロックでの重複が見られる。掘立柱建物跡群の古い時期については、建物の構造(間取り)や土塁敷下の土中(土塁構築当時の地表面と考えられる)から出土した12～13世紀前半の中国陶磁器がひとつの目安となると考えられる。また、17世紀以降の遺物も出土していることから近世に構築された掘立柱建物跡もあるかもしれない。この掘立柱建物跡群については、さらに建築学と考古学の両面から分析を続ける必要がある。

16世紀初頭に甲斐から浅利氏嫡流の浅利則頼とその一党が当地方に流落し、支配することになるが、「浅利興市侍分限」に浅利則頼を城主とする浅利氏の家臣団の中に、村落名の生(池)内を名乗る生(池)内権助がおり、本館跡の西100mに池内の集落があることから本館跡の館主が生(池)内権助ではないかとの見解もある。しかし、出土遺物の年代から「餌釣館」の創建期を推定すると、生(池)内権助を創建館主とするには無理があり、むしろ数代の館主のひとりとしたほうが良いかもしれない。

前年度に本遺跡から南に約500m離れた舌状台地に立地する餌釣遺跡が発掘調査され、中世の

第6章 まとめ

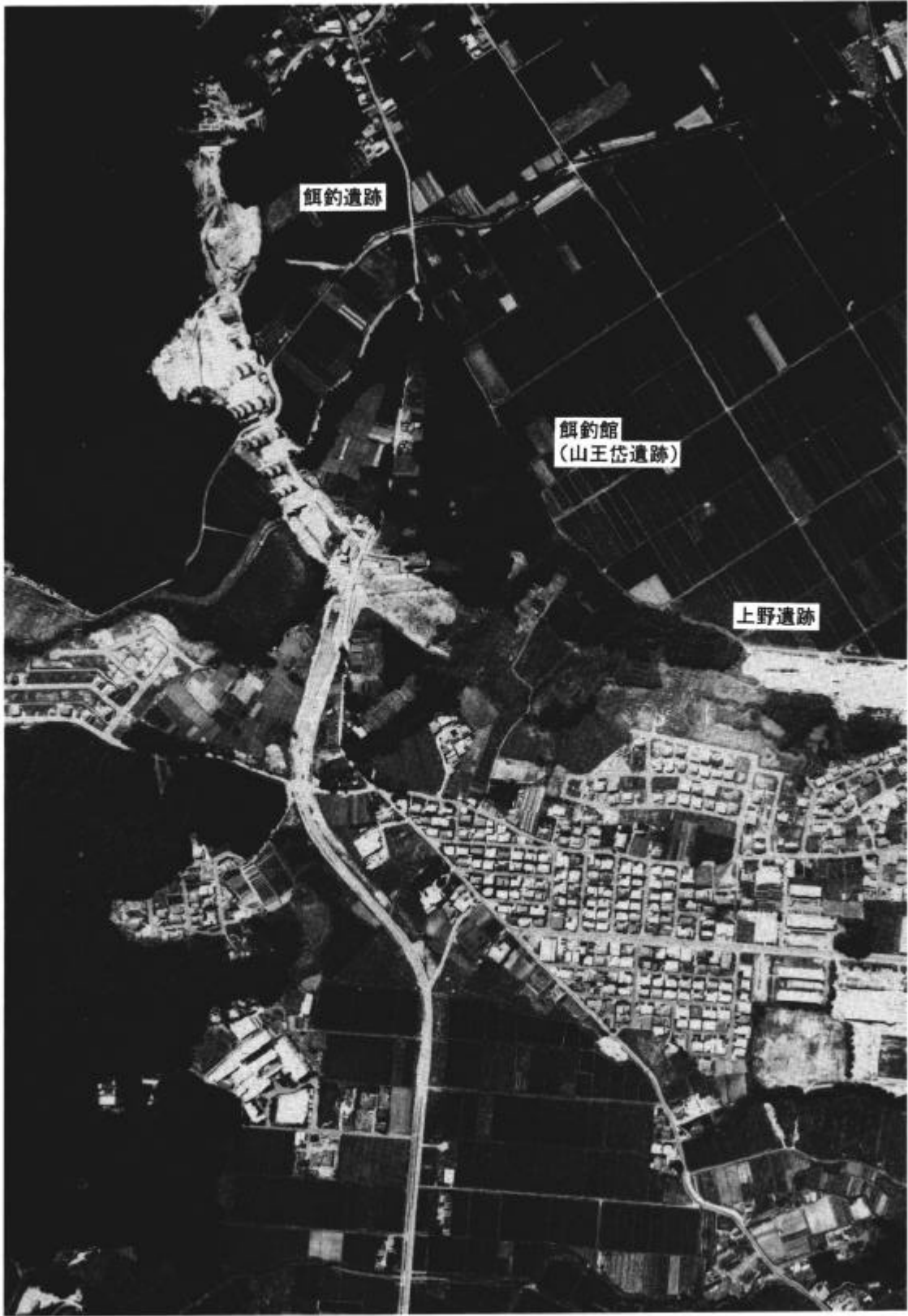
館跡であることが判明した。さらに南に山館があり、これら3つの館跡が米代川右岸のわずか2 kmの間にあまり間隔をおかずに立地している。大館盆地の縁辺部には、河岸段丘・舌状台地が発達し、そこに館が構築されている(第2章第2節の「歴史的環境」の項参照)。館の下方に集落があり、集落名を姓とした地侍の三者がよく結合した所謂一村一館型の館として認識されているが、発掘調査例が少ないため同時に存在したものか、また伝承通りの年代か明らかではない。

また、創建時期について沼館愛三氏は、古代に掘割された舌状地形を再利用したのが多いとの趣旨をのべており検討する必要がある。

三次にわたって発掘調査した「山王岱遺跡」からの情報を適確に分析するまでには至らなかったが、この調査で得られたデータに十分な検討を加えて、この遺跡の軍事的、政治的、社会経済的立場を究明しなければならない。このことを今後に残された課題としたい。

参考文献

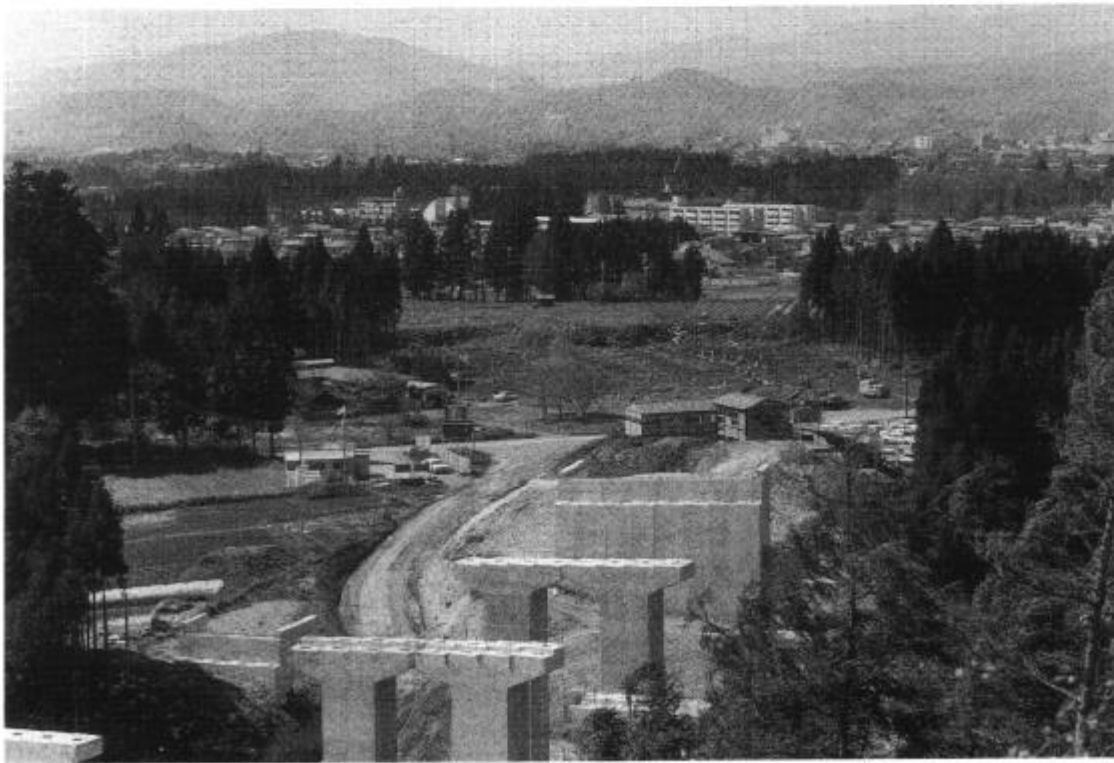
- 秋田県教育委員会 『片山館遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第203集
1990(平成2)年
- 秋田県教育委員会 『竜毛沢館跡発掘調査報告書—一般国道7号二ツ井バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査—』秋田県文化財調査報告書第188集 1989(平成元)年
- 沼 館 愛 三 『津軽諸城の研究』(草稿) みちのく双書第34集 青森県文化財保護協会
- 八戸市教育委員会 『風張(1)遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集 1991(平成3)年



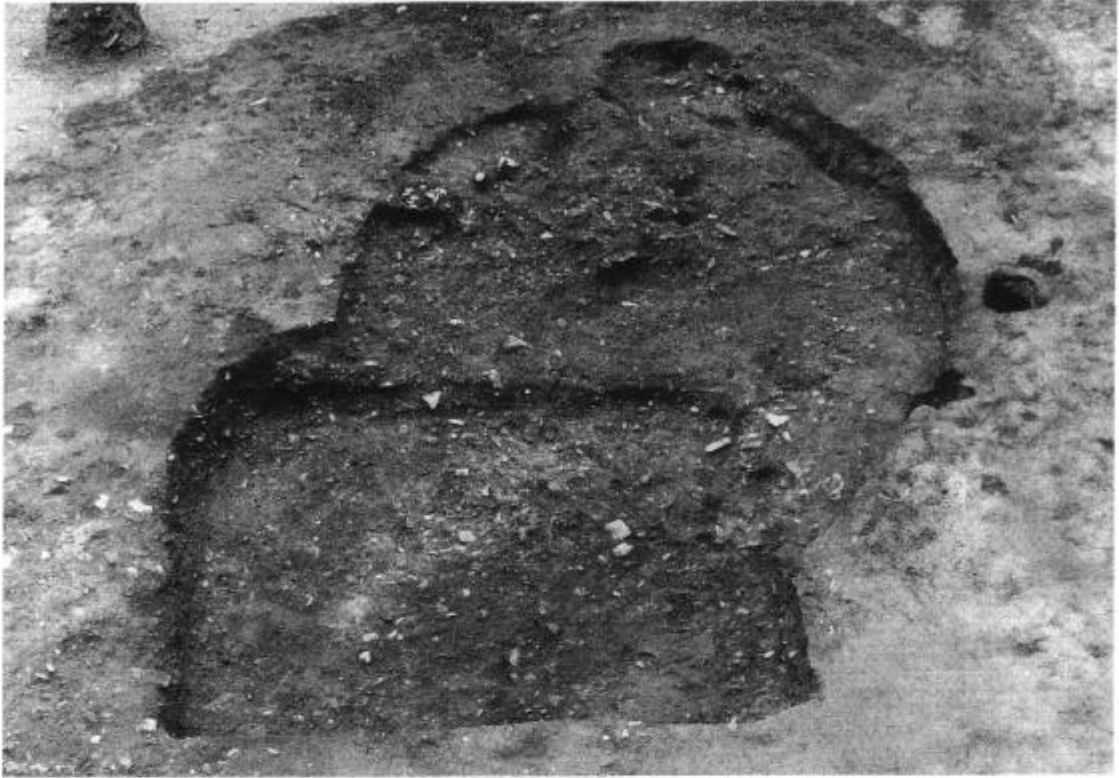
航空写真（遺跡北側上空から撮影）



調査区遠景（第1次調査）



調査区遠景（第3次調査）



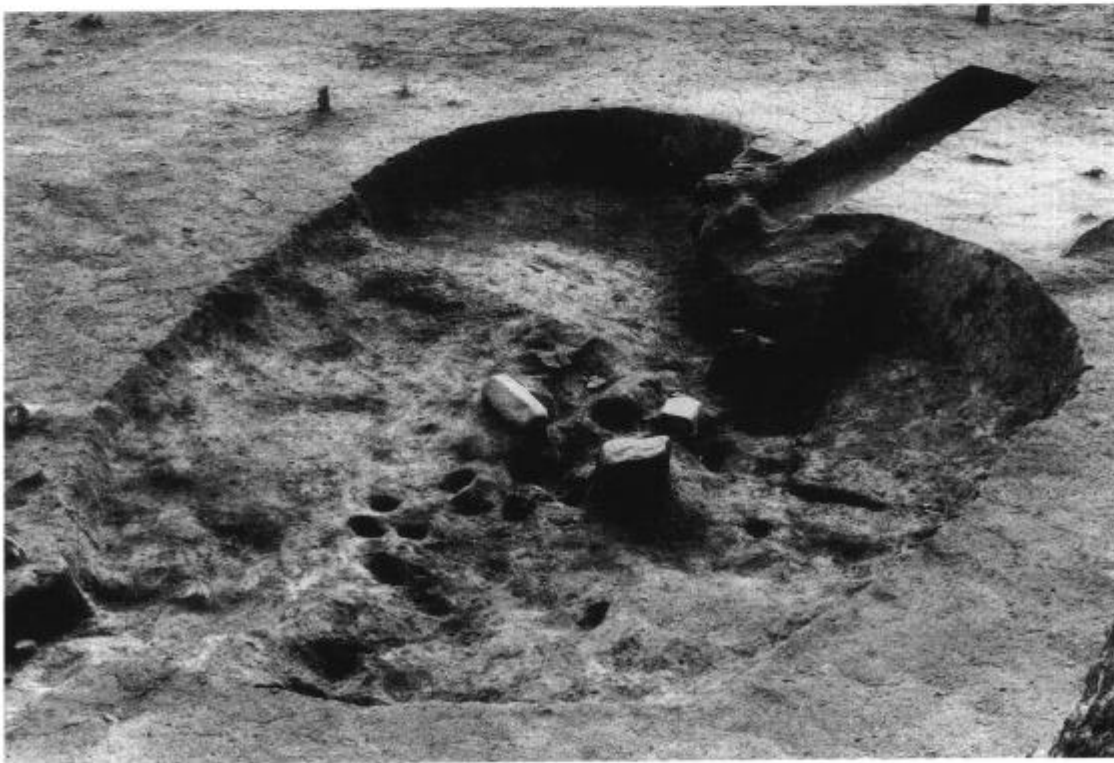
SI 27 豎穴住居跡



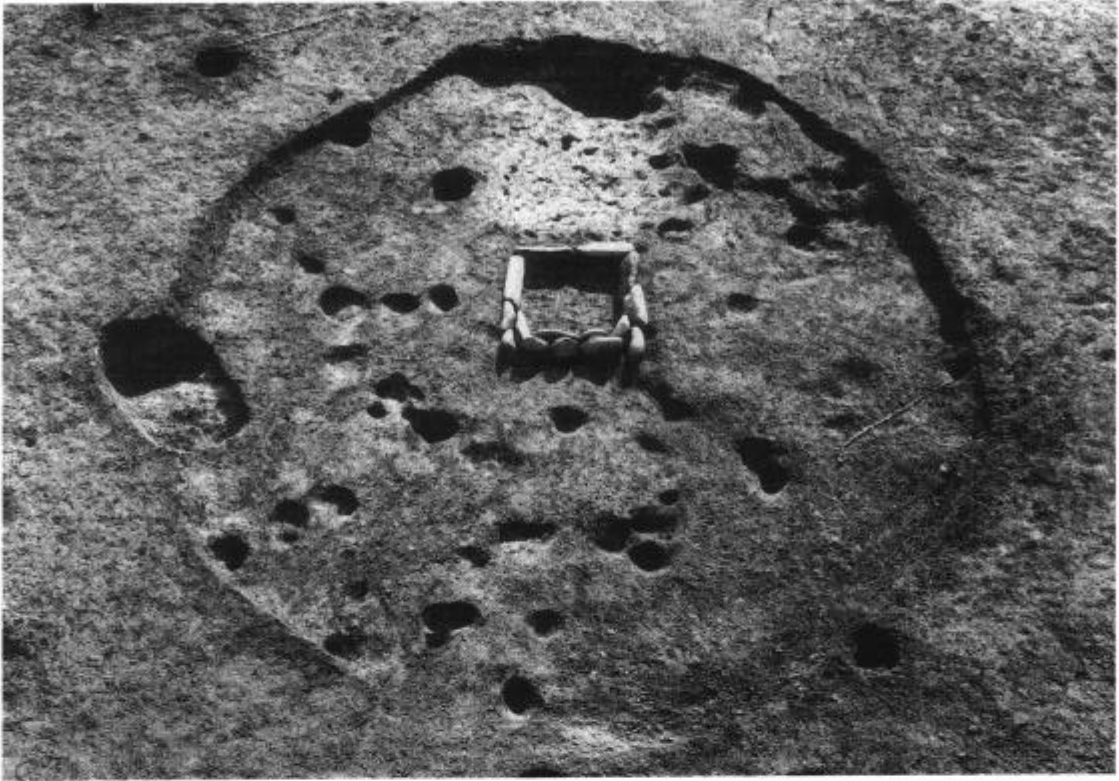
SI 30 豎穴住居跡



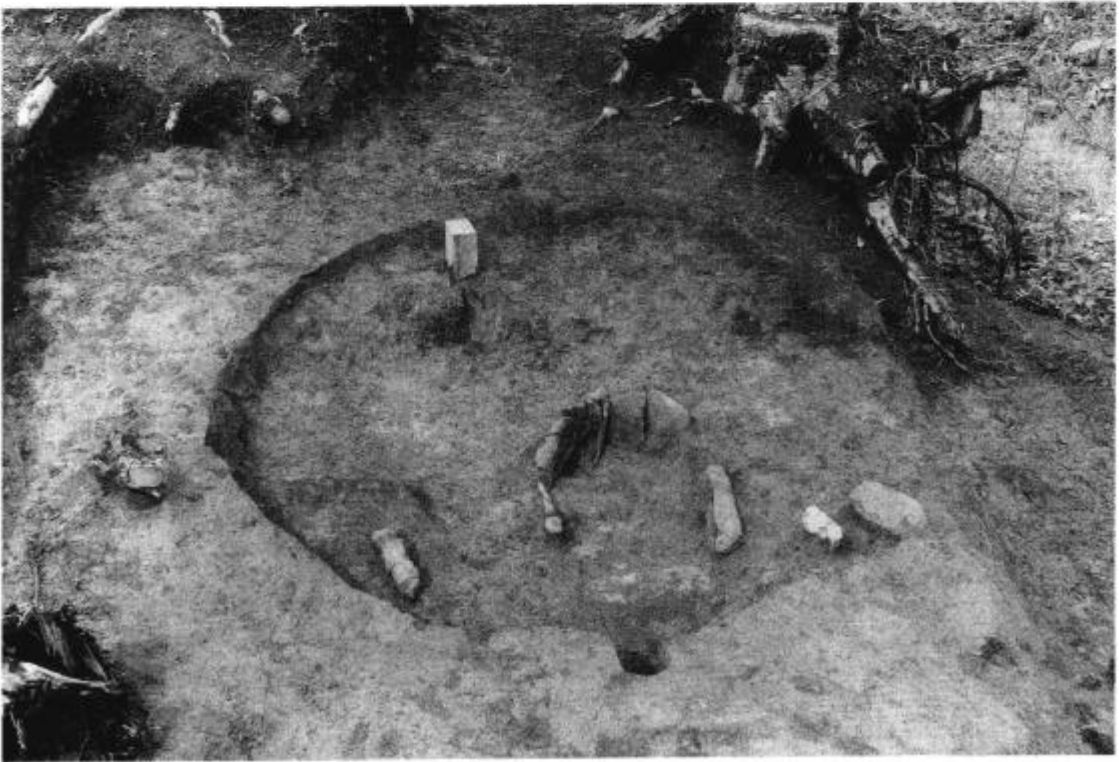
SI 185 竖穴住居跡



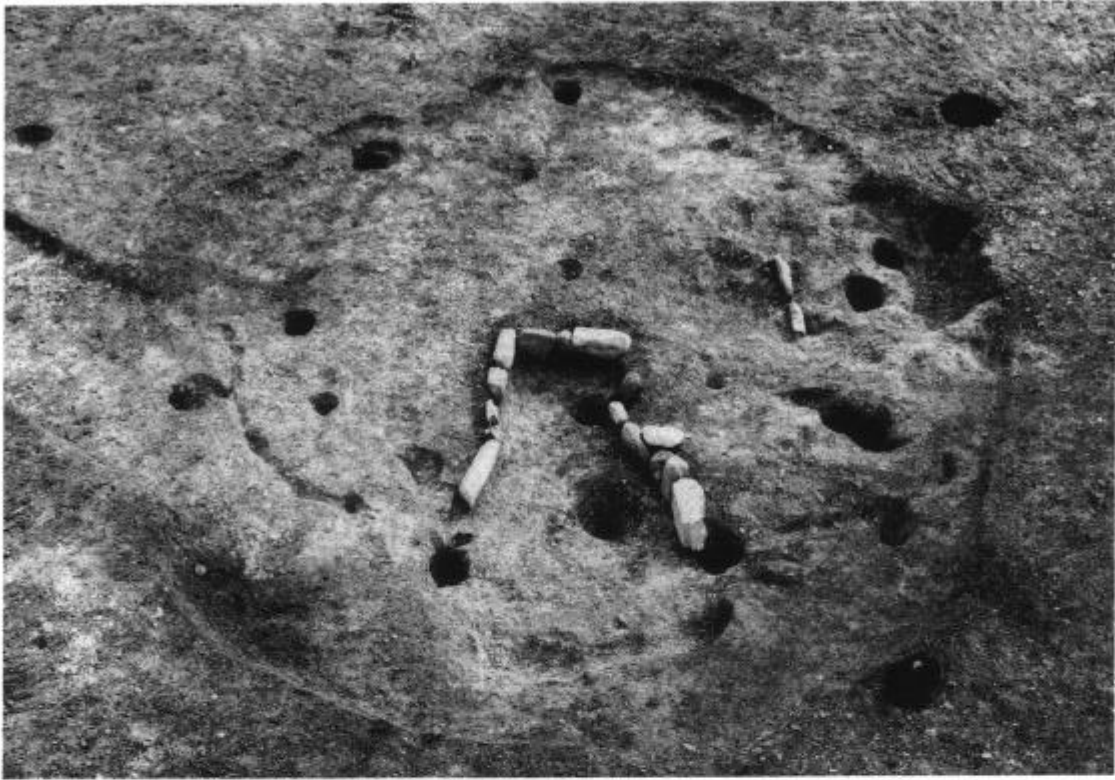
SI 187 竖穴住居跡



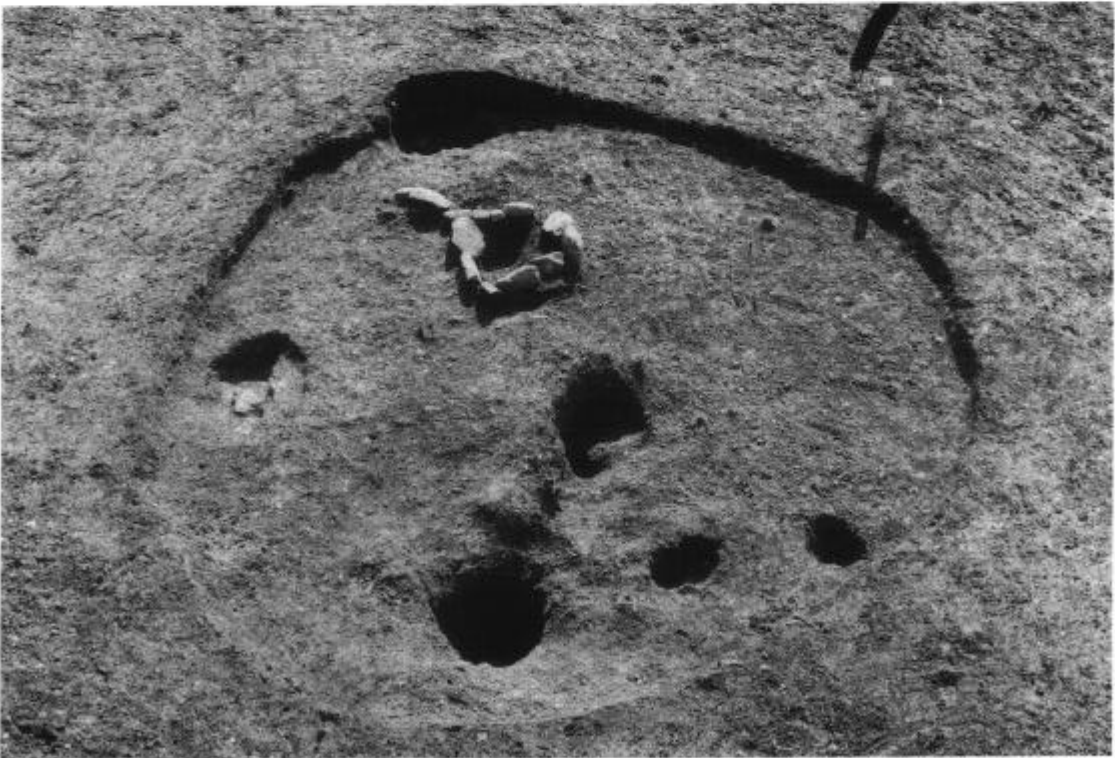
SI 189豎穴住居跡



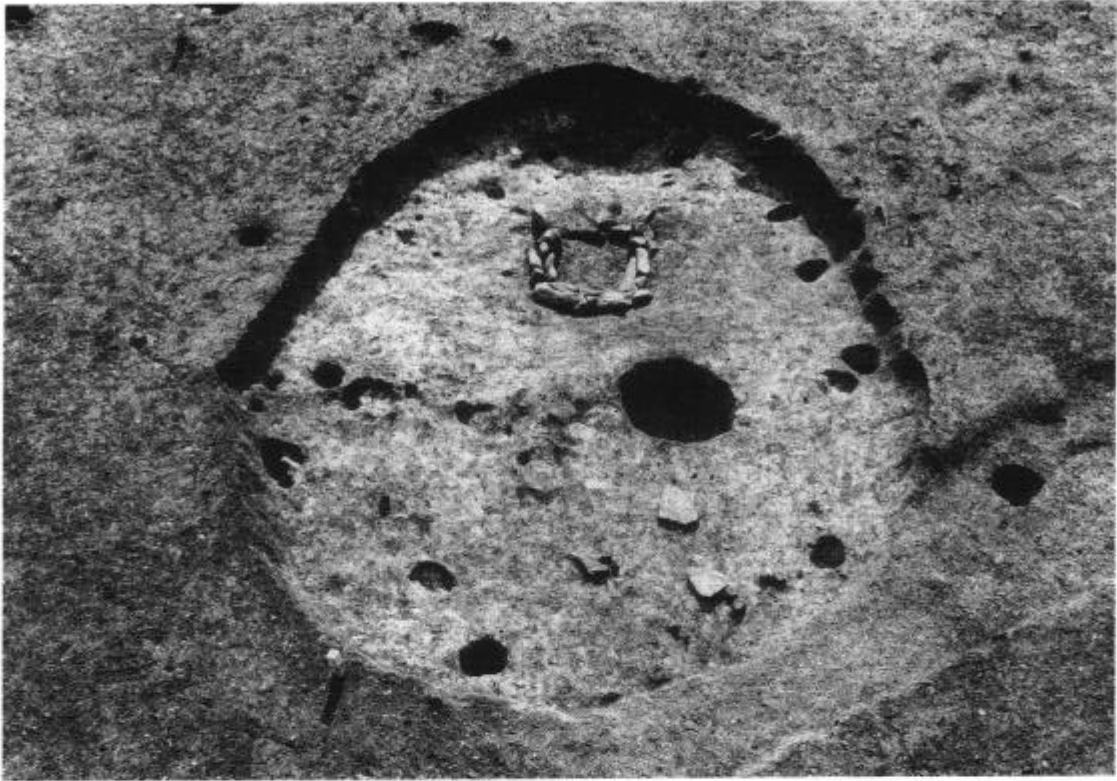
SI 200豎穴住居跡



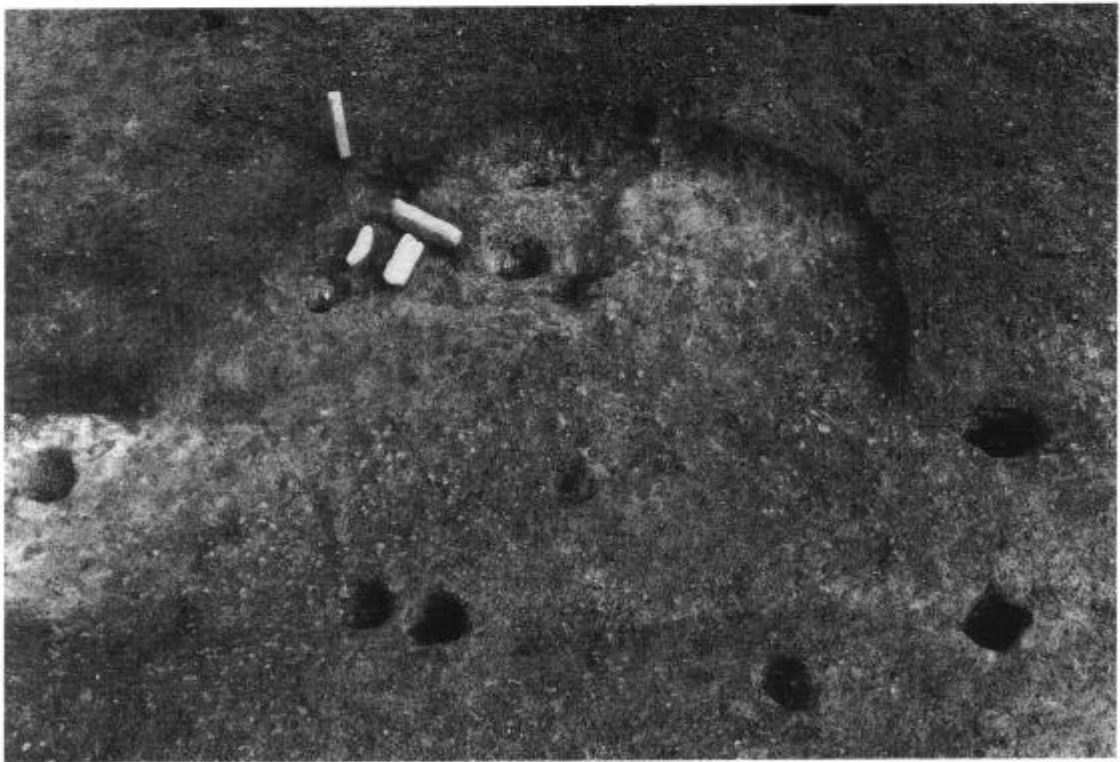
SI 201 竖穴住居跡



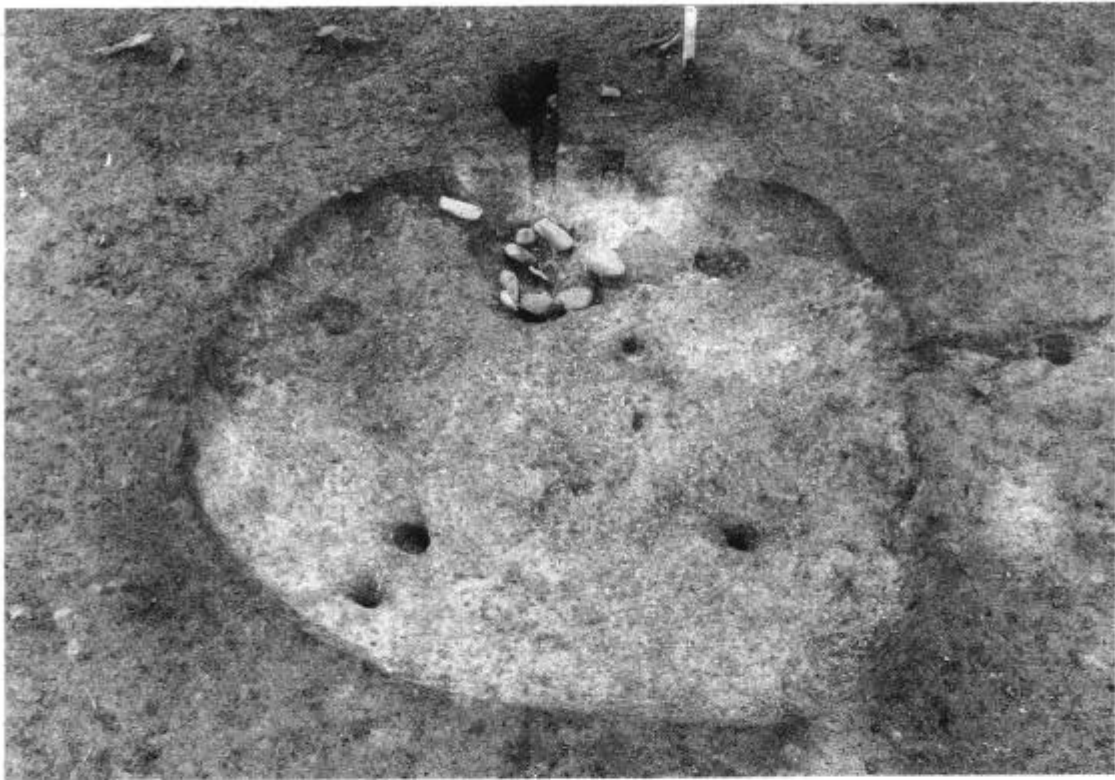
SI 202 竖穴住居跡



SI 203 竖穴住居跡



SI 206 竖穴住居跡



SI 222竖穴住居跡



SI 223竖穴住居跡



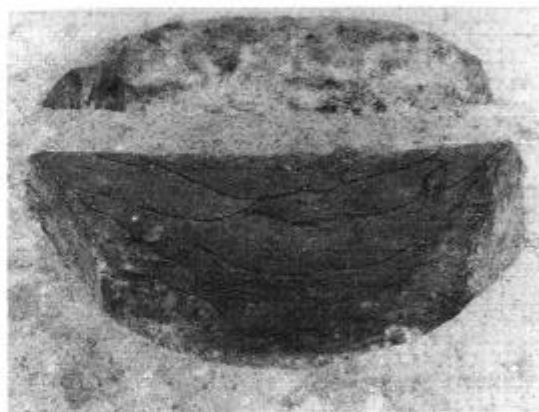
SI 224 竖穴住居跡



SI 225 竖穴住居跡



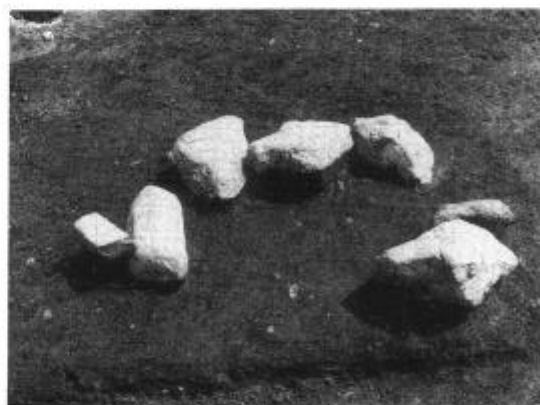
SKF 29 フラスコ状土坑



SK 188 土坑土層堆積状況



SR 226 土器設遺構断面



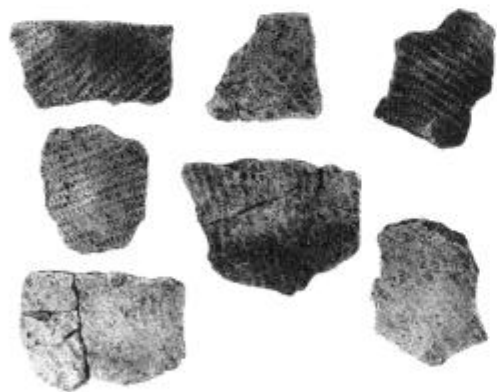
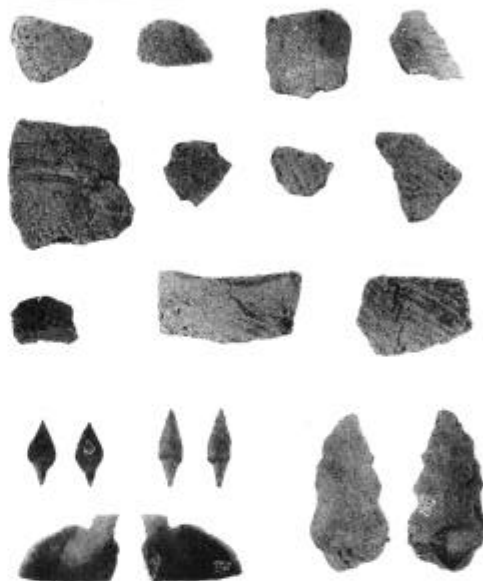
SQ 177 配石遺構



SI27



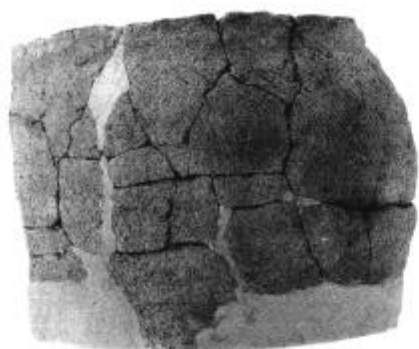
SI185



SI200



SI201



SI203



SI222



SI224

SI225



SI223



SR226



SKF29



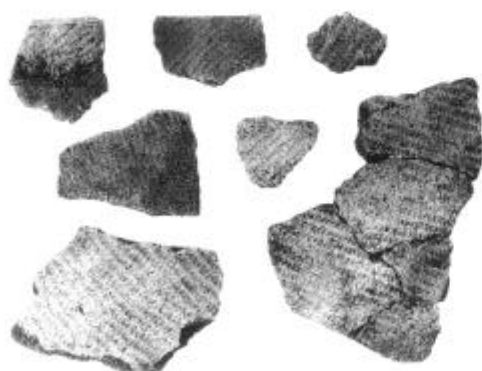
SK228



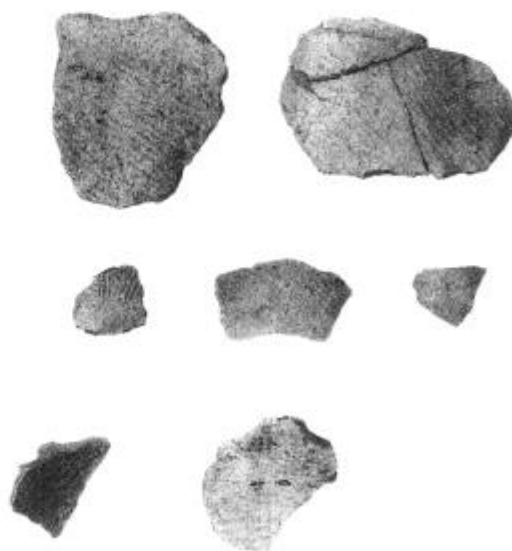
SK188



SK229



遺構外出土

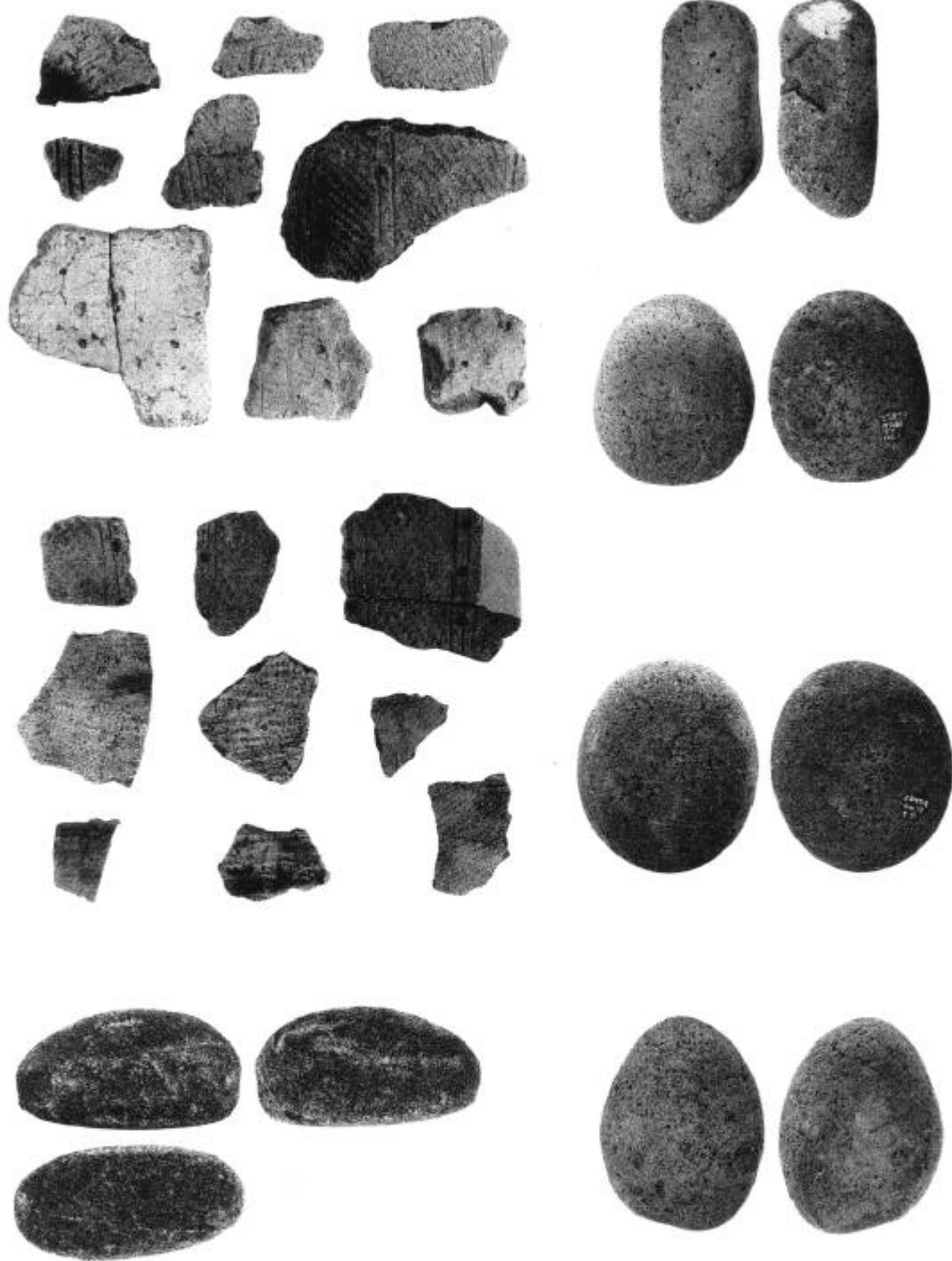




遺構外出土



遺構外出土



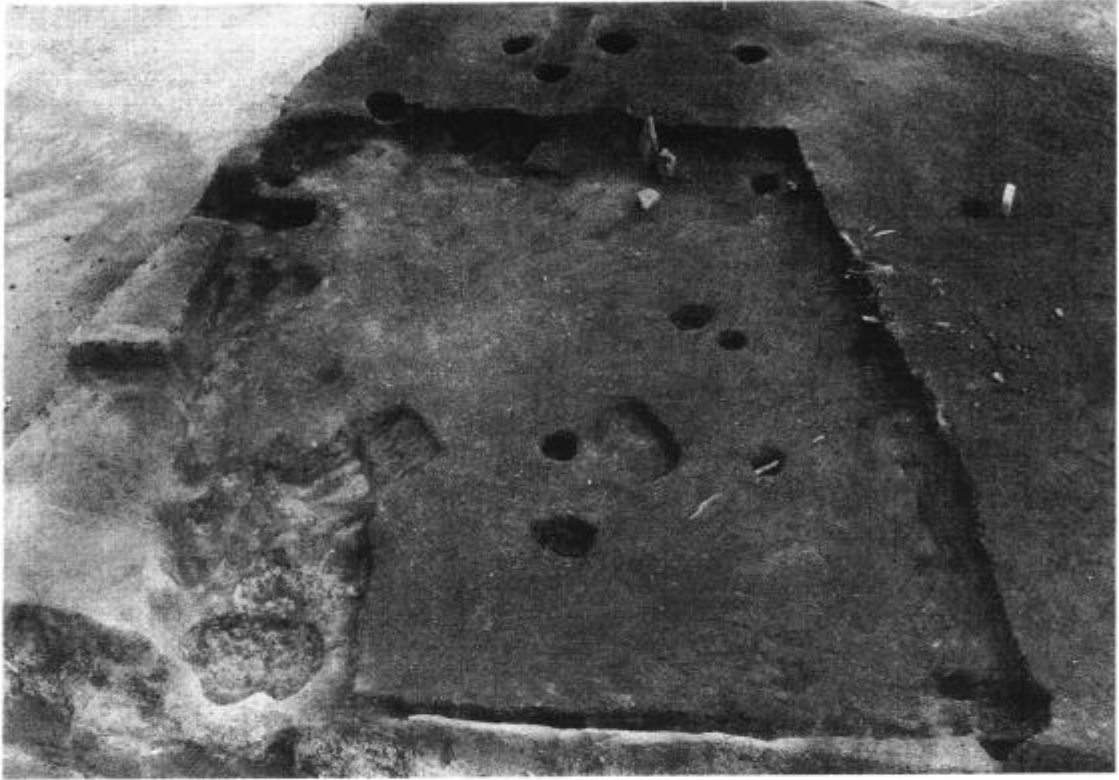
遺構外出土



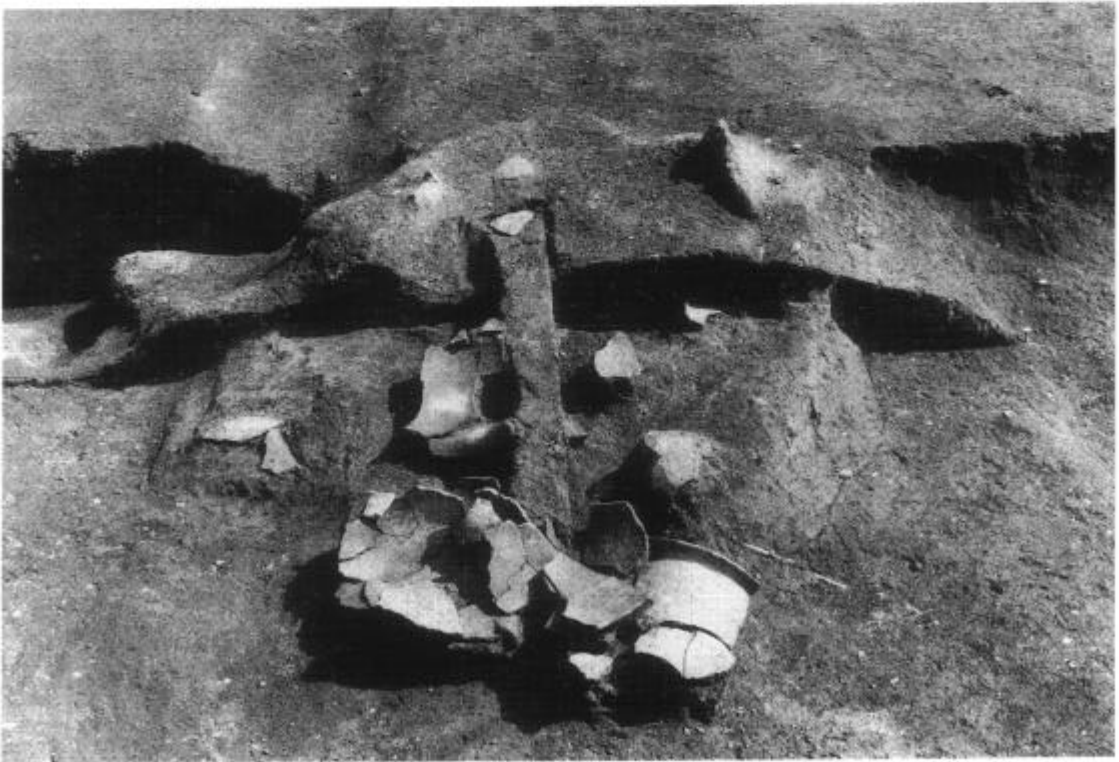
SI50竪穴住居跡



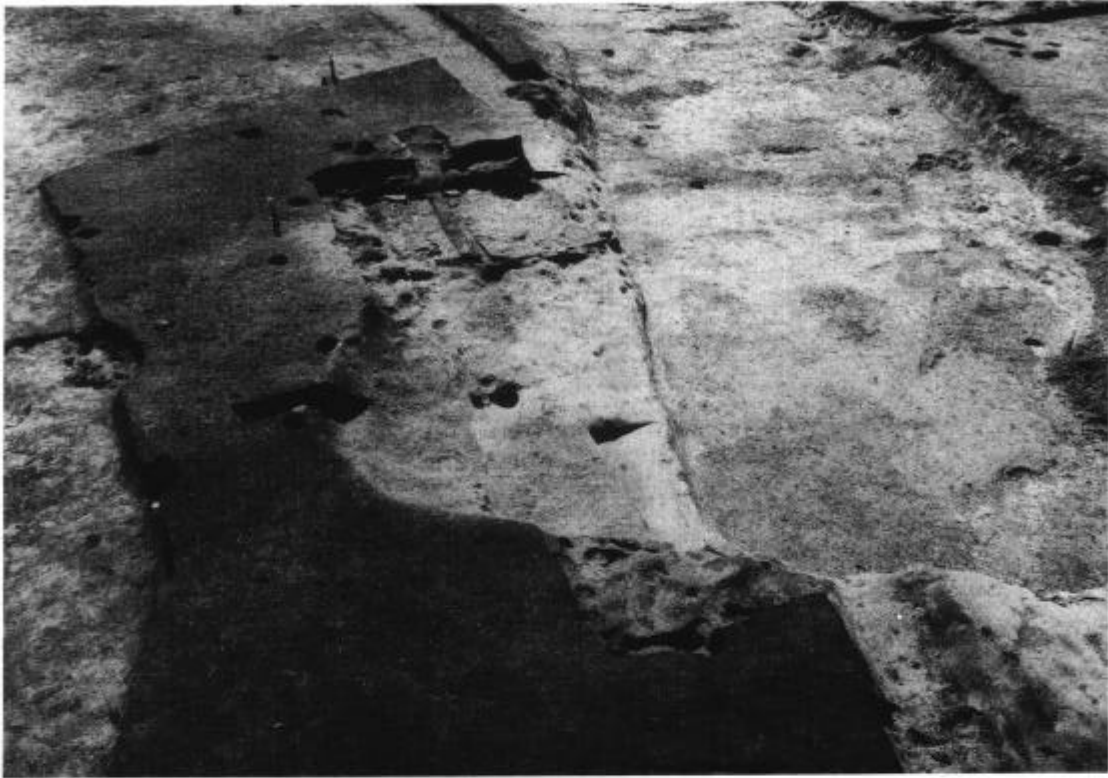
SI50竪穴住居跡かまど



SI 108 堅穴住居跡



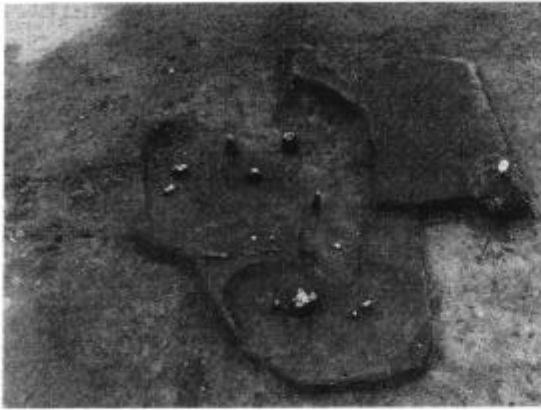
SI 108 堅穴住居跡かまど遺物出土状況



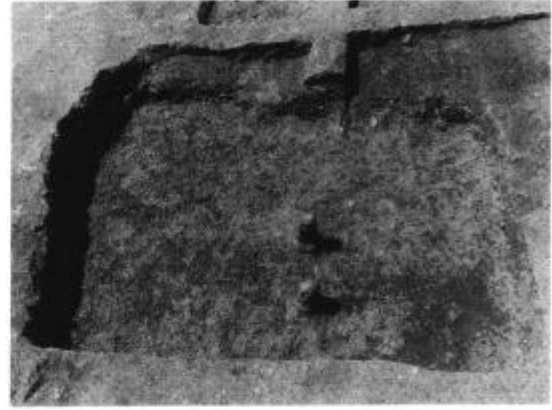
SI144 堅穴住居跡



SI144 堅穴住居跡かまど



SK08土坑プラン確認状況



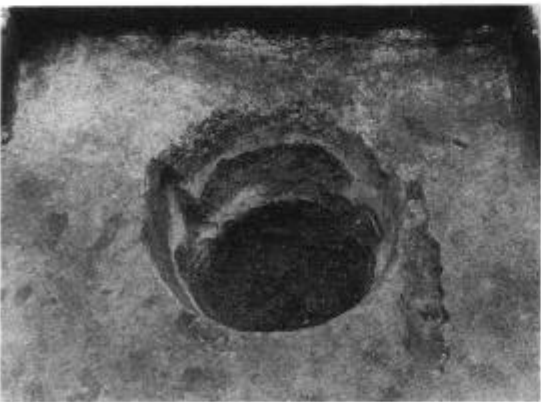
SK25土坑完掘状況



SK147土坑遺物出土状況



SN112焼土遺構



SE12井戸跡



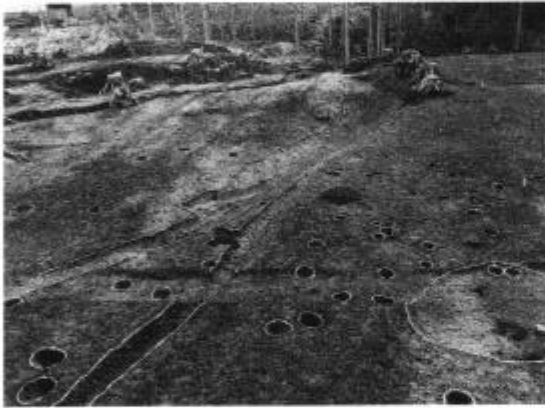
SE12井戸跡の曲物痕跡



SD168溝状遺構外遺構検出状況



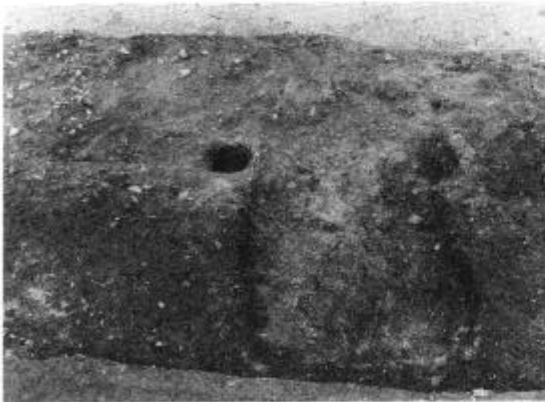
SD167溝状遺構



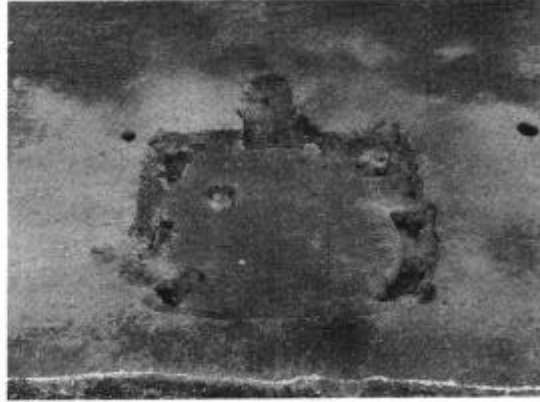
SD163・SD212・SD213溝状遺構



SD110溝状遺構外遺構検出状況



SI 21竪穴建物跡



SI176竪穴建物跡



SN112



SK147



SK147



S150



S150



S1108



S1108



S1108



S1144



遺構外



遺構外



SD01空堀跡完掘状況(1)



SD01空堀跡・SF254土塁



SD01空堀跡土層堆積状況



SD01空堀跡完掘状況(2)



SD09空堀跡、SF101・SF102土塁現況地形



同上 精査完了状況



SD09空堀跡・SF 251土塁検出状況



SD09空堀跡、SF 101・SF 102土塁検出状況



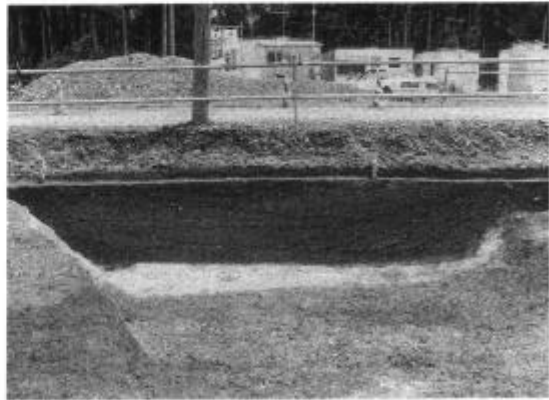
SF 102土塁盛土状況



SF 101土塁盛土状況



SD09空堀跡屈曲部



SD09空堀跡土層堆積状況(2)



SD09・SD10空堀跡配置状況



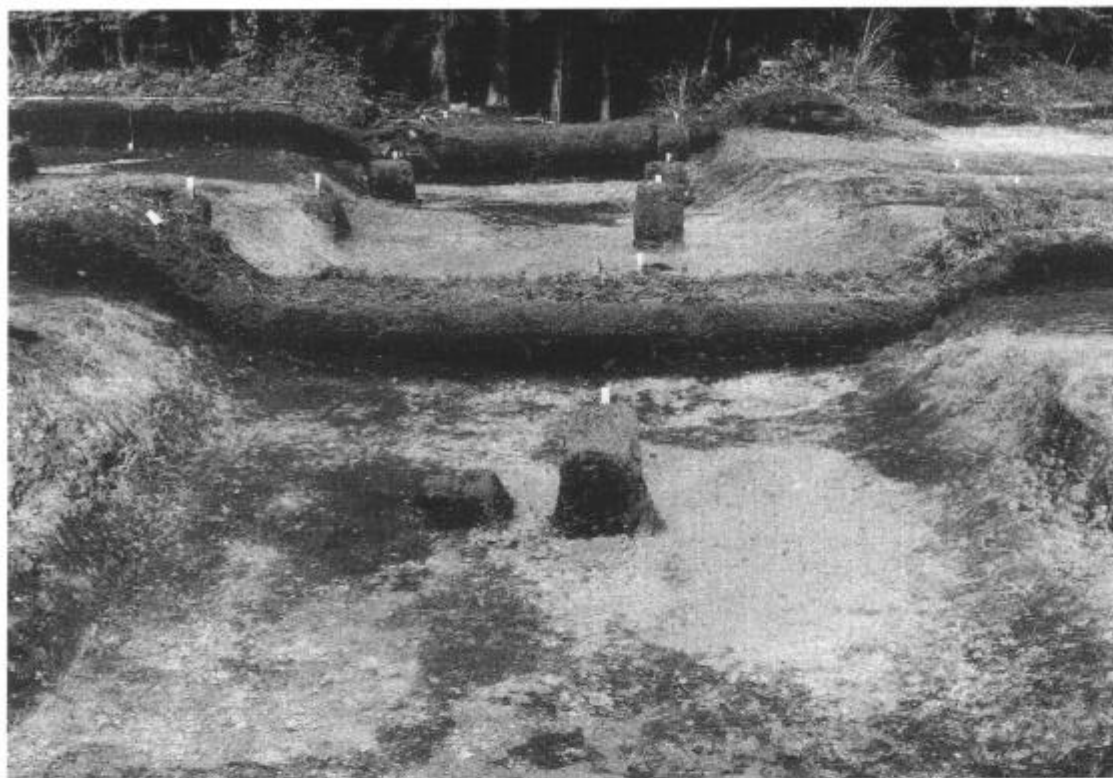
SD10空堀跡完掘状況(1)



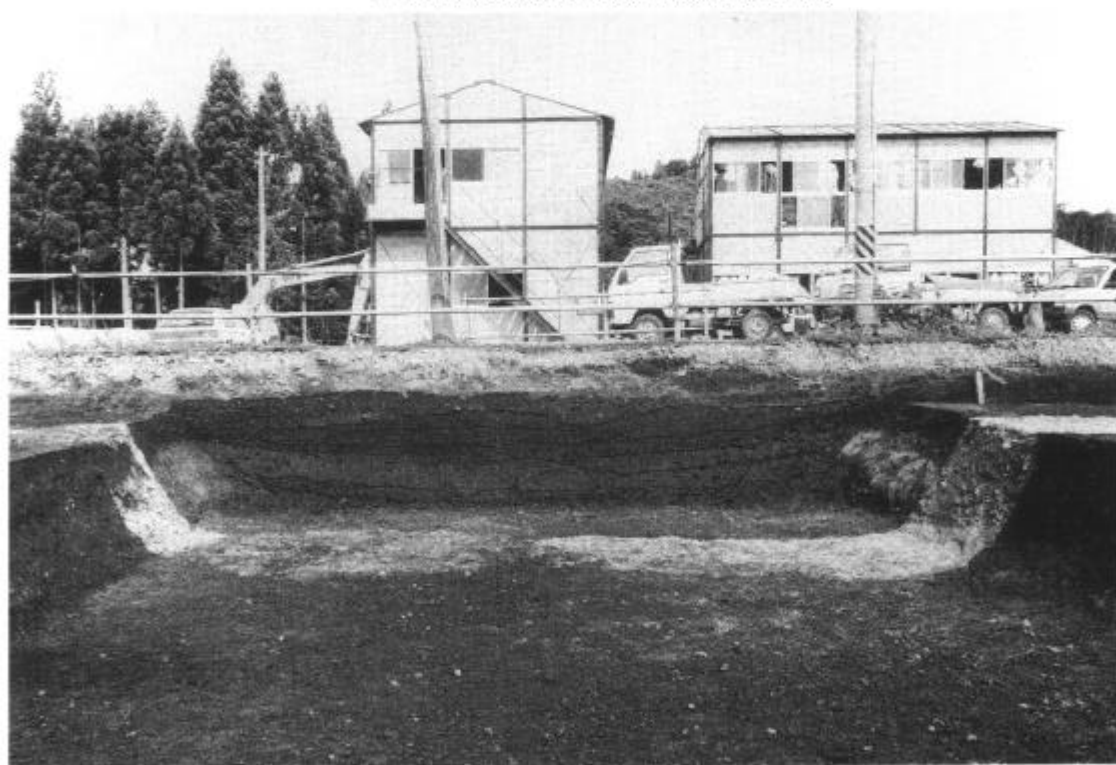
SD10空堀跡完掘状況(2)



SD10空堀跡屈曲部完掘状況
溝状遺構と橋跡(屈曲部の柱穴群)が検出された



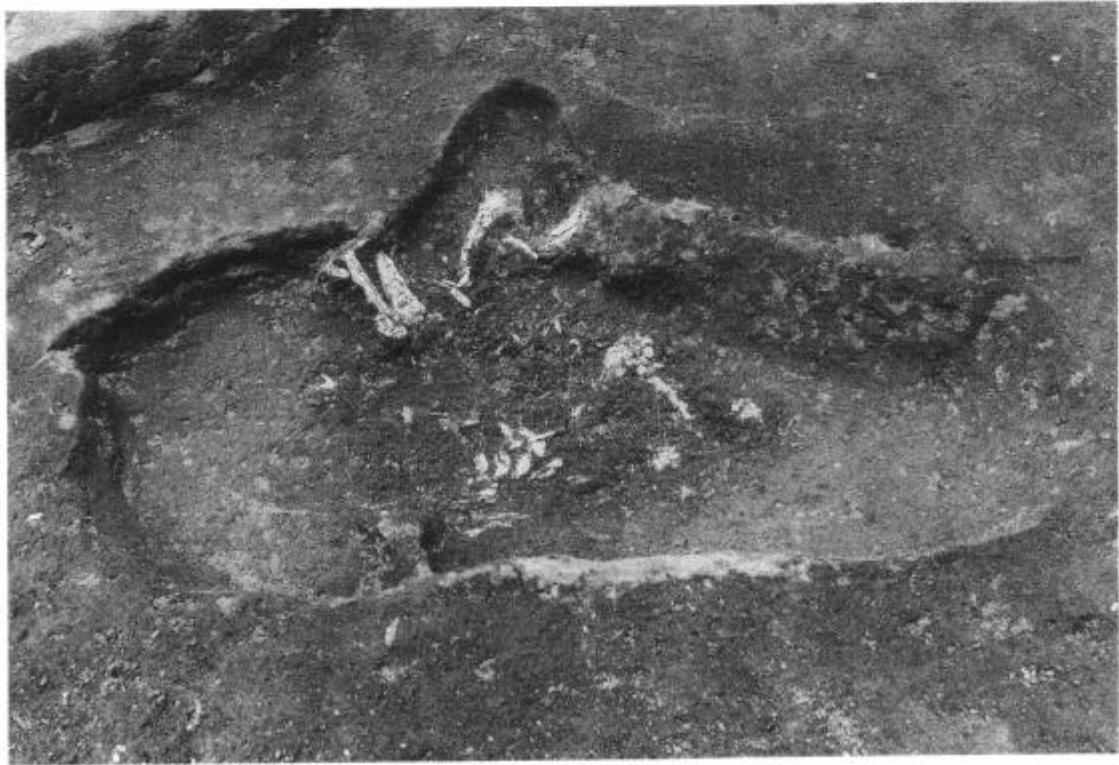
SD10空堀跡土層堆積状況(1)
土塁が南側(写真右側)に築かれている



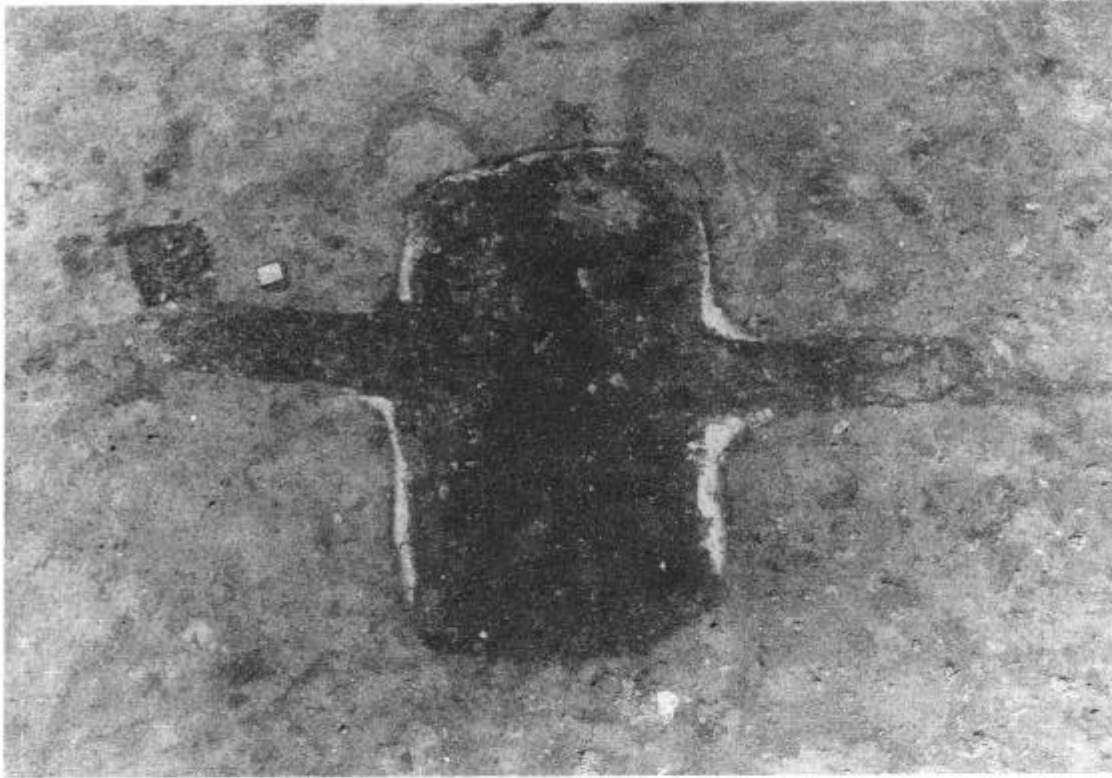
SD10空堀跡土層堆積状況(2)



SX04・SX13火葬墓プラン確認状況



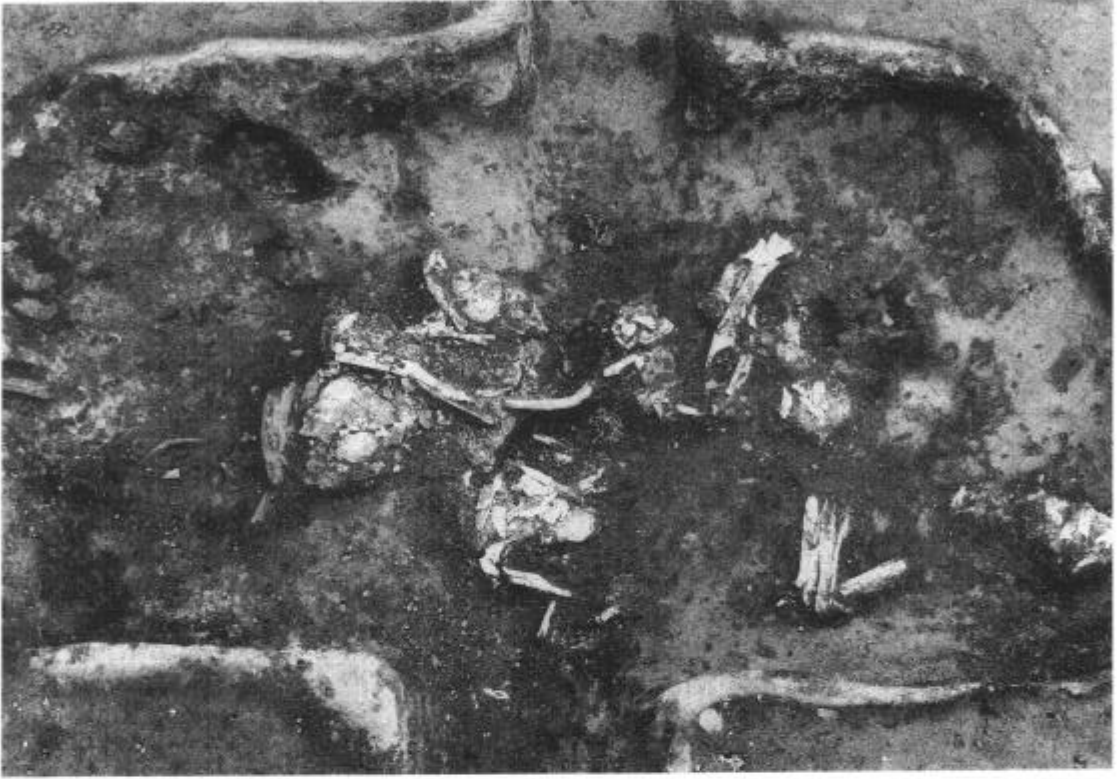
SX04火葬墓人骨出土状況



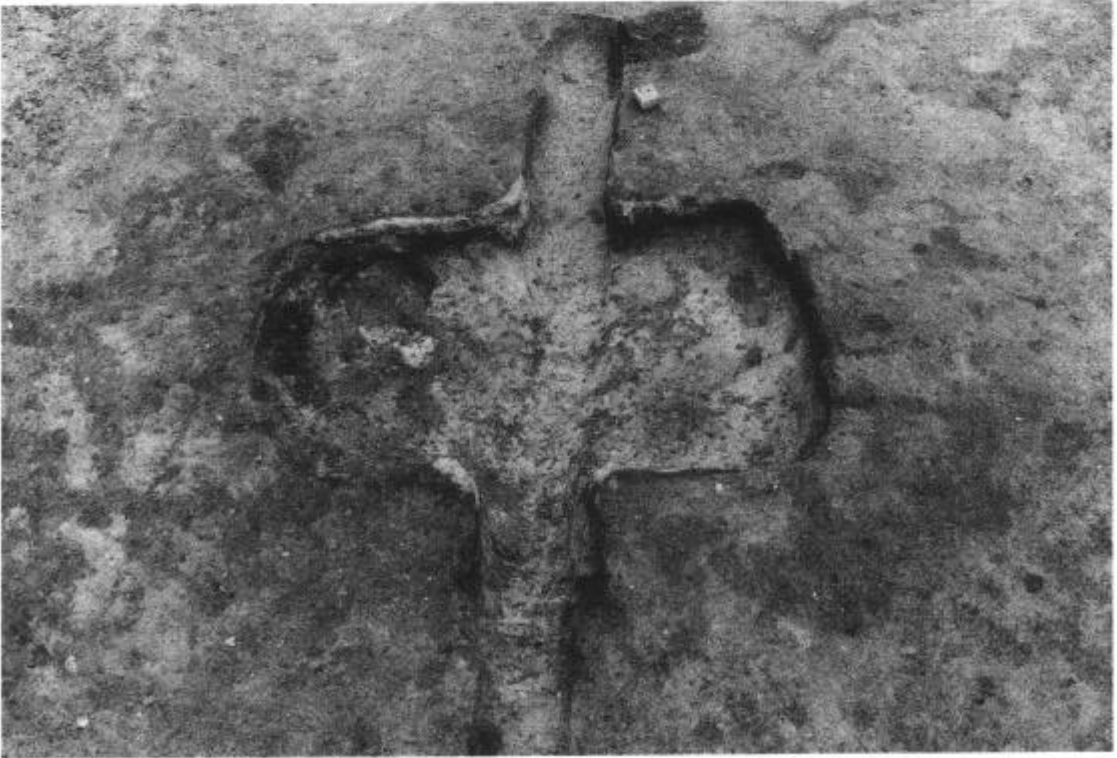
SX05火葬墓プラン確認状況



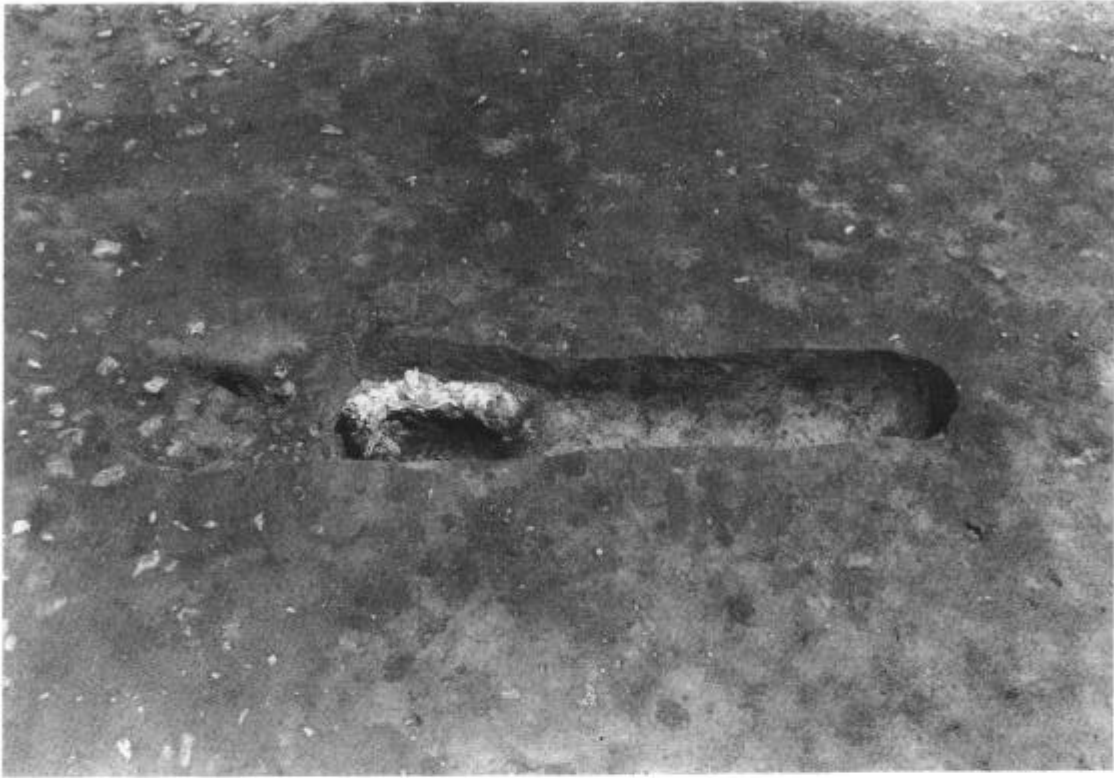
SX05火葬墓人骨出土状況(1)



SX05火葬墓人骨出土状况(2)



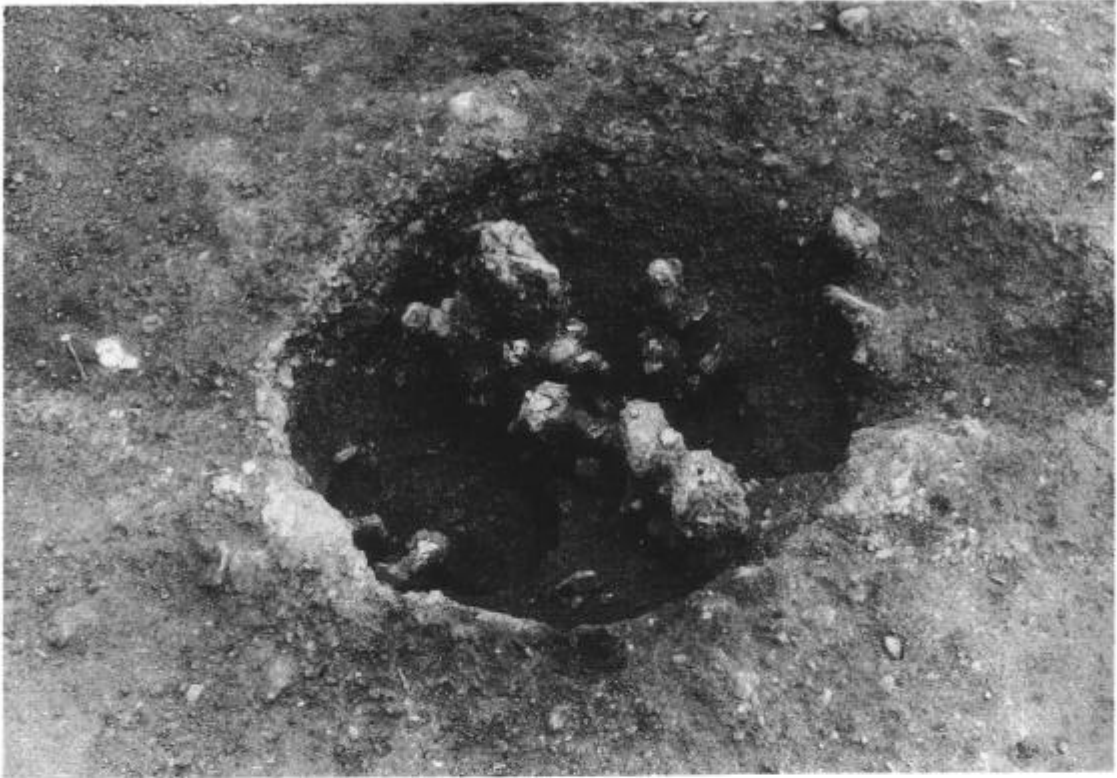
SX05火葬墓完掘状况



SX14被火骨出土遺構



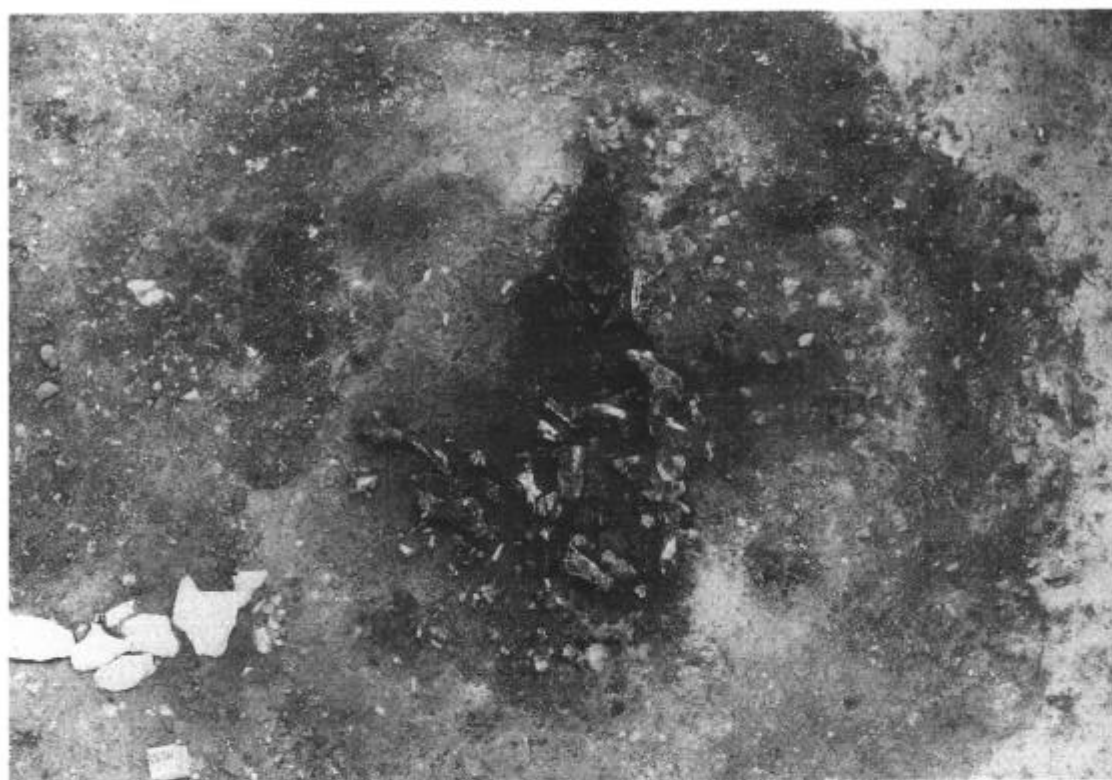
SX15・SX16プラン確認状況



SX15被火骨出土遺構
人骨出土状況



SX16被火骨出土遺構
木炭層堆積状況



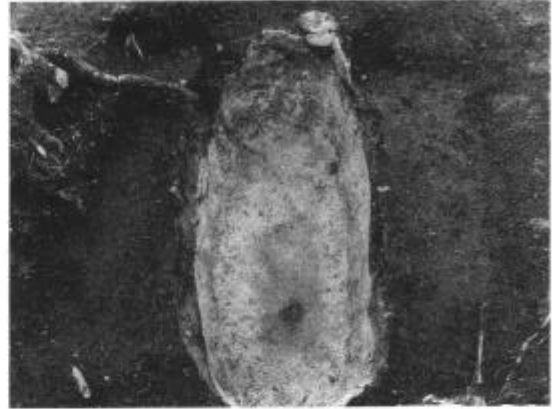
SX16被火骨出土遺構
人骨出土状況



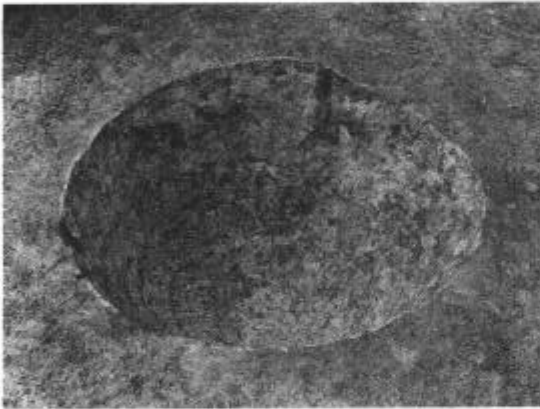
同上(部分)



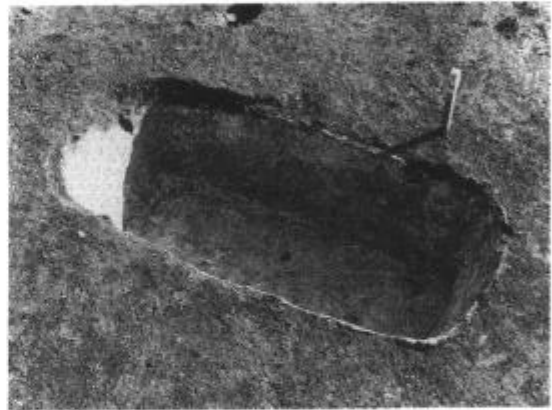
SK103土坑(近・現代)



SK173土坑(近・現代)



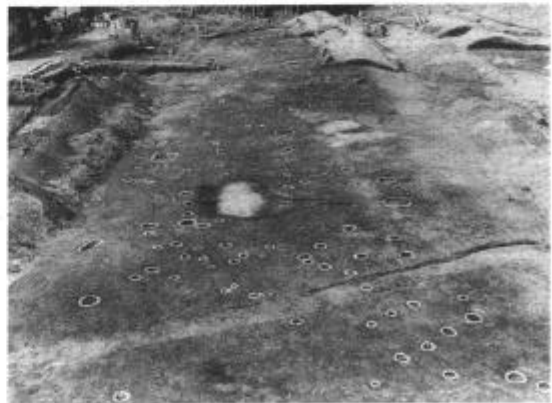
SK204土坑(近・現代)



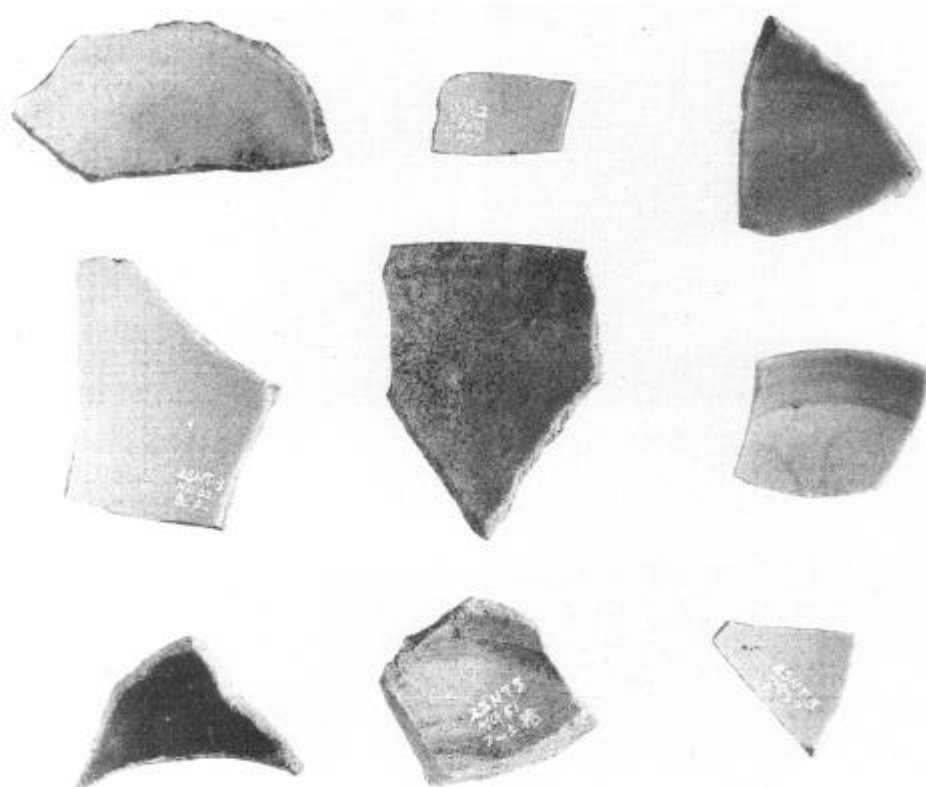
SK209土坑(近・現代)



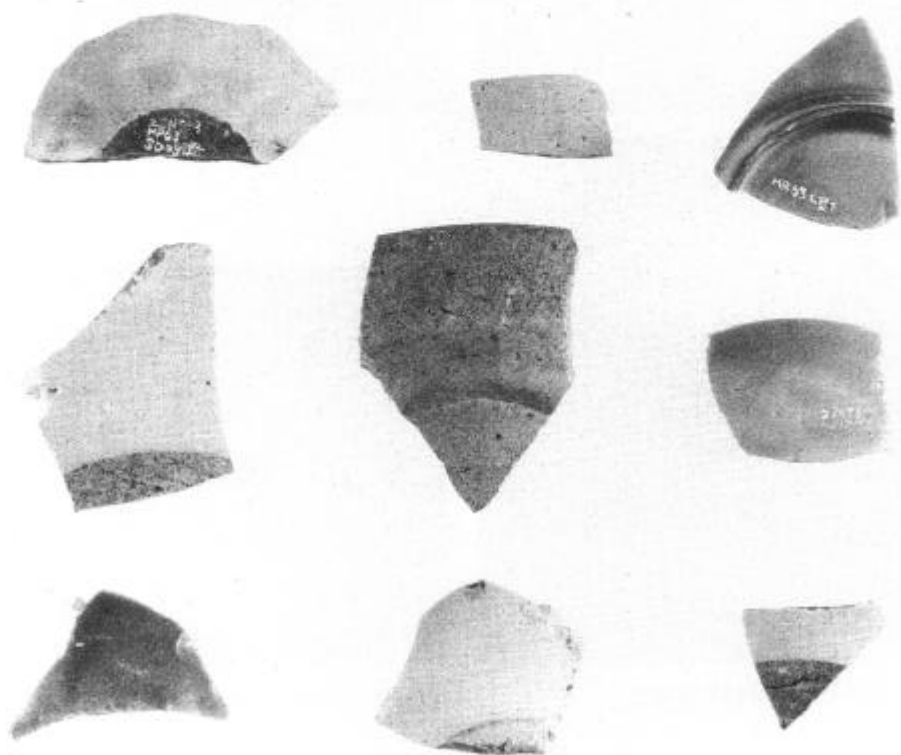
調査区西側遺構完掘状況



SD09—SD10空堀間の郭内に検出した柱穴群

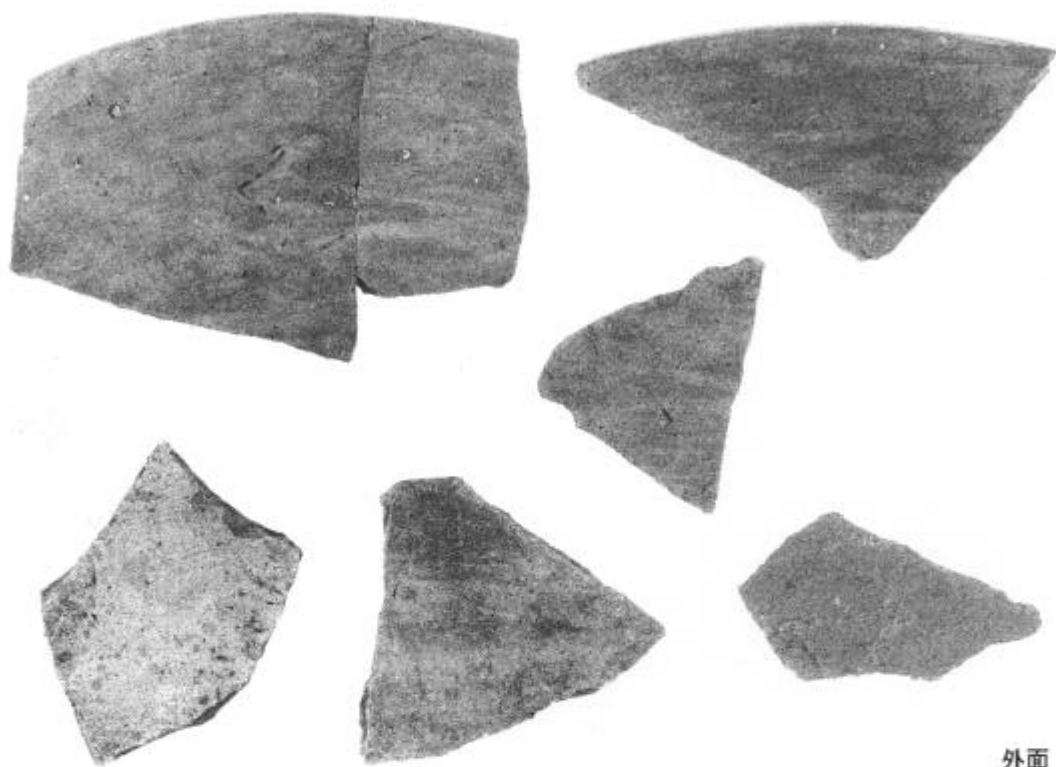


外面

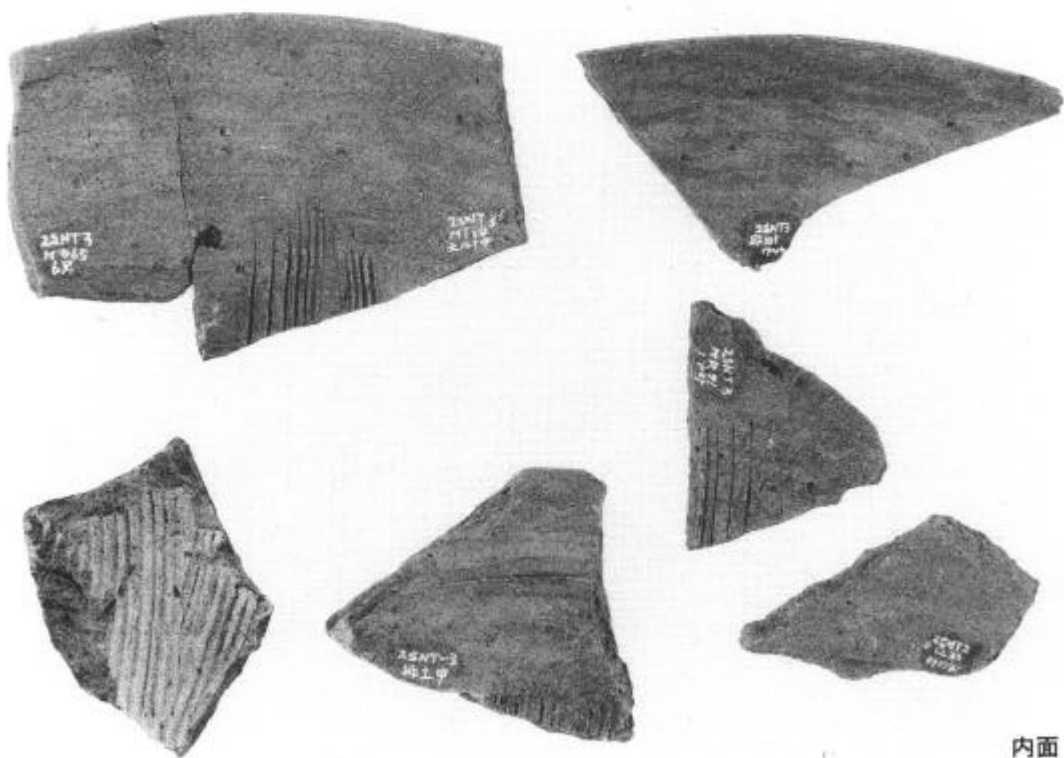


内面

青磁·白磁片

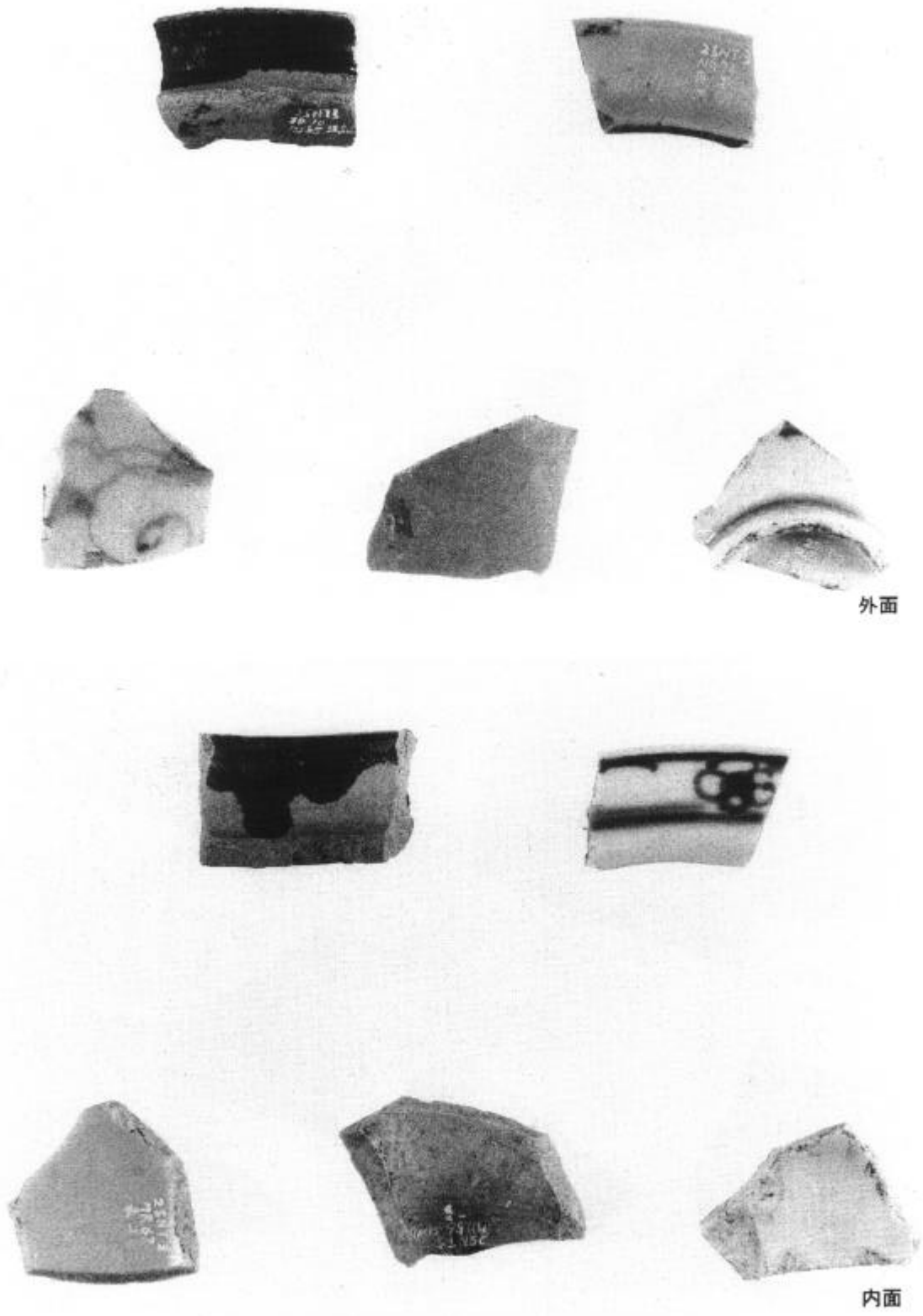


外面

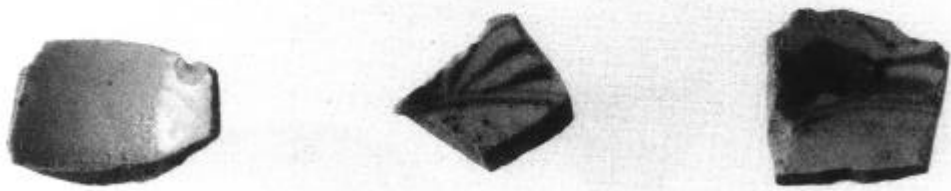
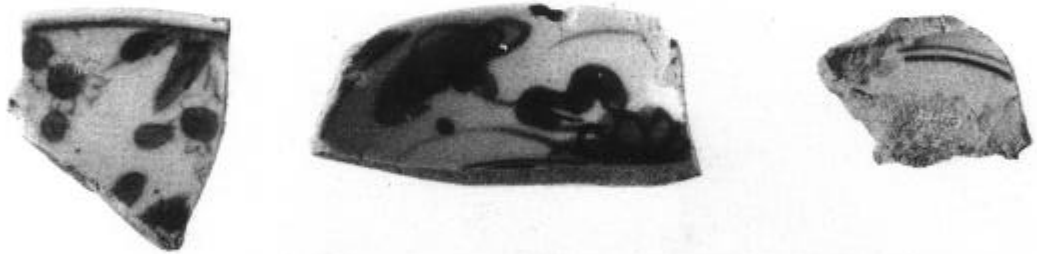
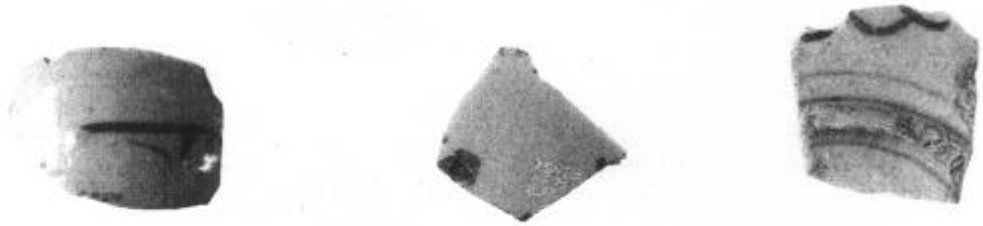
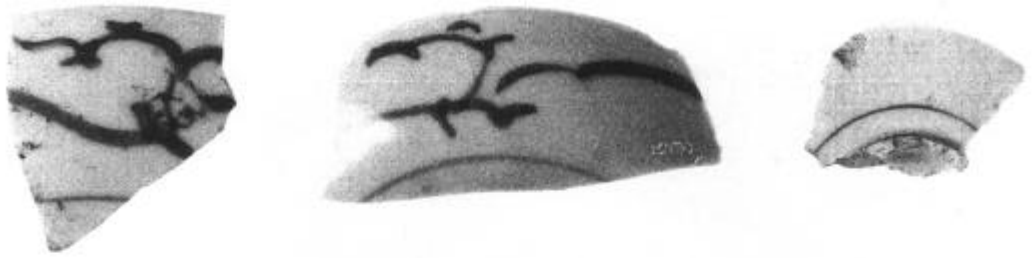


内面

珠洲系中世陶器片・珠洲烧片



17世紀～18世紀の染付陶器片



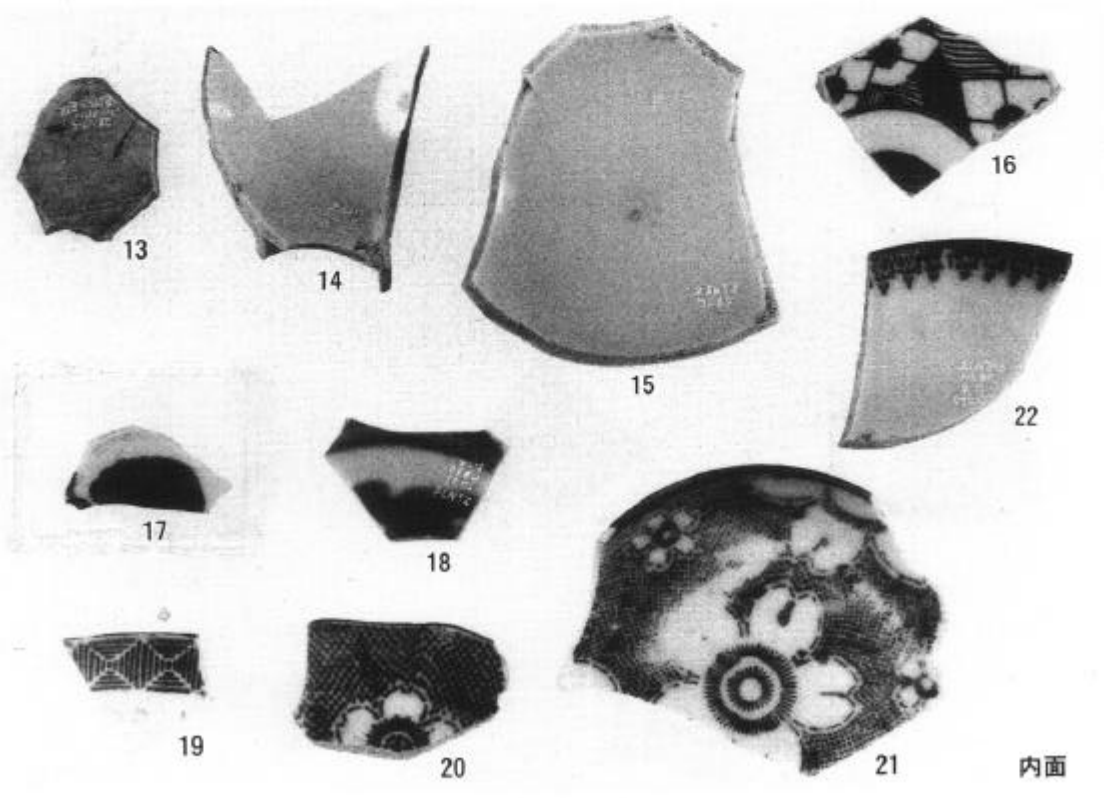
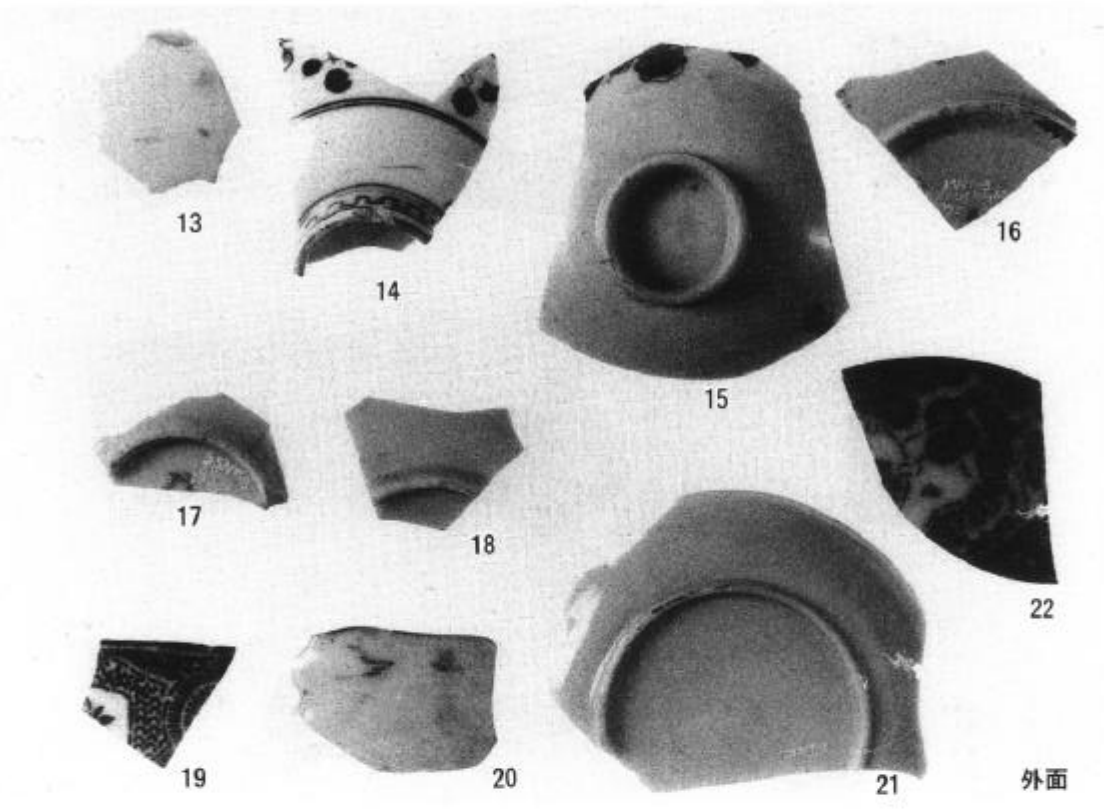
外面

内面

18世紀染付陶器片

62-55

63-1

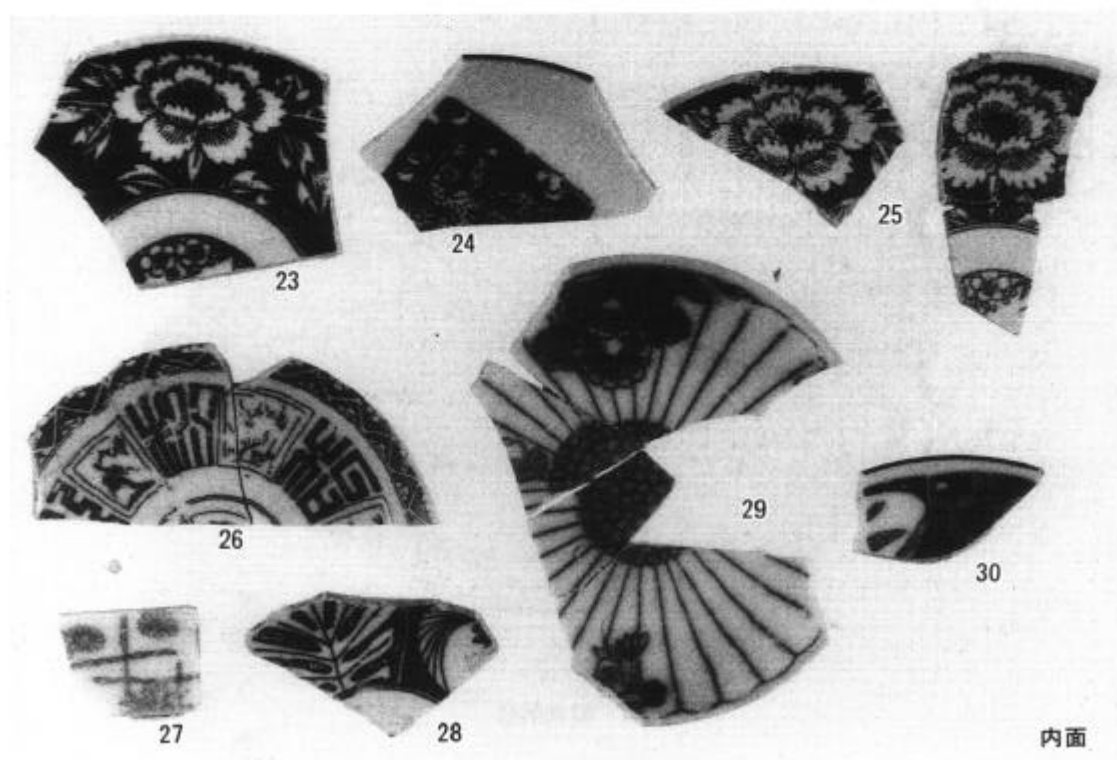
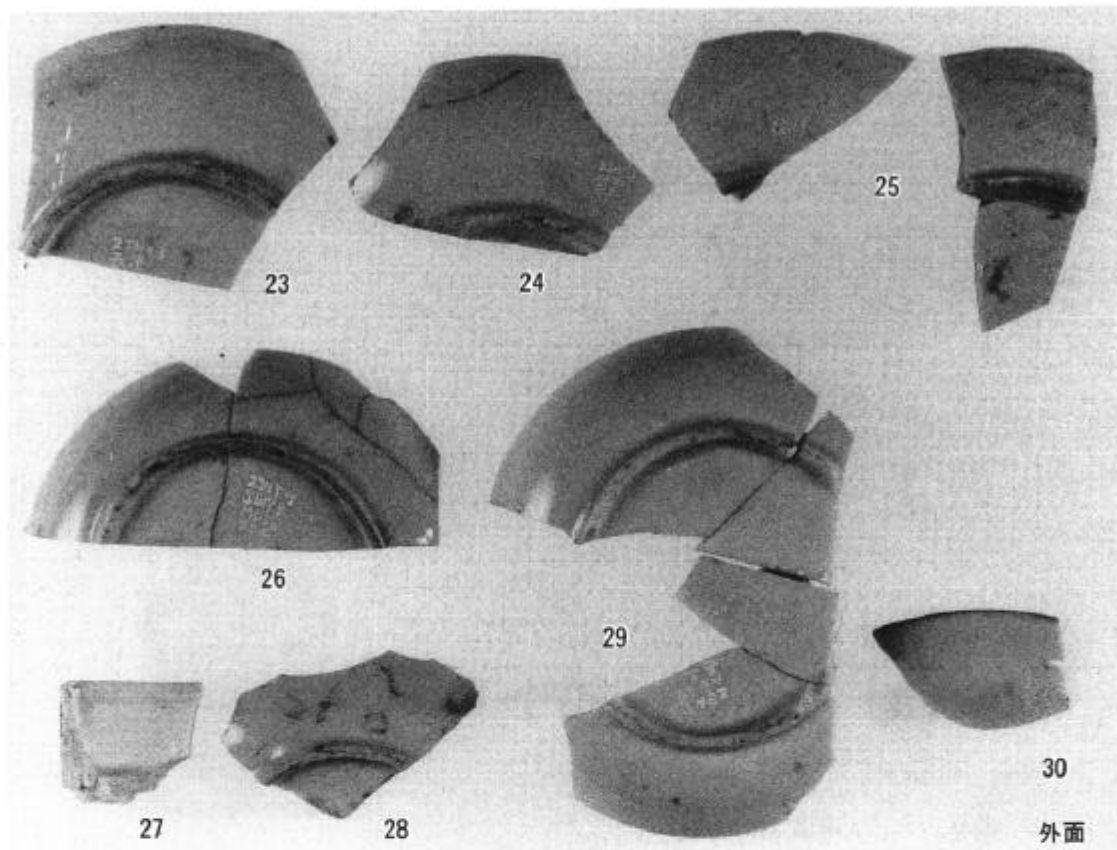


近代陶磁器(1)

3/10

3

3/10



近代陶磁器(2)



風炉片



煙管 (キセル)



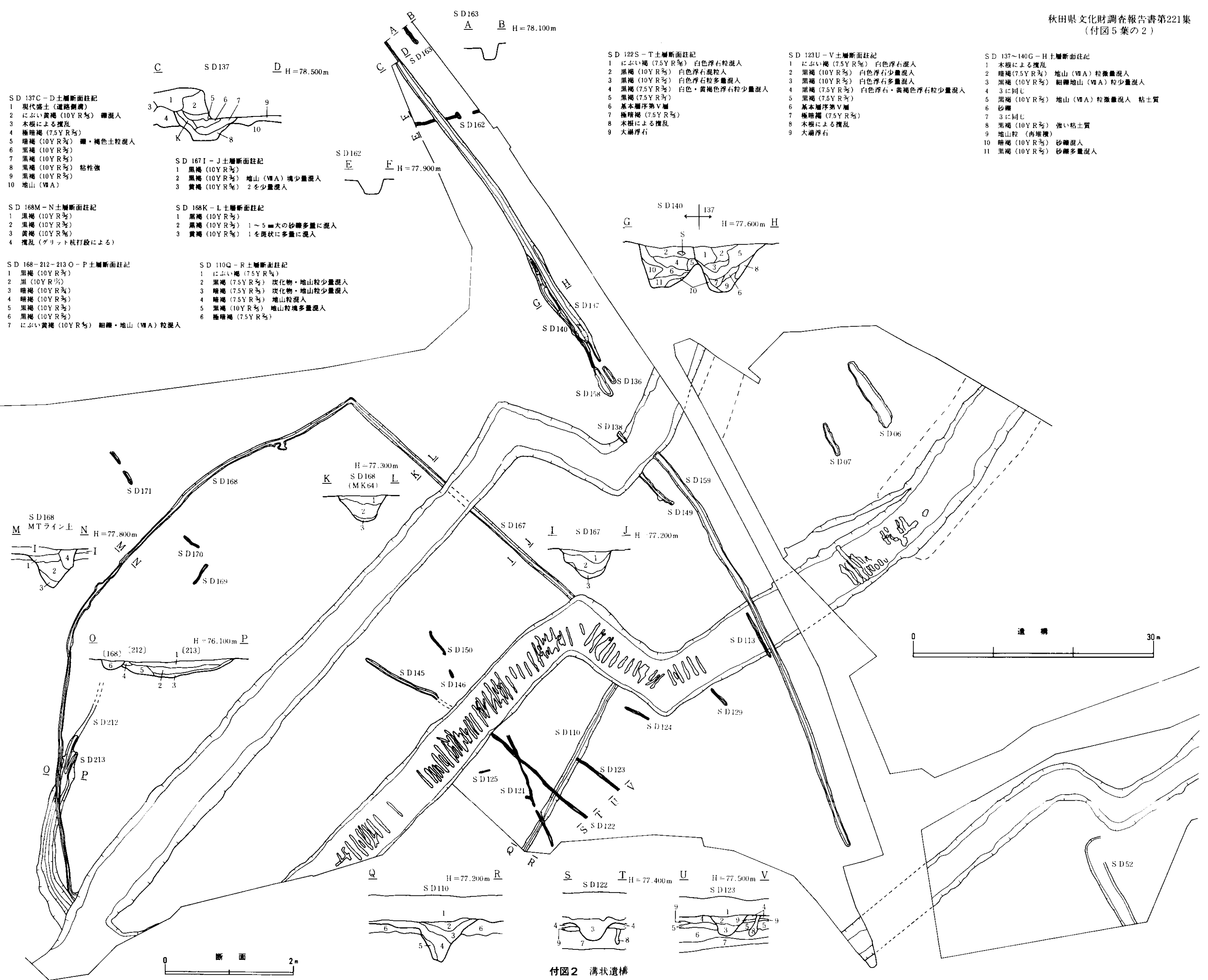
ろうそく立



近・現代陶器

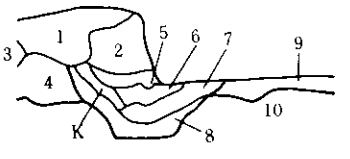


付図1 遺構配置図



- SD 137C-D土層断面註記
 1 現代盛土(道路側溝)
 2 にぶい黄褐(10Y R%) 礫混入
 3 木根による攪乱
 4 極暗褐(7.5Y R%)
 5 暗褐(10Y R%) 礫・褐色土粒混入
 6 黒褐(10Y R%)
 7 黒褐(10Y R%)
 8 黒褐(10Y R%) 粘性強
 9 黒褐(10Y R%)
 10 地山(VIA)

SD 137 H=78.500m



- SD 167I-J土層断面註記
 1 黒褐(10Y R%)
 2 黒褐(10Y R%) 地山(VIA)塊少量混入
 3 黄褐(10Y R%) 2を少量混入

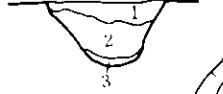
SD 162 H=77.900m



- SD 168M-N土層断面註記
 1 黒褐(10Y R%)
 2 黒褐(10Y R%)
 3 黄褐(10Y R%)
 4 攪乱(グリット杭打設による)

- SD 168K-L土層断面註記
 1 黒褐(10Y R%)
 2 黒褐(10Y R%) 1~5mm大の砂礫多量に混入
 3 黄褐(10Y R%) 1を斑状に混入

H=77.300m
SD 168 (MK64)



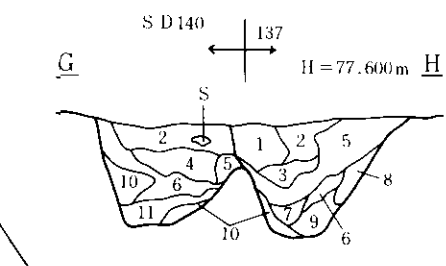
- SD 168-212-213O-P土層断面註記
 1 黒褐(10Y R%)
 2 黒(10Y R%)
 3 暗褐(10Y R%)
 4 暗褐(10Y R%)
 5 黒褐(10Y R%)
 6 黒褐(10Y R%)
 7 にぶい黄褐(10Y R%) 細礫・地山(VIA)粒混入

- SD 110Q-R土層断面註記
 1 にぶい褐(7.5Y R%)
 2 黒褐(7.5Y R%) 炭化物・地山粒少量混入
 3 暗褐(7.5Y R%) 炭化物・地山粒少量混入
 4 暗褐(7.5Y R%) 地山粒混入
 5 黒褐(10Y R%) 地山粒塊多量混入
 6 極暗褐(7.5Y R%)

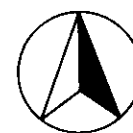
- SD 122S-T土層断面註記
 1 にぶい褐(7.5Y R%) 白色浮石粒混入
 2 黒褐(10Y R%) 白色浮石粒混入
 3 黒褐(10Y R%) 白色浮石粒多量混入
 4 黒褐(7.5Y R%) 白色・黄褐色浮石粒少量混入
 5 黒褐(7.5Y R%)
 6 基本層序第V層
 7 極暗褐(7.5Y R%)
 8 木根による攪乱
 9 大満浮石

- SD 123U-V土層断面註記
 1 にぶい褐(7.5Y R%) 白色浮石混入
 2 黒褐(10Y R%) 白色浮石少量混入
 3 黒褐(10Y R%) 白色浮石多量混入
 4 黒褐(7.5Y R%) 白色浮石・黄褐色浮石粒少量混入
 5 黒褐(7.5Y R%)
 6 基本層序第V層
 7 極暗褐(7.5Y R%)
 8 木根による攪乱
 9 大満浮石

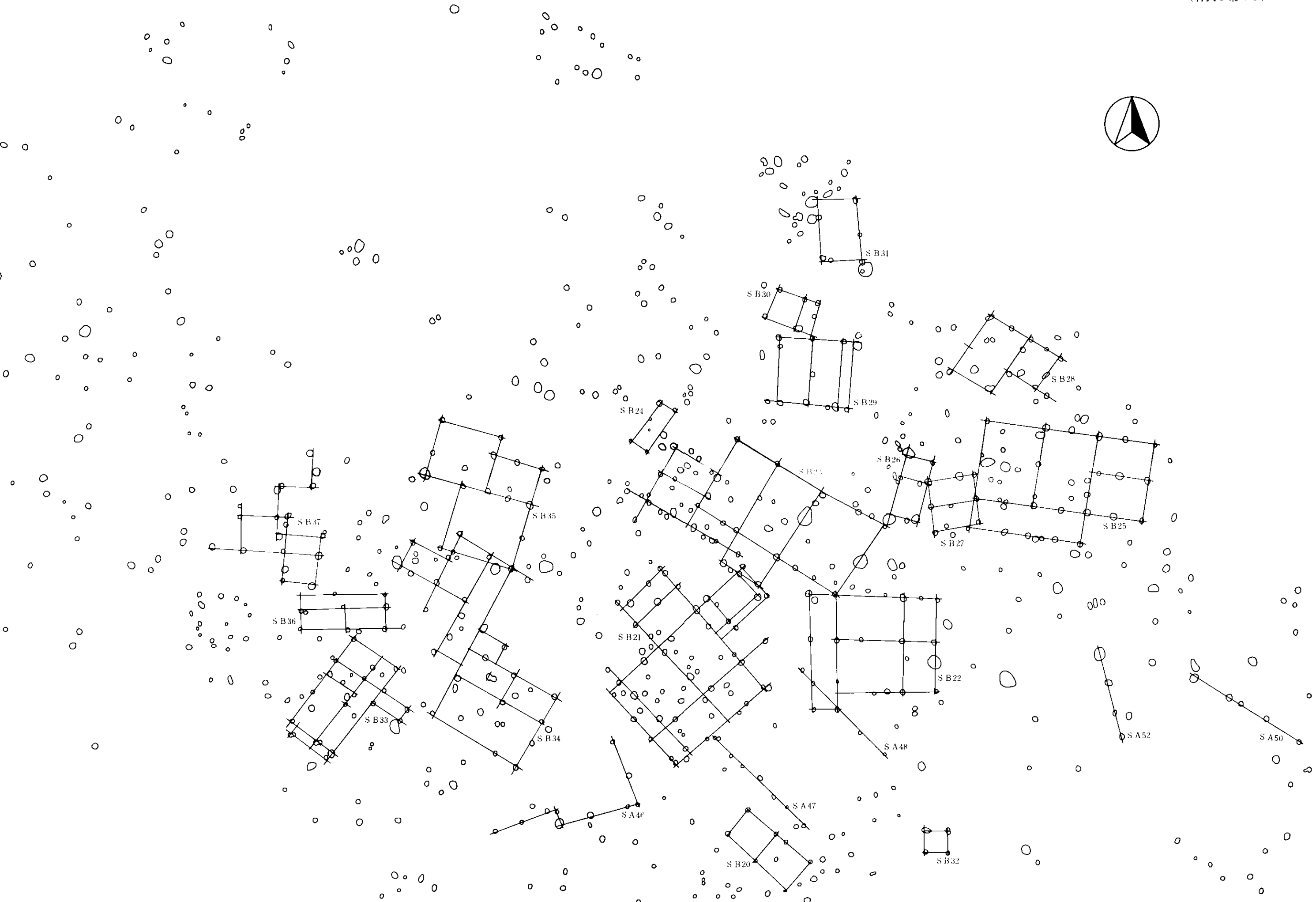
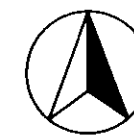
- SD 137-140G-H土層断面註記
 1 木根による攪乱
 2 暗褐(7.5Y R%) 地山(VIA)粒微量混入
 3 黒褐(10Y R%) 細礫地山(VIA)粒少量混入
 4 3に同じ
 5 黒褐(10Y R%) 地山(VIA)粒微量混入 粘土質
 6 砂礫
 7 3に同じ
 8 黒褐(10Y R%) 強い粘土質
 9 地山粒(再堆積)
 10 暗褐(10Y R%) 砂礫混入
 11 黒褐(10Y R%) 砂礫多量混入



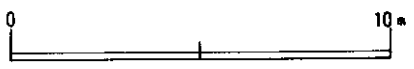
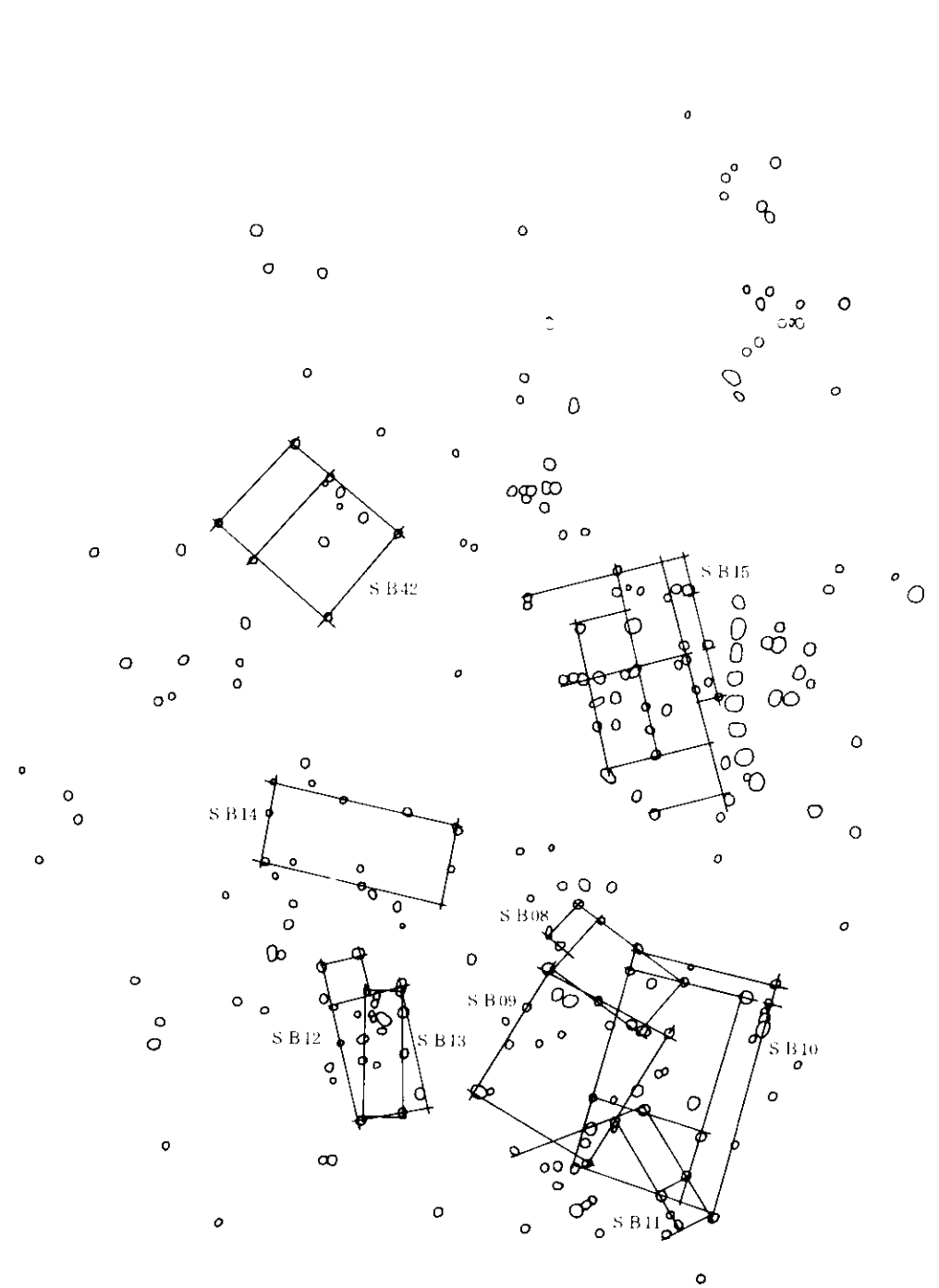
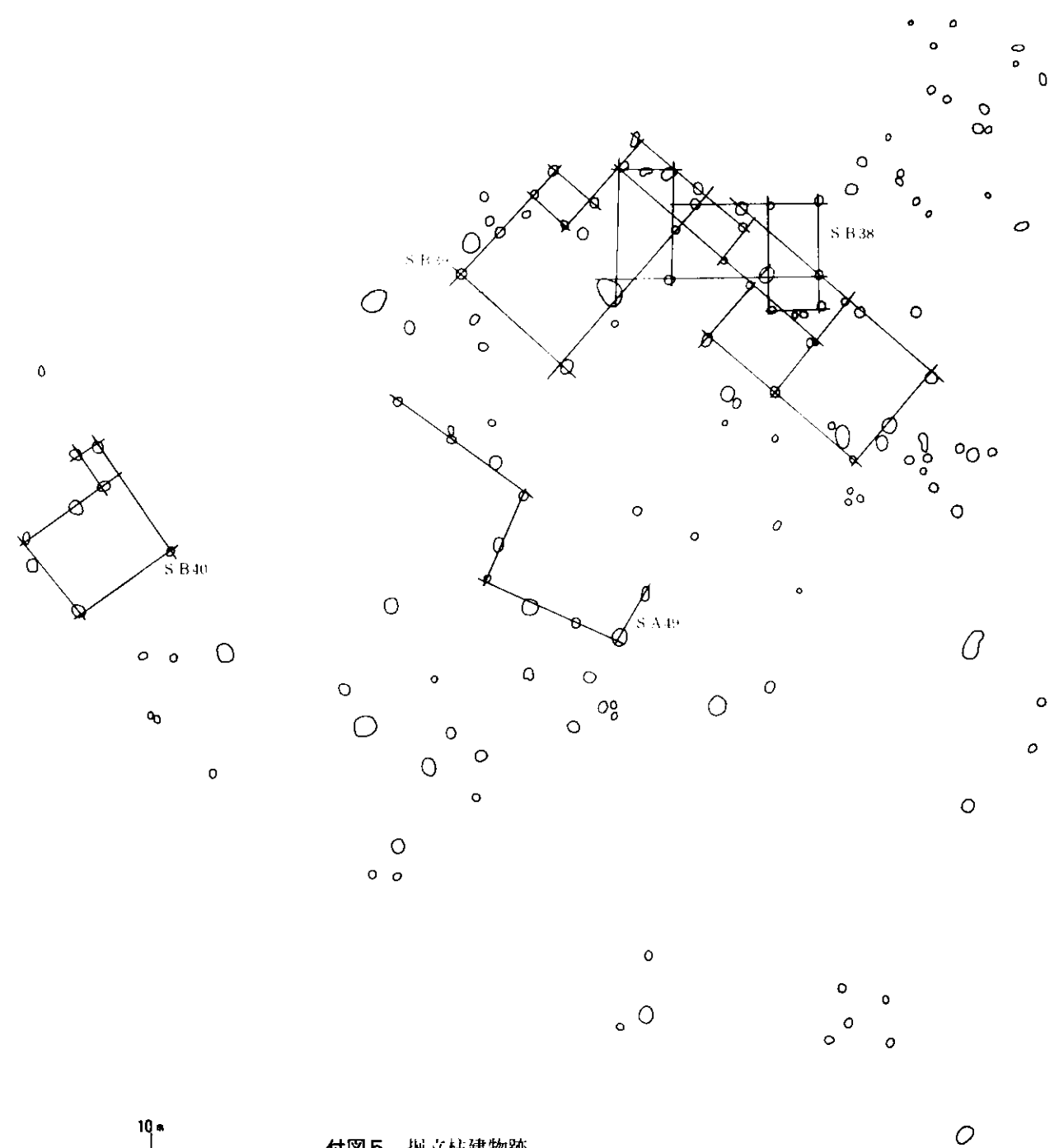
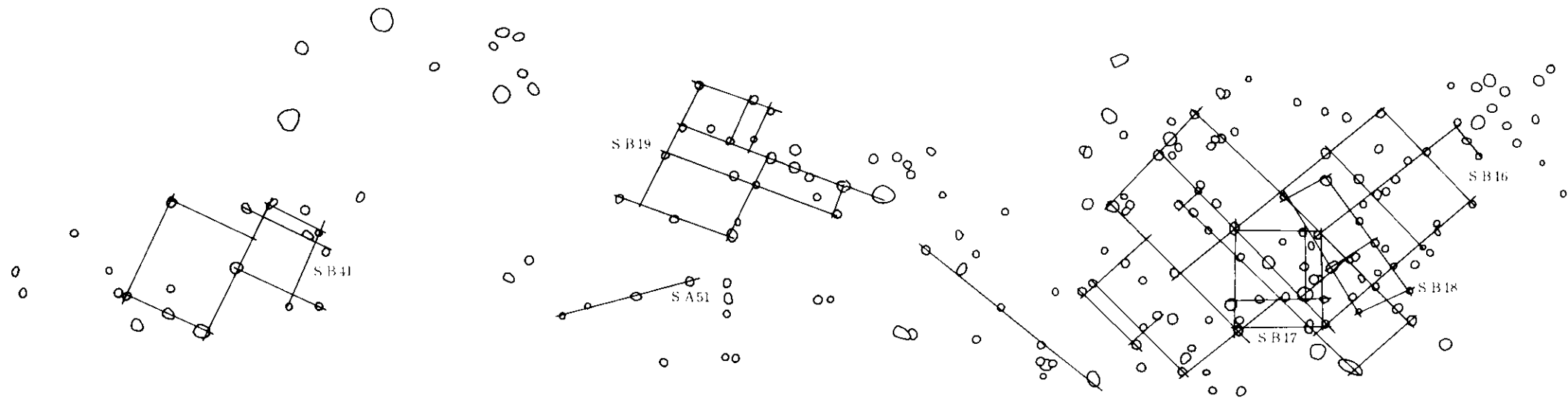
付図2 溝状遺構



付図3 掘立柱建物跡



付図4 掘立柱建物跡



付図5 掘立柱建物跡